バカとテストと勤労少年

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと勤労少年

【Ｎコード】
Ｎ３７８５Ｓ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
バカとテストと召喚獣の二次創作です。
２年前に事故で両親を亡くした少年『結城和真』。
その日から彼は人と一定の距離をとり生きています。そんな彼の心に歩み寄る女性(ひと)は現れるんでしょうか？
自サイト『悠久に舞う桜』にもリンクしています。

予習問題（前書き）

どうも、毎度おなじみのまあです。

書きかけのものをそのままに何本書くんだよ？
と言うツッコミは気にしない方向で行きましょう。
先日、活動報告に書いた部分はもう少し後での更新になります。

予習問題

2年前両親が事故で死んだ。

それまでは当り前の幸せ（もの）が壊れた時、不思議と涙は出なかった。

どうしてかは今でもわからない。

ただ、冷たく暗い病院の霊安室で2人の遺体を前に自分は1人なんだと思い知らされていた。

とうさんやかあさんの親戚は2人の死を悲しみ、1人になった俺を哀れんで泣いていた。

だけど、俺に手を伸ばす人は1人としていなかった。

当然だ。不景気な現代（いま）に親戚だからと言っても可哀想だからとは言え無駄な食いぶちを増やすような事をするようなモノ好きなんているわけはない。

推薦も決まっていた私立高校も両親が亡くなったと言う理由で推薦を取り消した。

学費を払えるかわからない生徒を推薦枠になんかもったいないって事なんだと思う。

それまで、友達だと思っていた奴らもただ、俺を可哀想な人間としか見なくなった。

そんなものを見て、たぶん、俺は絶望していたんだと思う。

1人だけここに残されたと言う現実に……

でも、たった1人だけ手を伸ばしてくれた人がいた。

急いで駆け付けて来てくれたのだろう。いつもカッコよくビシッと決めたスーツが乱れ、途中で転んだのか膝をすりむきながら、

「和くん、大丈夫？」

その場にいた誰よりも両親の死を悲しみ、涙を目に溢れさせながら俺を抱きしめ、俺の事を気遣ってくれた。

その時、それまで抑えていたものが一気に溢れ出した。

オリキャラデータ

結城和真（ユウキカズマ）
所属　２－Ｃ
性別　男
備考
中学３年の冬に両親を事故で亡くし、就職をしようと考えていたが従姉の『高橋洋子』の薦めで学費の安く洋子が勤務している文月学園に進学する事になる。現在は両親の残した家に洋子と２人暮らし、学年主任の洋子を補佐するために家事全般は１人でこなし、学園を終えるとバイト三昧と言う勤労少年。成績はそれなりだが、自分の置かれている立場を考えているため、他の生徒達より、学生と言うものを冷めた目で見ている事も多い。自称『シスコン（従姉）』

第1問

「……姉さん、いつまで寝てるの？　今日から新学期だから、朝からいろいろ準備があるって言ってなかった？」

「……うーん？　う、うそ、もうこんな時間ですか？」

『結城和真』は朝食の準備を終えると従姉であり、現在、自分の保護者代わりである『高橋洋子』の部屋をノックすると和真の声で洋子はようやく目を覚ましたようで慌てている声が聞こえ、

「……姉さん、俺は下にいるからね。慌ててケガとかしないでよ」

「わ、わかりました。それに私はそこまで鈍くはありません！！」

和真はため息を吐くと部屋から聞こえる洋子の声を聞きながら、階段を下りて居間に戻る。

「おはよう。姉さん」

「和くん、おはようございます」

朝のやり取りから数十分後、洋子は先ほどの慌てた様子とはまるで違い、仕事先である文月学園に行くスーツに着替えて居間に下りてくると和真と洋子は朝の挨拶を交わし、

「姉さん、学年主任になって忙しいのはわかるけど、休める時はきちんと休みなよ。体を壊したら元も子もないんだからね」

「和くんに言われなくてもわかっています。それに姉さんは和くんに心配されるほど弱くないです」

和真は洋子の分のみそ汁を盛り、洋子が昨日の夜も遅くまで仕事をしていた事を注意すると洋子は苦笑いを浮かべながら無理はしていないと言い、

「そうなら、良いんだけどさ」

和真は洋子の表情にくすりと笑う。

「それで、和くん、今日から2年生になるわけですけど新しいクラスで、上手くやってくださいよ。和くんは、学費とか気にしなくて良いんですから、バイトばかりではなくもう少し他の事にも目を向けるべきだと姉さんは思うんです。別にバイト自体をダメと言っているわけではありませんよ。早くから社会のルールに触れて自分を磨くと考えればそれは良い事なのかも知れませんが和くんは今は高校生なんですから、もう少し他にも比重を置いてください。まったく、和くんはやればAクラスにもなれるくらいの成績なんですから」

「あぁ。姉さん、それは耳にタコだよ。俺はそんなに勉強が好きってわけじゃないし、就職希望なんだから、これで良いんだよ。それに何かの間違いでAクラスに入ったら、姉さんだって担任としてやりにくかっただろ」

「確かにそうかも知れませんけど、姉さんはおじさんとおばさんから和くんを預かったんですから言う権利はあると思います」

洋子は和真に心配されているのが悔しいようで少し不満げに和真に言うが和真はいつもやっているやり取りのようで年の離れた従妹で

ある洋子の様子に苦笑いを浮かべながらも自分はあまり成績を重要視していないと言うと洋子はため息を吐き、

「ん？　姉さん、そろそろ、時間じゃない？」

「そうですね。この話は帰ってきてからにします」

「はいはい。俺は今日もバイトがあるからその後ね」

和真はこれ以上は洋子の小言には付き合えないと判断したようで洋子に時間だと言うと洋子はテーブルから立ち上がり、少し急いで玄関に向かおうとするが和真に話はまだ終わっていないと言って居間を出て行き、和真はそんな洋子の様子を見て優しげな笑みを浮かべる。

第1問（後書き）

どうも、作者です。

まずは何から言うべきでしょうか？
ひとまずは他をほったらかしてるのに新作と言う謝罪？
謝罪は無駄ですね。基本的にやりたいことをやる自分勝手な人間なので。（爆笑）

一先ず、勤労少年の和真君です。

他とは違ってここに出してみようかな？とかも思いますが彼もクールな子ですから、たぶん、相手をしてくれない。
Cクラスと言う設定的にも薄い状況で好き勝手やろうかな？（悪笑）

第2問

（……忘れものって、時間通りに出た意味無いじゃないか。登校前に洗濯したかったんだけどな）

和真は家で登校時間までの時間があるため、ゆっくりと家事をしようと思っていたのだが、洋子から『重要な書類を忘れたから持ってきてほしい』と言う電話があり、普段登校する時間より早く文月学園に向かい歩いていると、

「おはよう。結城、どうした？　ずいぶんと早いじゃないか？」

「おはようございます。西村先生」

校門の前で生活指導をしている『西村宗一』教諭に声をかけられ、和真は頭を下げ、

「姉さ……高橋先生が家に書類を忘れて届けにきました」

「そうか。しかし、書類を忘れるなんて高橋先生にしては珍しい事だな」

「まぁ、学年主任になって仕事も増えているみたいで昨日も夜遅くまで何かやっていたみたいですから」

苦笑いを浮かべながら早く登校した理由を話すと西村教諭は驚いたような表情をするが和真は洋子が昨日の夜も遅くまで仕事をしていた事を話し、洋子を責めないでほしいと頭を下げる。

「別に責めるような事はせん。高橋先生にかかる負担も多い事は俺も知っているからな。俺も手伝えれば良いんだが、結城も知っている通り、ウチには『バカ』がいるからな。俺はそれに対応しないといけないからな」

「……俺達の学年もFクラスは大変なんでしょうね。言い方は悪いですけど、バカを集めるから絶対に問題が起きますよ」

「……そうだろうな。特に今年のクラスは吉井と坂本の問題児の2枚看板がFクラスにいるからな。担任の福原先生も大変そうだ」

「えーと、確か、観察処分者（ふみつきがくえんのはじ）と悪鬼羅刹」

西村教諭は和真に洋子の手助けができない事を申し訳なさそうに謝ると和真は洋子からFクラスの酷さは聞かされていたようでため息を吐くと西村教諭は必ず問題を起こすであろう問題児の『吉井明久』と『坂本雄二』の名前を出してため息を吐き、和真は直接、2人と関わった事がないようで苦笑いを浮かべるが、

「すいません。これ、届けないといけないんで、これで失礼します」

「ん？　待て。結城、お前にもこれを渡さないといけないんだ。立ち話をしていてすっかり忘れてしまった。わるかったな」

洋子に書類を渡すために早く登校してきた事を思い出し西村教諭に頭を下げると西村教諭は慌てて和真を呼び止めて封筒を渡すが、

「俺、姉さんからクラスを聞いてるんで必要ないですよ」

「そうなんだが、一応はルールだからな。お前はCクラスだから間

違えないで行くんだぞ」

「はい。西村先生も生徒に封筒を渡すのにずっと立ってないといけないそうですから風邪に気を付けてくださいね」

和真はすでに洋子からすでに自分がどのクラスに振り分けられているか知っているため、封筒を渡される意味がわからずに首を傾げると西村教諭は苦笑いを浮かべてルールだと言うと和真はその封筒を受け取り校舎のなかに入って行き、

「……あのバカどもも結城くらい状況を理解してくれると助かるんだがな」

自分の事を気遣って言った和真の背中を見送り、西村教諭はため息を吐く。

第2問（後書き）

どうも、作者です。

和真「作者さん、この話ってこれで良いの？　原作メンバーと関われる気がしないんだけど」

まあ、最初は仕方ないですよ。Cクラスだし、かかわってくるとしたらF対Bが始まった辺りですね。まあ、Fクラス以外とは人間関係を見せて行こうと思ってます。

一先ずは、洋子先生の従弟として職員室に潜入です。

和真「遠藤先生とか竹内先生とか姉さんとかうちの教師陣も美人ぞろいだよね」

中には例外もいますから、気をつけてくださいね。

和真「……船越先生ね」

第3問

「失礼します。2年Cクラス、結城です」

和真は職員室のドアをノックした後、所属クラスと名前を名乗り職員室に入るが、

（あれ？　姉さんがいないな？　トイレかな？）

洋子の机を見るが彼女はそこにはいなく、首を傾げると、

「おはようございます。結城君」

「福原先生、おはようございます」

先ほど西村教諭との話に出ていた2年Fクラスの担任である『福原慎』教諭が和真に挨拶をし、和真は頭を下げる。

「高橋先生なら、5分くらい前に学園長室に呼ばれましたよ」

「そうなんですか？　困ったな。西村先生と話をしなければ会えたか」

「急ぎの用件ですか？」

福原教諭は和真が洋子を探していると思ったようで洋子が学園長室に言った事を教えてくれるが、流石に1生徒の和真が学園長室に乗り込むわけにはいかないため、ため息を吐くと福原教諭は和真に洋子の用件は急ぎかと聞くと、

「えーと、高橋先生が家に忘れた書類とお弁当を持ってきたんですけど、書類は重要なものと言っていたので」

「それなら、私が学園長室まで届けましょうか？」

「お願いできますか？」

「はい」

「よろしくお願いします」

和真は職員室を訪れた理由を隠す事なく答え、福原教諭は洋子に頼まれた書類を預かってくれると言い、和真は福原教諭に頭を下げる。

「いえいえ、気にしないでください……それと、できれば早く退散したほうがあなたのためですよ」

「……そうですね。ここは危険そうです」

福原教諭は笑顔でこれくらいの事は当然だと言うと和真に向けられている婚期を逃し単位を盾に男子生徒に迫っていると言う噂のある『船越』教諭から逃げるように耳打ちをすると和真は苦笑いを浮かべて頷き、

「後、これ、昨日、バイト先で作ったクッキーなんですけど、先生方でお茶受けにでもしてください」

「わかりました。いつもありがとうございます」

和真は福原教諭に書類とバイト先で作ったあまりものをクッキーを手渡し、洋子の弁当を彼女の机に置くと職員室を出て行き、

『ふ、船越先生!?　落ち着いてください!?　結城君は高橋先生の弟さんです!!』

『今時、あんな良い子はいないんです。未来のある若人に手を出そうとしないでください!!』

『……そんな話は聞いてられないのよ。私だって、私だって、結婚をしたいのよ!!』

『誰か西村先生を呼んで来てくれ!!　そうでもしないと止まらない!!』

職員室の中からは和真を狙う船越（ハンター）先生を力づくで押さえつける教師達の声が響き渡り、

（……早く、逃げよう。ここは危険だ）

和真は全力で職員室から離れて行く。

「あれ？　結城君、ずいぶんと早くない？」

「ん？　中林か？　……ジャージか。つまんないな。ここはサービスカットだろ」

和真は職員室から逃げるように自分の教室に向かっているとソフトテニス部に所属している去年のクラスメートの『中林宏美』が声をかけてくるが和真は宏美の姿を見てため息を吐き、

「……あってすぐの挨拶がそれ？」

「仕方ないだろ。俺は健全な男だからな。中林のスコート姿やその時に見える生足は見たいぞ」

宏美は和真の様子にため息を吐くが、和真は男なら当然だと言い切る。

第3問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、船越女史に目を付けられる。

和真「……職員室に行くと聞いた時から絶対にやられるとは思ったけどね。俺は熟女趣味はないからね」

洋子との関係もあるため、和真は教師陣には当たり障りないというか成績は中の中だけど模範的な生徒と言った感じです。

和真「教師陣に敵を作る理由ってないだろ。それに俺の態度が悪いと姉さんに迷惑がかかるからね」

そうですね。そして、職員室を脱出したところで宏美と出会う。現在、考えているヒロイン候補は『小山友香』、『中林宏美』の2人。『高橋洋子』先生はいろいろとまずいかな?と感じがありますし、和真にとっても洋子にとってもお互いは家族なんだと思います。

和真「まあね。俺は姉さんが大切だけど、これは恋愛感情じゃないと思うな。どちらかと言えば、俺は高校卒業したら就職する予定だから、早いところ良い人を見つけてほしいと思ってる」

だそうです。

第４問

「……結城君、あなた、もう少し言葉を選べないの」

「口に出さないで犯罪に走ったり、クール面して、女に興味示さないって顔してるよりはずっと健全だと思うけどね。それで、中林は朝練か？　朝からご苦労なこった」

宏美は和真の言葉にため息を吐くが和真は宏美が朝から部活に取り組んでいるのが信じられないようで苦笑いを浮かべながら言うと、

「良いでしょ。私は身体を動かすのが好きなんだから、そう言う結城君はこんな時間から何をしてるの？　遅刻はした事ないけど、いつもはもう少し遅いわよね？」

「あぁ。姉さんの忘れものを届けに職員室に行ってきた帰りだ」

「高橋先生が忘れもの？　珍しい事もあるのね」

宏美は運動部にも入っていない和真が早い時間から学園にきている理由を聞き、和真は洋子の忘れものを持ってきたと言うと宏美は学園では知的で落ち着いたイメージの洋子が忘れものをした事が信じられないようで驚いたような表情をするが、

「姉さんだって人間だからな。忘れものくらいするさ……さてと、これ以上、話し込んで中林の邪魔をしてもなんだから、教室ででも寝てるかな」

「あっ！？　そう言えば、結城君はどのクラス？」

「あぁ。言ってなかったな。Cクラス、相変わらず、可もなく不可もなくだ」

「Cクラス？」

和真は忘れものくらい誰でもすると言い、教室に戻ろうとすると宏美は和真を引き留めて彼の所属するクラスを聞き、和真は自分のクラスをCだと言うと宏美は怪訝そうな表情をする。

「どうかしたか？」

「結城君ならAは無理でもBくらいには行けたんじゃない？」

「……お前も俺を過大評価するのかよ」

「お前も？」

「……姉さんにも言われたよ。真面目にやればAには行けたってな」

和真は宏美の表情に何かあったのかと思い、宏美に聞くと宏美は和真ならもっと上のクラスになれたと言い、和真は今朝、洋子にも同じような事を言われたせいかため息を吐くと、

「俺はそこまで優秀じゃないしな。だいたい、就職希望なんだ。成績をあげるお勉強をするよりはもっと他に役に立つ資格（もの）を勉強するよ」

「そう言うところ。無駄に冷めてるわよね」

「仕方ないだろ。成績が良くたってそんなもんは何の役に立たない事は経験済みなんでね。それなら、先もわからずに無意味なお勉強をするよりは自分の手に残る資格(もの)を取った方が効率も良いだろ」

「まぁ、私も部活ばかりやってるから、結城君の事は言えないか」

自分は勉強するなら自分で必要なものを探すと言い、そんな和真の様子に宏美はため息を吐くが直ぐに部活ばかりしている自分は和真の事を責められないと笑う。

「ん？　そうだ。中林は何クラスになったんだ？　部活ばかりしてたしFか？」

「そんなわけないでしょ！！　失礼ない事を言わないでよ。私はEクラス。しかも代表よ」

和真は宏美の所属クラスを聞くと彼女はEクラスの代表になったと言うと、

「……いや、Eクラスの代表じゃ、そんな強気に出れないだろ」

「うっ！？」

和真は宏美の言葉に苦笑いを浮かべると宏美はバツが悪そうな表情をするが、

「まぁ、頑張れ。お前は頭に血が昇りやすいけど、人をまとめる代表の資質はあると思うよ。１人で突っ走らずにクラスの奴らの話も聞けよ」

「わ、わかってるわよ」

和真は宏美の様子にくすりと笑い、彼女を激励すると宏美は和真の顔を直視できないようで和真から視線を逸らし、

「じゃあな。代表様」

「……ええ」

和真は宏美の様子など気にする事なく教室に向かって歩いて行く。

第４問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

今回は宏美との会話でした。前回、和真のヒロインは宏美か友香と言う話をしましたが、どっちにしよう？

和真「盛り上がってるけど、今のとこは恋愛する気はないんだけど」

和真がそんなことを言ってもそうならないのが二次創作のお約束ですからね。

両方とも頭に血が昇りやすいタイプですし、冷静な和真が手綱を握れるのか引きずられていくのかも見所ですかね？

和真「……いや、だから、俺の話も聞いてくれ」

２人がいやなら『船越先生』に？

和真「待ってくれ！？」

冗談です。友香はあづまさんがやってるし、宏美の方が新鮮かな？とか思いながらもう少し書いていきましょう。

ヒロインはそのうちアンケートでもしましょう。

和真「……やめろ。これは船越先生の流れになる」

大丈夫ですよ。項目には入れませんから。（悪笑）

第5問

（……Cクラスでこれなら、BやAは凄いんだろうな。席は後ろだな。こう言う時は自分の名字に感謝だな）

和真はCクラスの教室に着いて設備を見ると1年時に使っていた教室よりはかなり良い設備であり、自分の席に腰を下ろすと、

（寝よ）

欠伸をしてから机に突っ伏して眠りに付く。

『おい。起きろよ。自己紹介、お前の番だぞ』

「ん？　あ、さんきゅ」

和真が寝ているとすでに登校時間も過ぎ、HRが始まり、和真を起こす声が聞こえ和真は欠伸をすると、

「結城和真です。得意教科も不得意教科も特にないです。特技は家事全般。後は……」

「和、何か面白い事やれ」

「そうだ。何かボケろ」

「……うるせえぞ。トオル、へーた。俺はお前らと違って笑いに生きてないんだよ」

簡単な自己紹介をした時、去年のクラスメートである『黒崎トオル』と『遠山平太』が和真に何か面白い事をしろと言うが和真はため息を吐き、

「他はAクラス担任の高橋先生は従姉になりますが、頭の出来は悪いので期待しないでください」

試召戦争はあまりやる気がないと暗に言うと席に座る。

「カズ、今年も同じクラスだね」

「あぁ、今年もよろしくな。山下」

和真は同じクラスに知り合いがいないかと周りを見ようとすると隣から『山下清美』が和真の手を突き、和真は挨拶をし、

「他に野口も同じクラスよ」

「……一心もいるのかよ。代りばえしないな」

清美は他にも『野口一心』と言う友人がいると言うと一心は和真と清美に手を振っており、和真はため息を吐く。

「そうかも、ここに居ないのって宏美だけ？　まったく、部活ばかりしてるから」

「中林なら、Eクラスの代表だぞ」

「Eまで落ちてるの？　まったく、だから、あれほど勉強しろって言ったのに」

清美は宏美がどこのクラスにいるかと首を傾げると和真は宏美がEクラスの代表だと言うと清美はため息を吐き、

「まぁ、カズがいるなら、Aは無理でもBの設備は取れるよね。いつ、仕掛ける気？」

「……俺は仕掛ける気はないって、俺は就職希望なの。これくらいの設備で十分」

「やる気ないね。そんな事を言ってると洋子先生が悲しむよ」

和真が居れば試召戦争を勝ちに行くことも可能だと言うが和真はやる気もなく、清美は苦笑いを浮かべながら洋子が悲しむと言うが、

「姉さんは姉さん、俺は俺、過大評価はいりません」

和真はため息を吐き、自分にはそこまでの頭はないと言いきった時、

「私が代表の『小山友香』よ」

「……あれがこのクラスの代表か？　気が強そうだな」

教壇の上にこのクラスの代表である『小山友香』が立ち、自己紹介とともにクラスの方針を話し始めるが、和真は興味がないため欠伸をすると、

「小山さんが代表か？　あの人って頭に血が昇りやすいって話よね」

「代表の器ではなさそうだな」

清美は友香の事を聞いた事があるようで和真を突きながら言うと和真は興味無さそうに言い、

「それも噂なんだけど、あの『根本恭二』と付き合ってるって話よ」

「根本？　あぁ、あの小者。可愛いのに男の趣味は最悪か。持ったいねえ」

清美は友香の彼氏が『根本恭二』だと話すと和真は恭二にあまり良い印象がないようで友香を哀れむような視線を送る。

第5問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

今回はクラスメートとの会話？　一応、Cクラスで友香以外の名前のある人間の友人として使わせて貰いました。

和真「適当だな」

仕方ないですよ。明久達Fクラスが中心の話なんですから他のクラスにスポットライトが当たるのなんて稀です。

和真「まあ、あまり無茶はするなよ」

そうですね。和真はCクラスですが洋子や博美、清美が言うようにAクラスになれる資質はありましたが本人が高校の勉強を必要としていないため、成績は普通です。

和真「得意教科くらいは決めてないのか？」

そうですね。Cクラスだから可もなく、不可もなくで良いかな？でも主人公だから『最強の槍』はいるかな？　とも思いますが家庭科は深秋がいるから他の教科にしたいんですけど実用的で考えると、英語はそれなりに良いのかな？　あとは洋子の得意教科の物理？

和真「得意教科にするならその3教科だな。まあ、腕輪とかもそのうち考えるんだろ？」

そうですね。主人公だし、腕輪の１つくらいは考えます。まだ、召喚獣の武器も決まってないですけどね。

第6問

「……ん？　清水、お前はDクラスか？」

「げっ！？　結城」

和真はトイレに行った帰りに廊下でバイト先の『ラ・ペディス』と店長の1人娘の『清水美春』を見つけると美春は和真の顔を見るなり威嚇し、

「……睨むなよ。俺はお前に睨まれる筋合いはない」

「あなたは美春の敵です。あの男の手先が！！」

「あの男って、お前の実の父親だろうが」

和真はため息を吐きながら威嚇するなと言うが美春は威嚇を止める気はなく、和真を怒鳴りつけ、和真は美春の様子に肩を落とす。

「美春はあんな男を父親なんて認めない」

「いや、誰がどう見たってお前と店長は血の繋がった親娘だろ。まさに今、俺はそれを実感している」

美春は和真を威嚇したまま、父親との繋がりを否定するが和真はそれを聞いてため息を吐くと、

「悪いな。そろそろ。俺は戻るぞ。人にわざわざケンカを売るような事をするなよ」

「結城に言われる筋合いはありませんわ！！」

和真はこれ以上、美春に関わるのが面倒だと思ったようで教室に入って行く。

「Ｆクラスがｄクラスに宣戦布告をしたってよ」

「おいおい。初日から仕掛けるかよ」

「……人の席を囲むな」

和真が教室に入り、自分の席に座ろうとすると和真の席は一心、トオル、平太、清美が囲んでおり、和真はため息を吐くが、

「しかし、Ｆクラスはｅクラスを無視したか……中林、怒ってるだろうな」

「確かに、宏美なら青筋立ててるかもね」

一心はｅクラスの代表になった宏美が怒っていると言うと和真の周りに集まった清美、トオル、平太の３人はその様子が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべる。

「まぁ、大丈夫だろ。代表になったんだから、それくらいは考えて行動するだろ。しかし、ＦとＤの試召戦争か？　それで清水はいつも以上に殺気だってたわけか？」

「清水さん？　って、清水美春さん？　……カズに女の影？」

「おいおい。どこからお前は女と繋がってるんだ？」

和真は宏美より美春の方が心配だと言うと清美は和真をからかうように言うと一心がその言葉にのっかかるが、

「バイト先の店長の娘だ。だいたい、あんな意味のわからないのは遠慮する」

「意味？　清水さん、良い娘よ」

「……」

和真は絶対にあり得ないと言うと清美は和真の持っている美春の印象と違う印象を持っているようで首をかしげ、和真は清美の反応が信じられないようで眉間にしわが寄る。

「何？　その反応？」

「いや、意味が分かんないだろ。あいつ、俺を見るなり威嚇してくるんだぞ。嫌われるほどまともに話した記憶もないのに」

清美は和真の反応に何かあったかと聞くと和真は美春の行動はわけがわからないと言うが、

「奥さん、聞いてよ。あそこのご主人、おもてになるみたいよ」

「そりゃそうよ。恋愛に興味無いって顔しながらも、無自覚でもてオーラを出していますもの」

「これだからって、鈍感は困るのよね」

一心、トオル、平太の3人は和真を鈍いと言い始め、

「いや、意味がわからないし、だいたい、お前ら、それ、酷くイラつくんだが」

和真は3人の様子に肩を落として大きなため息を吐く。

第6問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

なんか、書いてたら美春フラグが立ってました。改めて、自分が美春好きだと言う事を思い知らされます。

和真「……何で、あの意味のわからないのが好きなんだ？」

美春、かわいいと思いますよ。好きなものに一直線でそこまでまっすぐに行けるのはうらやましいと言うのもあると思いますけどね。

和真「そうかな？」

ええ。さてと美春ヒロイン候補への昇格はあるのかしばらく書いてから考えます。

和真「いや、だから、俺は」

船越？

和真「清水の方が良いです！！」

第7問

「それで、F対Dはどっちが勝つと思う？」

「普通に考えてDだろ」

「そうだな。振り分け試験の直後だし、点数差は変わらないだろ」

「そうだよな」

清美は４人の姿に苦笑いを浮かべると話を試召戦争に戻し、FクラスとDクラス、どちらが勝つかと聞くと一心、トオル、平太は当然、Dクラスが勝つと言うが和真だけは何か引っかかる事があるようで何も言わずにおり、

「カズはFが勝つと思ってるの？」

「……そうだな。Fが何となく勝ちそうな気がするんだよな」

清美は和真の様子に聞くと和真は苦笑いを浮かべると、

「何でだ？　普通に考えたら、Dの勝利は揺るがないだろ」

「普通はな。今朝、西村先生と話したんだけど、Fクラスには観察処分者（がくえんのはじ）と悪鬼羅刹（もとしんどう）がいるって話だからな」

「吉井に？　坂本？　それこそ、Dクラスが勝つんじゃないか？吉井なんて役立たずだろ？」

「確かにな。学園初の観察処分者。バカの代名詞だぞ」

一心は和真に何が引っかかっているんだと聞くと和真は明久と雄二の2人が気になると言うがトオルと平太は和真の考えは杞憂だと言うが、

「だけどな。ただのバカなら、西村先生があんなに苦労しないと思うんだよな」

「ただのバカじゃなく大バカだから苦労してるんだろ」

和真は苦笑いを浮かべながら頭を掻くと一心は何も起きないと言う。

「カズ、何がそんなに引っかかってるのよ。言ってみなさいよ」

「そうだな……さっきも言った通りなんだけど、ただ、設備が最悪だからって言うなら、最初は1つ上のEを狙うと思うんだ。だけど、FはDを狙ってきた」

「Eの設備じゃ、対して設備も良くならなかったからだろ」

清美は和真に今度は引っかかっている場所を聞くと和真は対戦相手がおかしいと言うが和真以外は何もおかしくないと言う。

「いや、それなら良いんだけど、勝てる見込みが有ってDに仕掛けているんなら、相当の厄介だぞ。仮にも悪鬼羅刹（もとしんどう）だしな。勝てる見込みが有る可能性は十分にある。戦況をひっくり返す切り札がいるとかな」

「それが吉井だって事か？」

「それも1つの要因だと思うけどな。それ以上に強力な駒がいる気がする……」

和真の言葉に平太は明久が重要な駒だと言うと和真は頷きながらも他にも強力な駒がいそうだと言うと、

「それと、初日から仕掛けてくるって事は少なからず、既にFクラスの代表はFクラスの戦力を理解している可能性もあるんだよな。仮にそうだとしたら、代表の資質としてはCクラス（うち）の代表よりは確実に上だ。Cクラス（うち）の代表様はクラスメート（ひと）の上に立ったのがご満悦みたいだから、上にはまだ2クラスもいるのに自分が代表だってな」

「カズ、あんた、相変わらず、きついわね」

「人を見下す奴が嫌いなんだよ」

和真は教室の中心で高圧的な態度をとっている友香を見て吐き捨てるように言い、清美は和真の態度に苦笑いを浮かべる。

「そのわりには吉井の事は学校の恥扱いだけどな」

「まあな。人を見下す奴も嫌いだけどな。だらける奴はもっと嫌いだ。中林みたいに部活を頑張ってEなら良いが、何もしないでFなんて最悪だろ。何もしなくても世の中を生きていけると思ってるんだからな」

トオルは和真の態度になれているのかため息を吐きながら言うと和真は少しだけ冷静になったようでため息を吐き、

「それなら、カズならどう動くのかな？　そこまで言って何もしないのは無しよね。Ｆクラスがクラスに勝ったら私達も狙われる可能性もあるわけだし」

「そこまで、考えてるんだ。反しての１つや２つあるんだろ」

「仮にあったとしても代表様は聞き入れないよ。それに俺は就職希望、試召戦争に興味なし」

清美はＦクラスに仕掛けられた時に和真を頼りにすると言うが和真はやる気はない。

第7問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真の戦力分析でしょうか？

和真「Fクラスを警戒しすぎじゃないかな？」

まあ、Cクラスだとやることないですしね。（苦笑）

和真「俺って今はFクラスのメンバーを知らないんだよね？」

鉄人から聞いて明久と雄二がいる事を知ってるだけですね。雄二が代表だと言う事は知りません。

和真「まあ、良いけど、と言うか相変わらず、原作キャラと絡んでないけど」

明久とはそのうちからませようと思ってます。明久が捕まらないため、教師陣の手伝いをしているところに鉄人が明久を連れてくるとかね。

ただ、友人やFクラスと試召戦争をする時に知り合うとかじゃない方向で考えてます。

和真「確かに、俺は姉さんの手伝いしてる可能性もあるからね」

そういう事です。

アンケート

先日から言っている『和真のヒロイン』を決めるアンケートです。

候補は『中林宏美』、『小山友香』、『清水美春』を考えています。

『高橋洋子』は今のところ家族としてしか考えていませんし、『船越教諭』はいくら票が入っても却下とさせていただきます。ネタには使うかも知れませんがさすがに和真が不憫ですから。

と言う事でアンケートの項目は

1．中林宏美
2．小山友香
3．清水美春
4．その他（名前）

でお願いします。何となくでも理由があるとうれしいです。

期限はひとまず第２５問あたり？

期限は延びる可能性はありです。

最後にしつこく言いますが『船越教諭』は却下です。ネタふりではありませんのでよろしくお願いします。

第8問

（Fクラスが勝利したか？　悪鬼羅刹（もとしんどう）は伊達じゃなかったか？　それにまさかあの姫路瑞希がFクラスにいるとなんてな）

放課後になり、和真は教室の掃除を行っているとFクラス対Dクラスの試召戦争の結果が出たようで教室にはクラスメート達がその話題で盛り上がり始めるが、

「和、帰るのか？　お前の予想通りなんだ。何か言えよ」

「予想って言ったって、姫路がいるなんて知らなかったんだから、何も言う事はないよ。それに今日はバイトなんだ。遅れると迷惑がかかるだろ」

「そうなの？　じゃあ、明日ね。カズ」

「あぁ。お前らもいつまでも遊んでないで帰れよ」

和真は興味がないため、掃除用具を片付けると教室に残っていたトオルと清美に挨拶をして教室を出て行く。

「……睨むな」

「……」

「……Dクラスに負けたのは俺には関係ないんだ。睨む必要がないだろ」

和真はバイト先の『ラ・ペディス』へ行こうとすると校門で美春に見つかり、彼女は相変わらず、敵意の視線で和真を睨みつけており、和真は彼女の様子に肩を落としてため息を吐くが美春は和真を睨みつける事を止める事はなく、

（……先に行こう）

和真は美春の相手をする理由はないと考え先を急ごうとすると、

「待ちなさい。あなたは美春の怒りを治めるために死んでもらいます」

「……いや、意味が全くわからないからな」

美春は和真を引き止め、和真は意味がわからないとため息を吐くが、

「問答無用です。美春のために死になさい！！」

「おい！？　いきなり何をするんだよ！？」

美春は懐からナイフとフォークを取り出すと和真に向かい投げつけ、和真はその凶器を慌てながらも全てカバンで叩き落とす。

「往生際が悪いですわよ。美春のために死になさい！！」

「断る！！　俺にはお前のために死んでやるような義理はない！！」

美春は和真が大人しく自分の攻撃を喰らわないのが腹立たしいようで更なる攻撃を繰り出し、和真に死ねと言うが和真は美春のストレス発散に付き合うほど仲がいいとは思っているため、美春の言葉を

却下するが、

「あなたがバイトしているお店は誰の家ですか？　うちで働いていると言う事はあなたは美春の下僕……下僕なんて言葉ももったいないですわ。あなたは美春にとって家畜以下の人間ですわ！！　だからこそ、美春の手で八つ裂きにされても文句１つ言えないはずですわ！！」

「そんなわけあるか！！」

美春は和真には自分に八つ裂きにされるのは当然だと叫び、和真はそんな理不尽な言葉に声をあげると、

「だいたい、そんな風に周りも見ずに突っ込んだからお前らは負けたんだ。誰もがＦは下だとか思ってたんだろ。少なくとも人を舐めている人間は足元をすくわれるってわかったんだろ。それなのに俺に当たるなよ」

和真はこれ以上、美春に付き合う理由はないため、下位クラスに負けたのは人を見下しているからだと言い切り、先を歩きだす。

「待ちなさい！！」

「……」

美春は和真の言葉に腹を立てているようで和真を呼ぶが、和真は美春の相手をする気もなくなったようで振り向く事なく先を進んで行く。

第8問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

美春にからまれる和真。

和真「……何の恨みがあるんだよ」

まあ、和真に騒ぎを届けて欲しいと言う声もありますしね。やっぱり、美春との絡みは押さえておかないといかないですからね。（苦笑）

和真「……俺は平和に生きたいんだけど」

無理ですね。

アンケート
1位　宏美4票
2位　洋子2票
3位　美春、葵1票

となってます。

和真「中林がトップみたいだね」

そうですね。宏美がヒロインってないから見たいと言う意見が多いです。

第9問

「すまないな。結城、吉井のバカが、観察処分者の仕事を忘れて帰ってしまってな」

「気にしないでください。今日はバイトも休みなんでタイムサービスまで時間もありますしね」

Fクラス対Dクラスの試召戦争の翌日の放課後に西村教諭に仕事を頼まれ、和真は西村教諭と隣に並び、プリントの入った段ボールを運んでいると、

「まったく、あのバカどものお前くらい教師に協力的だと俺達も助かるんだがな」

「いや、俺はまた違いますよ。高橋先生がいるから、先生達と関わる事が多いからですから、学生の本音で言えば先生達には関わり合いたくないですよ。呼び出しとかやってもいないのに悪い事を考えちゃいますし」

西村教諭は何か問題が起きているのか大きなため息を吐きながら和真を誉めるが和真は苦笑いを浮かべながらあまり呼び出しは嬉しくないと言った時、

「和くん、西村先生の手伝いですか？　忙しいですか？」

「ん？　高橋先生、結城に何かようですか？　急用なら、結城はお返ししますが」

「……高橋先生、学園内でその呼び方は止めてください」

洋子が和真と西村教諭を見つけて2人の元に駆け寄ってくると西村教諭は休養なのかと聞き返す隣で和真は洋子に学園内での分別は付けて欲しいとため息を吐く。

「ちょっと、出てしまっただけです。結城くん、西村先生、急用と言うわけではないんですが、ちょっと一緒に来てほしいんですが」

「それなら、これを職員室に運んでからでも良いですか？」

「はい。お願いします」

「……俺の意見は聞かないんですね」

洋子は和真の言葉に1つ咳をすると教師用の言葉使いになり、洋子と西村教諭は和真のこの後の予定を和真に確認する事なく決め始め、和真はため息を吐くと、

「急用じゃないなら、家に帰ってからじゃダメなんですか？　そろそろ、タイムサービスの時間なんだけど」

「はい。できれば、今日中に話しておきたい事なので」

和真は家に帰ってからにして欲しいと言うが洋子にも彼女の都合があるようでこの後が良いと言う。

「そうか。それなら、結城、早めに済ませるか？」

「そうですね。早いところ済ませましょう……と、言うか、観察処

分者って、こう言うのに関しては楽なんでしょうね。召喚獣は力が強いみたいだから、こんな重い物も簡単に運べるんでしょうから、俺は西村先生や召喚獣じゃないんであまりスピードは上がりませんよ」

西村教諭は和真に手伝わせている仕事を早く終わらせようと先に進むが和真は西村教諭には付いて行けないと言うと、

「結城くん、ちょうど良かったです。観察処分者になりませんか？」

「高橋先生、いきなり何を言い出すんですか！？　結城は確かに学校の授業に関しては学習意欲に欠けますが、それ以上に資格試験や就職に関しての勉強は他人より行っているはずです。それは姉である高橋先生が１番わかっている事でしょう！！」

洋子は突然、和真に観察処分者になるように言い、和真はいきなりの事で持っていた段ボールを落とし、西村教諭は洋子の言葉に和真は観察処分者にされる理由はないと言う。

第9問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、割と鉄人のお気に入りかも知れません。

和真「結構、仕事手伝っている事もあるしね。まあ、ゴールポストとかは動かせないけど、手で持てる荷物運びくらいは手伝うよ」

そして、洋子からの観察処分者になれと言う話に驚きの声を上げる鉄人に何があったかわからない和真。

洋子は何が言いたいんでしょうか？（苦笑）

アンケート

1位　中林宏美5票

2位　高橋洋子2票

3位　清水美春、小暮葵1票

5位　小山友香0票

宏美が票を伸ばしてます。

第１０問

「……高橋先生、確かに俺は授業にあまり興味はないけど、そこまで落とされるような事をした覚えはないですよ」

「結城君も西村先生も何を言ってるんですか？　私は結城君の努力は認めていますよ」

和真は落ち着こうとしたようで１度、大きく深呼吸をした後、洋子に向かい観察処分者になれと言われる事はしていないと言うと洋子は２人の反応の意味がわからないようで首を傾げると、

「それなら、どうして、結城が観察処分者なんかにならなければいけないんですか！！　しっかりと説明をお願いします」

「……西村先生、説明と言いますが、その話があるので私は結城君に来てほしいと言ったんですが」

「それなら、その話を俺も聞かせて貰います。問題ないですね」

「それは問題ありませんが、それなら、早く、西村先生の仕事を終わらせましょう」

西村教諭は洋子に説明を求めると洋子は未だに西村教諭がここまで言っている意味がわからないようで首を傾げたまま、和真が落とした段ボールを持ち上げようとするが、

「……高橋先生、持ちあがらないんですから無理はしないでください」

「すいません。お願いします」

洋子では段ボールは持ちあがらず、和真は動揺しながらも段ボールを持ち上げる。

「結城、急ぐぞ」

「はい」

「待ってください」

和真と西村教諭は詳しい話を早く聞きたいようで先を急ぎ、その後を洋子が慌てて付いて行き、職員室に段ボールを運び終え、

「それで、高橋先生、詳しい話を教えていただけますか？」

「……西村先生、高橋先生、長くなるなら職員室（ここ）はちょっと」

西村教諭は洋子に和真に観察処分者になれと言った事に詳しい話を聞かせろと言うが和真は職員室内から感じるおかしな気配に職員室を出るように言うと、

「はい。ここでは詳しい話はできませんので、付いてきてください」

「……他の先生に聞かれるのは不味い話なんですか？」

洋子は場所を移動すると言うと2人についてくるように言い、和真と西村教諭は洋子の後に付いて職員室を出て行く。

『ですから、船越先生、落ち着いてください！？』

『放して！！　吉井くんが彼の近所の男性を紹介してくれたけど私だって若くて家事の万能なお婿さんが欲しいのよ！！』

「……結城、お前、いろいろと気を付けるんだぞ」

「……そう思うなら、職員室に呼び付けないでください」

「あぁ。なるべく、お前に頼みたい事がある場合は生徒指導室に呼ぼう」

職員室からは教師達が船越教諭を抑えつけている声が聞こえ、西村教諭は和真の身の危険を案じたようで和真に言い、和真は肩を落として職員室になるべく近づきたくないと言うと西村教諭は頷くと、

「それで、高橋先生、どこに行くつもりですか？　他の先生達にも聞かれたくないような事なんですか？」

「いえ、そう言うわけではないのですが、この話は私だけではなく学園長先生からの提案ですので学園長先生から詳しい話を聞いた方が良いと思いますから」

「……学園長がですか？」

和真は洋子がどこに自分を連れて行くのか気になったようで洋子に向かい聞くと和真を観察処分者にすると言う話は文月学園の学園長である『藤堂カヲル』から出た話だと言う。

「学園長が？」

「はい。学園長、結城和真君を連れてきました」

「そうかい。入ってきな」

西村教諭はカヲルからの話と言う事で首を傾げると3人は学園長室の前に着いており、洋子は学園長室のドアを叩くと、中から返事が返ってくると、

「「「失礼します」」」

「よく来たね。あんたが結城かい？　……西村先生、あんたは呼んだ覚えはないんだけどね」

3人が学園長室に入ると中にはこの学園の最高権力者であるカヲルが高圧的な態度で和真を見るが隣に西村教諭がいるのを見て首を傾げる。

第１０問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真にとって職員室は危険な場所。（爆笑）

和真「爆笑じゃないからね。姉さんに用事があっても職員室に行けなくなるだろ。いい加減にしてくれよ」

いや、和真には騒ぎを届けないといけないので。

和真「……だから、騒ぎなんていらないからね」

何を言ってるんですか？　騒ぎがなければバカテスではありません。

和真「かもしれないけど」

まあ、納得のいかない和真は置いておきましょう。和真への観察処分者要請は次回に続きます。妖怪ばばあ長は何をいうんでしょうか？

和真「アンケートは変わらないから省略です」

第１１問

「高橋先生から結城を観察処分者にすると言う話を聞きまして」

「なんだい？　あんた、きちんと説明してないのかい？」

「学園長から説明の方が納得をしていただけると思いまして」

西村教諭はカヲルに向かい和真を観察処分者にすると言う事の説明を求めるとカヲルはため息を吐きながら洋子に説明をしてないのかと聞くと洋子は頷き、

「それじゃあ、説明させて貰おうかね。えーと、結城和真だね？」

「はい。それで」

「落ち着きなよ。別に取って食おうってわけじゃないさね」

「……」

カヲルは和真の名前を呼ぶと和真は流石に学園長からの話と言う事で緊張した面持ちで返事をするとカヲルは緊張しなくて良いと言うが、

「何で、下がるんだい？」

「いえ、ちょっといろいろとあって悪寒が」

「まぁ、良いさね」

その言葉で和真は船越教諭の事を思い出したようで顔を引きつらせ、カヲルは意味がわからないためかため息を吐くと真面目な表情になり、

「まずは観察処分者と言う話だけどね。詳しくはあんたの召喚獣を教師仕様の召喚獣にしたいと思ってね」

「……はい？」

カヲルは和真の召喚獣を教師と同じ扱いにしたいと言い、和真は意味がわからず首を傾げる。

「……学園長、それはどう言う事ですか？」

「簡単な事さね。元々、教師の召喚獣は観察処分者と同様に物体への干渉ができた。そのため、以前は雑用は各自、自分の召喚獣で行っていた。しかし、初めて観察処分者に任命された吉井明久（バカ）の影響でそれは観察処分者（せいと）の仕事と言う空気が学園全体に広がってしまったからね。それにその吉井明久（バカ）は仕事を忘れて家に帰る事も多々あると言うじゃないかい。そうなると手が足りないって言葉も多く出てね。それなら、生徒で手伝ってくれる人間を探そうと思ってね。それで高橋先生に良い人選はいないかと聞いたらあんたの名前が出たわけだよ。他の先生達の話でも良く手伝いをしてくれると評判も良いしね。おかしな事はしないと思ってね」

「はぁ」

西村教諭はカヲルに詳しい説明を求めると初の観察処分者を出した事で教師が雑用をしにくくなったため、白刃の矢が和真に立ったと

言うが和真はいまいち納得がいかないようでため息を吐くと、

「確かに、俺は西村先生の仕事を手伝っているんで召喚獣を作業に使えるのはありがたいんですが、生徒が召喚獣を使って作業をしていると俺の肩書って」

「まぁ、肩書は観察処分者になるね」

「……お断りします」

和真はそれを受けた時の自分の肩書が気になったようでカヲルに聞くとカヲルは肩書は『観察処分者』と言い切ったため、和真は笑顔で断ると、

「どうしてだい？」

「すいません。俺は就職希望なんですよ。うちで『観察処分者』とか言われたら就職先探すのに悪い印象しか与えないじゃないですか！！」

カヲルは眉間にしわを寄せて聞き返すが和真は就職希望なのに観察処分者のような不名誉な肩書はいらないと言い切る。

「なぜだい？　便利だよ」

「便利とか言う問題じゃありません」

「うるさいよ。あたしの決定は文月学園（ここ）じゃ、絶対だよ。従いな」

和真は納得がいかないため、受けないと言うとカヲルは権力で抑え

つけようとするため、

「……落ち着け、結城。学園長、その言い方はあまりに乱暴です。せめて、代わりの肩書を用意してください」

「それこそ、無駄じゃないか？」

「教師の雑用を押し付けるんです。それくらいは結城の意思も尊重するべきです」

「……作業を手伝わされるのは確定なんですね」

西村教諭は和真をカヲルの間に割って入り、カヲルに向かい和真の意見も取り入れろと言う。

第12問

「……仕方ないね。まぁ、直ぐに肩書は思いつかないから、今はそのままって事で頼むよ」

「……わかりました」

カヲルは西村教諭の言葉で面倒そうに何か肩書きを考えると言うと和真は断ると洋子の印象も悪くなると思っているため頷くが、

「後、すいません。その任を受ける代わりにもう1つ、お願いします」

「何だい？　これ以上、あたしに何をさせようって言うんだい？」

カヲルに向かいもう1つ頼みたい事があると言うとカヲルは眉間にしわを寄せて聞き、

「……船越先生の仕事だけは吉井に回してください」

「……どう言う事さね？」

和真は船越教諭に近づくと危険と判断しているため、船越教諭の手伝いはしたくないと言うとカヲルは意味がわからずに首を傾げる。

「……いろいろと危険なんです」

「よくわからないけどね。まぁ、基本的にあんたに仕事を頼む時の教師は高橋先生に頼んである。そうだね。せっかくだ。西村先生、

あんたもやりな」

「わかりました。私は元々、結城に良く仕事を手伝って貰っていたので一向に構いません」

和真は先ほどの職員室の件もあるため、真剣な表情をして言うとカヲルも何かあるとは察したようで和真に仕事を頼む時は洋子か西村教諭が担当してくれると言う。

「……わかりました」

「何だい？　納得がいかなさそうな顔だね」

「そりゃ、いきなり、呼び出されてですからね」

和真は担当者を聞き、安心したようではあるが改めて自分が面倒な仕事を任されたと思い肩を落とすとカヲルは和真の様子に聞き返し、和真はため息を吐くと、

「それで、教師仕様と同じ性能になるとは言いますけど、俺は何か特別な事をしないといけないんでしょうか？」

「そうさね。システムの書き換えはあたしがやるから特にやる事はないんだけどね」

「そうですか」

「ただ……」

カヲルに何か特別な事をしないといけないと聞くとカヲルは初めは

何もないと言い、和真は安心して頷いた時、カヲルは何かあるのかニヤリと笑う。

「……すいません。さっきの言葉、取り消させて貰っても良いですか？」

「今更、何を言うんだい？　当然、却下だよ」

「……」

和真はカヲルの様子に頷いた事を後悔し始めたようで撤回を要求するが当然、直ぐに却下され、和真は眉間にしわを寄せると、

「別に観察処分者とは違うからね。フィードバックがあるわけじゃないよ。ただ、教師仕様は特別だからね。ある程度の点数がないと機能しないようになってるんだよ」

「……それって、俺に点数をあげろって事ですか？」

「まぁ、簡単に言えばそう言う事さね」

カヲルは和真に成績をあげるように言い、

「……聞いて良いですか。どれくらいまで上げる必要があるんですか？」

「一先ずは総合点数で２５００点くらいで機能するね」

「……」

和真はカヲルにどれくらい成績を上げれば良いかと聞くとその点数は今の和真には手が届きそうもなく、和真はしばらく呆気に取られた後、

「ばばあ、いい加減にしろよ!!　俺の今の成績を知っているのか!!!　１０００点も上がるわけねぇだろ!!!」

「か、和くん、落ち着いて!?　目の前にいるのは学園長先生だから」

「結城、落ち着け」

ついにブチ切れてカヲルの机を叩くと、普段、見る事のない和真の様子に洋子と西村教諭は慌てて和真を止める。

第１２問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、妖怪の態度についにブチぎれる。

和真「さすがにあれは仕方ないよな？　そうだよな？　姉さんの印象、悪くならないよな？」

さあ？　わかりません。まあ、原作の明久や雄二の態度を見ていれば特に問題もないでしょう。

和真「そうだと良いんだけど」

さあ、教師仕様に対応させるために成績を上げるように言われた和真はどうするんでしょうか？

和真「……１０００点も無理だぞ」

確かにね。まあ、和真の今の点数は１６００点くらいと考えてます。Ｃクラスの上位組と言うか友香の次と考えてますね。友香フラグも立てないといけないし

和真「１０００点は無理だろ」

アンケートは変わらないため、省略します。

第１３問

「……落ち着いたか？」

「……ええ、なかなか、良いのを喰らいましたから」

西村教諭の拳が和真の頭に振り下ろされ、和真は頭を押さえながら返事をすると、

「しかし、１０００点あげるのは難しいのかい……」

「……普通に考えていただけると無理と言うのがわかると思うんですけど」

「まぁ、普通に考えるとね。だけど、あんたならできるんじゃないのかい？」

「……いや、何を根拠にそんな事を言うんですか？」

カヲルは和真を見てニヤリと笑うが和真は眉間にしわを寄せてため息を吐く。

「ん。今回の件で、あんたの中学時代の成績を調べさせて貰ったよ。ずいぶんと成績を落としてるじゃないか。基礎はできているはずだしね。ここまで戻せば、１０００点くらい簡単だろ」

「……姉さん」

カヲルは和真の今までの経歴を調べているようで簡単にできると言

うと和真はすでに素を隠す事なくカヲルに自分の中学校の成績を教えたであろう洋子を睨みつけるが、

「和くんならできますよ。西村先生もそう思いますよね？」

「そうですね。結城の理解力は悪くはないですから、少し真面目に取り組めば成績をあげる事は不可能ではないと思います」

「……」

洋子は和真になら１０００点上げる事は難しくないと思っているようで西村教諭に同意を求めると西村教諭は頷き、和真はどうして自分の事をここまで過大評価しているのかわからないようで眉間にしわを寄せると、

「ここまで言われて何もしないのは男としてどうなんだい？」

「……そうですね。だからと言っても１０００点も点数をあげるって言うのは現実味がなさ過ぎてどうしたら良いかわかりません」

カヲルは和真が困っているのが面白いのか楽しそうに笑うと和真は現実味のない点数にため息を吐く。

「まぁ、確かにそうだな」

「えぇ、俺の成績は良くも悪くも可もなく不可もなくですからね」

「その分、伸ばしようはあるんじゃないかい。一先ずは回復試験を受けて貰うよ。その時間は取れないから１日、授業が終わった後に１教科ずつだよ。１夜付けでも良いから勉強してきな」

西村教諭は和真にどのように勉強させたらいいか考え始めたようで眉間にしわを寄せ、和真は苦笑いを浮かべるがカヲルは具体的な事は言わずに和真にどんな手を使っても良いから成績を上げて来いと言い、

「大丈夫ですよ。一先ず、今日、家に帰ったら姉さんが和くんの勉強を見ますから」

「……いや、だとしても簡単に成績は上がらないから」

洋子は和真に勉強を見ると言うと和真はそれでも直ぐに成績が上がるわけはないと言うが、

「大丈夫。姉さんと一緒に頑張ろう。和くん」

「……わかったよ。やれるだけやるよ」

「はい。よろしくお願いします。和くん」

洋子は和真ならできると信じているようでまっすぐと和真を見て言うと和真は大きなため息を吐くと洋子は和真が頷いた事に嬉しそうに笑うと、

「なるほど、教師陣の噂では聞いてたけど、本当にシスコンみたいだね。これは良いね」

「……学園長、おかしな事を考えないで頂けますか？　ただでさえ、結城には大変な仕事を押し付けているんですから」

「なんだい？　西村先生、あたしを疑っているのかい？」

「……学園長の笑い方は何かを企んでいるようにしか見えません」

カヲルは和真と洋子の様子に何かを企んだように笑い、西村教諭はこれから和真に降りかかるであろう厄介事にため息を吐く。

第１４問

「和、観察処分者になったって本当か？」

「おい。何をしでかしたんだよ」

和真は休み時間になり今日の回復試験のために物理の教科書と睨めっこをしている和真にトオルと平太が声をかけてくる。

「……なんで、もう噂になってるんだよ」

「うそ、カズ、あれって、本当なの？」

「……半分、本当かな？」

清美は噂自体は聞いていたようだが和真が観察処分者になるわけがないと思っていたようで驚きの声を上げると和真はため息を吐くと、

「半分？　ってどう言う事だ？」

「……あぁ、話せば長くなるんだけどな」

一心が話しに食いついてきて和真はため息を吐きながら、昨日、学園長室に呼ばれて自分が教師仕様の召喚獣を使えるようになると言う話をする。

「……なるほど、シスコンってところを付け込まれたわけだな」

「……まったく、その通りで反論できない」

一心が苦笑いを浮かべながら和真がシスコンのせいでそんな面倒な事を押し付けられたんだと言うと和真は自分がシスコンだと認めているため、肩を落としてため息を吐くと、

「それで、カズは朝から物理の教科書をにらめっこしてるわけね」

「あぁ。今日は放課後に物理の回復試験を受けないといけないんだよ。1教科ごとに3週間で1通り受けてから、２５００点を超えるまで点数の上がりそうな教科を重点的に回復試験を受ける……やってられるか？」

「た、大変だな」

清美は和真が朝から珍しく教科書を読んでいる事に納得がいったと頷き、和真はすでに限界がきているようで乱暴に頭をかくと平太は苦笑いを浮かべ、

「でも、和が観察処分者級に召喚獣の扱い方が上手くなるってのは俺達にとってはプラスだよな。この間の試召戦争の話じゃ、吉井は召喚獣の扱い方がめちゃくちゃ上手いって話だろ。点数が高くて同じように召喚獣の扱いが上手いなら、Ａクラスだって目じゃないぞ」

「……何度も言わせるな。俺は試召戦争に興味はない。点数が高くなったら、それでこんな生活とはおさらばだ。わざわざ点数を下げるわけがないだろ」

「……本当にやる気ないわね」

一心が和真が召喚獣の扱いに慣れればＡクラスも目じゃないと言う

が和真は相変わらず、試召戦争に興味は見せないため、清美はため息を吐くが、

「そりゃ、そうだろ。お前ら、仮に上手くやってAクラスに勝てたって、たかだか3カ月だろ。それにもし俺達が勝てたとしたって小者が直ぐにしかけてくる」

「小者って根本くん？　代表と付き合ってるんでしょ？　それなら、そんな事しないでしょ」

「言ってるだろ。小者はどこまで行っても小者だ。変にプライドも高いだろうからな。自分ではAクラスに勝てないだろうけどな。仮に俺達がAと戦えばその時を狙ってくるよ」

「そんな事するか？」

和真はCクラスにAクラスと戦うまでの能力は言い切り、それ以外にBクラスの根本恭二が邪魔だと言うと清美と平太は首を傾げる。

「……するな。プライドだけの高い小者ってのはみんなそんな感じだ。うちの代表も一緒、そのうち、悪鬼羅刹（もとしんどう）に良いように使われるだけだな」

「お前にかかれば代表も三下扱いかよ」

「別に三下扱いしてる気はないよ」

和真の目には恭二も友香も同じようにしか映っていないようでため息を吐くとトオルはため息を吐くと和真は興味無さそうに言うと、

「そう言えば知ってる。私、小山さんの総合成績を聞いたんだけど、和真と1点差で代表だって」

「そうなのか？　和真、お前、頑張れよ。お前が後2点取ってればクラスはもっとまとまっただろ」

「いや、俺は人をまとめる才能はないから」

清美は和真と友香の総合点数を調べたようで和真の点数の事を言うとトオルは和真に振り分け試験の時にもう少しやれよと言うが和真は自分にはそこまでの才能はないと言い切り、教科書を睨みつける。

第１５問

「ありがとうございます。西村先生」

「なに、点数をあげるのは俺はこれくらいしか協力できないからな」

和真は西村教諭に呼び出されて生徒指導室に行くと西村教諭は和真の総合点数を上げるために各教科の要点をまとめたプリントを印刷してくれており、和真は西村教諭に頭を下げると、

「それで、どうだ。行けそうなのか？」

「正直、わかりませんよ。物理は昨日、家に帰ってから高橋先生に叩き込まれたんでそれなりに取れるとは思いますけど、後は英語はたぶん、真面目にやれば振り分け試験よりは取れると思いますけど……他はわかりません」

西村教諭は和真の勉強の進捗状況を聞き、和真は無理があるとため息を吐く。

「まぁ、無理をしない程度に頑張れ。俺はお前なら直ぐに点数が上がると思っているからな」

「……そんな過大評価はいりません」

西村教諭は和真ならやれると言うが和真は自分の評価を余程、低くしているようであり、

「結城、お前はもう少し、自分を評価したらどうだ？」

西村教諭は和真にもう少し自信を持てと言った時、

「失礼します」

「……遅いぞ。吉井」

生徒指導室に『吉井明久』が入ってくる。

（……吉井明久か？　観察処分者の仕事か……こいつのせいで、俺の仕事が増えてるんだよな）

「ねえ。君は何をしたの？　鉄人は体罰何か気にしないから」

「……吉井、おかしな勘違いをするな。結城はお前達バカと違って問題など起こさん」

和真は今の自分の状況の原因の１つである明久を見て少しだけイライラしてしまったようだが明久は自分が和真に迷惑をかけているなど思っていないため、和真を西村教諭に怒られていると思い勝手に仲間意識を持って話しかけるが西村教諭は明久の言葉を一蹴し、

「吉井、今日の放課後、観察処分者の仕事があるからな。間違っても昨日のように帰るんじゃないぞ。後は昨日、お前が勝手に帰ったせいで、結城に迷惑をかけたんだ。謝罪でもしておけ」

「そうなの？　昨日は」

「……悪いな。話しかけるな。不愉快だ」

明久に礼を言うように言い、明久は和真に謝ろうとするが和真は明久を見て機嫌が悪くなってきたようで眉間にしわを寄せると、

「……西村先生、ありがとうございました。俺はこれで失礼します」

「ん？　あぁ、すまないな。結城、頑張るんだぞ」

「はい」

西村教諭に頭を下げて生徒指導室を出て行く。

「ちょっと、待ってよ！！　昨日の事は謝るよ。だけど、そんな態度を取る必要がある？」

「……話しかけるなって言ってるだろ。観察処分者（がくえんのはじ）」

「何だよ。その言い方！！」

明久は和真の態度に自分が昨日、和真に迷惑をかけた事を悪いとは思っているようで謝ろうとするが和真は明久と話す気はないと言うと明久は和真の態度が気に入らないようで和真を怒鳴りつけるが、

「……言われる事をしてるだろ。お前のせいで俺がどれだけ西村先生の手伝いをしてると思ってる。それにお前はバカを好きなだけやってれば良いが、そのせいで泥をかぶってる人間がいるんだ。俺はその1人なんだよ。それも知らないで良くそんな口が叩けるな」

和真は明久の胸倉をつかみ言うと明久は意味がわからないようで戸惑ったような表情をすると、

「悪いな。俺はお前がFクラスとかより、人の迷惑を考える事もしないお前が気に入らない。話しかけるな」

「……」

和真は明久にそう吐き捨てると呆然と立ち尽くす明久を置いて自分の教室に戻って行く。

第16問

（……らしくないな。これじゃあ、清水と変わらない）

和真は明久と別れた後、自分が明久に吐き捨てた言葉が自分らしくないと理解しているようだが割り切れない部分は多いようで眉間にしわを寄せながら教室に向かって歩いていると、

「結城君」

「……中林か？　チャンジだ。俺は体操服ならブルマの方が良い」

「……あなたはどうしていつもそうなの？　だいたい、うちの体操服は指定でしょ」

宏美が和真を見かけて声をかけ、和真は宏美の声に振り返ると宏美は次の授業は体育のようで体操服姿であり、和真は宏美の足をジッと見た後に冗談交じりで返事をするが、和真の言葉に宏美はジト目で和真を見てため息を吐く。

「それで、何かようか？　俺は忙しいんだ」

「忙しい？　いつもやる気のない結城君が？　何かあったの？」

和真は宏美がため息を吐く様子など気にする事なく、忙しいから用があるなら早く話せと言うと宏美は和真が忙しいと言うのが信じられないようで首を傾げると、

「……何だ？　その反応は？　俺にだっていろいろとやる事がある

んだぞ」

「結城君が学校でやる事なんて資格試験か寝るだけでしょ。別にたいした用事じゃないでしょ」

「資格試験は十分にやる事だろ。まぁ、今回は内職でも学校の勉強だけどな」

和真は首を傾げる宏美を見てため息を吐くが宏美は和真の用事などたいした事ではないと言うが和真は教室に戻るとまた物理の教科書と睨めっこになるためか肩を落とす。

「学校の勉強？　何？　Ｃクラス、Ｂクラスに試召戦争でも仕掛けるの？　Ｆクラスにあてられた？」

「……仮に試召戦争だとしても俺が勉強する理由にはならないよ」

「確かにね。清美や野口君達から聞いたけど、そうそうに試召戦争不参加を表明したって話よね」

宏美は和真が勉強をすると聞いてＣクラスが試召戦争を仕掛けると思ったようだが和真は首を振ると清美達から和真の試召戦争へのやる気の無さをすでに聞いているようで宏美はため息を吐くと、

「それなら、何があったの？」

「ん？　あぁ……いや、俺の話は長くなるから、そっちの用件を先に話してくれ。休み時間は限られているからな」

宏美は和真に何かあったかと聞くが、和真は少し考えると今、自分

が置かれている状況は直ぐに説明が付くものではないため、宏美に用件を先に言えと言う。

「そう？　長くなるならそうするわ。あのさ……『ラ・ペディス』の期間限定の新作のクレープ、凄く美味しいって聞いたんだけど、美味しいの？」

「新作クレープか？　美味いぞ。俺は試作品を食わせて貰っただけだけどな。それがどうかしたか？」

「やっぱり、噂は本当なんだ。どうしよう。今月、ピンチだしなぁ……期間限定」

宏美は和真のバイト先の期間限定メニューが気になるようだが今月は苦しいようであり、

「……なぜ、期待するような目で俺を見る？」

「別に奢れとは言ってないわよ。確か、バイトでも社員割り引きがあるって言ってたよね。結城君と一緒なら、結城君が支払いすれば安く食べれるかな？　と思って」

和真は嫌な予感しかしないようで1歩下がると宏美は奢れとは言わないと言いながらも和真の腕をつかみ、

「……わかった。今度の日曜日で良いか。バイトは午後からだから、午前中なら付き合うよ」

「ありがとう。それじゃあ、日曜日ね。約束よ」

和真はため息を吐くと宏美は笑顔で礼を言うと自分の廊下を走って行く。

第１６問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

反省和真に宏美が遭遇。そして、デートの流れですが……

和真「デート？　違うだろ」

和真もたぶん、宏美も自覚してないでしょう。（苦笑）
宏美がアンケートのトップなのでひとまずは宏美イベントを増やしておこうかな？　って感じです。

アンケートは省略します。変わらないからです。
後、アンケートの締切ですが第１巻部終了（清涼祭前）までに変更します。相変わらず、歩みが遅いのでこのままだと何もフラグを立てないまま終了しそうだからです。

第17問

「……だから、俺の席を囲むな。邪魔だ」

「和、聞けよ。今度はFクラスはBクラスに仕掛けるんだってよ」

「……見りゃわかるよ。うちの代表様はご立腹みたいだからな」

和真が教室に戻るといつものメンバーが和真の席を囲っており、FクラスがBクラスに宣戦布告をしたと聞き、和真はDクラスを倒したFクラスがCクラスを無視してBクラスに宣戦布告をした事が気に入らないようでピリピリとした様子の友香を見てため息を吐くと、

「カズ、今度はどうなると思う？」

「……知らないよ。それより、うちの代表様は小者と付き合ってるんだろ。巻き込まれなければ良いけどな」

「巻き込まれる？　どう言う事だ？」

清美は和真にFクラスとBクラスの試召戦争の予想を聞くと和真は自分の席に座り、これ以上、変な事に巻き込まれたくないとため息を吐くが、その言葉はトオルの興味を引く、

「……考えればわかるだろ。小者で他人を見下してる。やるとしたらくだらない手段、それも自分の手が汚れないように手ゴマ、もしくはうちのクラスにやれって言ってな」

「……それは面白くないな」

「……そう考えると代表には悪いけどFクラスに勝ってほしいわね」

和真は物理の教科書を開きながら、吐き捨てるように言うとトオルも恭二の話を聞いているためか眉間にしわを寄せると清美はため息を吐く。

「俺はウチの代表様がどう動くかは知らないけどな。少なくともBクラスと協定を組むとか言いだした場合はウチのクラスを売るぞ。当然だろ。汚い手で何かしたら高橋先生に迷惑がかかるからな」

「まぁ、らしいな。そんな上からの協定なら俺も願い下げだな。それに試召戦争をやるって言ってるのにBと協定結んだって俺達に得はないからな」

「だな。和と違って俺達の頭じゃ、Aには敵わないだろうからな。それでもBクラスの施設なら取れるだろ」

「そうね。私達は分くらいわきまえないと」

和真はBクラスが汚い手段を使ってきた場合は自分の思う通りに動くくと言うと和真を囲んでいる4人は苦笑いを浮かべて頷き、

「と、言う事でウチの代表様が使えない時には下克上は任せるぞ」

「……だから、俺を巻き込むな」

「カズを巻き込む？　違うでしょ。今回、巻き込まれているのは私達、カズの言葉には人をその気にさせる力があるのよ」

トオルは和真の背中を叩き、和真はため息を吐くと清美は自分達は和真に巻き込まれていると笑うと、

「……ないよ。そんなものは俺は自分1人で精一杯だからな……何より、俺はこれをどうにかする事しか考えられないんだからな」

「……まぁ、頑張れ」

和真はそんな事を言うより、邪魔をしないでくれと言うと一心は和真の肩に手を置き、

「応援だけじゃなく、邪魔をするな。時間がないんだよ」

「そうね。でも、そう言われると邪魔したくならない？」

「山下の言い分もわかるな」

「……へーた、わかるな」

和真は解散しろと言うが清美はイタズラな笑みを浮かべると平太は清美の意見に賛成だと頷き、和真は大きく肩を落とす。

第18問

「和くん、少し手伝って欲しい仕事があるんですけど」

「カズ、洋子先生からの呼び出しだよ」

Fクラスと Bクラスの試召戦争が始まり、自習が始まりしばらくすると洋子が手伝って欲しい仕事があると言ってCクラスの教室を訪れる。

「……高橋先生、学園では結城と言ってください」

「そ、そうですね。すいません。どうしてもなれなくて、気をつけます」

「……気をつけるってもう2年目なんだから」

和真はため息を吐きながら洋子に言うと洋子は少し慌てた様子で気をつけると言うと、

「前から思ってたんですけど、和はシスコンですけど、高橋先生はブラコンですよね？」

「……一心、いきなりわけのわからない事を言うな」

「いや、一心の言う事もわかるな」

ぞろぞろと一心、トオル、平太が集まってくる。

「そ、そんな事はないと思うんですけど」

「……高橋先生、それで手伝って欲しい仕事ってなんですか？」

「は、はい。えーとですね。教材室から旧校舎の空き教室に教材を運んでもらいたいんです。それで、結構な量があるので」

洋子も少し一心が言った事に自覚があるようで慌てながら言うと和真は洋子に仕事の内容を聞くと洋子は和真に頼みたい仕事を話し、

「それなら、私達も手伝いましょうか？」

「そうだな。和は勉強しないといけないからな。早めに片づけようぜ」

一心、トオル、平太、清美は和真を手伝うと言うと、

「すいません。お願いできますか？」

「良いのか？」

「それくらいはな。ほら、さっさと始めようぜ」

和真は一心達の提案に首を傾げるとトオルは和真の肩を叩き、教材を取りに行こうと言う。

「そうだな。行こう。姉さ……」

「カズも洋子先生と変わらないじゃない」

和真は教材のところまで洋子に案内してくれと言うが和真も気を抜くと洋子の事を『姉さん』と呼んでしまうようで清美は和真を見て苦笑いを浮かべると、

「……言うな」

和真はため息を吐く。

「……これは多いな」

「すいません。お願いできますか？　本当なら吉井くんに頼む予定だったのですけど、試召戦争になってしまいまして」

「……また、あの観察処分者（バカ）のせいかよ」

「和、あんまり言うな。お前の価値を下げるぞ」

トオルは洋子に案内された教材室の教材を見て苦笑いを浮かべると和真は苦々しく言うと一心は和真の肩を叩き、

「……そうだな。悪い。気をつける」

「そうしろ。あんまり、感情的になって、吉井をバカにしているとウチの代表や根本と変わらなくなるからな」

和真は落ち着こうと大きく深呼吸をすると一心は笑顔を見せ、

「それじゃあ、早いところ、終わらせようぜ。和の自習時間も減らすわけにはいかないしな。せっかく、大出を振って回復試験の勉強ができるんだ。和の強化は俺達にとってもプラスになる事だからな」

「そうね。それじゃあ、洋子先生、私達はこれを運びますから洋子先生はお仕事に戻ってください」

「そうですね。総合教科を承認出来るのは高橋先生だけだからいないとこまるだろうしう」

平太は早く終わらせて和真の自習時間にしようと言うと和真達は教材を持って教材室を出て行く。

第１８問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

話しが進みません。

和真「確かにね」

和真もやる気ないし、

和真「必要ないしね」

まったく、ここまでやる気のない主人公になるとは思いませんでしたよ。

和真「悪かったね」

まあ、完全に和真派が出来上がっている流れなんですが、Ｂクラスとの協定に和真はどう動くんでしょうか？

番宣

リトルバスターズ！の二次小説を投稿しました。

『～あの日の約束～』と言う作品です。

神北小毬の幼なじみが主人公な作品です。リトルバスターズ！もやったよ。って人たちは見てくれると嬉しいです。

第19問

「……あれ？」

「和、どうかしたのか？」

「……いや、あいつらって、Bクラスだったよな？」

和真達は旧校舎の空き教室に教材を運ぶ途中にFクラスの教室にBクラスの生徒5名が入って行くのが目に映る。

「何で、Bクラスが？　決着つくの？」

「いや、決着がつくならそこで試召戦争はやってないだろ」

清美はBクラスの生徒がFクラスの教室にいるFクラス代表である『坂本雄二』の首を獲りに行ったかと思うが周りではまだ試召戦争が行われており、

「……何かきな臭いな？」

「やっぱり、そう思うよな？　見に行くか？」

「……そうだな」

和真と一心は何となく何かを感じたようでFクラスの教室を覗きに行くかと言うと、

「危なくない？」

「まぁ、危なかったら逃げれば良いし、ウチには最強のシスコンがいる脅しには屈しない」

「……悪かったな。なんなら、俺1人で行ってくるから」

清美は自分1人だけ女子のため苦笑いを浮かべるがトオルはどうにかなると言いながら和真をシスコンと言い、和真は不機嫌そうな表情をすると1人でFクラスの教室を覗きに行くと言い、歩きだす。

「……ちっちゃいな」

「そうだな……山下、へーた、試召戦争のところで全員に聞こえるようにBクラスがFクラスの設備を破壊してるって言って来てくれ」

和真達がFクラスの教室を覗くとBクラスの生徒がFクラスの教室の設備を壊したり，Fクラス生徒の私物の鞄を漁っている姿が見え、和真はため息を吐くと平太と清美に教師を呼んでくるように言うと、

「了解」

「3人で大丈夫？」

「別に取り押さえる気もないからな……証拠写真と状況が状況だから携帯は没収されないだろ」

平太は頷き、清美は首を傾げるが和真は気にする事なく、携帯電話で証拠写真を撮って行き、

「熱くなってるから、気づきもしないんだな」

「……小者の手のものは所詮、小者」

一心とトオルは和真が写真を撮っている事にも気付かないＢクラスの生徒達の様子にため息を吐く。

「……結城、どう言う事だ？」

「俺に聞かないで、直接、聞いてください」

平太と清美は途中で西村教諭に会ったようで西村教諭を連れてきて、和真に状況を聞くと和真はため息を吐きながら、Ｆクラスの教室の中のＢクラスの生徒達を指差し、

「それも、そうだな。お前ら、動くな！！　ここで何をしている！！」

『げっ！？　に、西村先生』

『な、何で！？』

西村教諭はＦクラスの教室の中にいるＢクラス生徒を怒鳴りつけると突然のできごとに驚きの声を上げるが、

「詳しい話は生徒指導室で聞かせて貰う。結城、野口、遠山、黒崎、山下、よく知らせてくれた」

「当然の事をしたまでです」

「はい」

西村教諭はＢクラスの生徒５名を担ぎあげると一心と清美は頷き、

「西村先生、緊急事態だったんで見逃してくださいね。証拠写真も撮っておきました」

「……そうだな。仕方ない」

和真は自分が携帯電話で撮った写真を見せると西村教諭は頷き、

「お前ら、どうしてこんな事をしたか全て洗いざらい話して貰うぞ。その後は当然、補習だ」

『い、いやだあぁぁぁ！！！？？？』

西村教諭はＢクラスの生徒を抱えて歩き出すと、

「……とりあえずは教材を運ぶか？」

「そうだな。さてと、和真、どうするつもりだ？」

「あ？　一先ずは小者しだいかな？　おかしな事をしてきたらその時はその時、あまりやりたくないけど……小山には名前だけの代表になって貰うしかないだろうな」

西村教諭の背中を見送った後、トオルはＣクラスの代表である『小山友香』の彼氏の手先を潰したため、和真達はＢクラスを敵に回した事で自分達の立場が変わってきた事にため息を吐く。

第２０問

「それじゃあ、行ってくるかな？」

「和、頑張れよ」

帰りのＨＲが終わり、和真が席を立とうとした時、

「失礼する。友香、悪いな。Ｃクラスの生徒をまとめてくれ」

「恭二、わかってるわ。みんな試召戦争の事で話があるわ。席に戻って」

Ｂクラス代表の『根本恭二』がＢクラスの生徒数名を引きつれて教室に入ってくると友香は帰宅を始めようとしていた生徒達を呼び止める。

「カズ、どうするつもり？」

「どうするつもりも興味なし、俺には関係ない」

清美は立ち上がっていた和真に声をかけるが和真は興味無いと言うと教室を出て行こうとすると、

『おい。聞こえなかった？』

「……あんたらが何をしようかなんて知らないし、興味もない。こっちは用事があるんで失礼するよ」

Bクラスの生徒は高圧的な態度で和真の肩をつかみ、和真は興味無さそうにその生徒の手を払い、

「だいたい。Fクラスの設備を壊せとか言う小者で卑怯な奴が代表のクラスが入ってきたんだ。ろくでもない事だろ。そんなのでとばっちり喰らう気はないね。俺は就職希望なんで試召戦争でも何でも勝手にやってくれ」

「ずいぶんと舐めた事を言うな。だいたい、俺がそんな指示を出したなんて事実はないぜ。そう言う嘘を言われると迷惑なんだ」

Bクラスの指示を聞く気はないと言うと恭二は自分はそんな指示を出した事はないと平気な面をして言う。

「そうか？　俺だって、お前みたいな小者に興味はないから、勝手にやってくれよ……ただ、それが真実なら、クラスもまとめられてない代表様がFクラスに勝てるかどうかもわからないけどな」

『おい。Cクラスが上位クラスに逆らうんじゃねぇよ！！』

和真は恭二に興味などないと言うと恭二は自分が連れてきた生徒に目配せをし、Bクラスの生徒の1人が和真の首をつかむが、

「殴りたければ殴れば良いだろ。俺はそれを西村先生に報告するだけだからな。こっちは手を出していない。口論のきっかけはそっちが人の腕を無理やりつかんだから、ここにいる全員が目撃者で証人。部が悪いのはそっちだろ。代表様がこんなところに連れて歩いてくるんだ。親衛隊と言われるクラスの成績上位者がここで退場しても良いならな」

和真は脅しに屈する気はないため、放せと言うと和真の首をつかんでいる生徒に言うと恭二は苦々しい表情をして生徒に目配せをすると和真の首をつかんでいた生徒は和真から手を放し、

「……根本、１つ、教えておいてやるよ。実力もないのに変なプライド持ってても邪魔だぞ。プライドなんてものは何の役にもたたないからな」

「忠告、ありがたく受け取っておくよ」

和真は恭二に向かいアドバイスだと言うが恭二は和真を見下しているため、和真程度に言われる筋合いはないと言う表情をして言う。

「そうか……後、代表様。そっちの彼氏と事前に打ち合わせをしてるなら、放課後、時間をくれくらいは言っておけよ。悪いけど、ちょっと点数が高いだけで、信頼も得てない代表に従うお人好しってのはなかなかいないぞ。現に今のやり取りで俺以外にも帰りたい奴は出てるからな」

「……」

和真は友香に向かいクラスをまとめたいなら考えろと言うと友香は和真が気に入らないようで和真を睨みつけるが、

「じゃあな。俺は行くぞ」

「和、待て。俺も行く。悪いね。代表、俺も今日は忙しいんだ」

「私も」

和真は気にする事なく教室を出て行き、和真の後ろに一心、トオル、平太、清美は続いて行くと教室の中は微妙な空気が広がり、数名の生徒が教室から和真達を追いかけるように出てくる。

第２１問

「山下、お前は出てきたら不味くないか？」

「そうだな。女はめんどくさいだろ」

和真は自分達と一緒に教室を出てきた清美に面倒な事にならないかと言うと平太も和真と同意見のようで頷くが、

「気にしない。だいたい、小山さんの態度は限度を超えてるでしょ。私以外にも同じ考えの娘は多いよ。半々くらい、もしくはこっちが優勢」

「まあな。うちのクラス分けは完全に成績ごと。言ってしまえば、実力的にはほとんど変わらないんだ。それを代表だと言われたってな」

清美は自分以外にも友香の態度に腹を立てていると言うと和真は成績自体は大差がないと言うと、

「確かに成績ごとだから仕方ないと言われたってそれでもでかい態度されたら面白くないよな」

「Ａクラス代表の『霧島翔子』みたいに頭１つでているわけでもない。言いたくないが根本みたいに汚い手を使ってでも人をまとめあげる才覚もない。Ｄクラスの『平賀源二』や中林のように先頭で周りを引っ張る力もない。Ｄクラス戦で上位クラスを出し抜いた悪鬼（もとし）羅刹（んどう）ほどの戦略眼もない。はっきりと言わせて貰えば代表の資質で考えるとウチの代表様は代表の資質は最低だよ」

一心は和真の言葉に頷き、和真は冷静に各クラスの代表の資質を見定めているようで自分達のクラスの代表である友香に最低評価をつける。

「ずいぶんとバッサリと切るよな」

「事実だろ。進級して1週間足らずだけどな。さっきのだって事前に言っておけば帰る人間も減っただろ。他人の話も聞かないにしても、やり方ってあるだろ」

トオルは和真の友香に対する評価に苦笑いを浮かべるが和真は気にする事なく、

「それじゃあ、俺は西村先生のところに行くからな」

「あぁ。頑張れよ。目指せ、腕輪持ち」

「いや。無理だから」

生徒指導室で回復試験を受けてくると言うと平太は和真を激励し、和真がため息をついた時、

「吉井、アンタの返り血がこびりついて洗うの大変だったじゃない」

「それって、吉井が悪いのか？」

「……」

目の前にFクラスの生徒達が話している姿が目に映る。

「……和」

「わかってるよ。俺は冷静だよ」

一心は和真の目に明久が映った事で和真の中に何か良くないものが出てきていると思ったようで和真の肩をつかむと和真は深呼吸して自分は冷静だと言うと、

「この後にBクラスがFクラスの代表を討ち獲れなければウチのクラスの代表様はFクラスの策略にはまってAクラスに試召戦争を仕掛ける事になる」

「Aクラスと試召戦争？　どう言う事？　明日まで試召戦争は中断でしょ」

和真はこの後に起きる事にある程度の予想は付いているようでため息を吐くと清美は首を傾げる。

「たぶん、CクラスがB対Fの決着が付いたら漁夫の利を狙ってくると言う噂が出ているはずだ。Fクラスが動いたのはウチのクラスに同盟を求めにくるってところだ……そして、根本はそれを使って休戦協定違反を訴えてくる」

「おいおい。自分が協定を提案しといてそこから罠かよ」

「仕方ないだろ。小者なんだから……悪いな。そろそろ行かないと西村先生を待たせるから行くぞ」

「あぁ」

和真は恭二がCクラスの教室で雄二に仕掛けると言うとトオルは恭二の汚さにため息を吐くと和真は眉間にしわをよせた後、表情を戻して生徒指導室に行くと言い、生徒指導室に向かって歩き出す。

第２２問

「和、どうだった？」

「何？　点数下がったとかは無しにしてよ」

物理の回復試験を受けた翌日、ＨＲ前に和真は生徒指導室により、西村教諭から回復試験の返却があり、教室のドアを開けると和真を見つけたトオルと清美が和真に声をかけると、

「……これ、何だと思う？」

和真は自分が取った点数が信じられないようで顔を引きつらせながら４３７点と書かれた解答用紙を２人の前に出す。

「……冗談で腕輪持ちになれとは言ったが本当に取れるのかよ」

「……１夜付けでそんな点数を取られたらこの学園の生徒と言うか学生のほとんどが勉強止めるわよ」

「……俺もそう思う」

トオルと清美も見せられた現実に顔を引きつらせると和真も２人の言葉に賛成なようで大きく頷くと、

「……昨日、西村先生がくれたプリントや一昨日の夜に高橋先生から教わったところがほとんど出た」

「それって、２人が手心を加えてくれたって事？」

「……いや、基本的にあの2人がテストに関してそんな事はしないと思うな。教え方が的確なんだと思う」

和真は顔を引きつらせたまま、西村教諭から渡されたプリントと洋子に教えて貰った時のノートを机に広げるとそこには和真の字でびっしりと2人から教わった事が記されており、

「……和、お前を俺は甘く見ていたよ。やればできる子だったんだね」

「……うん。洋子先生の和真を見る目はブラコンなだけじゃなかったよ」

トオルと清美は和真の頑張りを誉めたいようで2人で和真の頭を撫でまわし、

「止めろ!?」

和真は2人から逃げようとするが、

「照れなくて良いんだよ……それとも洋子先生に撫でて貰いたい？シスコンだし」

「そんなわけあるか!?」

清美は和真を生温かい目で見て言い、和真は声を上げる。

「朝から、何、騒いでるんだ?」

「和、どうだった？」

一心と平太が登校してきて和真達の様子を見て声をかけてくると、

「聞いてくれよ。一心、へーた。和の野郎、バカなふりをしてやがったんだ」

「ん？　バカなふり？　ヤマでも当たって３００点台でも取ったか？」

「これ、これ」

トオルは芝居がかった口調で和真が自分達をバカにしていると言うと平太が和真が大部点数を上げたと思って苦笑いを浮かべた時、清美は和真の机の上にある答案用紙を指さし、

「「何じゃこりゃ！？」」

「……そうなるよな。俺だって、生徒指導室で初めてその解答用紙を見た時に同じ事を言ったよ」

一心と平太は異常に上がった成績に驚きの声を上げ、和真はため息を吐く。

「そう言えば、この点数を見て鉄人は何も言わなかったのか？」

「……西村先生は『頑張ったな。よくやった』って言ってくれたよ」

トオルは一心と平太の驚きように満足したように笑うと和真に西村教諭の反応が気になったようで和真に聞くと和真は西村教諭なりの

最高の誉め言葉だと理解しているようで苦笑いを浮かべると、

「一先ずは物理で点数を稼いだんだ。後、７００点……無理だろ」

「どうにかなるだろ。これだけ、取れる頭があるんだ」

他の回復試験に向けて気合を入れようとするが、その壁は高すぎるようでため息を吐くが、一心は和真の肩を叩き、

「カズ、今日は何？」

「現代文……あんまり、得意じゃないんだよな。高橋先生も理系だから、教えて貰ってもあまりよくわからなかった」

清美は今日の和真が受ける回復試験の事を聞くと和真は苦手教科なのかため息を吐くため、

「まぁ、お前も理系の人間なんだろ。現代文なら、山下はそれなりに取れているだろ。和に教えてやったらどうだ？」

「そうだけど……これを見せつけられるとね」

平太は苦笑いを浮かべながら清美に和真のバックアップをするように言うと清美はイタズラな笑みを浮かべながら和真の解答用紙を指差す。

第２２問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、まさかの物理４００点オーバー。

和真「やりすぎだろ」

最初から和真は物理を主力にしようと決めてました。洋子先生の担当教科ですしね。瑞希は確かあまり得意じゃなかったからと言うのもありますけど、

後は平均的に上げるかほかに2、3教科特化させるかは考え中。

和真「腕輪の能力はどうするんだ？」

今、考えているのは２つ。

攻撃完全無効化と手加減

和真「試召戦争向きじゃなさそうだな」

そうですね。攻撃完全無効化はそのままです。一定時間、相手の攻撃を受けません。

和真「手加減は？」

名前は他の物を考えていますが、範囲攻撃で対峙した召喚獣の点数を一桁にしますが和真の召喚獣ではとどめは刺せなくなる。部隊長として動かすなら有効な能力ですが和真1人で無双ってのはやめたいですからね。腕輪の能力には規制をかけたいと思ってます。

和真「まあ、腕輪＝チートって感じだからね」

はい。あまり好きじゃないんです。個人的には人を書きたいので。

（苦笑）

アンケートはあの後、投票がないため、宏美が1位のままです。

第２３問

「手が穢れるのがすごく嫌だけど、薄汚いあなた達に相応しい教室に送ってあげるわ。覚悟しておきなさい。近いうちに始末してあげるわ！！」

（……ずいぶんと挑発的だな。まぁ、進級したばかりで勝てるわけもないのに挑発に乗るようなバカはいないだろ）

朝のＨＲが終わり、１時間目の授業が始まるまでの休み時間に２－Ａ所属の『木下優子』はそう言ってＣクラスの生徒全員を挑発して教室を出て行くが和真は今日の回復試験の方が重要なようで西村教諭から渡されたプリントと睨みつけていると、

「Ｆクラスなんて相手にしてられないわ！！　Ａクラス戦の準備を始めるわよ！！」

「……和、これって不味くないか？」

クラス代表の友香はＡクラスとの試験召喚戦争を始めると叫び、多くのクラスメート達は同意の声をあげ始めると一心は和真の肩を叩き、和真に何かした方が良いんじゃないかと言う。

「……うちの代表は隣のクラスの小者と付き合っていると聞いて男の趣味は悪いとは思ってたが、ここまで単純（バカ）だとは思わなかった」

「そう言う事を言わない。確かに私も根本くんはないと思うけど……主にあの髪形」

和真はため息を吐いて友香を小バカにすると清美は苦笑いを浮かべると、

「和、これを止めろよ。このままだと、せっかくあげた点数、がっつり下げられるぞ。だいたい、回復試験も俺達は受けてないんだ。Aクラスに勝てるわけないぜ」

「……だよな」

トオルは今の状況じゃAクラスに勝てるわけがないと言うと和真も同意見のため肩を落として頷き、

「山下、これ、貰うぞ」

「何？　私と間接キスでもしたいの？」

「そうじゃなくてな。それに間接は別に嬉しくないよ……当たらないように」

和真は清美の飲みかけの飲むヨーグルトを手に取ると清美は和真をからかうように言うが和真はため息を吐いて友香に当たらないように投げつける。

「ちょっと、誰よ！？　こんな事をするのは！！」

「……ナイスコントロール。俺、美少女の顔が白濁の液体で汚れてる。良い絵だ」

「それについては賛成だけど良いのか？　代表がお怒りだぞ」

飲むヨーグルトは綺麗な曲線を描いて友香が演説を始めていた教卓に当たって飲むヨーグルトがはじけ、友香の顔には飲むヨーグルトがかかり、彼女の怒りはこんなくだらない事をやった犯人を探す事に向かいだし、和真は笑いをかみ殺していると和真の様子に平太はため息を吐くと、

「そこ、これはあなたがやったの!!　どう言うつもりよ!!　また、私のやる事を邪魔するつもり?」

友香は笑っている和真を見つけて怒りをあらわにしながら和真の前まで来て、和真を怒鳴りつける。

「どう言うつもり?　その言葉、そっくり返すよ。安い挑発に乗った代表様」

「ちょっと、あなた、私をバカにしてるの?」

「勝ち目もないのに感情に任せてAクラスと試召戦争を始めるなんて十分にバカにされる状況だろ。それと代表になったなら、せめてクラスメートの名前くらい一致させておけよ」

和真は友香を挑発するように笑うと友香は怒りに任せて和真の胸倉をつかむが和真は友香の手をつかみ、自分の胸倉から彼女の手を外すと、

「うっ!?」

「へぇ、少しは冷静になったか?」

友香は和真の怒りでAクラスとの事を冷静に考えられるようになっ

たのか、自分が怒りに任せて無謀な事をしていたと気づき、和真はイタズラな笑みを浮かべ、

「少し冷静になって考えろ。今の状況でAクラスに勝てると思う奴は何人いる？　勝てないと思う奴は手を挙げてくれ」

「俺は勝てるとは思えない」

「私も」

クラスメート達に向かいAクラスに勝てると思っている人間がいるかと聞くとトオルと清美は手をあげ、続くように一心と平太が手をあげると冷静になればそのくらいの分別が点く人間は多いようで続くように手を上げ出す。

「代表様はどこに勝てる見込みを見つけたんだ？　俺の名前も出てこないって事はまだクラスメート全員の名前も顔も一致してないんだろ。Cクラス平均何人当てればAクラス1人に勝てるか？　1教科でもAクラスと対等に戦える人間がいるのか？　それくらいは考え付いているんだろ？」

「……」

「……ぶっちゃけ。俺は就職組だからな。内申は自分のテストと生活態度で決まるからな。設備なんてどうでもいいから、勝手に試召戦争を始めても良いが、俺は補習を受ける気もないからな。やるなら、やりたい奴で勝手にやってくれ」

友香に向かい勝てると思った理由を言えと言うが友香は何も答えず、和真は呆れたようなため息を吐くと自分は不参加を決め込むと言い、

友香を追い払うように手を振る。

第２４問

「な、何よ!!　私は代表なのよ!!　私の指示に従いなさいよ!!」

「断るよ。だいたい、代表だと言うなら資質を見せて欲しいね」

友香は和真の態度が気に入らなかったようで感情を爆発させて和真に自分の指示に従えと怒鳴りつけるが和真は友香の話など聞く気もないようで自分の席に座り、

「それと昨日も言ったけどな。代表だって言うなら、代表らしい事をしろよ。お前は何をしたいんだ？　はっきり言わせて貰うけど回復試験も受けてないんだ。点数はクラス分けの時のまま、たぶん、単体の教科で１００点近い差があるぞ。それを超えられるような作戦をお前に立てられるのか？　はっきり、言わせて貰うぞ。根本はＦクラスの代表と比べて明らかな格下だ。あいつが仮にＦクラスに勝てたとしても俺はあいつが立てる計画や作戦では動かない。ここにいる奴らはどうだ？　結局、昨日、斬り捨てた奴らは根本の指示だと西村教諭に白状したがあいつはしらを切ったぞ。そんな奴の指示で動きたい奴は何人いる？」

和真は友香に作戦を立てる能力はないと言い切ると西村教諭から昨日のＦクラスの設備破壊の状況も聞いているようで恭二は人に罪を着せる事を何とも思わないと言い、クラスメートに意見を求めるとクラスメートからは恭二に従う事はできないと言う。

「代表様、お前はどうするんだ？　ここで選べよ。クラスメートから信頼されてもいないお前が選ぶのは２つ。クラスの代表として根

本とは試召戦争で協力しないと言う事、それでも根本と組んで代表としての威厳を失墜させる事」

「……」

和真は友香に2択を迫ると、

「俺達の中でお前は確かに成績は良いのかも知れない。だけど、お前はクラスのために動いたか？　昨日は根本のために動いただろ。仮にお前が試召戦争であいつとの関係を割り切れないなら、俺達Cクラスは何を目指すんだ？　俺はさっきも言ったが就職組だクラス設備になんか興味もないよ。だけど、お前が代表として割り切っていないなら、彼氏の牛耳っているクラスに試召戦争を仕掛ける事はないだろ。さっきの言った通り、Aクラスとの差は簡単には埋まらない。なら、クラス設備を目指している奴らは何を目標に動けば良いんだ？　この中で本気で勉強してもAクラスに届かないと思っている奴は正直に手を挙げてくれ」

「……悪い。俺は届かないと思ってる」

「俺もだ。それに勉強ばかりしてたくないからな」

和真の質問にトオルと一心はAクラスには勝てないと手をあげるとクラスメートの多くが2人に続くように手を上げ、

「なら、Bクラスになら、どうだ？」

和真はBクラスになら勝てるかと言うとクラスメート達はBクラスになら何とか勝てると考えているものも多いようで手は下がって行く。

「代表様、あんたは1週間近くも代表の立場にいて、クラスが進む道を示したか？　ただ、自分が代表だと言う事に満足して何もやっていないだろ。クラスをまとめる事も、クラスの戦力を分析する事もFとDの試召戦争を考えてなぜ、あの結果になったかを考える事も。確かに点数が高いとは言ったって成績ごとでクラスを分けているって事はここにいる奴らの成績は大差ないはずだ。それなら、代表に必要なのはなんだ？　人をまとめる能力だろ。それにも気付かない奴が偉そうに文句を言うな。少なくとも俺は沈む事が決まっている泥船の手伝いをする気はない」

「な、何よ。それ？」

和真ははっきりと友香の指示に従わないと言うと友香は和真の意見に多くのクラスメート達が賛同している様子にどうしたら良いかわからないようであり、

「それなら、私はどうしたら良いのよ！！　あなたの言う事もわかるわよ。熱くなりすぎだって言うのも！！　でも、私達はAクラスにバカにされたのよ！！　確かにAクラスに比べたら私達は勉強している比重だって少ないかも知れないわよ！！　でも、それで戦わずにしっぽを振れって言うの！！　いやよ。私は負けたく無いわ！！」

「……カズ、ごめん。私もちょっと代表の気持ちもわかるかな」

友香は優子にバカにされたのが悔しかったと叫ぶと清美は苦笑いを浮かべながら、和真に何かできないかと聞く。

第２５問

「……いや、だから、俺は」

「ここまで騒ぎをでかくして何もしないはあり得ないぞ。和」

和真は友香の本音に面倒だと言いたげにため息を吐くが一心は和真の肩を叩くとクラスメート達は和真の次の言葉を待っており、

「……はぁ。まずは状況の確認。なぜ、Ａクラスの木下があんな事を言ったか」

「そこか？」

「あぁ。もしかしたら、Ａクラスにうちのクラスの生徒が何かやった可能性もあるだろ」

「……なぁ。和、俺、１つ重要かも知れない事を思い出した」

和真は状況を確認しようと言うと平太は何か思い出したようで和真に声をかける。

「何だ？」

「どのクラスにいるかわからないんだけど、木下優子には秀吉って言う双子の弟がいたよな？　確か演劇部だったはず」

平太は優子には弟の『木下秀吉』がいる事を思い出すと、

「……なるほどな」

「カズ、何かあったのか？」

「たぶん、これはＦクラスから報復だ」

和真は秀吉の存在にある答えに行きついたようでため息を吐く。

「何かわかったの？　えーと」

「クラス代表ならクラスメートの名前を合致させてくれ。結城和真だ」

友香は和真の様子に首を傾げると和真はもう１度、ため息を吐くと、

「さっきの木下の挑発はＦクラスの謀略の１つだ。大方、根本に協力したＣクラスへの報復。無謀にＡクラスに挑んで設備を落とされるようにってな。代表の性格も見透かされてるぞ」

「それって、どう言う事だ？」

先ほどの挑発はＦクラスの謀略だと言うと一心は和真の言葉の意味がわからないようで首をかしげ、

「よく考えろ。本当にＡクラスが試召戦争を仕掛けたいなら、ここで宣戦布告をして行くはずだろ。それなのに木下は宣戦布告を先延ばしにした」

「……まるで私達から試召戦争を仕掛けるように？」

「そう言う事だ。この試召戦争は無意味だ」

和真はため息を吐くと友香も和真の説明で和真と同じ意見に行きついたようで悔しそうな表情をすると和真は話をここで追わらせようとするが、

「それじゃあ、私達の相手はFクラスね」

「……いや、何で好戦的なんだ？」

友香はFクラス相手に試召戦争を仕掛けようと言い始め、和真は肩を落としてため息を吐く。

「そうでしょ？」

「……いや、FクラスはCクラスがBクラスと同盟を組んで自分達を嵌めたからだろ。それで仕掛けるのは違うだろ」

「なら、結城君、この怒りはどこにぶつければ良いのよ？」

「いや、知らないよ」

友香は自分達の怒りの矛先をどこに向けたら良いかと和真に聞くと和真はため息を吐くがクラスメート達は怒りの矛先を探しているようであり、

「和、何かないのか？」

「なくもないけどな。ここから先はFクラスしだいだからな」

トオルは真っ直ぐと和真を見て作戦はないかと聞くと和真は次の手はFクラスしだいだと言い、

「それじゃあ、そのFクラスしだいって言う作戦を教えて」

友香は大部熱くなっているようで勢いよく和真の首をつかみ顔を近づけながら言うと、

「……代表様、近いから」

「ご、ごめん!?」

和真は友香の顔が目の前に来た事で友香から視線を逸らすと友香は慌てて和真から距離をとり、

「……また、和の毒牙にかかった人間が増えた」

「天然の良い男はこれだから」

平太は2人の様子にため息を吐くと清美は和真をからかうように言う。

第２６問

「違うわよ！？」

「……からかうな」

友香は平太と清美の言葉を全力で否定し、和真はため息を吐くと、

「さっきも言ったけど、これは報復なんだ。気づいたのにのってやったら、それこそ、相手の思うつぼ。これだけは絶対に言える事、理解できるか？」

「えぇ」

和真にまずはＦクラスの仕掛けた罠にのってはいけないと言うと友香はまだ、納得はいかないようだが頷き、

「仮に報復として試召戦争を起こすなら、俺達がやる事はＦとＢクラスの勝者……違うな。決着がつきしだいＢクラスの設備を手にしているクラスに試召戦争を仕掛けるのが有効な手段だよ」

「待てよ。Ｂクラスの設備を持っているクラスってどう言う事だ？勝者がじゃないのか？」

和真はＦクラスとＢクラスの試召戦争の勝敗が決まりしだい試召戦争をＢクラスの設備を持っているクラスに仕掛けると言うと一心は和真の言いたい事がわからないようで首を傾げる。

「ＦクラスはＤクラスに勝った時に何をした？　設備交換はしたか

？　この目的って誰かわかるか？」

「してないわ……それが今回も起きるって言うの？　それなら、Ｆクラスは何のために試召戦争をしてるって言うのよ？」

和真はＦクラスがＤクラスに勝った時に設備交換をしなかった事が気になっているようでクラスメート達に設備交換がなかった理由を聞くと誰もＦクラスの考えている事が理解できないようであり、友香はＦクラスの真意がわからないと首を振ると、

「……今朝、用事があって、生徒指導室に行ってきたんだけど、Ｂクラスの生徒から室外機が壊れたから修理してくれって言う申請が出てるって聞いたんだけど、誰が何の目的で壊したと思う？」

「ちょっと待てよ。それがＦクラスの作戦だって言うのか？」

和真は西村教諭からＢクラスの室外機が壊された事が引っかかると言うとトオルは聞かされた事実に声を上げ、

「……カズ、西村先生の手伝い。頑張ってね」

「……あぁ」

清美は西村教諭が和真に修理を手伝うように言われたと思ったようで和真の肩を叩くと和真はため息を吐き、

「少なからず、これはＦクラスとＢクラスの試召戦争に関わっているはずだ。タイミングも良すぎるからな。ＦクラスがＢクラスの設備で試召戦争を止めるなら、相手はＦクラス。ＦクラスがＡクラスを狙っているなら、Ｂクラスに勝ったとしても設備交換はしないで

何か交換条件を出すはずだろ」

「待て。それじゃあ……」

和真は暗に試召戦争の相手はBクラスだと言い、クラスメート達の視線は友香に集まる。

「ここで最初の話に戻る。代表様はどうするんだ？　彼氏に気を使うか？　クラスの意思に答えるか？」

「……考える時間はないわよね？」

「そうだな。今回の報復は代表様がBクラスの代表とFクラスを嵌めたから、原因はBクラスにもあるんだ。仮にBクラスとは戦えないと言うなら、はっきりと言わせて貰うが、ウチのクラスでの代表ってのは飾りになる。誰も代表様の言葉は聞かなくなるよ。室外機の修理は今日の放課後からだから、たぶん、今日中に決着がつくだろうから」

和真は友香にCクラスの進む道を決めろと言うと、

「……悪いんだけど1時間だけ、答えを出すのを待って貰って良いかしら」

「好きにすれば良いだろ。元々、俺は試召戦争をする気はないしな」

友香は少し考えたいと言うと和真は勝手にしろと言い、西村教諭がくれた回復試験用のプリントに向かう。

第27問

「……カズ、大丈夫？」

「……無理」

Fクラスとの試召戦争が続いているため、自習時間のなか和真に現代文を教えていた清美が和真の様子に苦笑いを浮かべると和真は現代文は向かないようで魂が抜けかけており、

「和、お前、文系ダメなのか？」

「……現代文や古文は必要性を感じないから、やる気が」

「いや、普通に生活する上で物理の方が必要性ないだろ」

トオルは和真に文系がダメのかのと聞くと和真はやる気がでないと言い、平太は和真の言葉に苦笑いを浮かべると、

「そこは、ほら、和だから」

「まぁ、カズだからね」

一心は和真だから物理はできると言い、清美は一心の言葉の意味が理解できるようで苦笑いを浮かべ、トオルと平太は納得したようで大きく頷き、

「……悪かったな」

和真は４人が何を考えているかわかるようで不機嫌そうな表情をする。

「英語ならある程度、できるんだけどな」

「そうなの？」

「役に立つだろ」

「……まぁ、そうだろうけどな」

和真は文系なら英語の方が役に立つからやる気が出ると言うと一心はため息を吐き、

「いや、日本人だし、現代文は必要だろ？」

「今の時代、パソコンや携帯がある。字など書かなくても生きていける。だいたい、作者の考えなんて知るか。読む人間はそんなとこまで考えねぇよ」

「……学生の本分から全否定だな。おい」

トオルは現代文はそれなりに使うと言うが和真は余程、現代文が嫌いなようで乱暴に頭をかき、平太は和真の様子に苦笑いを浮かべた時、

「あなた達、少し静かにできないの？」

「ん？　代表様、何かようか？」

「……結城君、その代表様って止めてくれない？」

友香は先ほどのCクラスの進む道を決めたのか和真達に声をかけると和真は友香を見て何の用かと聞き、友香は和真が自分の事を『代表様』と言うのがバカにされていると感じているようで眉間にしわを寄せる。

「別に良いだろ。代表様は代表様なんだし」

「小山さん、私達に声をかけてきたって事は決まったの？」

「……ええ」

和真は友香の言葉を気にする事なく、現代文のプリントを見て眉間にしわを寄せていると清美は友香に答えは出たのかと聞くと友香は納得がいかなさそうだが頷き、

「それじゃあ、俺達のところより、前で話した方がよくないか？」

「そう言うわけにもいかないでしょ。少なくとも、今の状況を作り出したのは結城君なんだから、最初に話をするのが筋でしょ」

「そんなの勝手にしろよ」

トオルはここでなく、教壇に立って宣言した方が良いと言うが友香は和真に話をしてから次の行動に移すのが正当な順序だと言うが、和真は興味がないのか、自分の事で手一杯なのか、友香を追い払うように手を振り、

「結城君、私の話を聞く気はあるの？」

「いや、ずっと言ってるけど、俺は試召戦争に興味無いから、聞く気はない。だから、決意表明なら、教壇の前で勝手にやってくれ」

「そう。勝手にやってくれって言ったわね。それなら、勝手にやらせて貰おうかしら」

友香は和真の態度に額に青筋を浮かべるが和真は友香の答えはあまり興味がないと言うと友香は和真の態度に少し腹を立てているのかくすりと笑うと、

「みんな、話を聞いて、さっきの答えだけど、私なりに考えさせて貰ったわ」

教壇に移動するとクラスメート達に注目するように声をかける。

第２８問

「結果から言わせて貰うわ。私はＣクラスの代表としてＢクラスと戦うわ」

「代表、彼氏の事は良いの？」

友香は教壇でＢクラスとの試召戦争に踏み切ると言うと清美は友香に恭二との事は良いのかと聞くと、

「えぇ。それで文句を言うようなら、私から振ってやるわ」

「だ、代表、男前だな」

「そこ、おかしな事を言わない」

友香は恭二の態度で自分から振ってやると言い、一心が友香の言葉に苦笑いを浮かべると友香は一心を睨みつけ、

「……イエス。ボス」

「弱いな。一心」

友香の眼力に一心は静かになり、トオルは苦笑いを浮かべる。

「それで、私なりに考えさせて貰ったんだけど、私は自分で言うのも悔しいんだけど頭に血が昇りやすいのよ。だから、感情に任せて動いてしまう事が多い……」

「……何か嫌な予感がするんだけど」

友香は1度、深呼吸をした後、自分の性格の事を話し始め、和真はその言葉に何か感じたようで顔を引きつらせると、

「それで男子と女子で1人ずつ、私を補佐してくれる人を置きたいと思うのよ」

「頑張れよ。和」

友香は自分の補佐を置きたいと言うと平太は友香の考えが理解出来たようで和真の肩を叩き、

「男子は結城君、女子は山下さんに頼もうと思うんだけどお願いできるかしら」

「私？　カズはわかるけど、私は人をまとめる力はないよ」

友香は補佐を和真と清美に頼みたいと言うが清美は首を傾げる。

「えぇ。山下さんは言いたい事ははっきりと言えるし、結城君の扱いにも慣れてるしね」

「確かに、山下は和の扱いにはなれてる」

友香は清美を選んだ理由を話すとトオルは頷き、

「……その前になぜ、俺を巻き込む？　俺は試召戦争をやる気は」

「何？　私にだけはクラス代表だからと言う理由で選択を押し付け

て自分は逃げる気？」

和真は自分を巻き込むなと言うと友香は和真を挑発するように笑い、

「……和、諦めろ」

「……」

一心は和真の肩を叩く。

「決まったわね。それじゃあ、結城君、私達は次はどうしたら良いのかしら？」

「いや、その前に俺が補佐って立場で良いのか？　他にやりたいってヤツがいるかも知れないだろ」

友香は和真に次にCクラスが起こす行動の説明をして欲しいと言うが、和真は納得していないためクラスメートに確認をしてくれと言うと、

「結城君と山下さんが補佐で問題があると思う人は手を挙げて」

「……和、良かったな。満場一致だぞ」

「……嬉しくないよ」

友香はクラスメートに和真と清美を補佐として認めるかと質問をするとクラスメート達から反対意見は出る事なく、一心は和真の肩を叩き、和真はため息を吐く。

「それじゃあ、改めて、結城君、お願いできるかしら」

「……代表、楽しそうだな」

「初めて、カズを言い負かしたからね」

友香はくすりと笑うとトオルと清美は友香の様子に苦笑いを浮かべ、

「……やれば良いんだろ。その代わり、文句を言うなよ」

「文句？　おかしな事だったら、止めさせて貰うわよ」

和真は諦めたようでため息を吐くが友香は和真に向かい挑発的に言い、

「……何か、不穏な空気だな？」

「と言うか、あの2人は相性が悪い気がする」

「カズはクールに見えてキレやすいからね」

和真と友香の様子にトオル、平太、一心、清美は苦笑いを浮かべる。

第２９問

「カズ、代表、遊んでないで始めよう」

「そうね。結城君、始めて」

「……あぁ」

清美は不穏な空気を漂わせている和真と友香に声をかけると2人は一先ず、矛を収め、

「……このクラスの支配者に山下が座った」

「確かに」

「そこ、おかしな事を言わない」

清美が場を収めたのを見て、一心と平太が言うと清美はため息を吐き、

「それじゃあ、カズ、代表。後は任せるよ。私は戦術とか戦略ってわからないからね」

「えぇ。私もそれは結城君に任せるつもりだから」

「……いきなり丸投げかよ」

清美は和真と宏美に丸投げすると友香も清美の言葉に同意し、和真は肩を落としてため息を吐く。

「……それじゃあ、始めるか。その前に誰かAクラスと当たりをつけられる人間っているか？」

「Aクラスと？」

和真はクラスメート達にAクラスに知り合いはいないかと聞くと友香は意味がわからないようで首を傾げ、

「一応、今朝、ここにきた方が弟の方か確認していた方が何かあった時に次の行動に移りやすいからな。木下さんが噂通りの人なら今朝にここにきたのは弟だろうから、念のためだけどな」

『……』

和真は念のために確認しておきたいと言うが誰もAクラスに知り合いはいないようであり、

「……仕方ない。工藤を頼るか」

「……カズ、あんたに知り合いがいるんじゃない」

和真はため息を吐きながら頭をかくと清美はため息を吐く。

「えーと、一応、代表はいた方が良いとは思うんだけど……」

「何？」

「……木下さんにケンカ売るなよ。話がややこしくなるから」

「……」

和真は友香を連れて行った方が良いとは思いはするが友香が優子と揉めないか心配なようで苦笑いを浮かべると友香は和真を睨みつけるが、

「……それじゃあ、私と代表とカズで行ってこようか」

「……任せたぞ。山下」

清美は見ていられなくなったようで和真と友香の間に割って入るとトオルは苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、ちょっと行ってくるか。話はそれから」

「えぇ」

和真はAクラスに行くと言うと友香は和真を睨みつけたまま和真の後を追い、清美はため息を吐きながら2人の後を追いかけて行く。

「……えーと、工藤」

「あれ？　結城君、どうかしたの？」

和真は試召戦争が始まっているため、自分達と同じように自習になっているAクラスの教室を覗くと目的の生徒である『工藤愛子』を見つけて声をかけると愛子は和真を見つけて駆け寄ってくると、

「カズ、やっぱり、あんた無自覚でしょ？」

「何、わけのわからない事を言ってるんだ？」

清美は和真の知り合いが女子生徒だった事にため息を吐くが和真は意味がわからないために首をかしげるが、

「何々？　デートのお誘い？」

「違う。ちょっと相談に乗って貰いたい事と確認したい事があってな」

愛子は和真をからかうようにデートの誘いと言い、和真は直ぐに愛子の言葉を否定し、

「ぶー、つまんない」

愛子は口ではつまらないと言うが和真以外の友香や清美の反応を見たいようでくすくすと笑っており、

「工藤、話を進めて良いか？」

「うん。それで、結城君がボクを訪ねてくるって事はバイト先の新作クレープを奢ってくれるとか？」

「……いや、そうじゃなくて」

和真は愛子に話を聞いて欲しいと言うと愛子は和真にクレープを奢ってくれるのかと言うが和真は話が進まない事にため息を吐き、

「……カズが工藤さんに頼みたくなかった理由がわかったわ」

「……そうね」

和真と愛子の様子に友香と清美は苦笑いを浮かべる。

第２９問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、動くと言うか立場的に清美政権。（爆笑）

和真「完全にキャラが立ってきてるよな」

そうですね。トオル、一心、平太は完全に３バカの位置にはまってますしね。

和真「このクラスはどうなる事やら」

さあ？

アンケート

ヒロイン決定アンケートの現在の状況？

１位　宏美５票

２位　洋子３票

３位　美春、友香、葵１票

……なぜ、洋子先生に入る？

和真「わからないって」

基本的に美人女教師と男子生徒は萌える展開ですが、ここではアウ

トです。
そういうのは妄想で、反論は認めません。文句がある方はよりマニアックな性癖を暴露してください。

和真「……違うから」

第３０問

「それで……どっちが結城君の彼女？」

「違う。えーと、こっちがうちのクラスの代表様」

「Ｃクラス代表小山友香よ」

「それで、こっちが」

「山下清美です。よろしく、工藤さん」

愛子は和真をからかうように友香と清美の事を聞くと和真はため息を吐きながら、友香と清美を紹介すると２人は愛子に向かい頭を下げ、

「工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ♪」

「……工藤、その自己紹介はどうにかならないのか？」

愛子は２人に向かい自己紹介をすると和真は愛子の自己紹介に頭を押さえる。

「良いじゃない。それとも結城君はボクの特技は見たくないの？」

「……見たくないって答えるのは嘘になるけどな。俺達は用事があってきたんだから、話を進めさせてくれ」

愛子はイタズラな笑みを浮かべながら、スカートのすそを少し上げると和真はすでに愛子の相手をする事に疲れ始めているようでため息を吐くと、

「んー、そうだね。Cクラスの代表の小山さんが来るって事は試召戦争の宣戦布告？」

「いや、そうならないように確認にきたんだよ」

「確認？」

愛子は友香がいる事でCクラスとAクラスの試召戦争になると思ったようで少し眼光を鋭くすると和真は苦笑いを浮かべ、和真の様子に愛子は首を傾げ、

「あぁ。今朝の事なんだけど、ウチのクラスにAクラスの木下さんが来てな。ウチのクラスをバカにして帰って行った」

「優子が？　それはないよ。HRが終わった後だと優子はボクと一緒にいたから、Cクラスには行ってないよ」

和真は簡単に優子がCクラスに来て挑発して行ったと言うが愛子はその時間は優子と一緒だったようで直ぐに優子はCクラスを挑発している事はないと答える。

「あぁ。俺もそう思う。それで、Fクラスにいる木下さんの弟の仕業だと思うんだけど」

「それで、確認にきたわけだね。優子、ちょっと来て」

「愛子？　どうかした？」

和真は秀吉の仕業かどうか確認したいと言うと愛子は頷き、教室にいる優子に声をかけると優子は愛子が自分を呼んでいる理由がわからないようで首を傾げながら和真達の元に歩いてくると、

「えーと、愛子、この方達は？」

「……」

「……代表様、変な敵意を見せるな。えーと、木下さんだね……」

優子は和真達に見覚えがないようで首を傾げ、友香は優子に敵意の視線を向けようとするが和真は友香をいさめた後、改めて、Ｃクラスの今朝の出来事を優子に説明し、

「……そう」

「それで、一応、確認をしにね。Ｆクラスに確認に行ってもしらばっくれられると思ったし、木下さんには迷惑だろうと思ったんだけど、俺達もいろいろとはっきりさせたいからね。流石にあれだけの事を言われるとＡクラスに試召戦争を仕掛けると言う人間も出てきてるから」

優子は和真の説明に眉間にしわを寄せ、和真は優子がイラついている事に気づいているようで困ったように笑いながら言う。

「あたしはＣクラスには行ってないわ。信じてくれると助かるんだけど」

「あぁ。その言葉が貰えれば俺は良いんだよ。不快な思いをさせてしまってごめん」

「えぇ。こちらこそ、ウチの弟が迷惑をかけたようでごめんなさい。帰ったら、きつく言っておくわ」

優子はこめかみに青筋を浮かべながら、Cクラスに言ったのは自分ではないと言うと和真は優子に不快な思いをさせた事を謝り、優子も秀吉がCクラスにした事を謝り、

「いや、まぁ、試召戦争での事だから、仕方ないよ。わざわざ、時間を割いてくれてありがとう」

「気にしないでよ。このお礼は結城君がバイト先でボクと優子に奢ってくれるんだから」

和真は試召戦争での事だから、優子が秀吉に何かをする事ではないと言い、愛子と優子に改めてお礼を言うと愛子はどうしても和真に奢らせたいようで笑顔で言うと、

「……あまり、無茶な注文は止めてくれよ」

「それくらいの常識はあるよ♪」

和真はため息を吐くと愛子は笑顔のまま頷く。

第３１問

「と言う事でＡクラスとの試召戦争は回避した」

和真、友香、清美は教室に戻ると優子からＣクラスを挑発したのは自分ではないと言う言質を取った事を話すとクラスメート達は安堵のため息を漏らす。

「それで、結城君、私達が次に起こす行動は？」

「……少し落ち着けよ。取りあえず、現状で補給試験を受けた場合に振り分け試験より、点数が取れる自信がある奴は何人いる？」

「いや、テストは水物だからわからん」

友香は和真に次の行動を示せと言うと和真はため息を吐きながら、クラスメート達に補給試験を受けた時の自信を聞くとトオルはどうなるかわからないと答え、多くのクラスメート達は頷くと、

「和、そんな事を聞いてどうするんだ？」

「いや、今はＦクラスとＢクラスの試召戦争中だから自習時間だろ。その間に俺達は自習をしていても点数は変わらない。このまま振り分け試験のまま戦うか、どこかで補給試験を受けて試召戦争に臨むかってところだ」

一心は和真の質問の意味がわからなく手をあげると和真は今の点数で戦えるか疑問のようである。

『ちょっと待てよ。たかだかFクラス相手だろ。補給試験をする意味なんてないだろ?』

「まだ、Fクラスと戦うとは決まってないだろ。俺達が戦うのはFクラスとBクラスの試召戦争が終わった時にBクラスの設備を持っているクラスと戦うって言っているんだ。Bクラスが居座っている場合は俺達より点数が高いはずだろ。回復試験をしている途中だとしても戦争に使った教科以外は俺達より上だ」

「……確かにそうね」

クラスメートの1人はFクラスに報復したいため、F相手に必要などないと言うが和真はその言葉を斬り捨てるとBクラスと勝負する事を考えるように言うと和真の単純にBクラスの方が地力が上だと言うと友香は頷き、

「後はFクラスと戦うにしても」

「……姫路瑞希の存在か?」

「あぁ。噂じゃ、腕輪を持っているらしい」

和真はFクラスと戦う場合にも注意しないといけない人間がいると言おうとすると平太は瑞希の名前を出し、和真は瑞希が腕輪を持っていると言うと教室はざわざわとし始める。

「後は、これは噂でしかないんだけどな。Fクラスには『寡黙なる性職者』がいるらしい」

「ム、ムッツリーニだと!?　まさか、本当に存在していたのか!

？」

和真はＦクラスには『寡黙なる性職者』と呼ばれている生徒がいると言うとトオルはその名前に何かあるのか驚きの声を上げ、

『だ、代表、Ｆクラスとは戦うのは避けるべきだ。いや、俺はＦクラスとの同盟を望む！！』

『そうだ。俺達の幸せのためにＦクラスとは同盟するべきだ！！』

「……」

「な、何？　結城君、そのムッツリーニって何なの？」

男子生徒達はＦクラスと同盟するように言い始め、和真は頭が痛くなってきたようで頭を押さえ、友香は男子生徒の盛り上がりに何があったのかと和真に聞くと、

「……学内に盗撮カメラや盗聴器を設置して、盗撮した写真を売りさばいている問題児。噂じゃ、保険体育の成績は担当教師に並ぶと言う」

「カズ、あんた、写真とか買ってないよね？」

「ないよ」

和真は自分の知っている情報を話すと清美はジト目で和真を疑うが和真はため息を吐いて否定する。

第３１問（後書き）

どうも、作者です。

感想の話です。今まで、感想の返信は更新時に行っていたのですが感想を読んだときに変更させていただきます。ご了承ください。

第３２問

「これだから、良い男は」

「和、お前、それでも男か！！」

和真の写真を買っていないと言う一言にトオルと一心は和真を敵と判断し、

『そうだ。それでいて、洋子先生と同棲だと、許せん！！』

『そうだ。俺達は写真でしか眺める事しかできない。洋子せ！？』

男子生徒が和真と洋子が一緒に暮らしている事を非難し始め、１人の男子生徒が洋子の写真と言った瞬間、教室に大きな音が響き、

「カ、カズ？」

「結城君」

その音は和真の右腕が黒板を勢いよく叩いた音であり、友香と清美が何があったかわからずに和真の名前を呼ぶと、

「……お前ら、人の姉さんをなんだと思ってるんだ？」

「ま、不味い。和がブチ切れるぞ。誰だよ。洋子先生の写真の事を話した奴」

和真の額にはくっきりと青筋が浮かんでおり、平太は和真が何にご

立腹なのか理解したようで顔を引きつらせる。

『な、何だよ』

「……お前らが持っている姉さんの写真を俺の前に持ってこい」

「カズ、写真、集めてどうするつもり？」

男子生徒達は和真の様子に気落とされたようで声を震わせながら聞くと和真は洋子の写真を回収すると言い始め、清美は和真が集めた写真をどうするか予想は付いているようだが和真に聞くと、

「燃やす」

『ふ、ふざけるな。お前に何の権利があって！？』

和真は一言だけ燃やすと言うが本気なようで目は笑っておらず、男子生徒の1人は洋子のファンなのかそんな事はさせないと言おうとするが、

「……止めておけ。こうなった和は手が付けられん。死にたくなかったら素直に従え」

「……最強のシスコンだからな」

トオルと一心は男子生徒の肩を叩き、平太と清美が頷く姿に教壇にいる和真の元に数名の男子生徒が泣く泣く洋子の写真を持って行き、

「あ、あの。山下さん、結城君はどうしたの？」

「……見ての通り、カズはシスコンだから、洋子先生に近づく男には敵意の視線を向けるもう行きすぎたくらいにね」

「山下、おかしな事を言うな。俺は姉さんに相応しい男性（ひと）か見極める義務があるんだ」

友香は和真の変化に顔を引きつらせて聞くと清美は苦笑いを浮かべて和真はシスコンだと言うと和真は表情を変える事なく、当然の事だと言い切り、

「今更だけど、小舅だな」

「ホントよ。まぁ、当面のカズの敵は現国の寺井先生だけどね」

「嘘!?　寺井先生って、高橋先生の事が好きなの？」

一心は和真の言葉にため息を吐くと清美は苦笑いを浮かべながら、洋子に密かに憧れていると言う噂の現代文の担当教師である寺井教諭の名前をあげると友香は驚きの声を上げる。

「まぁ、洋子先生もカズと一緒で鈍いから、気づいてないだろうけどね。しかし、本当に姉弟そろって鈍いって言うのはあるんだね」

「……と言うか、従姉弟よね。それにあの姿を見て、結城君を好きって言う人いるの？」

「うーん。難しいところかな？　でも、恋愛感情あるなしかは微妙なんだけど、カズの周りには女の影が多い」

清美は友香の驚きの声に苦笑いを浮かべたまま、和真と洋子は鈍い

と言うと友香は和真の変わりようにため息を吐くと清美は和真の周辺には女の子が多いと言うと、

「山下、おかしな事を言うな」

「はいはい。それより、カズ、続き」

「あぁ」

和真は洋子の写真を集め終えた事で冷静になったようで平常時に戻り。清美は和真の言葉に空返事をすると和真に説明に戻るように言い、和真は頷く。

第３３問

「補給試験をしないとなると悪いけど、各人、自分の振り分け試験の各教科の点数を記入して提出して欲しい。それでどの教科で戦うかを考えるから、それで何人かまとめるのを手伝って欲しい」

「それって必要あるの？」

和真はクラスメート全員にテストの点数を教えて欲しいと言うと友香は首を傾げるが、

「今朝、話しただろ。今朝はＡクラス１人なら俺達は何人で当たらないといけないかと言う話をしたがＢクラス相手でも一緒だ。上位クラスなんだ。１対１じゃ、分が悪いだろ。後はさっきの土屋の話じゃないが、ウチのクラスには１教科でもＡクラスと対等に戦える人間はいないかが知りたい」

「なるほど、カズの物理みたいなものね」

和真はＢクラスと戦う上で有利な状況に落ち込むために各人の得意教科、不得意教科を知っておきたい事だと言うと清美は和真が昨日の回復試験で桁外れの点数をからかうように言うと、

「結城君って物理が得意なの？」

「得意と言うか……これ？」

友香は和真が物理を得意と聞いて感心したように聞くと一心が和真の机を漁り、西村教諭から返却された物理の答案をクラスメートに

見せる。

「な、何よ。これ!?」

「……一心、余計な事をするな」

友香が和真の物理の点数に驚きの声をあげると友香の言葉を皮切りにクラスメート達から驚きの声が上がり始め、和真は一心の行動にため息を吐くが、

「俺達の点数は知れ渡るのにお前の点数が知られないのは卑怯だろ？」

「それもそうだな」

一心は苦笑いを浮かべながら和真の点数もクラスメート達には知る権利があると言うとトオルは頷くと、

「ちょ、ちょっと、結城君、何で、あなた、物理がこんな点数なのにCクラスにいるのよ!?」

「待て、代表様、これにはいろいろとわけがあるんだ。とりあえずは落ち着いてくれ」

友香はCクラスで４００点オーバーは見られないと思っていたようで和真に勢いよくつかみかかると和真はため息を吐いて友香に落ち着くように言う。

「代表、簡単な理由よ。だってカズだから」

「山下さん、だってってそんな理由で４００点なんて、取れるわけがないでしょ！！」

清美は友香の慌てように苦笑いを浮かべるが友香は清美の落ち着きようが理解できないようであるが、

「代表、よく考えろ。洋子先生の担当教科はなんだ？」

「高橋先生の担当教科？　物理よ。それがどうしたの？　……結城君、そんな理由なの？」

平太は苦笑いを浮かべながら洋子の担当教科は何か聞くと友香は少し考えた後、何かが繋がったようで和真を見てため息を吐くと、

「最強のシスコンだからな」

「……わけのわからない事を言うな」

トオルは和真をシスコンだと言い切り、和真はその言葉にため息を吐き、

「俺がこの点数を取ったのは高橋先生と西村先生を通じて学園長先生から学園の手伝いをするためにＡクラス並みの点数を取って欲しいと頼まれたからだ。そのために現在は授業後に１教科ずつ回復試験を受けさせられてるからだ。本来なら単体教科は１２０～１５０点くらいだよ。物理は今回はヤマが当たっただけだ。今日は現代文なんだけど」

「１２０点、取れるか微妙よね？」

「……言うな」

今の和真が置かれている状況を話すと清美は先ほどから和真の勉強を見ているためか苦笑いを浮かべ、和真も現代文は点数が下がりそうだとわかっているようで肩を落とす。

第３３問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

今回は『バカとテストと勤労少年』で投稿キャラを募集したいと思います。

理由としてはＣクラスだと主要キャラがいないから現在レギュラー化しているトオル、一心、平太、清美と和真と友香だけですから、書くのになんか面白みがないかな？と思いました。ぶっちゃけ、気紛れです。

それで投稿キャラを募集しようと思ってます。

募集人数は２人。できれば男女１人ずつにしたいと思っています。

募集事項
名前
性別
所属クラス：Ｃクラス。
得意教科：１教科ｏｒ２教科（２００～３００点）
苦手教科：得意教科の数と合わせてください。（１教科２００点だとしたら苦手教科は１教科で５０点くらい、１教科３００点だとしたら苦手教科は３教科で５０点くらいと平均的に）
総合得点
１４５１～１５８６点（話の中でありましたが和真は友香とわずかな点数差で代表ではありません。総合得点を決める時は下の和真の

点数より低く設定させていただきます）
総合得点や得意、苦手教科はスタート時です。話が進むにつれて成長すると考えて総合得点だけでも良いです。その時は得意教科は伸ばしたい教科と考えて教科のみの記入でも構いません。Ｃクラスなので得意教科を特化型にしなければ全教科平均的と考えさせていただきます。

備考（性格等）
召喚獣装備（武器、防具簡単なもので良いです）

禁止事項
本当はＡクラスの成績。
原作キャラの兄弟。
観察処分者。

例
名前　結城（ユウキ）和真（カズマ）
性別　男
所属クラス：Ｃ
得意教科：英語、家庭科（１４０～１６０点）、成長後：物理（４３７点）、英語（２８９点）、家庭科（３４５点）
苦手教科：現代文、古文（１００～１２０点）
総合得点：１５８７点、成長後：２６７８点
備考：中学３年の冬に両親を事故で亡くし、就職をしようと考えていたが従姉の『高橋洋子』の薦めで学費の安く洋子が勤務している文月学園に進学する事になる。現在は両親の残した家に洋子と２人暮らし、学年主任の洋子を補佐するために家事全般は１人でこなし、学園を終えるとバイト三昧と言う勤労少年。成績はそれなりだが、自分の置かれている立場を考えているため、他の生徒達より、学生と言うものを冷めた目で見ている事も多い。自称『シスコン（従姉）

』
召喚獣装備
武器：大剣
防具：白いプレートアーマー

割と面倒な募集事項ですが、興味が湧いたら投稿してみてください。
募集期間は面白そうなキャラクターを選んだ時点で終了させていただきます。
もし、投稿キャラ同士で恋愛イベントが起きても怒らないでください。

投稿キャラは感想板、作者のメッセージボックス、活動報告にお願いします。
また、投稿キャラは和真達と一緒に成長させて行く予定です。その過程で投稿者さんに作者から連絡させていただく事もあるかも知れません。

第３４問

「へぇ、結城君って文系苦手なの？」

「苦手ってよりは必要性を感じない。言葉なんて伝われば良い」

友香は所々に見える和真の弱点に楽しそうに笑うと和真は文系を勉強する意味がわからないとため息を吐くと、

「そう言えば、和って実用的な教科の方が点数良いよな。英語はできるよな」

「あぁ、英語は使うからな。単語の意味がわかれば話せるし、後は家庭科」

「……男の子なのに？」

一心は相変わらず、現代文などやってられるかと言っている和真を見て苦笑いを浮かべると和真は英語と家庭科はそれなりにできると言うが友香は男の和真が家庭科ができると聞いて眉間にしわを寄せるが、

「代表、カズは料理も掃除も完璧よ。喫茶店でバイトもしてるってのもあるけど、家の家事もしてるし、もはや、そのレベルは『主夫』よ」

「……誉められてはいないよな？」

「でしょうね」

清美は和真の家事能力を認めていると言うがその言葉に和真はため息を吐き、友香は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、とりあえずはさっき言った通り、悪いんだけど振り分け試験の点数を教えてくれ。それで何とか試召戦争に勝てる算段を付ける。たぶん、相手はＢクラスになると思うから、今回、Ｆクラスは数学や物理と言った理数系で仕掛けているみたいだしな。理数系が得意な人間を中心に攻めると考えていて欲しい」

「理数系なら和がいるから、余裕だな」

和真は先ほど洋子の手伝いで廊下でＦクラスとＢクラスの試召戦争を覗いたため、点数が削れているはずの教科を中心に攻めようと言うとトオルは和真が居れば余裕だと言うと、

「いや、俺は試召戦争で点数を減らす気はないから」

「……結城君、ここまでクラスを煽っておいてそう言う事を言うの？」

和真は作戦を立てても試召戦争に参加するつもりはないと言い切り、友香は和真の態度にため息を吐くが、

「だから、ちゃんと道筋を立てただろ。そこから先は知らない。それに俺は最初に試召戦争に参加しないって言っただろ。せっかくあげた点数をどうして削らないといけないんだ。４００点だぞ。２５０点も稼いだんだ。俺は次にこの点数を取れる自信はない」

「ここまで言い切ると清々しいな」

「そうだな。俺達から見れば最強の矛だけど、和真から見たら誰にも奪われたくない宝物だからな」

和真は物理の点数にしがみつきたいと言い、和真の様子に一心と平太は苦笑いを浮かべる。

「はいはい。とりあえずは物理と数学中心に攻めるって考えてその2教科が得意な人間は今の自習時間に苦手な人間に教えてあげて、ここから1夜付けでも良いから試召戦争が開始された時点で2教科が得意な人間がカズの指揮で戦う。その間に苦手な人間はその2教科で回復試験を行う事。教科を2教科に絞る事で効率的にBクラスを攻める事」

「……やっぱり、山下がこのクラスの支配者だろ」

清美は自習時間中にやれる事をやろうと言うとトオルは清美の様子に苦笑いを浮かべ、

「トオル、おかしな事を言わない。カズも遊んでないで、物理が苦手な人間に教える。今はカズ以上に物理をできる人間はいないんだからね。現代文の勉強に時間を割くより、こっちの方が物理の点数を守れるでしょ」

「あぁ」

「それじゃあ、今、山下さんが言った通りにまとまって自習をして」

清美はトオルの言葉にため息を吐くと和真に効率が良い方を選べと言い、和真が頷くと友香は2人の様子に苦笑いを浮かべながらクラ

スメートに指示を出す。

第３４問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

相変わらず、やる気のない主人公です。

和真「しがみつくだろ。完全なまぐれだぞ。それを削って回復試験を受けていつもの点数になったらどうするつもりだ？」

まあ、確かにそうかも知れませんけど。（苦笑）

投稿キャラの話

多くの投稿をいただきありがとうございます。現在は選考中でしょうか？

和真「何を基準に選ぶつもりだ？」

そうですね。今更言うのもなんですけど、キャラクターの背景が見えるのは選びやすいですね。今いるメンバーと友人とかクラスがＣですし、Ｆクラスにどういう感情があるかとかもあるとキャラクターがつかみやすいです。

和真「まあ、後は男女１ずつを選ぶから、１人ずつより、１人に絞って書いてくれた方が選びやすいな」

そうですね。２人採用はしたくないので投稿キャラ２人の関係とか

もうくっつけてくれと言われるのは俺が書かなくてもよくねえ？
とか思いますから、恋愛系に持って行くなら別の投稿者さんのキャラをくっつけた方が楽しい。

和真「まあ、そうだろうな」

作者の考えはこんな感じです。

メールボックスに連絡をくれれば個人的にこうした方がいいキャラになりませんか？って話もしますがダメだしにもなるかも知れませんから傷ついても良い人だけそっとメールをください。

和真「傷つけること前提かい」

まあ、他の作品を読んでいただければわかると思いますが作者、ドS何で。

後はたぶん、出るのはBクラスとの試召戦争が終わった後、清涼祭からだと思いますが『これ』ってキャラが出てきたら即採用かも知れません。

和真「投稿はまだまだ、募集しています」

後は活動報告にバカとテストと召喚獣二次創作の原案を書きました。
今回の主人公はDクラスの女の子です。

第３５問

「……決まったみたいね」

「あぁ、相手はやっぱりＢクラスか」

ＦクラスとＢクラスの試召戦争が終結し、ＢクラスはＦクラスからの条件を飲んで設備を守ったと噂が休み時間に流れ始めるなか、

「……カズ、生きてる？」

「和は本当に現代文ダメみたいだな」

和真は西村教諭に自習の時間だしせっかくだからこの時間に回復試験を受けるように言われて現代文の試験を受けてきたのだがどうやらできなかったようで魂が抜けかけており、清美と一心は白くなっている和真を指で突き反応があるか確認するが、

「……山下さん、結城君は大丈夫なの？」

「さぁ？」

和真に反応はなく、友香は頭を押さえてため息を吐きながら清美に聞くと清美は苦笑いを浮かべながらも、

「山下、一心、突いてやるなよ」

清美と一心は和真を突くのを止めずにいるためトオルはため息を吐く。

「それで、結城君がこの状態だと次はどうしたら良いのかしら？」

「うーん。一先ずはＦクラスがＢクラスにどんな条件を出したかだよね」

友香は和真の様子にため息を吐きながら、次をどうするかと言い清美が苦笑いを浮かべた時、

「……はい」

和真の携帯電話がなり、和真は白くなった状態ではあるが電話に出ると、

「やっほー、結城君、結城君の予想通り、Ｂクラスの代表の根本くんがＡクラスに試召戦争の準備ができてるって言いにきたよ」

「……そうか。なぁ、工藤、どうして笑いをこらえてるんだ？」

電話の相手は愛子であり、愛子は和真に頼まれていたようでＢクラス代表の『根本恭二』がＡクラスに来たと言うが彼女は必死に笑いをかみ殺してあり、和真は愛子に笑いをかみ殺している理由を聞き、

「えーとね。今からメールを送るからそれで確認して」

「あぁ……ぶほっ！？」

愛子は楽しそうに和真にメールを出すと言い、電話を切ると直ぐに愛子から写真が添付されているメールが送られてきてメールを確認した和真は添付されてきた写真があまりに笑劇的だったようで見た

瞬間に吹き出し、

「和、何が送られてき……なんだ、これ!?　き、きたねぇ」

「こ、これは」

和真の反応に一心、トオル、平太は和真の携帯電話を覗き込むと和真と同様に笑い始める。

「何があったの？　……代表は見ない方が良いかな」

「何？　そんな事を言われると見たくなるわよ……」

清美は４人の反応に和真の携帯電話を覗くと携帯電話の画面には恭二の女装写真が映っており、清美は笑いをこらえながらも友香に見ない方が良いと言うがその言葉は友香の興味を引き、友香も和真の携帯電話を覗き込むと彼氏の女装姿に友香は固まり、

「えーと、今度は代表が白くなったぞ」

「まぁ、こんなものを見せられればな」

平太は友香をかわいそうな人を見る目で言うと平太は仕方ないとため息を吐き、

「さてと、それじゃあ、Ｂクラスは試召戦争の準備ができているらしいから、明日の朝から試召戦争に付き合って貰いますか？」

「そうだな。宣戦布告の使者はどうするんだ？」

「まぁ、俺が行くんだろうな」

和真は愛子から教えて貰った情報を有効に使いたいようでＢクラスへ宣戦布告をしに行くと立ち上がると、

「……結城君、私も行くわ」

「だ、代表様？　だ、誰か他にも付いてきてくれ」

「和、頑張れよ」

「いってらっしゃい」

友香は笑顔で和真と一緒にＢクラスに行くと言うがその目は笑っておらず、和真は背中に冷たい汗が伝い始め、友香と２人でＢクラスに行くのは危険だと判断して助けを求めるがクラスメート達は良い笑顔で和真と友香を見送り、

「う、裏切り者！！？？」

「……結城君、行くわよ」

友香は和真を引きずってＢクラスの教室に歩いて行き、和真の声が廊下に響く。

第３６問

「……失礼するわ」

「……お邪魔します」

友香に引きずられたまま、和真がＢクラスの教室の前に着くと友香は勢いよく教室のドアを開け、和真は今の状況にため息を吐きながら友香の後ろからＢクラスの教室に入ると、

「ゆ、友香！？」

「……」

恭二は女装させられたままＦクラスの『土屋康太』に写真を撮られており、友香はその姿に眉間にしわを寄せ、額にはぴくぴくと青筋が浮かんでいる。

「あ、あのな。代表、落ち着けよ」

「……落ち着く？　結城君は何を言っているのかしら」

和真は目の前に映る光景に顔を引きつらせながらも友香に近づくのは恐ろしいのか友香から手が届かない距離を取り、友香に声をかけるが友香の声には周りを怯ませる怒気が含まれており、

「結城君、私達がここに来た理由」

「い。イエッサー、ボス！？」

友香は和真にＢクラスに宣戦布告をするように言うと和真は友香の勢いに敬礼し、

「Ｃクラスの結城和真と代表の……」

「小山友香よ」

「ＣクラスはＢクラスに試召戦争を仕掛ける。開戦は明日の朝からだ」

和真はＢクラスに試召戦争の宣戦布告をするとＢクラスはざわつき始め、

「ゆ、友香、いきなり何を言うんだ？」

恭二は慌てて友香に声をかけるが、

「恭二、あなたがそんな趣味を持っているなんて知らなかったわ」

「ま、待ってくれ。友香！？　こ、これは俺の趣味なんかじゃない！！」

友香は笑顔で恭二の服装の事を言うと恭二は誤解だと叫ぶ。

「恭二、私は女装趣味の変態と付き合っていられないわ。別れましょう……結城君、帰るわよ」

「お、おう」

しかし、友香は恭二の言葉など聞きいれるつもりはなく、直ぐに振り返ると和真に教室に帰ると言い歩きだし、和真は今の友香には逆らう事はできないようで直ぐに頷くと彼女の後を追いかけて行くと、

「ゆ、友香、待ってくれ！！　こ、これは誤解なんだ！！」

後ろからは恭二の声が響くが友香が振り返る事はなく、友香のお怒りの様子にBクラスの生徒達も下位クラスの宣戦布告の使者に制裁を加えるような事は出来ずに立ちつくしている。

「……根本、日頃の行いが帰ってきたんだな」

「結城君、その名前、私の前で出さないでくれる？」

和真は流石に恭二が哀れに思えてきたようで小さく声を漏らすがその言葉に友香の顔はさらに不機嫌になるが、

「だとしても良いのか？　あれはFクラスがさせた事だろ。あんな形で別れても」

「良いのよ。それに結城君が言ってた通り、恭二は卑怯だし、クラスメートを駒としか扱わなかったんでしょ。だから、クラスメート達も恭二が生き恥をさらすような事になっても誰も助けに入らなかった……恭二と居れば、私もそうなりかねないから、うちのクラスは代表である私が暴走してもちゃんと止めてくれる人もいたしね」

「……まぁ、俺の場合は面倒な試召戦争をしたくなかっただけなんだけどな」

和真はそれでも友香に別れなくても良いんじゃないかと言うと友香

は恭二が女装をしていた事以外にも別れたいと思った要因はなると言うと自分が代表と言う立場と思い知らせてくれたのは和真だと笑顔を見せると、和真は友香の笑顔に少しだけ照れたようで彼女から視線を逸らすと指で自分の首筋を掻き、

「それじゃあ、宣戦布告は終わったって言って解散しようぜ。俺はこれから……」

「ボクと優子とデートだからね♪」

バイトもあるため友香にクラスに戻って解散しようと言おうとすると愛子が自分の腕を和真の腕にからめて和真に声をかける。

第３６問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

根本、振られる。

和真「さすがに酷くないか？」

まあ、友香にも友香で考える事があったと言う事で……それより、和真はモテますね。

和真「いや、意味がわからないからな。工藤は俺をからかって遊んでるだけだし」

アンケートも投票がない状態に進んでいますが投稿キャラ募集をともにヒロイン決定アンケートも引き続き募集していますのでよろしくお願いします。

和真「そう言えば投稿キャラって使いたいのは出てきてるのか？」

そうですね。女の子の方は今の状態ならこの子かな？　と言うキャラがいますが名前の発表は控えます。『もう発表しろや』って声があれば名前出して使っちゃうかも知れません。男の子はまだ決まってないです。

和真「そうか」

番宣？

活動報告にバカとテストと召喚獣二次創作の原案を書きました。『僕と私の共同生活？』と言う題名です。

今回の主人公は明久の従妹の女の子です。父親の海外赴任により、明久とともに暮らすように言われた女の子は明久に襲われてしまうのか？

和真「……煽るな」

第37問

「……工藤、ひっつくな」

「えー、その反応はないんじゃない？」

和真は愛子の行動にため息を吐くが愛子は不満そうに口を尖らせると和真の腕に抱きついている腕に力を込め、

「他に反応はないのかな？」

「……」

愛子は和真を挑発するように言うと和真は自分の腕に当たる愛子の胸の感触に集中しようとするが、

「……愛子、止めなさい」

「結城君も鼻の下を伸ばさない」

友香と優子がため息を吐きながら、愛子を和真の腕から引き離し、

「……」

「……結城君、残念そうな顔をしない」

和真はもったいない事をしたと言うのが表情に出て、友香はもう1度、ため息を吐くと、

「カズ、代表、戻ってきたなら遊んでないで早く状況を説明してよ……修羅場？」

清美は廊下から聞こえる和真と友香の声が聞こえたため、廊下に顔を出すと和真の周りに3人の女生徒がいるのを見て首をかしげた後、

「カズが修羅……」

「……違うからな」

教室に戻って和真を落としいれるような発言をしようとするのを和真は清美の首をつかんでため息を吐くと、

「工藤、木下さん、ちょっと待っててくれるか？　試召戦争が明日の朝からだって伝えてクラスを解散させるから」

「えぇ」

和真は愛子と優子に謝り、友香と教室に入って行く。

「和、代表、山下はどうしたんだ？」

「みんな、聞いてよ。さっき廊下で……」

「山下さん、話が進まないから黙っててくれるかしら」

一心は和真に首を捕まれて教室に戻ってきた清美の様子に首を傾げると清美は廊下で和真を囲んで女の戦いが繰り広げられようとしていたと話を誇張して言おうとするが友香は清美を笑顔で静止すると、

「……代表、目が笑ってないな」

「……あぁ」

トオルと平太が友香の様子に顔を引きつらせ、クラスメート達は同意見のようで頷き、

「結城君、Ｂクラスでの事を話して」

「あぁ」

友香は和真に試召戦争の開始時間を話すように言うが、

「……良いか。よく聞け、代表様がクズを振った」

和真にとっては試召戦争の開始時間より、友香が恭二を振った事の方が重要のようで友香が恭二と別れたと言う。

『な、何だと!?』

『代表、フリーだと!?　今がチャンスか?　傷心中ならどうにかなるか?』

男子生徒達は友香がフリーになったという事実に歓喜の声を上げ始め、

「代表様、人気あったんだな。まぁ、確かに可愛いからな」

「まぁ、多少、性格はきついが、気の強い女の子が好きな奴はいるからな」

「……結城君、他に言う事はないのかしら？」

和真は歓喜の声を上げているクラスメートの様子を見て頷くと一心は和真の言葉に同意するが友香は額に青筋を浮かべて和真の肩をつかむと、

「いや、やっぱり全員が知ってた方が戦いやすいだろ」

「確実に試召戦争に巻き込まれた腹いせね」

「だろうな」

和真は笑顔で事実を知っていた方がクラスメート達はＢクラスと戦いやすいと言うが清美とトオルは和真が友香に仕返しをしているようにしか見えないと言い、

「と言う事で、我らが代表様は現在フリーだ。試召戦争は明日の朝から、良いとこを見せて好印象を与えるんだ！！」

和真は友香を餌として男子生徒達の前にぶら下げてみると男子生徒のやる気はうなぎ上りに上がって行き、

「……あれだよな。和ってやる時には手段とか選ばないよな」

「……まぁ、戦略を考える人間としては良いんじゃない」

「よ、良くないわよ！？」

トオルと清美は盛り上がっている男子生徒の様子に苦笑いを浮かべ

ると友香はこの状況に付いて行けないようで顔を引きつらせると、

「それじゃあ、各自解散、明日はよろしくな。そうだな。せっかくだから、これも使うか？」

和真は気にする事無く教室を出て行こうとするが何か考え付いたようでCクラス以外の自分の他の学年を含めた知り合いに根本の女装写真を送信し、

「お、鬼だな」

「そうか？　あいつのせいで姉さんや西村先生はBクラスの生徒でFクラスの教室に設備破壊に入った生徒の停学にするとか仕事が増えてるんだ。制裁は必要だ」

「……違ったわ。シスコンね」

「……それでひとまとめにして良いのかしら」

トオルは和真の行動に顔を引きつらせるが和真は全て恭二が悪いと言い切り、友香と清美は顔を引きつらせながら和真の背中を見送る。

第３７問（後書き）

どうも、作者です。

和真「今日はなんだ？」

えーと、アンケートに投票があったから途中経過の報告です。

１位　宏美　５票
２位　洋子、愛子　３票
４位　友香、葵　２票
６位　美春、優子　１票

となります。

和真「何で、工藤が追い上げてるんだ？」

愛子のファンって結構いると思うんですよね。普通に可愛いですし、今回はＦクラスとつながりも薄いから康太との関わりも薄くなるでしょうしね。

和真「そんなものか？」

たぶん、アンケートは試召戦争編（第１巻部）が終わるまで受け付けています。投票お願いしますけど……さすがに話を作るのは無理そうだな。と思った場合は次点のヒロインで話を書かせていただきます。

和真「ご了承ください」

第３８問

「お待たせ」

「遅いよ」

「別にそこまで待ってないわよ。それにあたしはどっちかと言うと奢って貰う立場じゃない気がするし」

和真が廊下に出て愛子と優子に声をかけると愛子は待ちくたびれたと言いたげに言うが優子は元々、秀吉がＣクラスに来た事が原因のため、奢って貰うのは悪いと言うが、

「まぁ、木下さんも気にしないで良いよ。それにかわいい女の子と知り合いになれるなら喜んでクレープくらい奢らせていただきます」

「そうそう。優子も気にしない。それに結城君の事だから、他にも考えがありそうだしね」

和真は優子の様子に冗談交じりでそれくらいは何ともないと言うと愛子は和真が何かを企んでいると言った時、

「結城」

「はい。西村先生、どうかしましたか？」

西村教諭が和真を呼ぶ。

「あぁ、Ｂクラスの室外機の件なんだが……工藤に木下？」

「えーと、西村先生、ぼくと優子は席を外した方が良いですか？」

西村教諭は破損しているＢクラスの室外機の話をしようとするが愛子と優子がいる事に首を傾げ、愛子は西村教諭に自分達は聞かない方が良い話かと聞くと、

「いや、別にそう言うわけではない。結城、回復試験の時に話した続きなんだが」

「えーと、今日は高橋先生と西村先生がＢクラスの停学者の件で忙しくなったから室外機の修理と言うか故障個所の確認は明日の放課後になるって話ですよね？」

西村教諭は愛子と優子が居てもかまわないと言うと和真に話の内容を確認し、和真は何かあったのかと思いながら現代文の回復試験が終わった時に西村教諭から言われた事を思い出しながら言うが何か嫌な予感がしているようで顔を引きつらせる。

「……すまん。業者が明日の午前中にしかこれないんだ。それで明日の朝にいつもより早く登校してきてくれ」

「……了解しました」

西村教諭は申し訳なさそうに和真に頭を下げると和真は文句を西村教諭に言うわけにもいかないため、肩を落としながら頷き、

「すまんな。破損個所が外部からではなく、中の配線にも言っているようでな。俺では何もできなかったんだ」

「……良いですよ。何かあった時のための資格ですから、できる限りの事はします」

西村教諭はもう1度、和真に謝ると和真は力なく笑うと、

「それじゃあ、俺は帰ります」

「あぁ、すまないな」

「「西村先生、さようなら」」

和真、愛子、優子の3人は西村教諭に頭を下げて歩き出す。

「結城君、西村先生の話だけど……」

「優子、気にしちゃダメだよ。結城君は巻き込まれ体質だから」

「……その一言でまとめないでくれ。これでもかなり大変なんだから」

優子が校門を出たあたりで先ほど西村教諭が和真にしていた話が気になるようで和真に聞こうとすると愛子は優子が気にする事じゃないと言うが和真は肩を落として言うと、

「えーと、結城君って何をしてるの?」

「……木下さん、質問が大雑把過ぎるけど、えーと、木下さんって、俺と高橋先生が従姉弟だって事は知ってる?」

優子は和真の様子に苦笑いを浮かべながら改めて、和真が何をして

いるのかと聞き、和真はどこから話し始めるのが1番説明しやすいかと考えて自分と洋子の関係を知っているかと聞く。

第３８問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

とりあえず、Ｆクラスのせいで和真は明日の朝は早くから登校です。

和真「……何で、俺が」

まあ、和真が瑞希のラブレターが盗まれるイベントを潰したから壁に穴が空いてないんでまだ楽だと思ってください。

和真「だけど、朝早くからくると……船越先生が出てこないか？」

……ナニヲイッテルンデスカ。ソンナワケナイジャナイデスカ。

和真「おい！？　何で片言なんだ！！」

さてとアンケートですが、

１位　宏美、愛子　５票
３位　友香　４票
４位　洋子、優子　３票
６位　美春、葵　２票

愛子と友香の追い上げ中です。さて、どうなるんでしょうか？

第３９問

「そうなの？」

「あぁ、それで今は高橋先生と一緒に暮らしてるんだけど、仕事が忙しいせいか家でも仕事をしててさ。家での仕事で手伝える事なんてないだろ。そんな時に学校で書類をひっくり返してる高橋先生がいて、書類を拾って生徒指導室の西村先生まで運んだら、今度は西村先生から職員室に書類を届けてくれと言われて……気が付いたら、何かある度に呼び出される」

優子は初めて和真と洋子が従兄妹だと知ったようで驚いたような表情をすると和真は少しだけ後悔しているのか何でここまで学園の手伝いに駆り出されるようになったのか後悔しているようなため息を吐くと、

「な、なんか観察処分者みたいね」

「……それは言わないでくれるかい。吉井明久（ほんもの）を殺したくなるから」

「えぇ、わかったわ」

優子は教師の雑用を手伝っている和真の事を聞いて『観察処分者みたい』と言うと和真の目つきは鋭くなり、優子は和真の変わりように驚いたようで顔を引きつらせるが、

「ぼくと知り合ったのは水泳部の顧問の先生に結城君が捕まってプールのシャワーの水漏れを直してた時だよ」

「……そんなことまでしてるの？」

愛子は空気を読まずに和真と知り合った時の話をすると優子は和真の仕事内容に苦笑いを浮かべる。

「あぁ、まぁ、元々、手先は器用だし、Ａクラスの２人に言う事じゃないと思うんだけど個人的な考えで学校の勉強は必要ないと思っているから、何かあった時に使える資格を取ろうと思ってそっちの勉強をしているうちにね。資格試験を受けに行くと実技とか凄い人がいるし、コツを聞いたりもしてる」

「……あたし達とは違う勉強の仕方ね」

和真は少し冷静になったようで苦笑いを浮かべて言うと優子は感心しているようではあるがそれ以外にも何か考える事があるようで頷き、

「まぁ、後は……資格試験を受けるのって結構、金額がかかるんだよ。それで基本的に放課後はバイト三昧で……働いてるところを工藤に見つかった」

「だって、新作が出てるのにお小遣いはピンチ、そこに人の良さそうな結城君が働いてるんだよ。まずは交渉してみる余地はあるでしょ」

和真は自分がバイトしている理由には洋子に学費を返そうと思っている事もあるがそれを話して両親が亡くなっていると知られて『かわいそうな人』を見るような視線は受けたくないため、その部分を伏せてバイトをしている理由を話すと愛子は和真にたかるきっかけになった時の事を話し、

「……愛子、少しは遠慮したら」

「……木下さん、もっと言ってやってくれ」

優子は愛子に捕まった時の事を思い浮かべたようでため息を吐いて愛子に遠慮するように言うと和真は優子を応援すると、

「優子、気にしなくて良いんだよ。結城君はこう言ってるけど、ぼく以外にもソフトテニス部の中林さんとかにも捕まってるから」

「……それこそ、遠慮してあげなさいよ」

愛子は和真が宏美にも捕まっているから気にする必要はないと言うが優子は学園では教師達に捕まり、それ以外にも宏美や愛子に捕まっている和真が哀れに思えてきたようでため息を吐く。

第３９問（後書き）

どうも、作者です。

アンケート
１位　愛子　６票
２位　友香　５票
３位　宏美、優子　４票
５位　洋子　３票
６位　美春、葵　２票
７位　清美　１票

愛子がトップに躍り出ましたが、愛子かあ。（苦笑）
そして、宏美から清美への乗り換えが１人。

第４０問

「それじゃあ、俺は着替えてくるから」

「うん」

和真達は和真のバイト先であり、清水美春の父親が経営している喫茶店『ラ・ペディス』に着くと和真は他のバイトスタッフに愛子と優子を任せると着替えるために奥に入って行く。

「……結構、大きなお店ね」

「あれ？　優子ってここにきた事ないの？　結構、美味しいって有名だよ」

「そうなんだ……お、美味しそう」

優子はこの喫茶店にきた事がなかったようで喫茶店の内部をきょろきょろと見回していると愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべると優子はテーブルに置いてあるメニューを開き、写真付きで見えるケーキやクレープを見て小さな声でつぶやくと、

「優子、美味しそうじゃないよ。どれも美味しいんだよ。季節限定の新作も結構出るし、だから、どうにかしないとおこづかいが足りなくなっちゃうんだよ」

「……それでも結城君にたかるのは違うでしょ」

愛子は和真にたかる理由は正当だと言うが優子は愛子の言い分は間

違っているとため息を吐くが、

「優子、そうは言ってもね。食べれば、結城君にたかりたくなるが気持ちわかるよ」

「……工藤、頼むから木下さんまで、おかしな道に引き込まないでくれ」

愛子は優子も和真にたかりたくなると言った時、着替え終えた和真が2人の元に戻ってきてため息を吐く。

「あ、お帰り」

「……ウェイター服？」

愛子は和真の主張を無視すると優子は和真の姿に何かあるのか拳を強く握り締め、

「木下さん、どうかした？」

「な、何もないわよ！？」

和真は優子の様子に首を傾げると優子は慌てて首を振り、

「それで、何にする？」

「あれ？　座るのバイトは？」

和真は空いている愛子の隣に座り、愛子は和真の行動に首を傾げるが、

「あぁ、まだ混むまで時間があるしな。店長も混むまではゆっくりしていて良いって、それにAクラスの2人に聞いておいて欲しい事もあるからね」

「そうなの？」

和真は苦笑いを浮かべて愛子と優子に話したい事があると言い、優子は首を傾げる。

「いや、俺達CクラスがBクラスに試召戦争を仕掛ける事になっただろ。たぶん、FクラスはBクラスとFクラスを天秤に掛けさせてFクラスとの試召戦争を選ばせる計画だったと思うから、それを俺達が潰したから、それに乗る必要はないって事を教えておこうと思ってね。後はもしかしたら、何か他の手を使って同じように条件を持ってくる可能性もある」

「Fクラスがそんな事を考えていたって言うの？」

和真はこの次にFクラスが何かしてくる可能性があると言うと優子は最低学力のクラスであるFクラスがそんな事を考えていると言う事が信じられないようで眉間にしわを寄せるが、

「充分に考えられる事だよ。そうじゃなきゃ、FクラスとDクラスの同盟もCクラスへの挑発もBクラスをAクラスに行かせる事もなかったからね」

「確かにそうかも」

和真はFクラスには成績とは違う頭の使い方ができる人間がいると

言い、愛子はFクラスが仕掛けてきた事に苦笑いを浮かべると、

「それで、まだ代表様には話をしてないんだけど、1学期の間、CクラスとAクラスの正式な同盟を提案させて欲しい」

「同盟？　今更？　それも今学期だけ？」

和真は優子と愛子に同盟を持ちかけ、優子は首を傾げる。

「あぁ、基本的に現時点で俺達CクラスはAクラスには勝てないと思っている」

「そんな事をはっきりと言っちゃうんだ」

和真はCクラスではAクラスに勝つ事はできないと言うと愛子は苦笑いを浮かべるが、

「まぁね。うちには姫路さんのようにAクラスとまともに戦える人間もどれか1つでもAクラスに届く人間もいない。木下さんや工藤の相手だとうちのクラスは3人で戦わないといけないし、策によってAクラスと戦えるのってFクラスだけなんだよ」

「……結城君は戦う方法を考え付きそうだけど」

和真はFクラスを評価はしているようで自分達にはない武器をFクラスは持っていると言うと優子は和真が自分達をはめる事を考えているのではないかと視線を鋭くする。

「俺は試召戦争はする気無いよ。就職希望だし、自分の点数を下げるような事はしたくない」

「……相変わらず、やる気ないね」

和真は優子の視線に苦笑いを浮かべると愛子は和真の様子にため息を吐き、

「俺達がBクラスに勝てばFクラスは俺達を策に巻き込んでくる可能性もあるからね。CクラスがAクラスを狙っているとか偽情報を流したりね。同盟は秘密裏に進めてCクラスとAクラスしか知らないように学外でまとめる方が良いだろ」

「……確かにね。でも、結城君があたし達にそこまで協力する意図が見えないんだけど」

和真は同盟は他のクラスにばれない方が良いと言うと優子は和真の考えに納得する事もあるようで頷き、

「それは簡単だよ。結城くんはシスコンだから、高橋先生がAクラス以外の設備に行かせるわけにはいかないんだよ」

「……そう。一先ずは有益な提案だし、代表に話をしてみるわ」

愛子は和真がシスコンだと言い、優子は眉間にしわを寄せたまま頷き、

「まぁ、よろしく。それじゃあ、俺はバイトに戻るから」

「うん。そうそう、結城くん、ぼくはこれとこれ。優子は」

「それじゃあ、あたしはこれとこれ」

和真は混んできた店を見てバイトに戻ると言い、愛子と優子は2品ずつメニューを選び、

「……何で2品に増えてるんだ?」

和真はため息を吐くが愛子と優子に同盟をまとめるためと言い切られる。

第４０問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

広がる和真のシスコンと言う噂。

和真「……広めるな」

まあ、事実ですしね。そして、和真が勝手に進めるＣクラスとＡクラスの同盟。

それも全部、洋子のため。（爆笑）

和真「まあ、一応は今学期にしたしな。クラスもＡには届かないって認めてるんだ。害はないだろ」

そうかも知れませんが友香が怒りますよ。

和真「その時はその時」

投稿キャラの話。

一先ず、落ち着いたのかな？って感じです。

和真「きまったのか？」

悩みどころです。現在は女子生徒は２人にしぼってますが、このま

ま2人採用にしちゃう？って感じです。
男子生徒は今のままだと当確。

和真「ここからの追い上げキャラがいるかだな」

そうですね。

アンケート

1位　愛子、友香　7票
3位　宏美　5票
4位　優子　4票
5位　洋子　3票
6位　美春、葵　2票
7位　清美　1票

友香が追い付きました。

最後に番宣です。

今まで他の作品で特別問題として書いてきた他の小説家さんとのコラボ小説を『繋ぐ絆と境界破壊』と言う題名で投稿しました。
第1問に新作として和真を登場させましたのでご覧ください。

和真「よろしくお願いします」

第４１問

（……これなら、業者を呼ばなくてもどうにかなるかな？）

和真は授業が始まる前にＢクラスの室外機の破損状況を確認していると、

「どうだ？　どうにかなりそうか？」

「ええ、適当に配線を切っただけみたいなんで、それを繋げばどうにかなると思いますけど……燃えなくて良かったですね」

西村教諭は和真に室外機の破損状況を聞き、和真は自分の見立てでは自分でも修理はできそうだと言うが、破損状況から最悪の状況にならなくて済んで良かったとため息を吐き、

「……そうだな。確かに最悪の場合はそう言う事も考えられたんだ」

「……室外機を壊して、平然としているバカがいる事が信じられませんね。下手したら大事故ですよ。それで誰か死んだら、責任とれるのかよ。大島先生もそんな状況で協力しないで欲しいですね」

西村教諭は頭を抑えると和真は試召戦争でＦクラスが窓から侵入して勝利を収めたと聞いているようで設備を壊してまで勝利をつかもうとしたＦクラスも設備を守るためにＦクラスと同盟を組んだＤクラスにも嫌悪感を抱いているようであり、最後にＢクラス代表を倒した教科である保険体育の担当教師である『大島教諭』にも考えて欲しいと言う。

「……まったくだ。しかし、やってしまった事はどうしようもないだろ。試召戦争が一段落したら坂本と吉井にはきっちり指導をしてやる」

「そうしてください。二度とこんな事を起こさないように」

「ちょっと待て!?　結城、どこに行くつもりだ!?」

西村教諭はFクラスの吉井明久と坂本雄二にきっちりと指導すると言うと和真は平然とBクラスの窓から学園に入ろうとし、西村教諭は驚きの声をあげると、

「必要な道具を持ってくるんですよ。まぁ、直ぐに直るわけでもないから応急処置くらいはしないといけないでしょ。後、俺はこのまま修理に入るんで、出席確認は誤魔化して置いてください」

「……あのな。そんなわけに行くか」

和真は家から修理道具を持ってきて授業をさぼって修理すると言うと西村教諭はため息を吐くが、

「どうせ、今日の朝から試召戦争なんですから自習だし良いでしょ」

「……それをサボる理由にするな」

和真は試召戦争をやる気はないようで苦笑いを浮かべ、西村教諭は和真の言葉に頭を押さえてため息を吐く。

「そんな事を言っても俺だってヒマじゃないんですよ。今週は学校終わったら直ぐにバイトなんで今からやらないなら、業者を入れな

いなら来週まで室外機はこのままです」

「……わかった」

和真はそれなら修理は業者を呼んでくれと言うと西村教諭は納得はいかないようだが頷き、

「それじゃあ、ちょっと着替えてきますよ」

「……着替え？　そこまで本格的にやるのか？」

和真は勝ったと言いたげにくすりと笑い着替えてくると言うと西村教諭は和真がずいぶんと本格的にやるつもりだと驚きの表情をするが、

「いや、工具とか入れないといけないんで制服のままじゃ、いちいち脚立を上り下りしないといけないじゃないですか。下手にこのままやって制服を破いても嫌ですしね」

「……なるほどな。確かにその通りだな」

和真は着替える意味はあると言うと西村教諭は納得が言ったようで頷く。

第４１問（後書き）

どうも作者と

和真「主人公です」

和真、試召戦争ボイコット。（爆笑）

和真「点数、減らしたくないからな」

まあ、良いのかな？　と言う感じですが、察しの良い人は和真が何をするつもりかはわかると思います。（悪笑）

和真「さあ、どうなるんだろうね」

アンケート

１位　友香　８票
２位　愛子　７票
３位　優子　６票
４位　宏美　５票
５位　洋子　３票
６位　美春、葵　２票
７位　清美　１票

友香が単独首位の立ちました。

和真「代表様か？」

まあ、本来、作者が考えていたのが友香と宏美なんでこのままが良

いですね。
愛子も優子も他で書いてるから個人的に同じヒロインで話を書きたくない。

和真「ぶっちゃけるな」

なんか同じものになりそうな気がしてね。（苦笑）

第４２問

「……山下さん、結城君はどこに行ったのかしら？」

「さ、さぁ？」

友香は朝のＨＲが終わっても和真が教室に来ないため、こめかみに青筋を浮かべていると清美は友香の様子にどうしたら良いかわからないため、

「ちょ、ちょっと、誰か、カズを見てないの？」

「いや、今日は見てないな。カバンは置いてあるから、来てるとは思うんだけど……逃げたか？」

「逃げたんだろうな」

清美は一心、トオル、平太を捕まえて和真の居所を聞くが３人は和真が逃げたと言い、

「あ、あいつは何をしてるのよ！！」

「だ、代表、少しだけ、落ち着こうよ。はい、深呼吸、大きく吸ってゆっくり吐いて」

「……」

友香は怒りをあらわにして叫ぶと清美は友香に落ち着くように言って友香に深呼吸をするように言うと友香は大きく深呼吸をすると、

「良い？　結城君になんて任せてられないわ！！　こんな状況に巻き込んでおいて逃げるなんて良い。意地でも勝つわよ！！」

「熱くなってるな。代表様」

「……普通なるでしょ」

友香はそれでも和真に対する怒りがおさまらないため、クラスメート達にげきを飛ばすがトオルは友香の様子に苦笑いを浮かべ、清美は大きく肩を落とす。

「……なぁ、山下、今、携帯を見たら、和からメールがきてたんだけど、今、見せると逆効果だと思うか？」

「……どんな内容？」

「……こんな内容」

一心は試召戦争が始まる前に携帯電話の電源を切ろうと思ったようで携帯電話を開くと和真からメールがきている事に気づいて清美、トオル、平太に和真からのメールを見せると、

「……あいつは何がやりたいんだろうな」

「……わからないけど、確実に代表がこれを見たら火に油を注ぐよね？」

「……油で済むか？　むしろ、ガソリンだろ。確実にケンカを売ってるぞ」

清美と平太は制服から作業着に着替えて完全に業者の人間な和真と大島教諭の写メが添付されており、友香にだけは見せられないと意見が合致したようで大きく頷き、

「和は根に持つタイプだからな。代表様への仕返しだろ？」

「……と言うか、自分に仕事を押し付けたクラスへ対する嫌がらせじゃないの？」

「あり得るな。って何で、大島先生も一緒なんだ？」

４人は和真の目的が友香を始めとしたクラスメートへの嫌がらせだと言った時、

「そこ、遊んでないで準備、もうすぐ始まるわよ！！」

「「「「イエス、ボス！！」」」」

友香から４人に遊んでるヒマはないと言う怒声が響き、４人は慌てて返事をする。

「見返してやるわ。結城君、私をバカにした事を後悔させてあげるわ」

「……カズ、帰ってきても命あるかな？」

「ど、どうだろうな。ま、まぁ、こんなメールを送ってきたんだ。何かあるって信じようぜ。」

友香は和真に対する怒りが背後から溢れ出させながら笑っており、
４人は結果はどうであれ試召戦争が終わった時の和真の身の安全を
心配していると

「行くわよ！！」

ＣクラスとＢクラスの試召戦争の開始を告げるチャイムが鳴り響き、
友香はクラスメート達に指示を出すとクラスメート達は当初の予定
通り、数学と物理を中心に召喚フィールドを広げてＢクラスの生徒
と戦い始める。

第４２問（後書き）

アンケート

１位　友香　１０票
２位　愛子、優子　７票
４位　宏美　５票
５位　洋子　３票
６位　美春、葵　２票
７位　清美　１票

第４３問

「なぁ、結城」

「どうかしましたか？」

「どうして、俺がこんな事をしないといけないんだ？　お前は俺に試召戦争の事を頼みに来たんじゃないのか？」

Ｃクラス対Ｂクラスの試召戦争が開始されて１０分ほど経った時、和真は脚立の上で室外機の修理をしており、一心に写メを送った時に和真の隣に写っていた大島教諭は意味がわからずに首を傾げるが、

「何事にもタイミングってのがあるんですよ。それにこいつを直さないと俺達がＢクラスに勝った時に教室の居心地が悪いでしょ」

「勝てるのか？」

「自分達を過大評価して周りを見下している奴らへの対処ならいくらでも方法は見つかりますよ」

和真はＢクラスに負けるつもりもないようで当たり前のように方法などいくらでもあると言うと、

「こんなものかな？　ちょっと、大島先生、上にあがってきて貰って良いですか？」

「上に？　２人で脚立に乗るなんて危ないだろ」

「いや、俺は脚立からおりますんで」

和真は室外機の修理にめどが付いたようで大島教諭に上にあがってきて欲しいと言うが大島教諭は2人で脚立に乗るのはバランスが悪いと言うと和真は被っている日差し避け用の帽子を深々と被ると平然とBクラスの窓を開けて、

「すいません。ちょっと室外機の確認を取りたいんで失礼します。後、代表の方、すいませんが立ち会いお願いします」

「ああ……」

業者の人間を装いながらBクラスの教室に入り込み、代表の『根本恭二』を呼ぶと恭二は和真の格好が完全に修理業者に見えるため、警戒する事なく近づいてくる。

「それじゃあ、すいませんね。Cクラス結城和真がBクラス代表根本恭二に保健体育勝負を挑みます。試獣召喚（サモン）」

「へっ？」

「承認する」

和真は恭二が目の前にくるのを確認すると保健体育で恭二に試召戦争を仕掛けるが恭二だけではなく、Bクラスの教室にいた生徒達が固まるが大島教諭の『承認』と言う言葉に2人の周りには保険体育の召喚フィールドが形成され、和真を2頭身にしたような召喚獣が手には巨大な両手持ちようの大剣を手にして真っ白な鎧を装備しており、

「早く召喚してくれ。それとも戦意無しと判断して良いのかな？」

「な、何を言ってるんだ？」

「いや、だから、今は試召戦争中だろ。代表の根本恭二君」

「お、お前は！？　結城和真！？」

和真は恭二に早く召喚するように言うが恭二は今、何が起きたか理解できていないようであり、和真はくすりと笑うと被っていた帽子を取ってニヤリと笑い、恭二はその時初めて目の前にいる業者の格好をした男が和真だと気づき驚きの声をあげるが、

「だから、さっき名乗っただろ」

「くっ！？」

「で、召喚はなしか？　まぁ、今は回復試験の最中だしな。採点前見たいだから保健体育の点数はないか」

和真は恭二の様子など気にする事なく、恭二の今の保険体育の点数がない事を言い当てると恭二は苦虫を噛み潰すような表情をすると、

「……結城、教育者としてこのやり方はどうかと思うんだが」

「そうかも知れませんがこれが試召戦争のルールですしね。それになんかこの卑怯な小者は自分を策士とか勘違いしているんで思い知らせてやろうと、あれですよ。人間は負けた後に顔をあげれるかどうかでその後の成長が決まってくるんですよ」

「お前は……決着、勝者Ｃクラス」

大島教諭は召喚フィールドを張ったが試召戦争が起こる事なく決着が付いた事にため息を吐くが和真は気にする事なくはひょうひょうと答えると大島教諭は頭を押さえながら和真がＢクラス代表の恭二を倒したと認め、Ｃクラス対Ｂクラスの試召戦争は開始１５分と言う未だかつてない速さで終結する。

第４３問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、奇襲。

和真「自分で言うのもなんだけど卑怯だ」

卑怯、汚いは敗者の戯言です。それは今までの歴史が証明しています。
それに和真が１番にやらないといけないのは省エネですから。

和真「確かにな。点数削らないで勝てる方法だし」

和真が作業着を持ってきている事で気づいている人たちはいると思いますがどうなんでしょうかね？

和真「さあね」

戦術等を考える上で和真はやっぱり１人で動く姿が見えました。

和真「と言うか、代表様を激怒させてる姿」

そうですね。（苦笑）

アンケート
１位　友香　１１票

2位　優子　8票
3位　愛子　7票
4位　宏美　5票
5位　洋子　3票
6位　美春、葵　2票
7位　清美　1票

第４４問

「えっ！？　どう言う事？」

友香は自ら指揮を執り、代表がそばにいる事でＣクラスの戦意は高かったのだが友香達Ｃクラスの生徒の知らないところで和真が恭二を倒し、召喚フィールドは四散され廊下にも大島教諭の声でＣクラスの勝利が宣言され、友香は意味がわからないため呆然と立ち尽くすが、

「……カズだね」

「……和だな。間違いなく」

友香と一緒にいたトオルと清美は和真が何かやった事だけは理解したようで苦笑いを浮かべると、

「代表様、遊んでないで早く入ってきてくれよ。俺はヒマじゃないんだから戦後処理は任せるぞ」

「ゆ、結城君？　何、その格好？」

和真がＢクラスの教室から顔を出して友香に戦後処理をしてくれと言うと友香は和真の作業着姿に意味がわからないようではあるがそれより、和真が教室にいなかった事に腹を立てているようでこめかみに青筋をぴくぴくさせながら和真に聞く。

「見ての通り、作業着だ。そんな事より、戦後処理してくれよ。俺は忙しいんだからな」

「だから、何で、そんなものを着てるのよ!!　そして、何でBクラスから出てくるのよ!!　ちゃんと説明しなさいよ!!」

「だ、代表、一先ず、落ち着いて。カズも代表の怒りに油を注がない。何人か代表を押さえるのを手伝って!!」

和真は友香の質問にただ一言答えると友香は和真の胸倉をつかみ、清美は友香を和真から引き離し、女子生徒数名で友香を押さえつけるが、

「放しなさい!!　あの男には思い知らしてやらないといけないのよ!!　この間から私をバカにして」

友香の怒りは加熱されており、女子生徒達を引きずりながら和真につかみかかりそうであり、

「……一先ず、和、説明をしてくれ。そうしないと代表様がお前に襲い掛かるぞ」

「襲いかかるのか？　それなら、保健室のベットの上が」

一心は和真に一先ず、どのようにして恭二を倒したか、そして、何より、和真がどうして作業服を着ているか教えてくれと言うが和真は一心の言葉に下ネタに走り始め、

「……カズ、こんな状況でおかしな事を言わない。本当に殺されるわよ」

「殺されるなら腹上死希望で」

「結城君！！　あなたは何を言ってるのよ！！」

清美は和真の下ネタにため息を吐くが和真が止まるわけもなく、友香は顔を真っ赤にして和真を怒鳴りつけると、

「はいはい。反省しますよ。説明もしてやりたいけど、その前に俺も少しやる事があるんだ。代表様は戦後処理させといてくれよ」

「やる事？　……また、ろくでもない事？」

和真は他にもやる事があるから少し開けると言うと清美は和真がまだ何かおかしな事を企んでいるかと思ったようでため息を吐く。

「まぁ、ろくでもない事かは想像に任せるけど……仕返しってのは最後までしっかりとやらないといけないだろ」

「……ろくでもない事だな」

「……そうね」

和真は笑顔で『仕返し』と言い切り、トオルと清美は和真の言葉に頭を押さえるが和真のその笑顔になれていないクラスメート達は寒気を感じたようで息を飲むと、

「それじゃあ、ちょっと行ってくるから、代表様、よろしく」

「え、えぇ」

和真は改めて友香に戦後処理を任せると言うと友香も和真の笑顔に

威圧されたようで顔を引きつらせて頷き、

「……あ、あの。結城君って何なの？」

友香は和真の背中を見送った後、顔を引きつらせたまま和真と仲の良い一心、トオル、平太、清美の４人に聞くが、

「カズはカズ」

「シスコンで根に持つタイプ」

「……それもかなり根深く」

「……ケンカは売らない方が幸せだと思うぞ」

４人は友香から視線を逸らす。

第４５問

「戦後処理って言ってもね……何かある？」

「うーん。Ｆクラスにされたみたいに女装させてみるとか？」

友香は和真の奇襲により、討ち取られた恭二を前に戦後処理をどうしようかと首を傾げると清美は楽しそうに笑いながら、恭二に女装させてみようかと言うが、

「止めてよ。そんな気持ち悪いものは見たくないわ」

「……代表、一応、昨日まで付き合ってたんだよな」

友香は恭二の女装など気持ち悪いと言い切るとトオルは流石に恭二が哀れに思えているようで苦笑いを浮かべると、

「ま、待ってくれ。友香、昨日のは間違いなんだ！？　あれはＦクラスの奴らに無理やり」

「そのわりにはずいぶんと楽しそうだな」

「カズ、それ何？」

恭二は友香に女装はＦクラスにはめられたからだ行った時、和真が１冊の本を持って戻ってきて、清美は和真の持っていた本を覗き込む。

「……汚いね」

「汚いけど、楽しそうだろ」

「……そう見えるのがキモいな」

和真の持ってきた本には恭二が女装した姿の写真集であり、清美は流石に気持ち悪いようで口元を手で押さえると和真の周りにCクラスの生徒が集まりだして写真集を覗くと全員に意見は一致し、

「……恭二、二度と話しかけないで、早く出てってくれる」

「ま、待ってくれ。友香あぁぁ！！！？？？」

友香は眉間にしわを寄せて恭二に早く教室から出て行けと言うと恭二は友香に弁明したいようだが、

「いや、出るのはお前らだからな」

「……和、お前、冷たいな」

和真は恭二の叫びに冷静にツッコミをすると一心は苦笑いを浮かべると、

「いや、冷たいも何も負けた奴が言い訳するなんて見苦しいだろ。それに俺の仕事を増やした罰はこんなものじゃ終わらない……な。平賀、清水」

「まぁ……僕達にも責任があるわけだしね」

「……ええ」

和真はまだ恭二への罰は終わってないと笑うとDクラス代表の『平賀源二』と『清水美春』の名前を呼ぶと2人は和真に何か抑えられているようで納得いかなさそうに教室に入ってきて、

「Dクラス代表の平賀源二」

「同じく、清水美春ですわ。私達はBクラスへ試召戦争を仕掛けます。開始は今から30分後です」

Cクラスに負けたばかりのBクラスに宣戦布告をする。

「な、何を言ってるんだ!?」

「別に連戦はルール違反じゃないだろ。お前だって、そんな噂を流してFクラスを騙したんだ。他のクラスが漁夫の利を狙ってくるのは当然だろ」

恭二はDクラスからの宣戦布告に驚きの声をあげるが和真は当然の事だと笑い、

「ゴメンね。根本くん、僕達にもいろいろとあってね」

「……不本意ですわ。何で、美春が結城和真の口車なんかに乗せられないといけないのですか」

源二と美春は室外機を壊した件で和真から何かを言われたようでBクラスに宣戦布告をする意味を言うと、

「それじゃあ、よろしくね」

「……」

源二と美春は自分達の教室に戻って行き、

「まぁ、頑張れよ。ちなみにDクラスとの勝負がついたら次はEクラスが攻めてくる事になってるから」

「……カズ、あんた、鬼ね」

頭が状況を整理するのを拒絶している恭二の肩を叩き、和真は心底楽しそうに笑い、清美は和真の表情を見てため息を吐くが、

「言っただろ。俺は仕返しは最後まできっちりやるってな」

和真は笑顔で言い切り、教室にいるCクラス、Bクラスの生徒は和真は敵に回さない方が身のためだと理解する。

第４５問（後書き）

どうも、作者です。

『繋ぐ絆と境界破壊』に和真を出演させました。
お相手は由里さんの『バカとテストと本屋さん』より『永瀬夏樹』くんとの共演です。

興味が湧いたらご覧ください。

第４６問

「……結城君、あなたは何をしてるの？」

「見てわからないか。バカクラスがＢクラスを倒すためだけにＤクラスに壊させた室外機の修理だ」

Ｂクラスを追い出した後、和真は窓から脚立の上に戻ろうとすると友香は和真が何をするのか理解できないようで眉間にしわを寄せて言うと和真は見ればわかるだろうと言い、修理を再開し、

「カズ、これが作業着なわけ？」

「だから、見ればわかるだろ。わざわざ、下まで工具とかを取りに行けって言うのか？　ただでさえ、面倒な事を押し付けられてるのに時間がかかる事をしてられるか」

清美は和真が作業着を着ている理由を聞くと和真は面倒くさそうに言い、

「……ここから、恭二に仕掛けたわけね？」

「……その格好じゃ油断するだろうな」

友香は和真が室外機を修理している姿に全てが納得したようで顔を引きつらせるとトオルは苦笑いを浮かべる。

「それで、カズはこれから何をする気？」

「何を？　ってなんだ？」

「とぼけるな。お前の性格を考えればこれじゃあ、終わらないだろ。『仕返しは最後まで』なんだろ？」

清美はまだ和真が何か企んでいると思っているようで窓から和真に聞くと和真は首を傾げるが一心は和真の仕返しはこんなところで終わらないと言うと、

「……やるわね。間違いなくFクラスに仕返しを」

「……代表も和の性格わかってきたな」

友香は眉間にしわを寄せて和真がFクラス相手に何かするつもりだと言うと平太はうんうんと頷き、

「……別に何もクラスに迷惑をかける事はするつもりはないよ」

「やるんじゃない」

和真はクラスに迷惑をかかる事はしないと言うと友香は肩を落としてため息を吐く。

「やっほー。結城君、勝利おめでとう♪」

「……開始15分って、どうしたら、こんなに簡単に決着が付くのよ？　って、結城君、あなたは何をしてるの！？」

「あぁ。ありがとう。何を？　って、見ればわかるだろ」

友香がため息を吐いていると愛子と優子がCクラスの勝利のお祝いにきたのか和真に声をかけると和真は窓の外から返事をすると、

「それで、バカクラスはなんて言いに来た？　Bクラスを倒したCクラスが勢いに乗ってAクラスに攻め込んでくるとでも言ってきたか？」

「……ええ、まったくその通りよ」

和真はFクラスの考えを見透かしているようで呆れたように言い、優子は和真の言った通りにFクラスが試召戦争の話をしに来たと言う。

「……結城君、何をするつもり？」

「いや、どうせ、バカクラスはAクラスに仕掛けるつもりなんだ。それなら、仕返しはAクラスにやって貰えば良いかな？　とね」

友香は和真と愛子、優子の様子に何をするつもりかと聞くと和真はくすりと笑い、

「それで、どんな条件を出してきたんだ？」

「勝負は5対5の勝負。1、3、5戦目をFクラスが2、4戦目をぼく達Aクラスが選択教科を決める。で、5戦目は代表同士の戦いで3勝した方が勝ちって条件だよ」

2人にFクラスが勝負を挑んできた条件を聞くと愛子は苦笑いを浮かべながら、Fクラスとの試召戦争の内容を話し、

「……ずいぶんとむちゃくちゃな。そんな条件飲んでないよな？」

「……それがね。代表が受けちゃったのよ。これでも5対5まで持って行ったのよ」

和真は愛子から聞かされた条件に眉間にしわを寄せるが優子はFクラスに乗せられている事に自覚があるのかため息を吐く。

第４７問

「まぁ、受けたものは仕方ないか、それにＡクラスがどんな条件でもバカクラスに負けるわけにもいかないからな。相手が有利でも受けないといけないってのもあるか」

「確かにそれはあるかも」

和真は直ぐにＡクラスの事情もあるかと言うと愛子はＡクラスの代表には考えがあるのかものと笑い、

「それで、結城君に意見を聞こうと思ったのよ。戦術とかそう言うのはあたし達より、詳しそうだしね」

「あぁ。協力するよ」

優子はＦクラス代表の『坂本雄二』の考えが読めないようで和真に意見を聞きに来たと言うと和真は窓から教室内に戻り、

「えーと、まずは５対５だからＦクラスが絶対に出してくる人間」

「……姫路さんね」

「後は土屋康太」

和真はＦクラスで出場してくる生徒を考えようと言うと優子はＦクラス最強のカードである『姫路瑞希』の名前を出し、和真は他に『土屋康太』と言う生徒の名前を出す。

「土屋康太？　誰？」

「……和、まさか、その男が」

「あぁ、『寡黙なる性職者』だ」

優子は『土屋康太』の名前に心当たりがないようで首を傾げると一心には心当たりがあるようで和真に聞くと和真は頷き、

「ム、ムッツリーニ？」

「あぁ。説明は省略するけどな。そいつは保険体育は学年トップだ」

優子は聞き慣れない言葉に首を傾げたまま言うと和真は優子の反応が面白いようでくすくすと笑いながら康太の得意教科を話し、

「それで1勝、姫路さんで教科選択して2勝で最終戦で代表を倒すつもりってわけね……失敗した」

「かもな……でも、バカはAには絶対に勝てない」

優子は和真の話に眉間にしわを寄せると和真は苦笑いを浮かべた後、真面目な表情をすると、

「何、結城君が付いているからとでも言いたいわけ？」

「代表様、少し落ち着いてくれ」

友香は他人を食ってかかる和真が気に入らないようで和真を睨みつけて言うが和真は友香の様子に小さなため息を吐く。

「普通に考えてバカ代表が学年主席に勝てるわけがないだろ。ここまで作戦が上手く行っているから、自分の策を見抜いている人間はいないと思っているはずだ。だから、その油断に付け込む」

「油断？」

和真はＡクラスの代表が負けるわけないと言うと雄二は油断していると笑うと愛子は首を傾げ、

「普通に考えたら、今回の５戦勝負で最終戦は決まっている。お前達がＦクラス代表なら２枚の最強カードはどこで切る？」

「普通に考えたら、この条件だと１、３戦目しか考えられないな」

和真はＦクラス代表になったつもりで考えてくれと言うとトオルは１、３戦目に使うと言い、周りのメンバーもトオルと同じ意見のようで頷くが、

「だけど、バカ代表は３、４戦目でそのカードを切る」

「ちょっと待って、カズ、どう言う事よ？」

和真は雄二はそんな事はしないと言うと清美は和真の考えが理解できないようで直ぐに和真に聞き返す。

「ここまで上手くきている作戦にバカ代表はすべて自分の手のうちだと思ってるんだよ。最初に１対１を持ちかければ断られるのは当たり前、３対３、もしくは５対５までなら自分の作戦に気づいている人間はいないってな」

「……それって、あたしが坂本くんに上手くあしらわれたって事？」

和真はこの状況も雄二の想定内だと言うと優子は眉間にしわを寄せるが、

「あぁ、それでここまで上手く言っていると油断……まぁ、演出ってのに凝りたくなるのが人間ってな。２連敗からの３連勝ってな」

「……それはぼく達、だいぶ、舐められてるよね」

和真は落ち着いた口調で雄二の真理を見透かしているようであり、愛子は少しムッとした口調で言う。

第４７問（後書き）

１位　友香　１２票
２位　優子　８票
３位　愛子　７票
４位　宏美　５票
５位　洋子　３票
６位　美春、葵　２票
７位　清美　１票

第４８問

「だろうな。でも、だからこそ、対策は立てやすい。まぁ、バカクラスに誤算があるとしたら俺達がＡじゃなくＢクラスに仕掛けた事、俺達をけしかけて少しでも主力の点数を削れていれば儲けものくらいで考えてたろうな」

「……それがＣクラスを挑発したわけね」

和真は愛子の反応に気づきながらも話を続けて行くと友香は優子の真似をしてＣクラスを挑発しにきた秀吉を思い出したようで眉間にしわを寄せると、

「あぁ。で、仕返しの内容だけどな。簡単に言えば姫路を潰す」

「は？　ちょっと待て、和、簡単に言うけど坂本が４戦目にだしてくるって事は勝てる算段があっての事だろ」

和真は頷いた後、瑞希を潰す事が仕返しになると言うがトオルは瑞希を倒すのは難しいと言うが、

「トオル、普通に考えろよ。俺達Ｃクラスでなら姫路を倒すのは難しいがＡクラスだぞ。総合教科で当たらなければ単体教科で姫路と対等もしくはそれ以上に戦える人間はいる。確かに姫路の成績は良いが全教科トップって事はあり得ない。得手不得手は必ずあるからな」

「……確かにそうね。愛子、４戦目で姫路さんの相手ができる？」

「ぼ、ぼく？」

和真は瑞希相手に総合教科で戦うのは愚かだと言い、単体教科で勝負するように言うと優子は少し考えるようなしぐさをした後に愛子に瑞希と戦えるかと聞き、愛子は優子に突然、話をふられた事に驚きの声をあげる。

「工藤さんって、得意教科あるの？」

「う、うん。保健体育は得意だよ。噂のムッツリーニくんと個人的に戦ってみたい。腕輪も持ってるし」

清美は愛子に得意教科は何かと聞くと愛子は苦笑いを浮かべながら保健体育が得意だと言い、

「そりゃ、心強い……が、何かありそうだな？」

「うん。今も言ったけどムッツリーニくんと戦ってみたいんだよね」

和真は愛子に任せた方が良いと言おうとするが愛子の様子に違和感を覚えて聞き返すと愛子は康太と戦いたいと苦笑いを浮かべると、

「ちょっと、愛子」

「う、うん。優子の言いたい事もわかるんだけどね」

「……なら、正攻法はダメか？　こっちは邪道なんだけどな」

優子は愛子の反応に考え直して欲しいと言うが愛子にも引けない部分があるようで苦笑いを浮かべたまま答え、和真は愛子の反応に少

しだけ困ったように頭をかく。

「カズ、他にも手はあるのか？」

「Ａクラスだから正攻法が１番なんだと思うんだけど、ダメなら邪道だけどな……まぁ、女子生徒が出て限定テストで保健体育の実技『体力判定テスト』とかな。Ａクラスには文武両道の生徒も多いだろ」

「……ちょっと待ちなさい。そんなものが良いわけがないでしょ」

一心は愛子が勝負に私情を挟みたいのを見て和真に他に手はないかと聞くと和真は流石に卑怯な事がわかっているため苦笑いを浮かべて言うと友香は和真を睨みつけるが、

「一応、召喚戦争のルールとして成績に関係あるテストであれば問題ないはず、保健体育は筆記だけじゃなく、実技の占める割合もあるんだ。ルール的には問題ない。それに、バカ代表が個人戦にしてきたのは同じように何かに限定してＡクラスの代表に勝つ気だから、それなら、Ａクラスがやっても問題ないだろ。それで文句をつけてくるなら、最終戦にバカクラスの主張も潰せる。まぁ、邪道だし、Ａクラスのプライドの関係で使えるかはわからない」

「……確かに結城君の言い分はわかるわ。でも、流石に卑怯よね？」

「あぁ。だから、Ａクラスなら正攻法で姫路を潰すのがベスト、土屋みたいに単体教科だけずば抜けているとは違って姫路は全体的に点数が良いんだ。去年の教科別の点数で確認取れば単体教科勝負だと勝てるヤツは工藤以外にも出てくるだろ」

「そうね。確認してみるわ。結城君、ありがとう。参考になったわ」

和真は邪道だと理解しているため、決断はＡクラスに任せると言うと優子は和真に礼を言うと、

「愛子、戻るわよ」

「うん。それじゃあ。またね」

「さてと、修理の続きでもするか」

優子と愛子は自分の教室に戻って行き、和真は窓の外に戻って行く。

第４９問

「ねえ、結城君」

「何だよ？」

和真が室外機を修理している様子を見て友香が和真に声をかけるが和真は忙しため、不機嫌そうに返事をするが、

「ＡクラスはＦクラスに勝てると思う？」

「さあな。Ｆクラスが勝ったら勝ったで俺達が蹴散らしてから、Ｂクラスと同じようにＤクラスの設備まで突落してやれば良いだけだ」

友香は和真にＡクラス対Ｆクラスの試召戦争の結果が気になるようで和真に聞くと和真からはそっけない言葉が返ってくるだけであり、

「それって冷たくない？　一応は同盟組んでるのよ」

「冷たくはないよ。俺は考えられる限りの戦術を伝えた。戦争なんだから変な意地を張って負けた場合はそれまでの関係って事だ。それにＢクラスとの同盟を簡単に破ったのは誰だ？」

「……そうね」

友香は和真の態度は冷たいと言うが和真はＢクラスとの同盟を破棄した事を引き合いに出すと友香は黙ってしまい、

「うん。相変わらず、カズはクールだね」

「まったくだ」

和真と友香の様子に苦笑いを浮かべながら清美とトオルが窓から和真に声をかける。

「別にクールってわけでもないだろ。俺は現実主義者（リアリスト）なんだよ……これで良いな」

「直ったのか？」

和真は2人の反応にため息を吐きながらも修理はしっかりとしていたようであり、室外機は正常に動き始め、

「あぁ。これで大丈夫だと思う……汗ばむ女子の制服姿が見えなくなるのは残念だけどな」

「……結城君はもう少し言葉を選べないの？」

和真は動きだした室外機を見ながらも微妙に複雑な表情をすると友香は眉間にしわを寄せながら和真の言葉に不快感をあらわにするが、

「……確かに夏場は汗で透けるからな」

「そう考えると冷房のない設備も悪くないかも知れないな」

「この男どもは」

トオルと一心は和真の言葉に頷き、清美は眉間にしわを寄せると、

「まぁ、冗談はこれくらいにしてな。Aクラスが仮に負けたら俺達は同盟者としてAクラスに宣戦布告して和平交渉で設備を交換する。その後、俺達は負けてないわけだから刀を返してFクラスの喉元に喰いつく。姫路、土屋の点数は減ってるはずだしな。それでFクラスはFランクの設備に逆戻り、俺達はAランクの設備、AクラスはBランクの設備になる。恩を売るならこの後にまたAクラスと設備を交換すれば良い。実際は、姫路1人で1度に相手できる人数なんて限られてるからな。土屋も誰かに犠牲になって貰う形になるけど決着がついた瞬間にフィールドを変更、保健体育以外にフィールドを変えてやれば敵じゃない。吉井は倒すを前提にしないで数名で囲んで足止めすれば良いんだ。他に島田は数学が得意らしいがBランク相当なら2人ないし3人で当たれば倒せる。倒せなければ土屋と同じ対応をすれば良い」

「……結城君、あなた、どこまで考えて動いているの？」

和真は簡単にAクラスがFクラスに負けてしまった時の事を話すと友香は和真の口から出て言葉にどう反応して良いのかわからないようで顔を引きつらせて言う。

「まぁ、Aクラスが負けたらFクラスの設備までしか落とせないからな。Aクラスが勝てば今より1ランク下がるんだ。仕返しとしてはAクラスに勝って貰った方が良いんだよ」

「……和、性格、悪いな」

「いや、俺の場合は当然の権利だからな」

「た、確かにね」

和真はFクラスの設備の事を考えればAクラスに勝って欲しいと言い平太は和真の様子に苦笑いを浮かべるが和真は室外機を指差して当然の事だと言うと清美は顔を引きつらせながら頷き、

「それじゃあ、修理が終わったから、西村先生のところに報告してくるな」

「えぇ」

和真は周りの反応など気にする事なく室外機修理の終了を西村教諭に教えるために教室を出て行く。

第５０問

「結城君」

「ん？　中林、試召戦争はどうなった？」

和真が西村教諭に修理の報告を終えて廊下に出た時、宏美が和真を見つけて駆け寄ってくる。

「勝ったわよ。まぁ、Ｂクラスは連敗で精神的に大部、弱ってたし、卑怯な気もするけどね」

「卑怯も勝てば問題なし、それに卑怯な事をしてでも勝てば良いと思ってたヤツらの集まり何だ。返ってきただけだろ。自業自得」

ＢクラスはＦクラス、Ｃクラスに続き、Ｄクラス、Ｅクラスにも仕掛けられて精神的に弱っていたようで簡単に決着がついたようではあるが宏美は体育会系の事もあるのか卑怯な事をしたかなと苦笑いを浮かべるが和真はＢクラスの行いを許せないようでばっさりと切り捨てると、

「後はＦクラス対Ａクラスよね？　結城君はどうなると思ってるの？」

「どうなるって、バカがＡに勝てるわけがないだろ」

宏美は和真の様子に苦笑いを浮かべながら、２学年最初の試召戦争がＦクラスとＡクラスの試召戦争で一段落つくと思っているようで和真に聞くが和真はくだらない事を聞かないでくれと言いたげにＦ

クラスは負けると言う。

「うん。まぁ、私もAクラスが負けるわけはないとは思うけど、そうやって頭ごなしに言われると私達もバカにされてる気がするのよね」

「……あぁ、悪い。そんなつもりはないよ。中林を含めて少なくともEクラスの連中は部活を頑張ってるだろ。努力もしないような奴らが何もしないで上に挑むのはどうもな……やっぱり、頑張ってる人を見てるせいか。そんな事をされるとな」

宏美は和真に自分達もバカにされている気がすると言うと和真は苦笑いを浮かべて宏美に謝り、

「まぁ、でも、Fクラスが上に挑む姿は試召戦争だけじゃなく、他にも何かできそうな気がするから私達は刺激されたけどね」

「まぁ、確かに周りを焚きつけるには良いのかも知れないけどな。巻き込まれる身だと面倒な事この上ないぞ」

宏美は挑戦者の姿勢として何かを感じたものもあるのか真剣な表情をすると和真は彼の性格なのか宏美とは対照的に面倒な事は避けたいとため息を吐くと、

「そう言いながらも、クラスを勝利に導くあたり、結城君よね」

「何だ？　そのわけのわからない納得の仕方は？」

宏美は和真のため息を吐く様子に苦笑いを浮かべながら頷くと和真は宏美が何に納得しているか理解できないようで首を傾げるが、

「まぁ、気にしないでよ。あ？　そろそろ、私、教室に戻るね……そうだ。結城君、この間の約束覚えてるよね？」

「あぁ、できれば忘れたいけどな。忘れるとうるさいだろ？」

宏美は和真に先日の約束を覚えているかと聞くと和真は時間を取られる事もあるため、肩を落とす。

「覚えてるなら、良し。それじゃあね」

「あぁ」

宏美は和真の言葉に笑顔を見せると設備の上がった自分達の教室に向かって走って行き、和真はそんな宏美の背中を見送るが、

「……あれ？　よく考えたら、中林達も新校舎になったんだから、一緒に戻れば良いんじゃないのか？　……まぁ、良いか」

和真は宏美の教室は隣になったんだから、一緒に戻れば良かったと思うが別に追いかける必要もないと思ったようで頭をかいた後、教室に戻る。

第５１問

「和、おつとめごくろうさん」

「あぁ」

「カズ、さっき、宏美がきたんだけど」

「聞いてるよ。無事に根本を叩き潰したってな」

和真が教室に戻ると清美はＥクラスの勝利を和真に教えようとするが和真は先ほど宏美に会って直接聞いているため知っていると言って席に座ると、

「さてと、やるか」

「今日は何の再試験？」

「集まるな」

本日の回復試験のために自習を始めようとするといつものメンバーに友香を加えて和真の周りに集まりだし、和真は眉間にしわを寄せるが、

「現代文はボロボロだったんだ。俺達に協力できる事もあるかも知れないだろ」

「そうね。結城君はうちのクラスの主力でもあるわけだし、やれる事は協力しないといけないでしょ」

トオルは和真に協力できる部分はないかと思っているようで声をかけたと言うが本心は冷やかしのようで口元は小さく緩んでいるが友香はクラスの代表として和真の成績アップを重要だと思っているようである。

「で、今日は何？　少なくとも現代文見たく成績を下げるのは勘弁よ。教えた人間が悪いとも思われるし」

「……悪かったよ」

清美は昨日、和真に現代文を教えたが結果が伴わなかったようでため息を吐きながら言うと和真は納得がいかなさそうに清美に謝り、

「教えてくれるなら保健体育の実技……いや、実戦を代表様か山下に手取り腰取り教えてくれ」

「……結城君、私は冗談で言ってるわけじゃないのよ」

「……わからない。どうして、和真の周りには女の影が多いのかが」

和真は冗談めかして下ネタを言うと友香は真面目な話をしているため、眉間にしわを寄せ、清美は和真の人間関係がわからないとため息を吐くと、

「悪かったよ。まぁ、今日は家庭科だから、別にそこまで気を張る必要はないからな」

「お。勝機ありか？」

「あぁ。振り分け試験の時は順番に解いて言ったが、今回は被服系を捨てて調理系を重点に行こうと思う」

和真は今日は割と得意な家庭科であると言うと一心は和真の様子に今日は楽勝だと思ったようであり和真は笑顔でできないものは捨てると言い切る。

「……そ、それで良いの？」

「まぁ、前回のテストでも調理系は答えを書いたのは１０割に近い回答率だったからな。それならいっそ制限時間内で解けない問題は捨ててしまおうと誰にだって得意な分野あるだろ。数学は図形は好きだけどグラフが嫌いとかそれと一緒」

「何と言うか男らしいな」

友香は和真の言葉にこれはダメかも知れないと思ったようだが和真は効率を考えるとその方が良いと言うと平太は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、後は問題次第。被服系が多ければダメかも知れない」

「だ、ダメかも知れないじゃないでしょ。教科書を出しなさい。そっちも解けるようにするわよ」

和真は最初の問題で調理系が続かなければ点数が下がると言うと友香は慌てて和真の隣に座り、和真に教科書を開くように言うと、

「代表様、被服系できるのか？　意外だ。実はぬいぐるみを縫うのが趣味とかあるのか？」

「そ、そんな事を言ってるヒマがあったら早く準備しなさい！！」

和真は友香の様子に少し意外そうな表情をしながらも彼女をからかうように言うと友香は和真の言葉を否定するかのように声を張り上げるが、

「……なるほど、実は少女趣味か。部屋の中はぬいぐるみでいっぱいと」

「カズ、そう言う言い方はダメよ」

「そ、そんな事はないわよ！？」

友香の反応は明らかに慌てており、

「まぁ、気にするな。姉さんの部屋もそんな感じだから」

「……へ？」

和真は洋子の部屋も変わらないと言うとその言葉に教室全体が凍りつく。

第５１問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

勝手に洋子先生像を作ってますが第９．５巻を見るとそんなに外れてない気もする不思議。（苦笑）

和真「それで何のためのあとがきだ？」

今日は最終確認にしようと思いまして、現在募集している和真のヒロイン決定アンケートと投稿キャラ募集を第５５問で締めたいと思います。

和真「投稿もなくなってきたしな」

そうですね。キャラ投稿は１人何名までと言う明確なものもないので新たに投稿してくれても構いません。

和真「新しいクラスメートは」常識人でありますように俺の邪魔をしないように」

まあ、無理でしょうね。（爆笑）

和真「おい。爆笑ってなんだよ！？」

第５２問

「……洋子先生の部屋ってぬいぐるみだらけなの？」

「ん？　あぁ、結構な数があるな」

「い、意外ね」

清美は和真の言葉に顔を引きつらせながら洋子の部屋の状況を確認すると和真は家庭科の教科書を開きながらあまり興味無さそうに言うと友香は顔を引きつらせたまま頷き、

「別に個人の趣味だからな。意外と言われても俺にはどうしようもない」

「……和、そう言えば、前にゲームセンターのＵＦＯキャッチャーを荒らしてたよな？　あの時のぬいぐるみって洋子先生の部屋か？」

「ん？　あぁ、姉さんが欲しいって言ったのはやったぞ。後は清水と中林にも男の俺が持っていても仕方ないからな」

和真は洋子の趣味だから自分には何も言う事はないと言うがトオルは和真と一緒にゲームセンター巡りをした事を思い出して和真に聞くと和真はそのために取っていたわけではないと言うが、

「……流石、シスコンね」

「えぇ、結城君のシスコンパワーは侮れないわ」

友香と清美は和真が改めてシスコンだと納得すると、

「それで結城君、被服系なら私はそれなりに点数を取れるし、わかる範囲なら教える事ができるけど」

「ん。そうだな。せっかくだし、教えて貰おうかな。できれば、手取り腰取り」

「……結城君、いい加減にしないと怒るわよ」

友香は改めて和真に勉強を教えようかと聞くと和真は冗談交じりで答え、友香はこめかみに青筋を浮かべる。

「……冗談です。でも、俺の勉強を見るよりは自分の勉強をした方が良くないか？　今は自習時間なんだし、俺の勉強に付き合うよりは自分の点数を上げた方が効率は良くないか？」

「確かにそうね。でも、元々、試召戦争に参加する気はないと言っていた結城君を巻き込んだのは渡しなわけだし、それくらいはしないといけないでしょ」

「……代表様、男らしいな」

「結城君、やっぱり、私にケンカ売ってる？」

和真は友香の提案はありがたいが効率的に考えた方が良いと言うと友香は少しだけ照れくさそうに和真から視線を逸らして試召戦争に巻き込んだお詫びと言うと和真は友香の性格を彼なりに誉めたようだが友香にはバカにされているとしか感じなかったようであり、

「……そんな事はないぞ」

「それじゃあ、どうして、目を逸らすのかしら？」

和真は友香の様子に少し怯んだようで友香から視線を逸らすと友香は笑顔だがこめかみに青筋を浮かべたまま和真の肩をつかみ、

「さてと、私達もそろそろ、自分達の自習に戻ろうか？」

「そうだな。山下、俺、現代文、苦手だから教えてくれ」

「そうね。自習時間だし、それなりにまとまってわからないところは教えあった方が効率は良いわね」

一心、トオル、平太、清美の４人は友香の様子に和真を見捨てて新しい自分達の席に移動しはじめ、

「ちょ、お前ら、逃げるな!?」

「結城君、逃げるって言うのはどう言う意味かしら？」

和真は４人に助けを求めるが４人は振り返る事はなく、

「……和、実は俺達もお前の奇襲を一言も聞いてない事に腹を立ててたりするんだ」

「そう言う事だ」

４人は今回の作戦で１人で勝手に動いた和真へのお仕置きだと言う。

第５３問

「……」

「あれ？　結城くんに何があったの？」

放課後になると愛子と優子がＣクラスの教室に顔を出すが和真の魂は抜けかけており、愛子は首を傾げると、

「工藤さん、木下さん、どうだったの？　と言うか、負けたらここに来ないか」

「えぇ、勝ったわよ」

清美が２人にＦクラスとＡクラスの試召戦争の結果を聞き、優子は勝利報告をする。

「どんな風に決着がついたの？　結城君の予想はどこまで合ってたの？」

「……」

友香は和真の予想の精度を確認しようと２人に聞くと優子は魂の抜けかけている和真に視線を向け、

「えーと、１０割かな？」

「……そう言っても良いくらいの内容だったわ」

愛子は苦笑いを浮かべながら和真の予想は的中していると言うと優子は和真と言う人物の事が理解できないようで眉間にしわを寄せ、

「１０割？　って、どう言う事？」

「……Ｆクラスの代表者の順番に選択教科。それに結果も」

友香は首を傾げると優子は肩を落として言うと、

「それじゃあ、普通に勝ったって事で良いんだよね？　それなら、どうして、木下さんは納得いかなさそうなの？」

「それは……」

「それはね。Ｃクラスに結城君みたいな人間がいるなら、ぼく達は結城くんを警戒しないといけないわけでしょ。少なくともここまでこの学年をひっかきまわしたＦクラスの坂本くんは成績とは違った頭の良さを持っているわけだし、それを見破った結城くんにも対等の評価は付くわけでしょ。そして、結城くんがいるＣクラスはＦクラスより総合得点は高いわけだし、結城くんがやる気になったら、もしかしたらぼく達も不味いかなって」

清美は優子の様子に何かあったのかと聞くと優子は言いたくなさそうな表情をするが愛子は隠す事なく、和真の評価がＡクラスでは高くなっていると言い、

「それは私達がＡクラスに試召戦争を仕掛ける事を心配してるって事？」

「同盟は継続中だよ」

友香と清美は同盟を続けているから自分達がＡクラスに仕掛ける事はないと言うが、

「それでも中にはいるのよ。特に今回のＦクラスは奇襲や色々な手段を使ってきたわけだし、Ｃクラスも結局はＢクラス相手に奇襲で勝ったから、同盟もあたし達Ａクラスを油断させるためじゃないかって」

「そう言う事なんだよね。実際、ぼくは結城くんがそんな事をするようなタイプじゃないって知ってるし」

「それに関してはあたしも愛子と同じ意見なんだけど」

愛子と優子はクラスの中から出てきたＣクラスを危険視する声に困っているようであり、

「でも、結城君がＡクラスに仕掛ける事は絶対にないわよ。私達も結城君にケンカを売るつもりはないし……結城君にケンカを売るのはクラスをまとめる上で得策じゃないし」

「うん。カズだからね。Ａクラスに試召戦争を仕掛けると言ったら、Ｃクラスの情報をすべてＡクラスにリークしそうだし」

「……情報リークはないでしょ。結城くんの得にならないし」

友香と清美は未だに魂の戻らない和真に視線を向けて言うと優子は２人の言葉を否定するがＣクラスの生徒は今日の和真の様子から間違いなくＡクラスとの同盟中に試召戦争を仕掛けた場合は和真が敵に回ると判断しているようでＣクラス全員で優子にツッコミを入れ、

「な、何なの？」

優子はＣクラス全員からの言葉に意味がわからずに驚きの声をあげる。

第５４問

「そんな事があったんだ」

「……笑い事じゃない」

和真は日曜日の午前中に先日、宏美に約束させられた『ラ・ペディス』での新作クレープを前に試召戦争の話をため息交じりで宏美に話していると宏美はいつも和真にからかわれているせいもあるのか和真の困っている姿を見て楽しそうに笑っていると、

「豚野郎、ずいぶんと良い御身分ですわね」

「……清水、何の用だよ。俺のシフトは午後からなんだ。変ないちゃもんを付かないでくれ」

美春は店を手伝っているのか、自分が働いているのに宏美と店で話をしている和真が気に入らないようでケンカを売ってくると和真は美春に因縁をつけられる事はしてないと言い、

「清水さん、お邪魔してるわね。新作、凄く美味しいわよ」

「ありがとうございます。中林さん」

「……お前、誰だよ」

宏美は和真と美春の様子にくすりと笑った後、美春に新作クレープの感想を言うと美春は和真と話していた時とは異なる笑顔で返事をし、和真は美春の変わりように肩を落とす。

「中林さん、忠告しておきますわ。この豚野郎だけは止めておいた方が良いですわ。無害な顔をして」

「清水さん、割と結城君は有害よ。スケベだし、これで結構、鬼畜だし」

「……なぁ。中林、どうして、俺は休日の貴重な時間を潰してまでわざわざバカにされないといけないんだ？」

しかし、美春は和真の様子など気にする事なく、宏美に和真は彼氏にするのは止めた方が良いと言うと宏美は美春の言葉に乗っ掛かり、和真はコーヒーを飲みながらそんな事を言われる意味がわからないと言った時、

「ここ？」

「そうよ。ここの新作クレープが美味しいって女子の間で評判なのよ」

「はい」

Ｆクラスの『吉井明久』、『姫路瑞希』、『島田美波』の３人が入店してくると、

「……豚野郎、お姉さまとデートですって、許せませんわ。美春の手で八つ裂きにしてやりますわ！！」

「ちょ、ちょっと、清水さん！？」

「……落ち着け。文月（ウチ）の生徒が殺人とか新聞沙汰になると姉さんに迷惑がかかるだろ。だいたい、あれはデートと言うよりは吉井（バカ）がたかられてるだけだろ」

「そんな事は関係ありませんわ！！　美春はあの豚野郎を八つ裂きにすると言う使命があるのです。お姉さまに色目を使う豚野郎はすべて美春の敵です。八つ裂きにして凍結、粉砕してやりますわ！！」

美春は明久を見た瞬間に背後から黒い殺意をまき散らし、明久に飛びかかる勢いで駆け出そうとすると和真は左手で美春の首根っこをつかみ止めるが美春の殺意はさらに膨れ上がって行き、

「……結城君、清水さんをどうするの？」

「一先ずは奥に連れて行って更衣室にでも閉じ込めて置く」

宏美は美春の様子に顔を引きつらせるが和真は気にする事なく美春の首根っこをつかんだまま立ち上がった時、

「……ユウキカズマ、キサマ、ワタシノカワイイマイエンジェルヲドウスルツモリダ」

『ゆ、結城君、マスターが暴走したから逃げて！？』

美春の父親であり、この店の店主が美春と似た殺意をまき散らしながら和真に向かってきており、店員が和真に逃げるように言うが、

「……店長も閉じ込めてきます。後、少し早いけどシフトに入りますね。中林、迷惑をかけた。お詫びに今日の分は奢る」

「あ、ありがとう。私こそ、迷惑をかけたみたいでゴメンね」

『え、えぇ。人手が足りなくなりそうだから、キッチンの方、お願いします』

和真は今度は右手で店長の首根っこをつかむと宏美に謝り、2人を店の奥まで引きずって行く。

第５５問

「カズ、宏美とのデート、楽しかった？」

「……だから、デートじゃないって言ってるだろ」

和真が登校してきたのを見つけて、清美はニヤニヤと笑いながら宏美とのデートの件を聞くが和真はデートと認識していないため、ため息を吐くが、

「なぁ、実際、どうなんだよ。お前と中林って」

「中林さん？　って、ソフトテニス部の？　結城君って、中林さんと仲が良いの？」

「……だから、集まるな」

和真と清美の様子にわらわらといつものメンバーが集まり始め、それに便乗するように友香まで集まってきて和真は肩を落とす。

「俺とあいつで進展する事はないだろ。あいつのタイプって知的なクールな男だぞ」

「カズ、あんた、何で、宏美の好みの男のタイプを知ってるの？」

「実はすでに玉砕済みとか？」

和真は宏美の好みのタイプと自分はタイプが違うと言うがその言葉に清美は何か違和感を覚えたようでニヤニヤと笑い、トオルも清美

に続くが、

「面倒くさいから、もうそれで良い」

「これは何もないな。もっと、慌てるとかきょどるとか演技でも良いからしろよ!!」

「そうだ。面白くないぞ!!　そんなんじゃ世界を狙えないぞ」

「……世界なんか狙わないし、だいたい、何で俺が怒られないといけないんだ?」

和真はすでにこの話題が面倒になっているようであり、和真の対応に一心と平太は叫ぶが和真は眉間にしわを寄せて怒られる理由はないと言うと、

「……中林さんのタイプって思いっきり、結城君、被ってるわよね?」

「そうだけど、カズはクールに見えるけどそうでもないところが多いでしょ。カズも自分を理解してるし、宏美も去年、カズがクールじゃないってところは見てるからね。それより、だからこそ、危険なのよ。一緒にバカをやってたはずなのにちょっとした事で印象が変わるから……」

友香は宏美のタイプは和真と被っていると言うが清美は苦笑いを浮かべた後、くすりと笑い、

「……最初の印象は最悪でも、男の子は直ぐに成長していくからね。そう思わない。代表♪」

「や、山下さん、な、何をいきなり言い出すの!?」

「うん。この反応は自覚ありかな?」

「そ、そんなわけないでしょ!!」

清美は友香の耳元で今の和真はどう見えると聞くと友香は慌てて清美から距離をとり、友香の反応に清美はニヤニヤと笑う。

「山下、代表様、騒いでないで自分の席に戻れよ。俺はゆっくりとしたいんだ。お前らもだ」

「和、冷たい」

「冷たくて結構、俺は眠いんだ。だいたい、へーた、気持ち悪い事をするな」

和真は友香と清美の様子を気にかける事なく、2人を追い払うように手を振ると平太は両手を口元に置き、和真を責めるように言うが和真は平太の様子に眉間にしわを寄せると、

「私は結城君に用があるの。山下さん達とは違うわ」

「代表、和へのデートのお誘いか?　残念だが和は渡さないぞ」

「……わけのわからない事を言ってないで散れ」

友香は和真に用事があったようだが、トオル達男性陣はすでに悪のりを始めており、和真と友香の間に割り込み和真は意味がわからな

いようで大きなため息を吐く。

第５５問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

アンケート結果発表です。和真のお相手は友香です。

和真「代表様ね」

不満ですか？

和真「だって、代表様は小者と付き合ってたんだぞ。なんか趣味が悪い代表様に選ばれると考えると微妙？」

それも違うでしょ。後は投稿キャラを今回で締切ます。発表は登場時に。

投稿キャラデータ

北条（ホウジョウ）　新（アラタ）
性別：男
所属：２－Ｃ
得意教科：数学、物理（１３０～１４０点）、成長後：１８０点程度
苦手教科：古文、英語（８０～９０点）
総合得点：１４８０点、成長後：１５６０点
備考：和真のバイト仲間。和真と同じく『ラ・ペディス』でバイトをしているため、美春とも顔見知りではあるが和真が美春に絡まれているときは生温かい目で見守っている。（かかわり合わないようにしている）
和真が洋子先生や鉄人に捕まってバイトに遅れている間は１人でフロアを回す事も多い。
容姿は細身の長身でぱっと見は貧弱そうだけど筋肉質。（ボクサータイプ？）
性格は特にくせもなく平凡な男の子に見えるが美春に巻き込まれる和真を見捨てるあたり図太い。
召喚獣：二丁拳銃、カウボーイの服
投稿者：リンクさん

尼崎（アマガサキ）棗（ナツメ）
所属　２－Ｃ
性別　女
得意教科：英語（２１３点）、世界史（１８４点）
苦手教科：数学、物理、化学（５０～６０点）
総合科目：１４５３点
備考：容姿に目立つものはないが騒ぎが好きな女の子で面白そうだと判断するとすぐに首を突っ込む。新聞部のエースで、康太には劣

るが強い情報網を持つ。カメラテクもたいしたものでたまに土屋康太が唸るほどのものを撮ることもある。
和真や清美と言ったCクラスの主要メンバーとは1年時に同じクラスだったが和真が苦手であまりグループに接近してこない。
普段からデジカメと小型録音機を懐にしのばせており、スクープを探している。
実は意外と真面目で涙もろい、人情家でもある。
将来は報道関係を目指しており、とくに外国語を熱心に勉強している。そのため、英語と現代社会に伸び代有り。
召喚獣：レザーアーマー、ロングボウ
投稿者：ＧＡＵさん

第５６問（前書き）

投稿キャラクターが登場します。

第５６問

「違うわよ。家庭科の回復試験はどうだったのよ？　私は勉強を見たわけだし、気になるでしょ」

「あぁ。あれか……見ない方が良いぞ」

友香は和真の家庭科の補給試験がどうなったのかと聞くと和真は友香から視線を逸らし、

「これはやっちゃったかな？」

「……和、お前は良い奴だったよ」

「和真、死にフラグだな……ん？　どうかしたか？」

清美は和真の様子に和真の点数が減少したと思ったようで苦笑いを浮かべると一心は悪のりを始めようとした時、いつもとは違った声が聞こえその声の主に視線が集まるとそこには同じクラスの『北条新』が立っており、新は視線が集まる意味がわからないようで首を傾げると、

「新、どうかしたか？」

「ん。これ、店長が昨日の暴走のお詫びだってさ」

「お詫びとか言う前にあのおかしな暴走を止めて欲しいな。もしくは清水がシフトにいる時間帯だけでも時給を上げてくれるとか」

「まったくだ」

和真は新に何の用だと聞き、新は『ラ・ペディス』の名前が入った箱を和真に渡すと2人で苦笑いを浮かべる。

「カズ、北条くんと知り合い？」

「あぁ。バイト仲間」

「なら、何で、今まで教室で和に話しかけなかったんだよ？」

「それは和真の周りに行くと厄介事に巻き込まれそうだったから様子見。現に巻き込まれてたし」

「こう言う奴なんだ」

清美は和真と新が話している姿が不思議なようで首を傾げると和真は新は自分と一緒で『ラ・ペディス』でバイトをしていると言うと平太は2年になってからの新の行動に首を傾げると新は悪気などまったくないようで笑顔でとばっちりはゴメンだと言うと和真は肩を落とし、

「それで、用件はこれだけか？」

「あぁ。後はたいした事じゃないんだけど……吉井がラブレターを貰ったと言う噂が！？」

「ほ、北条くん、それって本当？」

和真は箱を開けながら箱の中身を確認した後、モンブランを取り出

しながら新に聞くと新は和真の天敵である明久がラブレターを貰ったと言う噂があると言うと新の話に興味が湧いたのか1人の女子生徒が新に飛び付き事実を確かめようとするが、

「棗、北条くんの首が絞まってるよ」

「尼崎、暴れるな。モンブランに埃が舞う」

「……結城君、そこじゃなくて北条君を心配するべきじゃないの？」

和真と清美は女子生徒と知り合いのようであり、女子生徒を呼ぶと友香は和真の言葉にため息を吐くと、

「そ、そうだね。わたしったら、スクープの匂いについ」

女子生徒『尼崎棗』は舌を出して反省の色を見せる。

「……棗、それは良いから手を離しなよ。北条くんの顔が蒼くなってるから」

「どうやら、死にフラグは新のだったようだな」

「和、モンブランを食いながら言うな」

しかし、棗の腕は新の首を絞めたままであり、清美は棗の手を新の手から放す様子を和真はモンブランを頬張りながら人事のように言い、

「しかし、バカ相手にラブレターね。代表様と言い、その女と言い、Aクラス代表の霧島と言い、男の趣味が悪いのがそろってるな」

「結城君、いったいどう言うことかしら？」

和真は友香を見ながら言うと友香の額にはくっきりと青筋が浮かぶが、

「あぁ、そうだ。代表様、家庭科のテストなんだけど助かった。代表様のおかげで大部点数を稼げた」

「……そ、そう。それは良かったわね」

「「「なんじゃこりゃ！？」」」

和真は気にする事なく、家庭科の答案用紙を取り出すと点数は３４５点と書かれており、友香は予想以上の点数に顔を引きつらせトオル、一心、平太の３人は和真の解答用紙を見て驚きの声をあげると、

「……カズ、あんたはどうして、無意識に他人のプライドを打ち砕くの？」

「いや、そんなつもりはない。今回は代表様が教えてくれたところが出たからな。元々、家庭科は悪いわけじゃないし、感謝してる。お礼に何か選んでくれ」

「えぇ、いただくわ」

清美は和真を見てため息を吐くが和真はそんなつもりはないと言うと友香に箱からケーキを取ってくれと言う。

第５６問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

投稿キャラを出させていただきました。

和真「選考理由は？」

そうですね。まずは新君は和真は勤労少年とさせていただいているのでバイト仲間は欲しいと思っていました。そこを突かれました。性格も話の内容から紛れ込ませやすそうだったからです。

棗さんは和真や他のメンバーとの関係がしっかりしていることです。それに和真を少し苦手に思っているのも面白そうだったからですかね？

和真「尼崎とは去年も同じクラスなんだよな」

はい。その中で和真を苦手だと思う事がありました。それも考えています。面白くできたらいいなあ。

第57問

「で、北条くん、吉井くんがラブレターを貰ったって言うのは」

「落ち着け、これ以上、首を絞められてたまるか」

棗は和真の補給試験の事より、明久のラブレターの方が気になるようで新につかみかかるように聞くと新は棗の手を外させると、

「北条、ここで吉井の話をするのは和の機嫌が悪くならないか？」

「いや、大丈夫だろ。これはこれで吉井が痛めつけられる流れだし、どうせ、どっちに転んだって吉井を殺すためにFクラスは暴動が起きるんだから知らないより、知ってる方が心構えができるだろ」

「……全然、納得できないんだけどな。いっそ、本当に死んじまわないかな？　いや、ダメだ。そうなると報道陣がきて姉さんの仕事が増える」

トオルが明久のラブレターの話を和真に聞かせるのは危険じゃないかと言うが新はどっちでもあまり変わらないと言うと和真はぶつぶつと黒い殺意（もの）をまき散らしており、

「……私は結城君がいつか、高橋先生のために人を殺しそうな気がするわ」

「それに関しては大丈夫よ。人殺しなんかになったら、洋子先生に迷惑がかかるから」

「山下の方が正しそうだな」

友香は和真の様子に顔を引きつらせて言うと清美とトオルは友香の言葉を否定する。

「それより、棗、どうしたのよ。あんたがカズがいるところに突撃してくるなんて、あんた、カズが苦手でしょ」

「……」

「……尼崎さん、どうして隠れるの？」

清美は棗に和真との相性が悪くなかったかと聞くと棗は明久のラブレター事件で和真の事は二の次になっていたようだが少し冷静になったようで清美の後ろに移動し、友香は首を傾げると、

「いやぁ、わたし、1年生の時に今見たく、周りが見えなくなって突撃して結城君を怒らせてから苦手と言うか」

「あぁ、そんな事もあったな」

棗は苦笑いを浮かべながら和真が苦手だと言うと一心はその時の事を思い出したようで苦笑いを浮かべ、

「結城君を怒らせた？　高橋先生を怒らせたの？」

「……その思考に行きつくあたり、代表様も和に毒されてるな」

「そうね」

友香は和真が怒る理由に1つしか思いつかなかったようで苦笑いを浮かべると平太は友香も和真に毒されてきていると笑うと清美は頷くが、

「尼崎さんの事情はわかったわ。でも、人の前から隠れるのは失礼よ。結城君の怒る理由なんてだいたい、予想が付くんだからもう大丈夫でしょ」

「……代表様、俺はバカにされてる気しかしないんだけど」

友香はため息を吐きながら気をつければどうにかなると言うと和真はため息を吐き、

「別に特におかしな事をしなければ怒んないよ。俺をなんだと思ってるんだ」

「そうだな。だいたい、女子を怒るよりは今は吉井への殺意で和は動いているからな。安全だ」

和真は棗を怒るような事はしないと言うと平太は棗を怒るよりは和真には殺るべき相手がいると冗談交じりで言うが、

「正直、最近はそれが1番、笑えないんだけどな」

「……確かにそうだな」

トオルと一心は和真の行動から冗談で済まなさそうだと苦笑いを浮かべた時、朝のＳＨＲ開始の鐘が鳴り、

「わけのわからない事を言ってないで席に戻れ」

「そうね」

和真と友香は全員に自分の席に戻るように言う。

第５８問

「……始まったな」

「そうね。結城君、抑えてよ」

ＳＨＲが終わると廊下は大騒ぎする声が響き、一心は苦笑いを浮かべると友香は額に青筋が浮かび始めている和真に落ち着くように言うが、

「何を言ってるんだ？　代表様、俺は落ち着いているよ」

「……シャープ、折れたね」

「……折ったな」

和真は落ち着いた声で言うが和真の持っていたシャープペンシルは中心から真っ二つに折れ、和真の様子にトオルと清美は顔を引きつらせると、

「しかし、ラブレターを貰っただけで暴動ってのはどうなんだ？」

「あれ？　北条くん、それって勝ち組の発言っぽくない？」

新はＦクラスの行動に苦笑いを浮かべるがその言葉は棗の興味を引いたようで棗は目を輝かせながら新に飛びかかるように聞く。

「そう言うわけじゃないけど、俺と和真のバイト先ってそれなりに有名店だからな。他校の男は良く見えるってヤツだ。まぁ、俺より

はあっち」

「……うん。確かにバイトの衣装をきっちりときてるカズは見た目は悪くないしね。何より、洋子先生が関わってこないから理性的な感じするし」

「後はウチの店の名物変態父娘を軽くいなすからな」

「……確かに、あの時の和は男でも惚れるかも知れない」

新はバイト先で他校の女子生徒からラブレターを貰った事があると白状すしながらも額に青筋を浮かべている和真を指差すと清美は和真のバイト先での姿を思い出したようで苦笑いを浮かべると新は些細な事で人外化を始める清水父娘の暴走も和真がもてる原因だと言うと平太は大きく頷き、

「あれ？　その時って北条くんって何してるの？」

「何って？　接客、常連客にもなるとあんな暴走でも動じないから」

「……北条くん、図太いって言われた事ない？」

「ん。和真からはよく言われる」

清美は清水父娘が暴走している店の様子を思い出したようでその時の新の事を聞くと新は普通に働いていると答えると清美は新の性格がわかってきたようで眉間にしわを寄せて言うと新は特に気にする事なく答え、

「……結城君が他校の女子からもてるのはわかったけど、その子達

が今の結城君を見たら幻滅するわね」

「だろうな」

友香は新の事より額に青筋だけでは治まらなくなり、背後から禍々しいくらいの怒りのオーラを吹き出し始めた和真の様子に顔を引きつらせると一心は和真から少し距離を取る。

「……」

「カズ、ちょっと、授業が始まるけど、どこに行くつもり？」

和真はゆっくりと席から立ち上がるとその姿に清美は和真がとうとうブチ切れたと思ったようで顔を引きつらせながら和真の行く先を聞くと、

「ちょっと、ゴミ掃除をしてくる」

「そうか。気をつけろよ」

「あぁ」

和真は怒りを通り越したのか爽やかな笑みを浮かべてFクラスをゴミと言い切り、Cクラスの空気が凍りつくなか新だけが動じる事なく和真を見送り、

『こ、こいつ、何だ!?』

『ひ、引け!!　撤退だ!!　我らは異端者の吉井をグロテスクに殺すまでは死ねないのだ!?』

和真が廊下に出て直ぐに廊下からはFクラスの生徒らしい声が途切れ出し、

「……北条君、止めないのね」

「止めるだけ無駄だからな」

友香は顔を引きつらせて新に和真を止めるように言うが新は無駄な事をするつもりはないと言いたげにため息を吐く。

第59問

「……結城、助かるんだが、授業はどうした？」

「気にしないでください。この分はしっかりと補習でも何でも受けますよ」

「そ、そうか。まぁ、お前の普段の態度から考えれば補習もないだろうな」

「そうですか？　それでは西村先生、俺は失礼します」

「あ、あぁ。気をつけて行ってくるんだぞ」

和真は背後に真っ黒なものをまといながら捕まえたFクラスの生徒達を生徒指導室に引き渡すと直ぐにまだ騒ぎを起こしているFクラスを捕まえるために生徒指導室を出て行き、流石の西村教諭も和真の様子に和真の背中を見送る事しかできない。

「アンタのせいで『彼女にしたくない女子ランキング』の3位になってるんだからああっ！！」

「さらばだっ！！」

『吉井明久』はラブレターをクラスメート達から守るために逃走をしているなか、同じクラスである『島田美波』に見つかり、彼女の様子に生命の危険を感じたようで全力で逃げ出そうとするが、

「ゆ、結城君！？」

「……前に言ったよな。他人の迷惑を考えて動けって」

明久は美波から逃げ出そうと振り返った瞬間に和真にぶつかり、床に腰を付くと和真の顔を見上げて顔を引きつらせるが和真は気にする事なく明久の胸倉をつかんで無理やり立ちあがらせると、

「あんた、よくやったわ。さあ、アキ、観念しなさい」

「ちょ、ちょっと、結城君、放して！？　このままじゃ、僕は美波に殺されちゃうよ！？」

「……こい」

美波は和真に明久を引き渡すように言うが和真は美波の言葉を聞くきなどなく、明久を引きずって歩きだそうとする。

「ちょっと、アンタ、アキを渡しなさいよ！！　ウチはアキのせいで『彼女にしたくない女子ランキング』の3位になってるんだから、それなのにあき1人だけ幸せをつかむなんて許せないのよ！！」

「……知るか。そんな事で青筋を立てているから、『彼女にしたくない女子ランキング』とかくだらないものの上位になるんだろ。だいたい、他人のラブレターを破り捨てようとするような奴に彼氏なんかできるかよ。話は終わりだ。さっさとこい。クズ」

「ちょ、ちょっと、放してよ！？　ボクは何もしてないよ！？」

美波は和真が自分の話を聞かずに明久を連れて行こうとする姿に和真の腕をつかむが和真は美波の手を払うと彼女の言葉を斬り捨て明

久の首をつかんだまま進んで行くが、

「ちょっと、あんた、ウチにケンカを売ってるわけ？」

「勘違いするな。ケンカを売ってるのはお前だ。俺はお前にこのクズを引き渡せと脅しをかけられる覚えもない」

美波は和真の態度に和真を睨みつけるが和真には言いがかりでしかないため、彼女の言葉に従うわけはなく、

「ちょっと、結城君！？　ぼ、僕は僕の幸せを妬むクズで最低なクラスメートから逃げないといけないんだ！？　そうしないと僕はグロテスクに殺されちゃうんだよ！！」

「知るか。お前が死のうが俺の知った事じゃ……いや、お前みたいなクズでも学内でウチの生徒に殺されると姉さんの迷惑になるな」

明久は和真に引きずられながら自分はこんなところにいると殺されてしまうと叫ぶと和真は最初は明久がどうなろうと知った事でないと言いながらも洋子に迷惑がかかると考え始め、

「そ、そうだよ。学内で殺人とかは不味いから、僕を助けると思って」

「それとこれとは別だ。お前が逃走の途中で外したサッカーネットや倒した古書保管庫の本棚、カッターが突き刺さって廊下の壁、割れた蛍光灯。やる事は他にもあるんだからな」

明久は和真に自分を逃がして欲しいと言うが和真は明久の言葉を聞きいれる事なく明久を引きずって行く。

第６０問

「何で僕がこんな事を？」

「何で？　誰が見たってお前が当事者だろ。お前らがバカな事をやって壊したんだからな」

和真と明久は被害の１番大きい古書保管庫で散乱した本を片付けていると明久は和真から逃げる事を諦めたようだが自分が壊れた学校の備品の修理をさせられているのが納得が行ってないようであり、ため息を吐くと不機嫌そうな表情の和真が良くそんな事を言えるなと言う。

「だからと言って、僕は被害者なのに僕は僕の幸せを守ろうとしただけなのに……結城君、先にラブレター読んでも良いかな？」

「そんなもの、後に決まってるだろ。だいたい、被害者？　勘違いするなよ。少なくともお前らバカクラス以外から見ればお前も加害者に決まってるだろ。バカ騒ぎをして学園の備品を壊して、それを使う人間から見たらお前もバカクラスも一緒だ。現にお前のせいで俺は本来やらなくても良い。備品の修理をしてるんだからな。くだらない事を言ってないで手を動かせよ」

明久は自分は悪くないと言うが和真はその言葉を斬り捨てると明久に早く作業を続けるように言い、

「でもさ。これだって僕と結城君でやるのはそれこそ違うじゃないか？」

「……本来ならお前らバカクラス全体でやって貰いたいところだけどな。それをやると被害が拡大するだけだろ。後、片づけが嫌ならお前も西村先生のところに行ってこいよ。一応はお前は追いかけられてる方だったから、補習はなしって事で話が付いてるんだ。お前の言う幸せを壊したいって奴らの中で殺意を向けられながら補習を受けたいってなら別だけどな。補習が終わればまた、地獄の追いかけっこだろうがな」

「……さぁ、やろうか。結城君」

明久は散乱した本を見てため息を吐くと和真はそれなら補習室に行って来いと言うと明久は先ほどから自分の命を狙ってきたFクラス生徒を撃退している和真がそばにいる方が安心だと思ったようで作業を再開させる。

「ねえ。これなら召喚獣を使ってやろうよ。僕は観察処分者なんだから、こう言う時にこそ、使わないと誰かヒマそうな先生を!?」

「……お前、ふざけてるのか？　この学園にヒマな教師がいると思ってるのか？」

明久は作業を再開してしばらくすると良い事を思いついたと言いたげに教師を呼んで召喚獣を使おうと言おうとするがその言葉の途中で和真が明久の胸倉をつかみ、

「な、何でだよ。僕は観察処分者なんだから、それくらい」

「観察処分者の役割を履き違えるなよ。観察処分者はあくまで教師や学園の雑用をするのが役割だ。学園や教師の都合で仕事を与えられるって事だ。この件はお前らがバカ騒ぎをした結果であり、お前

らが責任を持ってやらないといけない事だ。それを自分の都合の良いようにとらえるなよ!!　ヒマな教師がいる？　お前はどれだけ教師の仕事を知っている？　勤務時間を終えた後に教師が家に持ち帰った仕事を何時までやってるか知ってるのか!!」

明久は和真が怒っている理由がわからないようであり、その態度はさらに和真の怒りに油を注ぐ事になる。

「だって、それが先生の仕事だろ」

「てめえ」

「結城君、ストップ!!」

明久はそれをやるのが教師の仕事だと言い、その言葉に和真はそれでも手をあげる事は抑えていたのだが明久を殴り飛ばそうとした時、友香が和真の腕をつかみ、

「……古書保管庫の本、大丈夫か？」

「流石にこれはダメになった本もあるんじゃないか？」

「カズ、先生から西村先生から許可貰って手伝いにきたよ」

友香以外にもいつものメンバーに新と棗を追加したCクラスの生徒達が古書保管庫に入ってくる。

第６１問

「和真、少し頭を冷やしてこい。西村先生からこれを預かってるから、購買で飲み物でも買って来い」

「……あぁ。悪い」

「代表、人数が多いから、カズに付いて行って」

「わ、私？　山下さんの方が良くない？　……わかったわ」

新は明久の胸倉から和真の手を離させると購買で買い物をしてくるように言うと和真は少し頭が冷えてきたようで古書保管庫を出て行き、清美は和真の様子を見て友香に付いて行って欲しいと言うと友香は自分よりは清美の方が良いと言うが清美達の表情を見て何かを察したようであり、和真を追いかけて古書保管庫を出て行き、

「……吉井、ずいぶんと勝手な事を言ってくれたよな」

「な、何だよ？　だ、だって、それが先生の仕事だろ」

トオルは和真と明久の話が聞こえていたようであり、去年から和真との付き合いもあるメンバーは明久の言葉にかなり腹を立てているように見え明久は顔を引きつらせながら言い返すと、

「……吉井くん、その言葉、君の家族が先生でも同じ事を言える？　君の家族が家に帰ってから、毎日、日が変わるまで仕事して、朝も同じように早く起きて学校に行く姿を見てたら、同じ事を言える？」

「そ、それは、言えないかも知れないけど、あ、あのさ。結城君の家族に先生がいるの？」

清美は落ち着いた声で明久の家族に先生がいた時、明久は同じ事を言えるかと聞くと明久は和真が怒った意味を察したようで聞き返す。

「……学年主任の洋子先生だ。まぁ、関係で言えば従姉弟だけどな。和は家で洋子先生が夜遅くまで仕事しているのを見て、洋子先生のフォローをしようといろいろやってるわけだしな。これや西村先生の手伝いもその１つだ。先生達だってお前達バカと一緒で各自の生活があるんだ。それを無視して迷惑をかけてそれを仕事だからか？　ずいぶんと勝手な言い草だな」

「事の発端は吉井くんがラブレターを貰った事なのかも知れないけどさ。吉井くんはクラスのみんなにラブレター見るのを邪魔されて文句を言いたいかも知れないけど、結城くんも一緒だよ。まぁ、わたしも吉井くんと一緒で結城くんを怒らせた事のある身としては強く言えないんだけどね」

一心はどこかで明久に言っても無駄だと思っているのか本を片付けながら言い、棗は苦笑いを浮かべると、

「それで棗は反省したでしょ」

「吉井、お前はどうするつもりだ？　また、同じような事をして和を怒らせるなら、俺達はお前達バカクラスを許さない。実際、俺達は何の努力もしてないお前らバカクラスにバカや豚扱いされてはらわた煮えくり返ってる奴らもいるんだからな。この後、試召戦争でＦクラスを叩きのめしたって良いんだ。悪いけど、そっちの自慢の

代表様の軍略程度、和は見破る」

「そ、それは困るよ。これ以上、設備が落としたら、姫路さんの体調が……」

清美は棗は反省しているから和真はその後に彼女を責めるような事を言っていないと言うと平太はFクラスがCクラスを罵倒した事を盾にしてFクラスに攻め込んでも良い言い、明久はこれ以上の設備の劣化はクラスメートの『姫路瑞希』の体調に関わると表情を曇らせる。

「吉井くん、わたしは新聞部なんだけどそれなりにFクラスが試召戦争を仕掛けた理由も調べさせて貰ったから、言わせて貰うけどいきなり試召戦争を仕掛けたけど本当にやるべき事はそれだったの？
君は姫路さんの体調を気にしたのかも知れないけど他のクラスに姫路さんと同じくらいに身体の弱い生徒がいたらどうするの？」

「ど、どう言う事？」

「ここは教育機関なんだ。設備で体調を崩す生徒が出てくるなら、それを改善するのは当然の要求だろ。死人なんか出たらスポンサー収入で成り立ってる試験校は終わりなんだからな」

「……北条くん、ずいぶんと冷めた言い方ね」

棗は明久のやりたい事には共感する部分はあるが前提が間違っていると言うと明久は首を傾げると新は文月学園の弱みを逆手に取れと言い、清美は苦笑いを浮かべるが、

「はっきりと言えばFクラスが取った行動は考えが短絡的、Aクラ

スの木下や工藤から試召戦争の話は聞いたが姫路が言った『Fクラスが好き。人のために頑張れるFクラスが好き』って言葉、お前、その言葉に顔向けできるのか？　少なくともお前達がやってる行動は人のためじゃないだろ。ただ、自分達のために動いてる。それは優しいじゃない。甘いだけだ。そんな人間ばかりだから、お前はラブレター貰っただけで命が狙われる。和だって、洋子先生のために動いてるが面倒だと言いながらも泥をかぶるような事をしてるから、自分達で言うのもなんだが自分達に得はないのに俺達みたいにこんな面倒な事を手伝いにくる人間もいる。お前らはお互いに足を引っ張るだけだろ？」

「トオルが恥ずかしい事を言ってる！？」

「……山下、茶化すな」

トオルは真面目な表情で明久に言うと清美はトオルをからかい、一心は清美の行動にため息を吐き、

「……そうかも知れないね」

「少し考えを改めなよ。だって、吉井くんは『姫路さんのため』に試召戦争を頑張ったんでしょ。少なくとも誰がくれたかわからないラブレターに浮かれてて良いのかな？」

「な、な、何を言ってるの！？」

「わかりやすいな」

「そうね。姫路さん、可愛いしね。守ってあげたくなるし」

「ちょ、ちょっと!?　お、おかしな勘違いをしないで!?」

明久は和真を助けにきたCクラスメンバーとFクラスの違いに小さく頷くと棗は明久をからかうように言い、その言葉に明久は顔を真っ赤にして慌て出し、そんな明久の慌てように古書保管庫には笑い声が響く。

第62問

「……代表様、悪かった」

「謝るならあんな事は止めてよね。吉井くんを感情に任せて殴ったらFクラスと変わらないでしょ。それに結城君が停学にでもなったら、それこそ、高橋先生に迷惑がかかるわよ」

「……そうだな」

和真の隣に友香が並び、2人で購買へ向かって歩いていると和真は友香が止めてくれなければ明久を殴りつけていた事を自覚しているようで友香に謝ると友香は怒っているようで少し語尾を強くして言うと和真も自覚があるため、弁明するような事はしない。

「ねえ。結城君、ちょっと込み入った事を聞いて良いかな？」

「……何だ？」

「いや、まだ、私は結城君と同じクラスになって1週間だし、聞いて良いのかな？　とは思うんだけどね。結城君と高橋先生の中に何があったのかな？　って、結城君の高橋先生第一主義って……」

「異常だって言うんだろ？」

「う、うん」

友香は和真の行動が理解できない部分もあるため、和真に洋子との話を聞こうとすると和真は少し困ったように笑い、

「……ちょっとくらいなら遅れても文句は言われないかな？」

「う、うん。たぶん、結城君の頭が冷えるまで戻って行かない方がよさそうだし」

「それもそうだな。なら、屋上にでも行くか？　廊下で話し込んでたら怒られそうだから」

「そうね」

和真は何故か友香に話す気になったようで友香を屋上に誘うと友香は頷き、２人で屋上に向かって歩き出す。

「……天気良いな。何で、こんな中、授業や設備修理をしなきゃいけないんだ？」

「文句を言わない。学生の本分は勉強でしょ」

和真と友香が屋上のドアを開けると空は青く春の日差しには少し強く、和真は目を細めて学校をサボりたいと言うと友香はため息を吐き、

「わかってるよ。さてと、何から話したら良いかな？　って、まぁ、あまり話す事もないか」

和真は苦笑いを浮かべると友香に話す内容を少し整理し、

「俺が今、姉さんと一緒に住んでるって事は知ってるよな？」

「えぇ。どうしてかは知らないけど」

「2年前、俺の両親が事故で死んだんだ。それから、姉さんは俺の保護者になってる。親戚連中も冷たいもんで誰も食いぶちを増やしたがらなかったからな」

「えっ!?　ちょ、ちょっと待ってよ!?　何で、そんな事をあっさりと話しちゃうのよ?」

「何で?　よくある話だろ?　たまたま、それが俺に起きただけ、それだけだ」

友香に洋子と自分が一緒に住んでいる事を確認した後、自分の両親が事故で死んだと言うと友香は聞かされた事実にどう反応して良いのかわからないようで慌てるが和真は対照的に酷く冷静に見える。

「で、でも」

「普通に考えてみろ。良い年の娘が結婚もしてないのにおかしなこぶを付けた。収入もない生きる術も知らない無駄な食いぶちを抱え込んだんだぞ。親戚からはおかしな事を言うのも出てきた。それでも姉さんは俺に手を伸ばしてくれたんだ」

「……」

「俺に返せるもの何て何もない。だから、本当は進学しないで就職して生きる術を探そうと思った。姉さんにこれ以上の迷惑はかけられない……かけちゃいけないと思ったから、でも、『姉さんは笑って『家族』なんだからそんな事は気にしないで良い。弟がお姉ちゃんに気を使うのは生意気です。甘えなさい』と言ってくれたんだ。

その言葉は俺の中でかけがえのないものだから」

「……そうなんだ」

和真は自分が1人になった時、洋子が手を伸ばしてくれた事で自分にとって大切なものだと言うと友香は和真が洋子を大切に思っている事を理解したようで頷き、

「それじゃあ、高橋先生に迷惑をかけないようにしないといけないわね。結城君、高橋先生の事になると周りが見えなくなるから、そのせいで騒ぎになっても困るからね」

「あぁ。気を付けるよ……そろそろ、帰らないと不味いな」

「そうね。野口君辺りが面倒だとか言ってそうだし」

友香は和真に少し冷静になるように言うと和真は苦笑いを浮かべて買い物を済ませて古書保管庫に戻ろうと言うと友香は和真の言葉に頷くと、

「それじゃあ、行きますか？」

「えぇ……恩人か？　敵わないかな？」

「ん？　代表様、何か言ったか？」

「何も？」

和真は購買に向かって歩き始めると友香は和真の話に何か思った事があるのか小さな声で呟く。

第６３問

「悪いな。遅れた」

「ただいま」

購買で飲み物を買ってきた和真と友香が古書保管庫のドアを開けると、

「……えーと、何があったんだ？」

「さ、さぁ？」

なぜか明久は床に膝を付いて涙を流しており、その前にはＦクラス代表の『坂本雄二』と『姫路瑞希』が立っており、状況について行けない和真と友香は首を傾げる。

「えーと……簡単に言うとね。ラブレターを書いたのは姫路さんで落としちゃったのを拾ってくれた人が気を利かせて吉井くんの靴箱に入れてくれたみたいなんだけど」

「……姫路本人にまだ渡す勇気がなかったわけか？　それで吉井に名乗らずにラブレターを処分したと」

「それで、ラブレターは？」

「あれ」

清美は和真と友香の耳元で今の状況を説明すると和真と友香は全て

を察したようで苦笑いを浮かべてラブレターの結末を聞くと細かく破かれ修復不可能なラブレターだったものが明久の膝を付いた床の前に散らばっており、

「……まぁ、何と言ったら良いかわからないが、吉井、作業続けるぞ。遊んでる時間はないんだ。ここを終わらせたらカッターの刺さった壁の修理もあるからな」

「ちょっと、何か優しい言葉をかけてくれるとか無いの！？」

「いや、それ、俺のせいじゃないし」

和真は明久のダメージより、作業を優先すると明久は血涙を流しながら和真に向かい叫ぶが和真の反応は冷たく、

「姫路さんとバカクラス代表、あんた達は邪魔しにきたのか？　手伝う気がないなら消えてくれ。邪魔でしかないから」

「い、いえ、お手伝いさせていただきます。私のせいですし」

和真は雄二と瑞希に邪魔するなら出て行けと言うと瑞希は古書保管庫の整理を手伝うと言うが、

「それじゃあ、俺はクラスに戻るか。せいぜい、頑張れよ」

雄二は自分には関係ないと言って古書保管庫を出て行こうとする。

「待て。雄二、元をたどれば、雄二が僕がラブレターを貰った事をクラスにばらしたからこんな騒ぎになったんじゃないか！！　責任とって手伝えよ！！」

「は？　知らねえよ。それに良いか。俺は明久、お前の幸せがムカつくんだ」

明久はそんな雄二の態度にラブレターを失った恨みもあるため、雄二に責任を取れと言うが雄二は明久の言葉を鼻で笑って古書保管庫を出て行こうとするが、

「……そうか。この騒ぎの原因はバカクラス代表。お前か？」

「……スイッチ入ったね」

「そうね。姫路さん、危険だから避難しましょうか？」

「え？　え？　何があったんですか？」

明久と雄二のやり取りは目覚めさせてはいけない和真の『シスコン力』を覚醒させる事になり、和真の背後には禍々しいくらいの漆黒の殺意が浮かび上がり、友香と清美は免疫のない瑞希を両脇から抱えて彼女を後ろに下がらせると、

「雄二、かかったな。今の言葉で貴様は終わりだ！！」

「は？　バカ久、お前は何を言ってるんだ！？」

「……バカクラス代表、今から放課後まで西村先生の補習授業か作業を手伝うかを選べ」

明久は口元を緩ませて雄二に向かい言い、雄二は明久の言葉の意味がわからずに明久をバカにした瞬間、和真の右手が雄二の胸倉をつ

かむと雄二の身体は勢いよく壁に押し付けられ、

「それともお前を嫁に渡して嫁に手伝わせるか？　ダメ亭主の責任を取るのは嫁の役目だしな」

「て、手伝わせていただきます」

雄二は和真の様子に今まで生きていて感じた事のない恐怖を感じたようで顔を引きつらせながら作業を手伝うと頷き、

「シスコン最凶説」

「……期待はしたけど雄二って、昔、悪鬼羅刹とか言われて恐れられてたんじゃなかったかな？」

「まぁ、今更だな。あの状態の和は西村先生とも対等に戦いそうだ」

和真と雄二の姿に明久は顔を引きつらせるがＣクラスの生徒達は今更と言いたげに作業を再開して行く。

第６４問

「しかし……」

「どうかしましたか？」

「何々、カズ、今度は姫路さんに魔の手を？」

和真は作業を手伝っている瑞希を見て何か言いたげな表情をすると清美は和真をからかうように笑うが、

「……山下、俺が見境ないみたいに言うな。確かに姫路さんはかわいいけどな。そんなつもりはないよ」

「は、はわわ」

「そう言うなら、もう少し言葉を選んだらどうかしら」

和真は清美の言葉を否定しながらも瑞希にかわいいと言い、瑞希は面と向かって言われる事もあまりないようで顔を真っ赤にすると友香は少し不機嫌そうに和真に言葉を選ぶように言うと、

「それは悪かった。気を付けるよ。代表様」

「あ、あの。それで私に何か御用ですか？」

和真は友香の様子に首を傾げると瑞希は和真に自分に声をかけた理由を聞き返す。

「いや、ラブレターを破くのは姫路さんのものだったから、俺が言うのはおかしいのかも知れないけど、吉井が好きならそのまま読ませるのがベストだったんじゃないのか？」

「カズ、あんた、わかってないわね。乙女心は複雑なのよ」

「そ、そうですよ」

和真は明久へのラブレターで間違いないならそのままにした方が良かったんじゃないかと言うと瑞希と清美は男の和真にはわからないと言いたげに言うが、

「いや、自分が貰ったラブレターを破く女の子に好意って持てるのか？」

「た、確かにそうかもな」

和真は純粋に思った疑問を言うとトオルは苦笑いを浮かべながら頷き、

「あっ！？　そ、それじゃあ、あ、あの」

「それに姫路さんって最後の踏ん切りがつかなくてラブレターを持ち歩いていたんだろ。自分では渡せなさそうだし、むしろ、チャンスだった気がして」

「そう言われると結城君の言う通り、チャンスを潰した気がしなくもないわね」

和真とトオル、２人の男の子の言葉に瑞希は驚きの声を上げると和

真は瑞希の性格が何となく理解出来たようで瑞希は自分のチャンスを潰した気がすると言うと友香は和真の言葉に頷く。

「で、ですけど、あんな形だと」

「いや……あのさ。聞いて良いかわからないんだけど、姫路さんはFクラスが試召戦争を仕掛けた意味って知ってる？」

「は、はい。吉井くんが私の体調を心配してくれて」

瑞希はそれでも事故のような告白は嫌だと言いたげであり、和真はそんな瑞希の様子に彼女との距離を縮めると瑞希にFクラスが試召戦争を仕掛けた理由を聞き、瑞希は顔を真っ赤にして頷くと、

「男から言わせて貰えば、吉井には下心がある。姫路さんと仲良くなりたいとかその先とかな。ラブレターの内容は知らないけど上手く行く確率は高かったと思うんだけどな」

「確かに、しかし、学園1、2を争う知的美少女2人がよりにもよってバカクラス相手かよ」

「いろいろとやる気が失せる結果だ」

和真はそのままラブレターを明久に読んで貰えば上手く行ったと言うが瑞希が明久の事が好きだと言う事に納得がいかなさそうにため息を吐くとトオルは和真の言葉に同意を示し、

「あ、あの。結城君、黒崎君、それって、吉井くんもあの」

「どうかな？　タイミングってのはあると思うからな。少なくとも

今さっきラブレターを破り捨てた相手から告白されて頷けるかはわからん」

「それならこの方法は……『吉井くんが他の女の子からラブレターを貰って浮かれてたのが許せなかったの。吉井くんは私のもの。誰にも渡さない。渡さない。ワタサナイ。ワタサナイ』とか清水さん風に」

「いや、それ、確実に逆効果だろ」

瑞希は明久に告白しても大丈夫だと思ったようだが和真は未だにラブレターを失い打ちひしがれている明久に視線を送った後、今はタイミングが最悪だと言うと棗が楽しそうに美春の人外化を真似して言うが和真は大きく肩を落とす。

第６４問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。
オリジナルファンタジーの小説を投稿しました。『性悪魔術師と白銀の歌い手』と
言う作品です。相変わらず、主人公の性格はよくないですがまあが作る新たな世界を楽しんでいただければ幸いです。

興味がある方は作者のページから探してみてください。

第６５問

「うむ。よくやってくれた。大変だっただろう」

「ホントだよ」

「……吉井、何度も言わせるな。お前は自業自得なんだからな」

作業をすべて終了させると西村教諭が顔を出し、差し入れの飲み物を持ってきてくれると明久は余程、疲れたようで床に腰をおろして疲れたと言うが和真は明久の態度にため息を吐くと、

「まったくだ。吉井、お前がどれほど結城達に迷惑をかけていたかも理解できたな」

「う！？　は、はい」

西村教諭はため息を吐きながら明久にペットボトルを手渡しながら、先日、明久に話した事のある和真に礼を言っておけと言った理由がわかったかと聞き、明久は西村教諭の言葉に珍しく素直に頷き、

「あ、あのさ。結城君、この間は適当に謝って終わらせようとしてごめん。僕は何もわかってなかったよ」

「ん？　あぁ、わかってくれれば良いんだけど……」

「あ、カズが珍しい反応をしている」

明久は和真に向かい頭を下げると和真は明久の行動に少し驚いたよ

うな表情をすると清美は和真をからかうように言う。

「山下、黙ってろ……まぁ、気にするな。あの時は俺にもいろいろあったし、お前に当たったって部分もあるしな。悪かったよ」

「う、うん」

和真は学園長である『藤堂カヲル』から物理干渉のできる召喚獣にするために総合得点をあげろと言われた翌日であったため、自分も冷静になりきれていなかったと自覚もあり、明久に謝ると明久は戸惑ったような表情をすると、

「それに今回の件で吉井だけが原因じゃないって事がよくわかった。と言うか、原因の6から7割は他にあるって気がする」

「……そうだな」

和真は自分がらしくない事を言っているため苦笑いを浮かべた後、原因は雄二にあるんじゃないかと雄二に視線を向けると西村教諭は和真の意見に賛成なのか大きく肩を落とすが、

「あ？　何を言ってるんだ？」

「少なくとも今日の原因はお前だろ」

「は？　知らねぇよ」

雄二は和真に巻き込まれて修理をさせられた事が面白くないようで自分は悪くないと言いたげに言う。

「吉井、言っておく、こいつと縁を切れ。その方が安全な生活が遅れるぞ」

「やっぱり、そう思うかな？　それなら、結城君はどうしたらこのゴリラと縁を切れると思う」

「そうだな。一先ずは嫁に引き渡すか？　人の邪魔をできないくらい徹底的に」

和真は雄二の態度に反省の色が見えないため、明久に雄二と縁を切った方が良いと言うと明久も何度か思った事があるようで和真に意見を求め、和真は表情を変える事なく、Ａクラス代表でもあり、雄二の幼なじみである『霧島翔子』に雄二を任せると言うと、

「おい。何で、翔子の名前が出てくんだよ！？」

「何で？　って、Ａクラスとの試召戦争でそう決まったんだろ。ずいぶんと完敗だったみたいじゃないか。３連勝の勝ちを演出して４戦目で負け決定。とか無様な事をした代表様。それどころか大将戦でも完敗も良いところだったしな。アドバイスする必要もなかったな」

「そうそう、坂本くん、今度、新聞部で試召戦争をきっかけに付き合い始めたカップルを特集しようと思うんだけど、２学年最初のカップルとして取材に行くからよろしくね」

雄二は和真を怒鳴りつけるが和真はＡクラスの試召戦争で決まった事だろと言うと棗が雄二に更なる追い討ちをかけ、

「止めろ！？　お前らは俺に何の恨みがある！？」

「いや、普通に考えて俺達はお前らにバカ扱いされてるんだ。恨みも辛みもだいぶ溜まってるぞ」

雄二は自分が不利になっている事に声を上げるが和真は雄二の言葉を斬り捨てる。

「姫路さん、秀吉がお姉さんから雄二の作戦を見破った人がCクラスにいるって言ってたけど、あれって結城君かな？」

「そ、そうじゃないでしょうか。でも、試召戦争で体力テストなんて」

「木下さん、運動神経も良かったしね」

明久は瑞希に雄二が考えた試召戦争の作戦を見破ったのは和真じゃないかと聞くとAクラスは和真のアドバイス通りに瑞希を倒しており、瑞希は力になれなかった事に肩を落とし、

「自分を責めない。それに吉井くん、今は姫路さんをフォローするところよ」

「そうそう。そんなのだから、『嫉妬されて』ラブレターを破かれる事になるんだよ」

明久と瑞希の様子に友香と清美は2人をからかうように言うと、

「な、何を言ってるんですか！？　友香ちゃんも清美ちゃんも！？」

「何か、姫路さん、小山さんと山下さんと仲良くなったね」

瑞希は慌てて友香と清美に言うが明久は2人の言葉の意味を全く理解しておらず、

「……姫路さん、大変ね」

「そうだね」

友香と清美は明久を見て大きく肩を落とす。

第６６問

和真は単体教科の補給試験を続けており、目標であった２５００点を超えた日の昼休みに学園長室に呼び出されてカヲルの前に立っている。

「やればできるじゃないか。まったく、できないってのはやりたくないだけじゃないか」

「……そうですね」

カヲルは和真の点数に少しだけ満足そうに笑うがその言葉にはどこかとげがあり、言われた和真は面白くなさそうな表情をするが、

「それじゃあ、今日の放課後は調整に入るから、帰るんじゃないよ」

「てめえ、ばばあ！！　いい加減にしろよ！！　俺はあくまでも手伝いと言う事でここにいるんだ！！　俺の予定を勝手に決めんな！！」

「……結城、少しは落ち着け」

「何だい？　予定があるって言うのかい？」

カヲルは和真の召喚獣の調整をするからと和真の予定を聞く事なく、放課後に作業を行うと言うと和真はカヲルの態度がかなり頭にきているようでカヲルを怒鳴りつけると同行していた西村教諭が和真を抑えつけながら落ち着くように言うとカヲルは和真と西村教諭の様子にそこで初めて和真の予定を聞く気になったようで和真に予定の

内容を話せと言う。

「バイトが入っているんですよ」

「バイト？　何だい。デートとかじゃないのかい？　悲しいね」

「ばばあ！！　ぶち殺！？」

「……まったく、少し冷静になれんのか？」

和真は西村教諭に取り押さえられて少し冷静になったようで今日はバイトの予定が入っている事を告げるとカヲルは和真をバカにするように小さくため息を吐き、その態度が和真の怒りにさらに火を点けるが西村教諭の拳骨が和真の頭に振り下ろされ和真は頭を押さえて床をのたうちまわり、

「学園長、結城の言う事ももっともです。ただでさえ、結城は毎日のように補給試験を行うためにバイトを終えた後も家に帰って遅くまで自習をしていたのです。もう少し、結城の意見も聞くべきだと思います。結城の召喚獣を教師と同じ仕様にするのはあくまでも学園の都合であって、結城本人には得になるような事でもないのですから」

「……そうさね。しかし、西村先生、あたしが言う事じゃ無いかも知れないけど、やり過ぎじゃないかね？」

西村教諭は床をのたうちまわっている和真の事を気にする事なく、カヲルにもう少し和真の意見を聞いて欲しいと言うがカヲルは西村教諭の言葉の割に扱いの悪い和真をかわいそうなものでも見るような視線で見て頷くと、

「結城はこれくらいしても問題ありません。頑丈さで言えば、ウチのクラスのバカどもと大差ありませんので」

「そうかい。それじゃあ、結城和真、バイトの休みの日を教えな。調整はその日の放課後にしてやるさね」

「……それじゃあ、明日の放課後でお願いします」

和真に1撃を加えた西村教諭は和真相手ならこれくらいは問題ないと言い切り、カヲルは苦笑いを浮かべながら和真の予定を聞くと和真はまだ頭が痛むようで頭を押さえながら明日の放課後にして欲しいと言い、

「わかったよ。あんたの予定に合わせてやったんだ。時間に遅れるんじゃないよ」

「わかりました。それでは失礼します」

カヲルもそれなりに忙しいようで時間の調節が必要なのか少し考えるような素振りをした後に和真に遅れるなと言うと和真は言いたい事はあるが言っても無駄と判断している部分もあるようで頭を下げて学園長室を出て行く。

第67問

「カズ、お帰り」

「……だから、どうして、俺の席を囲んでるんだ？」

和真が教室に戻ると和真の席はいつものメンバーで囲まれており、和真は頭を抑えるが、

「結城君、どうだったの？」

「……なぜ、吉井と姫路までいるんだ？」

なぜか、和真の席を囲んでいるメンバーには明久と瑞希も紛れ込んでおり、和真は大きなため息を吐くと、

「……このクラスが1番、安全なんだよ」

「和真がFクラスをいろんな意味でぶちのめしだろ。それで吉井が追われる羽目になってるんだと」

「あの後、結城くんが事ある事に坂本くんを霧島さんに引き渡すから、それの嫌がらせを吉井くんにしてるんだって」

明久は和真から視線を逸らして言うと新と棗が原因はこの間の明久のラブレター事件だと言い、

「……いや、俺、関係ないだろ。元々、坂本が勝手に墓穴掘って勝手に墓穴に落ちて勝手に墓穴に生き埋めになっただけだろ。逆恨み

も良いところだ」

「……その通りなのよね。でも」

「……それがFクラスなんだよ」

和真は原因は雄二にあると言うが友香は眉間にしわを寄せると明久は力なく笑う。

「……予想以上のバカクラスだな」

「……うん。何か、ごめん」

和真はFクラスのバカさ加減に大きなため息を吐くと明久は和真から目を逸らして謝り、

「まぁ、とりあえずはここに居れば設備が壊れないならそれで良い。楽だから」

「結局はそこに落ち着くのよね」

和真は明久が設備を壊してまで逃げ回る事を選択しなかった事を評価したようで席に座って弁当箱を取り出すと和真の様子に清美は苦笑いを浮かべ、

「当然だ。お前らだって、また、あの片付けをしたいのか？」

「いや、遠慮したいけど」

「そうですね」

和真はこの間の設備の修理がかなり大変だったため、また同じ事をしたいかと聞くと友香と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それで、吉井……なぜ、俺の弁当をそんな目で見てるんだ？」

「い、いや、結城君のお弁当、美味しそうだと思って」

「吉井くん、違うよ。カズのお弁当は美味しそうじゃなくて美味しいんだよ」

和真はカヲルとの話し合いで時間をとってしまったため、急いで昼食を食べようとすると明久が自分の弁当を覗いている事に気づき、明久に声をかけると明久は気まずそうに目を逸らし、清美は明久の言葉に和真の料理の腕は確かだと言うと、

「そ、そうなんだ」

「……ホントよ。はっきり言って自信なくすわ」

「確かにね。洋子先生のために作っているから栄養面もカロリー計算も問題なし……結城くん、調理師免許や栄養士の資格も取れるよね」

「シスコンの鏡だな」

明久は物欲しそうに和真の弁当を見て頷き、友香は肩を落とすと棗は和真なら調理師や栄養士の資格も取れそうだと言い、トオルはうんうんと頷きながら和真がシスコンだと言う事を再確認しているようであり、

「……どうして、俺が責められる流れなんだ？」

「えーと、わかりません」

「まぁ、こいつらに言っても無駄だな。吉井、お前は何故、そんなに俺の弁当を見つめる。飯食ったんじゃないのかよ？」

「た、食べたよ。ソルトウォーターを」

和真はため息を吐くと瑞希は和真の様子に苦笑いを浮かべると和真はいつもの事だと割り切ったようで弁当の続きを食べようとするが明久の視線が気になるため、明久に食いにくいと言うと明久は昼食を食べたと言うがその内容はおかしく、

「……それは食べたとは言わないだろ」

「結城くん、吉井くんがお昼ご飯を食べられないのは有名な話だよ」

「……」

和真は肩を落として明久の食生活がおかしいと言うと棗は明久の食生活がおかしいのは有名な話だと笑う。

第６８問

「は？　昼飯が食べられない？　……あまりにバカだから、両親に虐待でも受けてるのか？」

「……確かに、吉井のバカさならそれくらいしても問題なさそうだ」

「……それはスクープの匂いだね」

和真は棗から聞いた話に首を傾げながらも和真は１つの推測をはじき出し、トオルと棗は和真の意見に頷くと、

「違うからね！？　虐待なんか受けてないからね！？」

「なら、何で、昼飯も食えないんだよ？」

「そ、それは僕は１人暮らしをしてるんだけど……仕送りが少ないんだよ」

明久は虐待と言う事実はないと声を上げると和真は昼食を食べられないような状況はあまり考えられないようで純粋な疑問をぶつけると明久は１人暮らしをしているのだが仕送りが少ないため、昼食に回せないと言うが、

「嘘だな」

「嘘ね」

「な、何で！？　どうして疑うんだよ」

和真と友香は一言で明久の言葉を斬り捨て、明久は驚きの声を上げて疑われる理由がわからないと言う。

「いや、普通に考えろ。いくら仕送りが少ないと言ったって昼飯は食うだろ。むしろ、抜かすなら朝だろ。それなのに昼飯を抜いてくるなんて何かあるに決まってるだろ」

「そうね。それに本当に仕送りが少ないならご両親に話をするべきでしょ」

しかし、和真と友香は常識的にあり得ないと明久の言葉を斬り捨てると、

「そ、それは……」

「……やっぱり、他に何かあるんじゃない」

「それで、吉井くんがお昼を抜いてる理由は？」

明久は目を泳がせ、友香はため息を吐くと清美は何か面白い事があると思ったようで明久に聞く。

「そ、それは……世の中には僕を誘惑するものが多すぎるんだよ」

「……用は無駄使いして食費に回す金がないと……バカすぎる」

「……呆れてものも言えないわ」

明久は目を泳がせたまま言葉を濁らせると和真は明久が無駄使いを

している気づき、眉間にしわを寄せると友香も同じ意見のようで呆れたように肩を落とすと、

「だ、だって、仕方ないじゃないか！！　趣味にはお金がかかるんだよ」

「趣味にお金がかかるってのは賛成なんだけどね。私もこれに大部、お金をかけてるし」

「……いや、何を趣味にしてるかはわからないけど、まずは何をやるにも身体が資本だろ。飯くらいは食えよ」

明久は自分は悪くないと言いたげに言うと棗は愛用のデジカメを手に明久の意見には賛成できると言うが和真はあり得ないと言い、

「仮に趣味に金がかかるって言うなら、他の出費を抑えるべきだろ。今、光熱費ってどれくらいだよ。１人暮らしなら無駄な事をしてるんじゃないのか？」

「そ、それは……」

「吉井くん、カズは主夫だから、節約術は相談した方が良いよ」

和真は明久に無駄な出費を抑える事を進めるが明久の反応は悪く、清美は明久が和真の言う事を信じられないせいだと思ったようで和真に節約術を聞くのは有効な手段だと言うが、

「……ガスはこの間から止められてるから節約はする必要はないよ」

「よ、吉井くん、それってどう言う事ですか？」

明久の言葉は話を聞いていた人間は誰1人も予想しておらず、瑞希は顔を引きつらせて明久に聞き返すが和真達はどう反応して良いかわからないようである。

第69問

「……とりあえず、要点をまとめると仕送りはマンガやゲームに使って食費や公共料金に回す余裕はないと？」

「う、うん」

和真達Cクラスのメンバーは明久の仕送りの使い方を1度では信じられなかったようで3度、確認すると明久はすでにいろいろと申し訳なくなってきているようで身体を小さくして言うと、

「……悪い。あまりの事にどう反応して良いかわからない」

「そうね」

和真は明久の常識から大幅にずれている明久の様子にため息を吐くとCクラスの生徒は大きく頷き、

「吉井、お前、生活を改めろ。そのままだといつか死ぬぞ。生活費まで削ってそれで入院や通院、最悪、死んだら、ゲームもマンガもないだろ」

「だ、だけど」

「いや、そこで悩む理由がわからない。俺はゲームもやらないし、マンガも読まないから！？」

「結城君、君は何を生きがいに生きてるんだよ！！」

和真は明久に生活態度を改めるように言うが明久は難色を示し、和真は明久がそこまでゲームやマンガに命をかける理由がわからないと言った時、明久は和真に向かい吠え、

「あ？　突然なんだ？」

「この年まで生きていてゲームもやらない、マンガも読まない。君は絶対に人生を損している！！　君も生活を改めるべきだ！！」

和真はいきなりの明久の様子に少し驚いたような表情で聞き返すと明久にも譲れないものがあるようで和真にも生活を改めるべきだと言うとゲームやマンガの素晴らしさを和真に向かい話し始める。

「……これは俺が怒られる流れなのか？」

「……いや、違うと思う」

和真は明久が熱く語っているが意味がわからないようで眉間にしわを寄せると新は苦笑いを浮かべる隣りで、

「姫路さん、チャンスよ。吉井くんは食費にお金を回す余裕がない。ここは胃袋をつかむべきよ。毎日、手作りお弁当攻撃とかしなよ」

「やっぱり、そうでしょうか？」

「山下さん、流石に毎日は無理でしょ。材料費だってバカにならないし、でも、毎日は無理でもそう言うのは有効な手かもね」

友香と清美は瑞希に手作り弁当で明久を落としに行くようにアドバイスをしており、

「よ、吉井くん」

「何？　姫路さん？」

瑞希は２人から背中を押されたせいもあるのか勇気を出して明久を呼び、明久が瑞希の方を振り向くと、

「わ、私が吉井くんのお弁当を『毎日』作ってきます」

「へぇ、良かったじゃないか。吉井？」

「ひ、姫路さん、そ、そんなの悪いよ！！　僕の事は気にしなくても良いから！！」

瑞希は明久の弁当を毎日作ってくると言い、和真は明久を見てニヤニヤと笑おうとするがなぜか明久の顔は一気に血の気が引いて行き、全力で瑞希の弁当の提案を遠慮し始め、

「……代表様、山下、吉井のあの反応を見ると姫路の料理は不味いと思うんだけど」

「……うん。そんな感じがするね」

「な、なんか意外ね。姫路さんって料理とか女の子らしい事って似合いそうな気がするのに」

和真は明久の様子に瑞希の料理の腕が悪い事を察して友香と清美に話を振ると２人は和真と同じ事を思ったようであり、苦笑いを浮かべ、

「だ、大丈夫だよ。姫路さん、僕の事は気にしなくて良いから！！
それに結城君の言う通りに生活を改めようとも思っているから！
！」

「……撤回する。不味いじゃなく生死に関わりそうだ」

明久は瑞希の料理に余程の恐怖があるのか土下座をして生活を改める事を約束し、明久の行動に瑞希以外の人間が彼女の料理の酷さのレベルを察したようで顔を引きつらせる。

第７０問

「……どうしよう。一先ずは来週、買う予定だったゲーム代を」

「……ゲーム１つで血涙を流すなよ」

明久は一先ずは自分の命を優先したようであり、なけなしのゲーム代を食費に回すと言うと一心は呆れたようなため息を吐き、

「吉井、節約するなら自炊の方が良いと思うけど料理はできるのか？」

「う、うん。料理は割と得意だよ。昔はよくやってたし、今は時間がないからやってないけど」

「へぇ、意外」

和真は流石にこれ以上、明久を責めるのは良心が痛むのか明久の生活改善に協力しようとしており、料理ができるかと聞くと明久は料理は得意と答え、清美は意外そうな表情をすると、

「だって、料理は家の中で１番立場の弱い人間がするものでしょ？」

「……」

明久は首を傾げながら吉井家の方針なのか料理ができるようになった理由を話すが和真を含めた誰１人として明久の言葉の意味がわからずに顔を引きつらせ、

「……吉井がバカなのは吉井家の教育方針にある気がするんだ」

「……結城君、はっきりと言わない」

和真は思った事を口に出すと友香は和真の言葉にため息を吐き、

「え？　な、何で、みんなは僕をそんなかわいそうな人を見るような優しい目で見るの？」

「吉井くん、君はそんな事を気にしなくて良いんだよ。純粋なままでいればきっと良い事があるよ。そんな君が好きだって言ってくれる女の子が絶対にいるから」

「なるほど、吉井がゲームやマンガに走ったのは1人暮らしになって自由になった反動か」

和真と友香の意見に全員が納得したようで明久を優しい眼で見守るように言うと明久は自分の家族が世間一般からずれている事は理解できていないようであり、首を傾げると棗は明久に優しい言葉をかけ、新は大きなため息を吐く。

「それより、吉井、ゲームを諦めるとして仕送りまで金は足りるのか？　自炊をするとしても公共料金を払えなければ料理もできないから結局は無駄な出費になるだろ？」

「う……」

「そうね。そうなるとバイトとか？　でも即日払いって最近はあるの？」

「吉井くん、やっぱり、私が」

「だ、大丈夫だから!?　姫路さんは心配しなくて良いから!?」

和真は明久に仕送りまで手持ちのお金でどうにかなるかと聞くと明久は困ったような表情をし、友香は明久の生活費をどう稼ぐかを考え始めると瑞希は諦めていなかったようで再度、明久のお弁当作りに立候補するが明久は全力で遠慮し、

「即日払いか？　和真、俺とお前が口添えすれば何とかなるんじゃないか？」

「そうだな。今日は2人ともバイトだし、店長に掛け合ってみるか？」

明久の様子に和真と新は自分達がバイトをしている清水美春の実家でもある『ラ・ペディス』で明久を短期で雇えないかと言うと、

「あ、あのさ。結城君も北条君もみんなもどうしてそんなに親身になってくれるの？」

「あ？　どうしてって、普通だろ？」

「あぁ。別におかしな事をやってるつもりはないぞ」

明久は和真達が明久の事を真剣に考えてくれている事にどうしたら良いのかわからないようで戸惑ったような表情をするが和真と新は別に特別な事をしているつもりはないと言い、

「そ、そうなのかな？」

「吉井、言って置くぞ。Fクラスと一緒にするなよ。少なくともあいつらは世間一般的な常識から外れてるからな」

「まったくね」

明久は居心地が悪そうに苦笑いを浮かべるがトオルはFクラスがおかしいと言い切ると清美は苦笑いを浮かべ、

「それで、吉井、どうする？　バイトのあてがないなら」

「うん。お願いできるかな」

和真は明久にバイトの件を確認すると明久は頷く。

第７１問

「吉井、行く……酷いな」

「今まで知りあいもいないから、Ｆの教室には来なかったけど、これは酷い」

和真と新が明久を迎えにＦクラスの教室のドアを開けると２人はＦクラスの設備状況を見て顔を引きつらせると、

「結城君、北条君、座って待っててよ。すぐに行くから」

「ん。明久、どこに行くつもりなのじゃ？」

「うん。ちょっとね」

明久は２人に気づき、少し待っていて欲しいと言うと優子にそっくりな男子生徒の制服を着た生徒が明久に声をかけ、明久は少し頬を染め、

「……新、あれは性別『男』で合っているんだよな？」

「和真、知らないのか。この学園は男子と女子、秀吉の３つの性別があるんだぞ」

「……わかった。気にしない事にしておく」

和真は明久と話をしている相手が優子の双子の『弟』である『木下秀吉』だと気づいたようで明久の反応に眉間にしわを寄せるが新は

気にする事はなく、和真は自分の理解できない事から目を逸らす。

「ゴメン。待った」

「いや。それじゃあ、行くか？」

明久が帰る準備を終えて和真と新のそばまで駆け寄ると3人は教室を出ようとした時、

「あ！？　あんた、この間の！！　アキをどこに連れて行くつもりよ！！」

「和真、知り合いか？」

「ん？　まったく関係ない」

先日の明久のラブレター事件で明久を追いかけ回していた『島田美波』が和真を見つけて威嚇するように吠えるが和真は美波の相手をする気はなく、教室を出て行き、

「えーと？」

「吉井、行くぞ。約束の時間に遅れる」

「ごめん。美波、僕達急ぐから」

明久は美波の様子に苦笑いを浮かべるが新も和真に続くように教室を出て行き、明久は美波に謝った後、２人を追いかけて教室を出て行こうとすると、

「吉井くん、結城くん、北条くん、待ってください」

「ん？　姫路？　どうかしたか？」

瑞希が3人の名前を呼び、瑞希の声が聞こえたため、和真は教室を覗き込む。

「あ、あの。私もご一緒してもよろしいでしょうか？」

「ご一緒？　姫路はバイトする必要あるのか？」

「そ、それは」

瑞希は明久と一緒にいる時間が欲しいのか和真と新に自分もバイトの口利きをして欲しそうであり、新はそんな彼女の様子に少しだけ意地悪をすると瑞希の顔を耳まで赤く染まりはじめ、

「新、からかうな。まぁ、吉井の家庭状況は説明してあるから本人のやる気次第って事になってるけど、姫路は数日だとしてもやるなら親に許可を貰えよ」

「はい。絶対に説得します！！」

和真は瑞希が何を考えているのか理解しているようで新をいさめると瑞希に両親は自分で説得するように言い、瑞希は大きく頷くと、

「姫路さん、何か欲しいものがあるの？」

「よ、吉井くん！？　そ、そうなんです。あ、あの。今月、少しお小遣いが厳しくて」

「……鈍いな」

「そうだな」

明久は瑞希がどうしてバイトをやりたいかまったくわかっていないようで首を傾げ、瑞希は顔を真っ赤にしたまま慌てて明久にバイトがしたい本当の理由を隠しながら言い訳をしており、和真と新が２人の様子にため息を吐いた時、

「あ、あんた達、どうして、ウチを無視するのよ！！」

「し、島田、いきなり、声を張り上げるでない。驚くであろう」

美波は自分が無視されている事に声を上げ、秀吉は火の付いた美波の様子に美波に落ち着くように言う。

第７１問（後書き）

どうも作者です。

今更ですが……これって面白いんですかね？

バカテスって明久がひどい目に遭うのが面白いと思っている中で和真達Ｃクラスの常識的な行動。

たまに書いててこの方向は合っているのかと思います。

まあ、原作に沿える人間でないのでどうしようもありませんが。（苦笑）

後はお気に入り登録が４００件を超えました登録してくれた皆様ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるようにがんばりますので引き続きよろしくお願いします。

第72問

「ん。吉井、そろそろ行かないと不味いな」

「ホント？」

「……お主達は完全に島田は無視なのじゃのう」

美波の様子を気にする事なく、和真は時間を確認すると明久に急げと言い、和真と新は先に出て行こうとする姿に秀吉はため息を吐くと、

「よくわからん人間に因縁をつけられるほどヒマじゃない。それも自分が他人に迷惑をかけているのに自覚もないような迷惑な奴らにはな」

「まったくだ」

和真と新は美波だけでなく、秀吉にも話しかけるなと言いたげであり、

「あ、明久、なぜ、ワシはこの2人にこのように冷たくされるのじゃろうか？」

「そ、それは」

「吉井、行くぞ。本当に時間がないんだ」

「う、うん。秀吉、明日、説明するから、じゃあね」

秀吉は初見の和真と新にここまで冷たくされる意味がわからないようで首を傾げると明久は2人を含めたCクラスの言い分も聞いているため、少し困ったように笑うと和真は時間がないと言い、明久は秀吉に謝ると4人で教室を出て行こうとするが、

「あんた、この間から何なのよ!!　ウチに文句でもあるの!!」

「み、美波ちゃん!?」

美波は先日からの和真の態度に腹を立てているようで和真を怒鳴りつけて彼の胸倉をつかむ。

「……この間も今日も言ったが、何で関係ないお前に俺が命令されないといけない」

「な、何でって、あんたが悪いんだから、当然でしょ!!」

「……話も通じないのか、F(バカ)はみんなこんなのばっかりかよ。嫌になるな」

和真は美波の態度に呆れたようなため息を吐くが彼女は本当に自分が悪いと思っていないようであり、和真は彼女の言葉を聞いて美波だけではなく、教室に残っているFクラスの生徒全員に聞こえるように言うと、

「ゆ、結城君、い、いきなり、何を言い出すのさ」

「何?　当然の事を言ってるだろ」

明久は和真の言葉に騒ぎが拡大すると思ったようで和真を止めようとするが和真は場を収める気はなく、

「他人を責める事しか知らない、人の気持ちを考える事の知らない自分本位のバカ。そんな人間に何で俺が因縁を付けられなきゃいけない？　この間、お前に従う義理はない事は話しただろ。こっちは吉井との間で約束をしているから迎えにきてるんだ。それを関係ないくせに因縁を付けられているんだ。それに『ちょっと、アンタ、アキを渡しなさいよ！！　ウチはアキのせいで彼女にしたくない女子ランキングの3位になってるんだから、それなのにアキ1人だけ幸せをつかむなんて許せないのよ！！』だったか？　こんな事を平然と言う、人の気持ちを考えない奴に話す事なんかあると思うか？」

「あ、あんただってウチの気持ちを考えてないでしょ！！　それなら、あんたこそ、ウチに謝りなさいよ！！」

「何度も言わせるな。俺はお前にわけのわからない因縁を付けられて文句を言われてるんだ。そんな人間と仲良くできる人間はよっぽどのバカだ。言って置くぞ。吉井がお前達のくだらない嫉妬で壊した物をこれを壊したのは吉井だけじゃなく、お前らも同罪だ。それも理解してないだろ。それを関係ないのに片付けた人間にお前らはわびの1つでも入れたか？　そんな常識も知らない人間に俺が謝る義理も義務もない」

「まぁな。少なくとも吉井と姫路は自分達が迷惑をかけた事は理解して謝ったのに未だに自分は悪くないって言っているバカがいる事が信じられない」

和真は美波には話す事はないと言うと美波は和真もやっている事は変わらないと言うが和真には先に因縁を付けてきたのは美波なのだ

から従うつもりも謝るつもりもなく、新は和真の言葉に頷くと、

「行くぞ。時間もあるのにこんな言葉も通じないバカの相手をして時間に遅れたら、印象が悪くなるのは吉井だ」

「吉井、姫路、行くぞ。時間をかけても無駄だ」

「で、でも、結城君、北条君」

「因縁だけ吹っ掛けて話し合いをする気もないんだ。知らん」

和真と新は明久と瑞希に行くぞと言うと2人は美波の事も心配しているようであり、どうしたら良いかわからないようであるが、和真と新は歩きはじめ、

「ゴメン。美波、時間がないから僕と姫路さんも行くね」

「あ、あの。美波ちゃん、私と吉井くんが2人と話をしてみますから」

明久と瑞希は和真達Cクラスの言い分も聞いているためか美波にも理解して欲しい部分もあるため、美波に声をかけると2人の後を追いかけて行く。

第７３問

「あ、あのさ。結城君」

「言っておくぞ。俺はあの煩い女と木下に謝る事はない」

『ラ・ペディス』に向かう途中で明久は先ほどのＦクラスでの様子に言いたい事があるようだが和真は美波と秀吉の事以外なら聞いてやると言うと、

「あ、あの。そんな事を言わないでください。美波ちゃんも木下くんもそれにＦクラスのみんなもとても優しくて良い人達なんですから」

「……姫路、悪いがその考えは捨てろ。名前も知らない相手を怒鳴り付ける奴も、作戦だとしても人をバカにした後に謝罪にもこないような奴は良い人とは言わない。俺達はＦクラスの被害者だと言う事は前に話しただろ？」

「あう」

「そうだけど……」

瑞希はそれでも美波も秀吉も友達のため、和真や新にもわかって欲しいと言いたげに言うが和真はＦクラスの自分勝手な態度に腹を立てているようで瑞希の言葉を否定すると明久と瑞希は和真を含めたＣクラスの人間から言われた事が正論だと理解出来るようでバツが悪そうな表情をする。

「Fクラスは自分勝手すぎるんだよ。自分本位で他人の事を考えない。その上、努力だってしないクセに文句だけは人一倍に言って他人を責める。吉井、お前は俺があいつにからまれるきっかけがあのラブレター事件だとして、俺はあの煩い女に怒鳴られる理由はあったか？」

「そ、それは」

「元々、自分達の勝手な都合で騒ぎを大きくしたわけだろ。俺はその原因としてお前を捕まえて壊した設備の修理をさせた。俺の理由は正当だ。あいつはどうだ？　本来、お前がラブレターを貰おうがあいつには関係ないだろ。お前のせいで彼女にしたくない女子ランキングが上がった？　違うだろ。いくら容姿がよかろうが少なくとも名前も知らない相手を怒鳴りつけるような礼儀知らずを好きになるようなバカはいない。お前が何かしたのかも知れないが元々の原因はあいつにあるんだ。それをお前に押し付けているだけだ。それをわかろうとしないで俺を責めるのは筋違いだろ。言っておくぞ。仮に吉井や姫路があいつに俺に謝った方が良いと言ってもあいつは絶対に謝らない。自分が悪いと思っていないんだからな。木下も一緒だ」

和真はFクラスの教室に顔を出した事でFクラスの態度にかなり腹を立てているようであり、自分が美波や秀吉に謝る理由がない事を話すと、

「そ、そんな事はないよ。秀吉はCクラスに行く時に気分が乗らないって言ってたし」

「じゃあ、聞いて良いか？　木下はCクラスから出て行った後はどんな様子だった？　俺が思うに木下さんを演じきった事で満足そう

にしていただけだろ」

「た、確かに」

「普通なら、そこで罪悪感が生まれるんだよ。他人を騙した事にな。だけど、木下はそうは思わなかった。演劇部だから、自分の演技に満足した？　仮にそうだとしても俺達は木下の演技を観に行った観客じゃない。１人の考えを持った人なんだ。それをだましてバカにしておいて、その後に責任は持たない。仮に木下の演技が素晴らしいものだとしても俺は自己満足で人の心を知ろうとも考えようともしない木下の演技では心は動かないし、そんな演技をする人間を信じる気はない」

明久は秀吉にだけでも謝って欲しいと言うが和真は今日まで謝りにもこない秀吉の様子から彼がＣクラスから出て行った時の満足げな表情を思い浮かべたようで唾を吐き捨てるように言う。

「Ｆ（バカ）クラスは基本的に人の善意、良心ってものが欠落してるんだよ。なら、相手をする上でこっちがとる行動も一緒だ。あいつらを人として扱わない。同じ事をやっているんだ。文句を言われる筋合いはない。それが吉井や姫路の友人だろうとな。俺はお前ら２人を友人だとは思っているが、他のバカどもとは何でもない。そんな人間に気を使う気はない」

「悪いな。俺も和真と同意見だ。Ｆに何人か去年のクラスメートもいたけど、去年も同じだ。自分本位で他人の事は考えるような事はしない奴らだったし、そいつらとも俺は友人じゃないし、和真やＣクラスの方を味方するよ。別に２人にＦクラスと縁を切れとは言わないけど、俺達からＦクラスに歩み寄る事はないと思って欲しい」

「で、でも、結城くんも北条くんも私や吉井くんには話をしてくれました。それなのに他のみなさんには話してくれないんですか？」

和真と新は明久と瑞希以外のFクラスとは友人になれないと言うと瑞希は自分や明久には自分達の考えを話してくれたのに他の人には話してくれないのかと言うと、

「少なくとも2人とも話せばわかってくれそうだったからな。他は無理だ。自分達がやった事に罪悪感を持っている奴は誰1人としていない。Fクラスの代表を見ればわかるだろ？」

「そ、そんな事はないよ。雄二は悪気なんてないと思うけど、秀吉とかわかってくれる人はFクラスにもいるよ」

「まぁ、バカ代表には期待なんかしてないけどな。他に関しては説得力がないから無理。話はここまで到着だ」

和真は苦笑いを浮かべて明久と瑞希には話が通じそうだと思ったと言い、明久は和真の言葉に少しだけ驚いたような表情をした後、和真に言い返すが和真は明久の言葉に説得力がないと言った時に目的地に到着したようで和真は店を指差し、

「あれ？　ここって、この間、来たよね？」

「は、はい。クレープ、とっても美味しかったです」

明久と瑞希は試召戦争が終わった後の休日にこの店を訪れた事があると言い、

「知ってる。俺はその日、店にいたしな。吉井が姫路とあの煩い女

にたかられている姿も見てる」

「そうなの？」

「た、たかってなんていません！？」

「まぁ。姫路はあの煩い女に影響されてるところもあるのかも知れないが付き合ってもいない人間に無理やり奢らせるのは常識的に考えるとあまり良い事じゃないからな。そう言うのはしっかりと順序を守れよ」

「そう言う事だ」

和真はその時の明久達の姿を見ていたと言うと瑞希は明久にたかっていたわけではないと言うが和真と新は瑞希の様子に苦笑いを浮かべる。

第７４問

「しかし、いきなり、今日からで大丈夫なのか？」

「うん。家に帰ってもゲームをするだけだし、それに公共料金の話になって思ったんだけど、電気を止められてゲームができなくなるのは困るからね」

「……そこでゲームが1番初めに出てくるのが凄いよ」

和真と新が明久と瑞希を店長に合わせると和真と新の紹介と言う事も関係しているのか明久と瑞希はたいした面接も受けずに合格になり、明久は和真と新と一緒に男子更衣室でバイトの衣装に着替えている。

「そ、そうかな？」

「まぁ、それでもどこかで線を引かないと面倒な事になるぞ。頼むぞ。しばらく、学校に来ないと思ったら栄養失調で動けなくなってるとかは洒落にならないからな」

「うん。気をつけるよ……」

和真は明久の生活を心配していようで苦笑いを浮かべると明久もつられるように苦笑いを浮かべた時、

「結城和真、北条新、ゆっくりと話していないで早くしなさい。姫路さんはすでに準備ができてますわ。家畜以下の分際で美春を待たせるなんて、生意気ですわ！！」

「あ、あの。清水さん、それは言い過ぎじゃないでしょうか？」

「いいえ。あの豚野郎どもには充分ですわ！！」

「あぁ。待ってくれ。すぐに行く」

「美春？」

「店長の娘、気をつけろよ。いろいろと面倒だから」

ドアを1枚はさんだ廊下から美春の声が聞こえ、美春の隣で瑞希はどうしたら良いかわからないようであり、和真は瑞希の気苦労が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべて返事を返すと明久は首を傾げ、新は苦笑いを浮かべながら美春が店長の娘だと話し、

「そうなんだ。機嫌を損ねないようにしないとね」

「……まぁ、無理だろうけどな」

「そうだな」

明久は和真や新の顔をつぶすわけにもいかないと思っているのか真面目な表情をするが対照的に和真と新は困ったように笑うと、

「いつまで、待たせるんですか！！　早くしなさい！！」

「……ドアを開けるな。まぁ、着替え終わったところだから良いけどな」

「あれ？　君はDクラスの清水さん？　えーと、確か、美波を狙っていたよね？」

美春は限界がきたようで勢いよくドアを開け、和真は美春の行動にため息を吐くと明久は美春の事を知っているのか名前を思い出す。

「豚野郎！！」

「え！？　ちょっと、何！？」

「……フォークとナイフを投げるな。それで破壊された備品の修理費も洒落にならないんだからな。純利益が上がらないと俺達（バイト）の時給が上がらないだろ」

美春は明久の顔を見た瞬間におかしなスイッチが入ったようで明久に向けてフォークとナイフを投げつけようとするが和真は美春の腕をつかみ、

「……ここでおかしな事をすると店長が暴走するぞ。それはお前にとっても歓迎する事じゃないだろ」

「……確かに、そうですわ。結城和真、仕方ありませんわ。今日はあなたの言葉に従いますわ。しかし、次はありませんわ。店の外で出会ったら、あなた事、美春の手で八つ裂きにしてあげますわ」

「……会っただけで殺されてたまるかよ」

美春に耳打ちをすると美春も和真の言葉に納得する部分もあるようで憎々しい視線を明久に向けながら頷き、

「あ、あのさ。北条君、僕はどうして清水さんに睨まれてるのかな？」

「まぁ、気にするな。いつもの事だから」

明久は美春に命を狙われる理由に心当たりがないため、顔を引きつらせながら新に聞くが新は苦笑いを浮かべるだけである。

第７５問

「それじゃあ、始めますわよ」

「待て。清水」

「何ですか？」

美春は明久と瑞希に仕事の説明をしようとするが和真が美春を止め、美春は不機嫌そうな表情で振り返ると、

「それは俺がやるよ。お前が、吉井と一緒に居て、店長が暴走すると困る」

「……確かにそうですわね。あの変態が騒ぎだすと仕事になりませんわ」

和真は美春がやろうとしていた仕事を変わると言い、美春は和真の言葉に少し何か裏があるのかと考えるが和真の言い分にも納得するところが多いようで頷き、

「美春は仕事に戻りますわ。姫路さん、この豚野郎どもがおかしな事をしたら遠慮なく言ってください。美春の手で八つ裂きにしますから」

「えーと、八つ裂きはやりすぎだと思いますけど」

「良いのですわ。この豚野郎どもには当然の報いですわ」

「……まだ、何もしてないぞ」

仕事に戻ると言うと瑞希に何かあったら自分を呼ぶように言うがその言葉は酷くおかしく瑞希は顔を引きつらせて言うが美春は瑞希の言葉を斬り捨て、和真はため息を吐く。

「まだ？　とは何かをするつもりですか？　これだから、豚野郎は」

「……清水、勘違いするな。俺も新も姫路に何かするつもりはない」

「と、言う事はこの豚野郎ですか！！　お姉さまにも色目を使っている上に」

「な、何をおかしな事を言ってるの!?　ぼ、僕は何もしてないよ!?」

美春は和真の言葉に目つきを鋭くすると和真は自分も新も瑞希には何もしないと言い、その言葉で美春への明久への殺意が一気に跳ね上がり、明久は美春の怒りが理解できないため声を裏返すと、

「……清水、その件なんだが」

「何ですか？」

和真は美春を手招きすると美春は和真を疑いながらも話を聞くようで和真に近づき、

「……良いか。お前がお姉さまと言っているのが誰かはわからんが、吉井と姫路は本人達が恥ずかしがり屋だから言わないが両想いだ。だから、この2人を早めにくっつければ、そのお姉さまと言うのは

完全にフリーになるんじゃないのか？」

「……それは姫路さんにはあの不細工で頭の悪い家畜以下の豚野郎を押し付ける形になって申し訳ありませんが美春にとっては有益な情報ですわ」

「……どうしてだろう。僕にはあまり嬉しくない話がされている気がするよ」

「大丈夫だろ。それより、他の奴らから2人のバイト着姿を見せてくれってメールがきてたから寄ってくれ」

和真は店の中で無駄な争いを起こさないためか美春におかしな事を吹き込み、美春が大きく頷く姿に明久はおかしな不安を感じたようであり、顔を引きつらせるが新は気にするなと言うと携帯電話で写真を撮りたいようで明久と瑞希に並ぶように言う。

「しゃ、写真？　よ、吉井くんとですか？」

「あぁ。2人並んでいるのと1人ずつの撮りたいんだけどダメか？」

「僕はかまわないけど」

「わ、私もかまいません……後で北条くんに写真を貰おう」

瑞希は声を裏返すと新は彼女が何を考えているか予想が付いているようで苦笑いを浮かべて3枚の写真を撮りたいと言うと明久は何も考えずに頷き、瑞希は顔を赤らめながら頷くと明久の隣に並び、新は携帯電話で写真を撮ると、

「吉井と姫路にも送るな」

「は、はい。ありがとうございます」

「うん。ありがとう」

新は2人にも写真を送ると言った時、

「わかりましたわ。その件に関しては美春は全面的に協力しますわ」

「取引成立だな」

和真と美春の間にはおかしな同盟が成立している。

第76問

「……」

「役立たずですわ」

「そう言うな。初めてなんだし、仕方ないだろ」

和真が明久と瑞希にバイトの説明をした後に2人は接客の実践に移ったのだが瑞希はぎこちないながらも何とか接客を行っているが明久は注文を取りに行くと舌をかんだり失敗を続け、精神的なダメージが重なって行っているようでカウンターの近くで落ち込んでおり、

「よ、吉井くん、落ち着けばきっとできますよ。私でもできているんですから」

「う、うん」

「いや、もう少ししたら忙しくなってくるし、それなら、キッチンを手伝うか？　洗い物とか、短期の予定なんだし、そっちの方が効率が良いだろ。どうせ、こっちもやって貰うんだしな。店長も良いですよね？」

『あぁ。かまわないよ』

瑞希は明久に声をかけると明久は情けない姿を見せられないと思ったようで気合いを入れて立ち上がるが和真はカウンターの中から苦笑いを浮かべると明久にキッチンの仕事をしないかと言い、美春の父親である店長に確認し、店長はまだ今日は調子が良いようで和真

の意見に賛同すると、

「確かにな。吉井は家事ができるって言ってたし、そっちの方が良いかもな。こっちは任せておけよ」

「美春はどっちでもかまいませんわ。ただ、この店の事を考えれば役立たずに払うお金はありませんわ」

新は和真の意見に賛成なようで接客は任せておけと言うと美春は今の状況で明久に払うバイト料はないと言う。

「うん。そうするよ。そっちの方が向いていると思う」

「それなら、私もキッチンに」

「いや、姫路は接客で頼む。そろそろ込み合ってくるから、慣れていない人間が集まると店が回らなくなるかも知れないからな」

明久は洗い物くらいならどうにかなると思ったようで頷き、瑞希は明久と一緒にキッチンに移動しようとするが和真は明久の反応から瑞希をキッチンに踏み入れさせてはいけないと思ったようで彼女の行動を制限し、

「グッジョブ、結城君。助かったよ……この後に店にくるお客さんが」

「あぁ。吉井の反応から、姫路はキッチンに入れてはいけない存在だと言う事は理解できた」

明久は和真の行動を大手を振って誉めるわけにはいかないため、小

さな声で礼を言うと和真は苦笑いを浮かべ、

「店長、ちょっと良いですか？」

『わかってるよ。吉井くん、姫路さん、忙しくなる前にこれ、美春も北条くんも』

和真は何かあるのか店長に声をかけると店長は明久と瑞希以外に新と美春の名前を呼び、４人分のケーキをカウンターに置く。

「良いんですか？」

「お、美味しそうです」

『今度の新作の試食だよ。素直な感想を教えてくれるかい？』

明久と瑞希は目を輝かせると店長は２人の喜んでいる姿に少し頬を緩ませるが、

「……」

「清水、警戒するな……いろいろと問題はあるが料理の腕だけは確かだろ？」

「……そうですわね。それより、これが出たら、また、中林さんや工藤さんにたかられますわね？」

「……言うな」

美春は何かを警戒しているようであり、直ぐにはカウンターに近づ

く事はせず、和真はそんな美春の様子に苦笑いを浮かべると美春は新作が出る度に愛子や宏美にたかられている和真を小バカにするように笑った時、

『……ワタシノカワイイマイエンジェルニイロメヲツカウナブタヤロウ』

「え？　店長さん？」

「どうかしたんですか？」

和真と美春の様子に店長のおかしなスイッチが入り、人外化が始まりだし、明久と瑞希は何が起きたかわからないようで首を傾げ、

「……ちょっと、閉じ込めてくる」

「任せたぞ」

和真は2人に事情を説明する事なく、店長の首をつかむと店長を引きずって行く。

第７７問

「姫路さん、今日はごくろうさまでした」

「い、いえ。無理なお願いを聞いて頂きありがとうございます」

店長の人外化が治まらず、明久と瑞希は即日払いとの約束でバイトをしていたため、美春が２人分のバイト料を持ってくると瑞希には手渡しでバイト料を渡し、彼女を労うが、

「役立たず、受け取りなさい」

「……おかしな事をするな。金をなんだと思っている」

「何をするのですか！？」

美春は明久のバイト料を床に落とすと彼を見下してバイト料を受け取れと言うは和真は持っていたシルバートレイで美春の頭を叩くと明久のバイト料を拾い上げ、美春は和真につかみかかろうとすると、

「当たり前だろ。吉井はきちんと働いたんだ。これは正当な報酬だ。だいたい、店長が暴走して手が足りない時に吉井はしっかりと働いていただろ。吉井がいなかったら今日は回せたかわからないぞ」

「まったくだ。吉井も姫路も今日は助かった」

「そ、そんな事はないよ。僕なんてあまり役に立てなかったし」

和真は美春の頭を左手で押さえると明久を労い右手で明久にバイト

料を渡すと新も和真の言葉に頷く。

「そんな事はない。少なくともキッチンはかなり助かったしな。正直、店長の暴走を考えたら短期じゃなくて続けて欲しいくらいだ。これは事実、清水も認めろ」

「イヤですわ！！」

「……イヤだって、おい」

和真は明久のキッチンでの働きぶりに大部、助かったと言うと和真達以外のスタッフも明久の働きぶりを評価しているようで頷くなか、美春だけは明久を評価する事などあり得ないと言い、和真は美春の言葉に大きなため息を吐くと、

「吉井は1人暮らしだからまだしも姫路は遅くなると不味いだろ」

「ん？　それもそうだな。吉井、姫路、今日は後片付けは良いから先に着替えてあがれ」

「え？　良いの？」

スタッフ達から慣れない仕事をした明久と瑞希を今日は帰してやれという声が聞こえ和真と新は2人に着替えるように言うと明久は驚いたような表情をするが、

「……その代わり、ちゃんと姫路を家まで送ってこいよ」

「遅いんだから、男のお前がそれくらいするべきだ。良いか。2人っきりなんだ。しっかりとやれよ」

和真と新は明久を捕まえて引き寄せ、明久に瑞希をしっかりと家まで送り届けるように言う。

「ぼ、僕が！？」

「当たり前だろ。だいたい、他の男どもに任せて姫路を奪われても良いなら別だけどな」

「ぼ、僕は別に」

明久は和真と新の言葉に顔を赤くして慌てるがその様子を見れば明久が瑞希に好意を抱いているのは明らかであり、和真は明久をからかうように笑うと、

「姫路もお疲れ。今日はゆっくり休めよ。後、１人で帰るのは危ないから、吉井に送って貰うんだぞ」

「は、はい。今日はありがとうございました。吉井くん、すいませんがよろしくお願いします」

「う、うん」

和真は明久が逃げないように瑞希に明久に送って貰えと言うと瑞希は顔を赤くしながら明久を見上げ、明久は恥ずかしいのか瑞希から視線を逸らして頷き、２人は着替えるために更衣室に歩いて行き、

「きっかけがあればすぐにでも上手く行きそうなんだけどな」

「まぁ、タイミングってのもあるんだろ。それより、片づけるぞ。

清水、遊んでないで働け」

「あなたに言われる筋合いはありませんわ！！」

新は明久と瑞希の背中を見ながらため息を吐くと和真は苦笑いを浮かべながら、捕まえたままの美春に言うと美春は和真を怒鳴りつける。

第78問

「おはよう。姫路さん」

「おはようございます。吉井くん、昨日は家まで送っていただいてありがとうございました」

バイトの次の日に明久は教室に着いて、カバンを机がわりのミカン箱においた後、瑞希に朝の挨拶をすると瑞希は明久に家に送って貰ったお礼を言うと、

「明久、昨日は姫路と一緒だったのか？」

「うん。昨日は結城君に頼んで短期のバイトを紹介して貰ったんだよ。それでしばらくは放課後はバイト。姫路さんも一緒」

「はい。それで、昨日は吉井くんに家まで送って貰ったのでお礼を」

雄二は明久と瑞希が一緒にいた事にこの2人、ひょっとして進展でもあったのかと言った感じで声をかけると明久と瑞希は昨日のバイトの事を話し、

「アキと瑞希が一緒のところでバイト？　……あいつ、何なのよ。やっぱり、あの男はウチの敵ね」

「昨日は時間も押しておったと言うのはバイトの時間じゃったと言うわけじゃな」

明久達の話に聞き耳を立てていた美波は和真を自分の敵だと再確認

したようで教室にはいない和真に殺気を飛ばし始め、秀吉はそんな美波には気づかないふりをしているのか明久に昨日の放課後に急いでいた理由はバイトのためかと聞く。

「うん。結城君が僕の生活を聞いたら、それじゃ、いつか死ぬぞと言って色々と相談に乗ってくれたんだ」

「ほう。そうなのか？　そのような男には見えんかったのじゃがのう」

明久は和真が自分の事を心配してくれた事を話すが秀吉はFクラスの教室にきた時の和真の態度に少なからず腹を立てているようで和真はそんな人間には見えなかったと言うと、

「ひ、秀吉、あのさ。その事なんだけど」

「木下くん、私と吉井くんのお話を聞いていただけませんか？　美波ちゃんも」

明久と瑞希は和真達Cクラスの生徒に自分達の友人である秀吉と美波が誤解されたままでいる事をどうにかしたいようであり、元はと言えば自分達の行動からきた事だと言う事を説明したいようで秀吉と美波に声をかける。

「何じゃ？」

「何よ？　あいつの事？」

秀吉は2人の表情に何かあったとは思ったようで首を傾げながら聞き返すが美波は和真は自分の敵だと判断しているようで不機嫌そう

な表情をすると、

「あのね。結城君達がFクラスに対して怒っている事があるんだよ。原因は試召戦争の時に秀吉がCクラスに行った時の事」

「は？　戦争なんだ？　怒られる事はしてないだろ。だいたい、あいつらだって、根本と組んで俺達をはめやがったんだ。報復は必要だった」

明久は秀吉にCクラスの生徒がFクラスに持っている不満の説明をしようとするが雄二も和真の事が気に入らないためか、こっちは当然の事をしていると話しに割って入ってくるが、

「僕も最初はそう思ったよ。だけどさ。本当にそれで良いのかな？　って、試召戦争とは言っても、僕は結城君を含めたCクラスの生徒に恨みもなかったし、よく知らない人ばかりだったし、あの時は罪悪感もなかった。でもさ。姫路さん以外は努力もしなかったから、Fクラスになったわけだろ？　そんな僕らがきちんと勉強をして、中には部活やバイトと勉強を両立している人達をバカにして良かったのかな？　って、結城君達から見れば、僕らは自分達を豚扱いされたわけだし、そんな人間に話しかけられるのは不快だって言うのは当然なんだと思う」

「……明久はワシが悪いと言うのか？」

「正直、わからないよ。でも、秀吉はAクラス戦の時にその事をお姉さんから聞いていたよね？　お姉さんにも反省するように言われてたのに何もしなくて良いのか？　1人で行けないなら、僕と姫路さんも一緒に行くよ。だからさ」

明久は和真達が言っている事もわかると言うが秀吉は謝る必要がないと思っているようであり、明久は和真の言っていた秀吉は悪い事をしたとも思っていないと言った事を信じたくないようで秀吉に謝りに行こうと言う。

第79問

「……なぜじゃ。なぜ、明久はワシらではなく、結城と言ったCクラスの味方をするのじゃ」

「秀吉？」

秀吉は明久の言葉に小さな声で疑問の声をあげると明久は秀吉の名前を呼ぶと、

「なぜ、ワシが謝らぬといけないのじゃ！！　確かにバカにした事は悪いと思ってはおる。雄二の言う通り、あれは作戦だったのじゃ！！」

「……だから、言っただろ。悪気なんてないってな」

「結城君？　どうして、ここに？」

秀吉は明久が付き合いの長い自分より、和真達Cクラスの味方をしているのも気に入らないようであり、意地になっているのか声を張り上げてCクラスには謝らないと言った時、廊下まで秀吉の声が聞こえたのかFクラスの教室のドアを開けて和真がFクラスの教室に現れると秀吉と美波はだけではなく明久と瑞希を抜かしたFクラスの生徒は和真を睨みつける。

「いや、昨日の今日じゃ、買い物も公共料金の支払いも終わってないと思ってな。こいつを届けに来た。今日は吉井は罪悪感を持つ事もできないバカどもを説得するから昼はこないって言ってたからな」

「あ、ありがとう。結城君」

和真はFクラスの反応に不機嫌そうな表情をしながらも明久に小包を手渡すと明久は和真が自分にお弁当を作ってきてくれた事を理解したようで和真に礼を言うがその表情は凄く気まずそうであるが、

「別に無理して謝る必要はないし、そんな納得がいかない面で謝られたってこっちがムカつくだけだしな。だから、吉井と姫路には伝えたが俺も同じ態度を取らせて貰うだけだ」

「あ？　どう言う事だ？」

和真はFクラスに向かい自分の事は気にするなと言うと雄二はこの間、和真に良いようにやられた事もあるため、完全に彼にとっては和真は敵であり、和真に喰ってかかろうとすると、

「話しかけるな。豚。変な臭いが移るだろ」

「てめえ」

和真は雄二の事に話しかけるなと言い、雄二の怒りは和真の一言でさらに1段階上がる。

「何だ？　お前達が俺達を挑発した時に言った言葉だろ。同じ事を言って何が悪い」

「結城君」

和真は雄二だけでは無くFクラスにはこちらを非難する資格などないと言うと、明久と瑞希はクラスメートと和真の間に挟まれて気ま

ずそうであり、

「あとな。お前らがバカをやって壊した学園の設備の修理費はお前らに請求するようになるからな」

「あ？　お前になんの権利があるんだよ？」

和真はこれ以上はここにいると明久と瑞希に迷惑がかかる事も理解しているようで教室を出て行こうとするが思い出したかのように設備の修理費は問題を起こしたFクラスの生徒に請求すると言い、雄二はその言葉にかみつくと、

「決まってるだろ。お前らのクラスの設備は最低ランクなんだ。お前らが壊した物の修理費に回す予算なんかあるかよ。Fクラスは必要なものは各自で用意するのが規則だろ。そこから考えても当然だろ。それをさっき、西村教諭と学園長にも提案してきた。こっちはお前らが壊した設備を無償で直すのを手伝う羽目になったんだ。当然のことだろ。勝手にバカ騒ぎしたんだ。その責任を取るのが人として当然の事？　ん？　豚だからできないか。言い返してもかまわないぞ。その代わり、無責任な言い訳や言葉を並べてみろ。本気でぶちのめしてやる」

和真はFクラスに文句を言う資格などないと言い切ると完全にFクラスを見下した様子で言い切るが常識のないFクラスの生徒達は和真に向かい罵声を浴びせ始めるが、

「悪いな。豚に人間の言葉が通じるわけがなかったな」

和真は本気で自分達が悪い事をしているとも思っていないFクラスの生徒達の様子に呆れたようで大きくため息を吐いて教室を出て行

き、

「明久、なぜ、あのような人間の味方をするのじゃ！！」

「そうよ！！　あいつ、ウチらの事をバカにして許せないわ！！
瑞希もアキもあんな最低の人間に関わるのは止めなさいよ！！」

「み、皆さん、落ち着いてください。美波ちゃんも木下くんも、結城くんは最低な人じゃないです」

「そ、そうだよ。みんな落ち着いてよ」

和真が教室から出て行く姿に秀吉と美波は和真を完全に敵だとみなしたようであり、口早に和真を非難し始め、明久と瑞希はクラスメート達に落ち着くように言うが治まるわけもなく、

「……Cクラス代表はあの小山だったな。それなら、結城、俺をバカにした事を思い知らせてやる」

そんななか、雄二だけは和真に仕返しをする方法を思いついたようで小さく口元を緩ませている。

第７９問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、悪役。（爆笑）

和真「人に言ったことを返されただけで、よくここまで怒れるよな。本当にバカしかいないな」

まあ、Ｆクラスですしね。和真に対する批判や非難もくるかも知れませんが気にしない方向でこの作品はＦクラスの常識のなさについて書いてますしね。

和真「別に痛くもないけどな。こっちは当然のことを言っているんだ」

まあ、そういう事です。Ｆクラス養護ではないからこその物語。だからこそ、挟まれる明久と瑞希。

そして、何かを企む雄二。

まあ、ろくでもない事でしょう。

第８０問

「結城君、あなた、Ｆクラスと何か揉めなかった！！」

昼休み、久しぶりに回復試験から解放されてまどろんでいた和真の平和をぶち壊すように友香の声が響き、

「……代表様。何かあったか？」

「何かあったかじゃないわよ！！」

和真は欠伸をしながら、友香に聞くと友香の怒りはすでに臨界点を超えているようであり、彼女の額にはくっきりとした青筋が浮かんでおり、和真の胸倉につかみかかりそうな勢いである。

「Ｆクラスと揉めなかったかと言われると吉井と姫路以外は豚扱いすると言ったくらいか？」

「当然の事だな。それがどうかしたのか？　代表様？」

和真は友香の手を交わすと今朝、Ｆクラスの教室で起きた事をもの凄く簡単に話すといつものメンバーが騒ぎを嗅ぎつけてぞろぞろと和真の席に集まり始め、

「散れ」

「散れ。じゃないわよ！！　それがどんな騒ぎになってるか。わかってるの？」

和真はメンバーを追い払うように言うが友香の怒りは収まる事はなく、和真を睨みつけると、

「バカどもがまた責任転嫁して俺やCクラスを非難し始めたくらいだろ。俺達を挑発して、Fクラスに試召戦争を仕掛けさせるように」

「……まったく、その通りよ」

「……カズ、今更だけど、あんた、予知能力とかない？」

和真は友香が怒っている理由に心当たりがあるようで欠伸をしながら、Fクラスが何をしているか言い当て、友香と清美は納得がいかなさそうに眉間にしわを寄せる。

「和、どうするんだ？　乗ってやるのか？」

「乗る必要はないだろ。非はこっちにはない。Fクラスのやった事を信じる人間が2学年にいると思うか？　Dクラスはクラスのやり口を理解してるし、Aクラスも同じ、Eクラスは体育会系だからな。今までの試召戦争での卑怯なやり取りをしてきたFクラスに不快感は表わしても同調はしない」

「……確かにね。でも、正論が効かないFクラスだよ。何をしてくるかわからないよ」

一心はFクラスの挑発に乗るのかと言うが和真はこちらには非がないと言い切り、Bクラスを旧校舎まで落としいれた時に取った連携やFクラスの今までの行動から信じる生徒はいないと言うと棗は頷きながらもFクラスの行動は常識では測りきれないと言うと、

「まぁな。でも、乗ると吉井や姫路の立場がなくなるからな。せっかく、俺達以外にもウチのクラスの奴らとも仲良くなってきたわけだろ？　試召戦争をするとあいつらの居場所がなくならないか？　それに姫路の体調を考えると設備はこれ以上は落とせないだろ？」

「……そうね。今でも最低の設備なのにこれ以上、設備が落ちると姫路さんは不味いわよね」

「……いや、どっちにしろ。クラスには居づらいだろ。それなら、挑発に乗ってＦ（バカ）クラスをぶちのめした方が良くないか？　あの２人はＦクラスの行動に反対しているだろうし、設備に関しては最終的に和平交渉で終わらせたとすれば設備は落とさなくて良いだろ？」

和真は明久と瑞希の事を考えるとムカついても試召戦争は仕掛けられないと言うと友香は頷くがトオルはＦクラスを黙らせるためにも挑発に乗った方が良いのではないかと言う。

第81問

「……確かにトオルの言い分もあるな」

「なら、どうするつもり？　このままじゃ、吉井君と姫路さんはかわいそうよ。私達とクラスメートの間で板ばさみなわけだし」

和真はトオルの言う事も一理あると言うと清美は明久と瑞希が心配なようで和真にどうにかしろと言いたげに言い、

「何か考えるよ。代表様、しばらく時間をくれ。3日……いや、2日で良い」

「2日も？　その間に2人に耐えて貰えって言うの？」

「今、こっちから仕掛けるのは上策じゃないんだよ。Fクラスは俺達Cクラスを悪役にした挑発をしてこっちの怒りを誘うつもりだ。だけど、それに乗ってしまうと周りからの印象は最悪だ。だけどな。Fクラスはこっちが反応しなければ勝手に自分達が正義だと言い始めて理不尽な事を仕掛けてくる。これはバカクラスの代表は計算に入れていないはずだ。そしたら俺達はクラスでそれを訴えて攻撃をすれば良い。勝った時にこっちの正当性を盾にできるからな。何より、吉井と姫路の事を考えれば俺達はしばらくは我慢しないといけない。すぐに仕掛けるとバカ代表に俺達は吉井や姫路を直ぐに裏切るとか吹き込みかねない」

和真は感情で走ってしまった事で明久と瑞希に迷惑をかけた事を自覚しているようで乱暴に頭をかくと2日時間をくれと言うが友香はそれはできないと言うが和真は雄二が考えてもいない事を計算に入

れているようであり、

「……今更だけど、カズを敵に回したくないわ」

「でも、和真、どうするんだ？　Ｆクラスと戦うとして勝機はあるのか？　ＦクラスがＢクラス戦で見せた土屋の奇襲とか、それこそ、姫路の点数とか」

「坂本くんの性格を考えると姫路さんの体調を盾に吉井くんに戦えって絶対に言うよ」

清美は和真の考えを聞いてため息を吐くと新と棗はＦクラスが仕掛けてくるであろう強力なカードをどう対処するかと言う。

「土屋の対処は簡単だ。保健体育のフィールドに入らなければ良い。Ｆクラスがいなくたってフィールドは展開できるんだ。代表様の周りを無難に総合教科のフィールドを展開しておく、干渉を起こして消される可能性もあるからもう１人予備の教師を用意しておいて直ぐに対応できるようにしておく、まぁ、その前に大島先生を押さえておくから問題ない」

「……良く、ポンポンと策が出てくるな」

「こんなもんは考えれば誰だって出てくる。姫路は無理に倒す必要ないと言いたいけど、あいつの性格を考えると倒してやらないと自分を責めるだろうからな。俺がやるよ。だから、誰か吉井を頼んで良いか？　姫路は倒さないといけないけどな。あいつはフィードバックがあるんだ。なるべく、ダメージを与えずに終わらせてやりたい」

「……あぁ。吉井は任せろ。その代わり、姫路は任せるぞ。元々、お前くらいしか倒せる奴はいないんだ」

和真は保健体育を使った時の最大攻撃力を誇る土屋康太の対処法を話すと一心は感心を通り越して呆れたようなため息を吐くが和真はFクラスに取り残された明久と瑞希の事を考えて少しだけ困ったように苦笑いを浮かべると新はこの中で言えば自分が明久の相手をするべきだと言い、

「……後は人の気持ちも聞かないでこんなくだらない事を仕掛けてきたバカに思い知らせてやるよ」

和真はFクラス代表の雄二の立てた作戦が気に入らないようで吐き捨てるように言うと、和真の話を聞いていたメンバーは同じ意見のようで和真の言葉に同意するように大きく頷く。

第８２問

「どうだい。体に違和感はないかい？」

「……学園長が俺にそんな事を聞くのに違和感を覚えます」

「……あんた、本当に可愛げのないガキだね」

放課後になり、和真は学園長室で和真の召喚獣を教師仕様と同等にするための調節を行っているとカヲルは和真に体調を聞くが和真は自分を心配するカヲルが気持ち悪いと言い、カヲルは和真の返事に眉間にしわを寄せると、

「そりゃあ、俺の都合も考えずに勝手にこんな事を決められれば文句くらい言いたくなります」

「それに関しては謝るよ。すまなかったね」

「……熱でもあるんですか？　それとも何か裏があるんですか？」

「……本当に口の減らないくそじゃりだね」

和真は自分が文句を言うのは正当であると言うとカヲルも和真に悪い事をしていると言う自覚はあるようで作業の手を止めて和真に頭を下げるが和真はカヲルの態度に違和感しか覚えないようで疑うような視線をカヲルに向け、カヲルは和真の視線に大きくため息を吐き、

「あたしだって、常識くらいはわきまえているさね。それでも、あ

たしの方も忙しくて手一杯だったんだよ。そんな中に教師陣から観察処分者が働かないからどうにかして欲しい？　正直、あたしが文句を言いたいよ、そんなものは自分でやりなってね」

「まぁ、確かに」

自分も忙しくて和真に気を使ってやる余裕はなかったと言うと和真も納得する部分もあるようで頷く。

「それにこれだって本当に信頼できる生徒かも見極めないといけないんだ。教師の仕事を手伝うって事は他の生徒の個人情報だって知る可能性がある。ただ、教師に外面だけいい生徒に任せるわけにはいかないんだよ。あんたは考えもしっかりとしてるしね」

「……評価をされたみたいだけど、嬉しくないんだけど、それに今の話だとホントは成績を無理に上げる必要もなかった気がするんですけど」

「まあね。成績に関して言えば、実際はそのままだって動いたよ……ん？　文句は言わないのかい？」

「１０００点をあげるために動く過程を見られていたって事ですよね。納得はいきませんがそのおかげで出来る事もあるんで押さえておきます。それに途中から何となくですが気づいていましたしね」

カヲルは生徒の召喚獣を教師仕様にするのに和真の事を見極めさせて貰ったと言うと和真はため息を吐き、

「一先ずは学園長先生のオメガネにかかった事を喜んでおけば良いんですか？」

「口の減らないガキだね。あたしのメガネにかかったかと言うと一先ずは保留だね。ただ、あんたを信じるって言うのが教師陣には多くてね。その中にいた。あんたの姉と西村先生を信じただけさ。別にあたしからの信頼より、あんたはあの2人から信頼されている方が嬉しいだろ？」

「……まぁ、そうかも知れませんね」

カヲルは和真を信じたのではなく、洋子と西村教諭を信じたから、2人の期待を裏切るなと言うと和真は少しだけ照れくさそうに苦笑いを浮かべて頭をかき、

「あたしが言いたい事はそれだけだよ……これで完成だね。ご苦労だったね」

「あ、はい……って、終わりなら帰っても良いんですか？」

「あぁ……ん？　そう言えば肩書なんだけどまだ考え付いてないから、後にして貰うよ」

「わかりました。失礼します」

カヲルは和真が照れる様子に小さく表情を和らげると肩書は後回しだと言い、和真に労いの言葉をかけると和真はカヲルに頭を下げた後、学園長室を後にする。

第８３問

「あれ？　結城くん、こんな時間に何をしてるの？」

「ん？　代表様。部活は終わったのか？」

和真がカバンを取りに教室に戻ると友香が教室には残っており、和真は時計を確認するとすでに部活も終わりの時間になっており、友香に部活は終わったのかと聞くと、

「えぇ。今日は茶道部の方だったからカバンを教室に置いて行ったのよ」

「茶道部の方？　あれ？　代表様はかけもちをしてるのか？」

友香は和真と同じように教室にカバンを取りに来たと苦笑いを浮かべると和真は友香の言葉に彼女が複数の部活に所属していると思ったようで聞き返す。

「そうよ。もう１つはバレー部」

「バレー部か？　試合の時は教えてくれ」

「あれ？　応援にきてくれるの？」

友香はバレー部と茶道部に所属していると言い、和真は友香に試合がある時は教えてくれと言うと友香は和真がバレーに興味があるとは思わなかったようで驚いたような表情をするが、

「いや、代表様の太ももと揺れる2つのボールがみたい。後は茶道部の時は帯を引っ張りたい」

「……結城くん、ふざけないでくれるかしら？」

「いや、割と本気だ」

和真の目的は男の子特有のものであり、友香は眉間にしわを寄せて冗談はやめて欲しいと言うが和真は笑顔で言い切り、友香は呆れたようなため息を吐くと、

「代表様、俺は帰るけど、代表様はどうするんだ？　場所しだいでは送るぞ」

「……」

「警戒しないでくれ。流石に合意じゃない相手は押し倒さないから」

和真は教室に居ても仕方ないと思ったようで友香に帰ろうと言うが友香は和真の発言から彼を警戒しているようで和真をジト目で睨むと和真は苦笑いを浮かべ、

「行くよ」

「えぇ」

2人並んで教室を出て行く。

「しかし、実は近所だったんだな」

「そうね」

和真と友香は学園を出た後、2人で話をしながら歩いていると2人の家は近いようで顔を合せて苦笑いを浮かべた時、

「ないです」

「ん？」

「結城くん、どうかしたの？」

「あぁ……あの子、何かあったのかな？」

和真の耳に小さな女の子の声が聞こえ、その声は落ち込んでいるようでいるような声であり、和真は気づいてしまった事もあるため、声の主を見つけると、

「何か落としたのかい？」

「は、はいです。ノインちゃんのキーホルダを落としてしまったです」

和真は近づいて声をかけると女の子は悲しそうに目を伏せる。

「ノインちゃんキーホルダ？」

「如月ハイランドのマスコットよ。もう少ししたらオープンする遊園地。確か、オープン前に販促の一環で応募者にプレゼントしたとか」

和真は女の子が落とした物に心当たりがなく首を傾げると友香は知っているようで和真に説明すると、

「そうか？　悪いな。代表様、俺はこの子に付き合うから」

「結城くん、私も手伝うわよ。辺りも暗くなってきたし、早く見つけましょう」

「良いですか？　お兄さんと彼女さん、ありがとうです」

和真は友香に自分はこの女の子の落とし物を探す手伝いをすると言うと友香は自分も手伝うと言い、２人の言葉が嬉しかったようで女の子は表情を輝かせて２人に頭を下げるが女の子は和真と友香の関係を勘違いしているようであり、

「ち、ちが！？」

「子供の言う事だから慌てるなよ。それじゃあ、どこで落としたか、知りたいからどうやってここに来たか教えてくれるかい？」

友香は慌てて女の子の言葉を否定しようとするが和真は気にするなと言うと女の子にここまで見た道順を聞く。

第８４問

「ないな」

「はいです」

「葉月ちゃん、泣かないで」

和真と友香は女の子と一緒に彼女が歩いた道を探しているがキーホルダは見つからず、女の子『島田葉月』の瞳にはうっすらと涙が浮かび始めた時、

「あれ？　結城くん、何をしてるの？　小山さん以外にこんな小さな女の子にまで手を出してるの？」

「……愛子、おかしな事を言わないで」

優子と愛子が３人を見かけて声をかけてくる。

「工藤、おかしな事を言うな。流石に俺は特殊な趣味はない。ただ、この娘は美人になると思う」

「……結城くん、あれ？　木下さん、それ、どうしたの？」

和真は愛子の言葉を否定すると友香は和真の様子にため息を吐いた時に優子の手にキーホルダがある事に気づく、

「これ？　さっき、そこで拾ったのよ。あたしは知らなかったんだけど、何か、愛子が言うには限定物みたいだから、交番に届けよう

と思って……何？」

「木下さん、タイミングが良いな」

優子は横断歩道の真ん中を指差しながら言うと和真はあまりのタイミングの良さに苦笑いを浮かべると和真達がキーホルダを探していた事を知らない優子は眉間にしわを寄せると、

「今、まさにそれを探していたんだよ」

「これを？」

「ハイです。お兄さんと彼女さんは葉月が落としたノインちゃんのキーホルダを捜すのを手伝ってくれてました」

和真はキーホルダを探していたと言い、優子が首を傾げると葉月は和真と友香が自分が落としてしまったキーホルダを探してくれていたと言う。

「そうなの？　はい。今度は落とさないように気を付けるのよ」

「ハイです」

優子は足もとから見上げている葉月を見て、しゃがみ込んで葉月と目線を合わせて葉月にキーホルダを渡すと葉月は大きく頷くと、

「ありがとうございましたです」

「気を付けて帰るんだぞ」

葉月は嬉しそうな表情で４人に頭を下げると家へ戻って行き、４人は葉月の背中を見送り、

「木下さん、助かったよ。正直、葉月ちゃんも泣きそうになってたし、見つからなかった時の事も考えてたんだ」

「良いの。良いの。気にしないでよ。お礼は決まってるわけだしね」

「……いや、俺、家に帰って姉さんの夕飯を作らないといけないし」

和真は優子に礼を言うとなぜか、愛子が和真にお礼は言葉でなく態度で示せと言い、和真は愛子にまたたかられている事を感じ取り、洋子の夕飯を作らないといけないと言って逃げ出そうとするが、

「結城くん、携帯なってるわよ」

「ん？　ホントだ……うん。飯はいら……わかったよ」

友香は和真の制服の中で携帯電話が鳴っている事に気づき、和真に声をかけると和真は慌てて携帯電話を出ると洋子からの電話のようであり、和真が話を終えて電話を切ると、

「洋子先生、夕飯、いらないみたいだね」

「……いや、だからと言って、この流れで俺が奢るのはおかしいだろ？」

「何を言ってるの？　女の子に囲まれている幸せ者なんだから、それくらいはするべきだよ」

愛子は和真の様子から夕飯の準備がなくなった事に気づき、笑顔で和真の腕に抱きつき、和真の逃げ道を塞ぎ、和真を引きずって行き、

「……えーと」

「……愛子」

「何やってるの？　優子も小山さんも行くよ」

「ちょっと待て！？　どうしてこうなるんだ！？」

友香と優子は愛子の行動に苦笑いを浮かべるなか、和真の声が悲痛な声が響く。

第85問

「……豚野郎、ずいぶんと良い身分ですわね？」

「……俺はたかられてるんだぞ。この状態で良い身分なわけあるか」

和真は愛子に捕まえられて４人でバイト先の『ラ・ペディス』に着くなり、美春に睨みつけられる。

「清水さん、お邪魔するよ」

「ええ、今、席に案内しますわ。豚野郎、さっさと歩きなさい。６番テーブルが空いてますわ」

「……何か、酷く納得がいかないんだ」

美春は和真の足を蹴りながら席まで歩くように言い、和真はため息を吐きながら、３人を席まで案内すると、

「ん？　和真、代表、良いところにきた」

「北条くん、どうかしたの？」

「あぁ。ちょっとな。Ｆクラスとの事があるだろ。それで吉井と姫路が落ち込んでてさ。俺は気にしなくて良いと言ってるんだけど」

和真達を見つけた新が駆け寄ってきて、明久と瑞希が落ち込んでいるからどうにかして欲しいと言う。

「やっぱりか？　気にはなってたから後でメールでも出しておこうと思ってたんだけどな」

「あれ？　吉井くんと姫路さん、ここでバイトしてるの？」

「へぇ、秀吉はそんな事を言ってなかったけど」

和真は苦笑いを浮かべると愛子と優子は2人がバイトを始めたと事に意外そうな表情をする。

「まぁ、昨日からの短期のバイトだ。工藤、吉井にたかるなよ」

「わかってるよ。吉井くんの場合は生活に関係しそうだし」

「……俺だって生活に関係してくるよ。新、2人は？」

「休憩室にいる。ちょっと、失敗が多いから、清水と店長が気を使ってくれた」

「そうか。ちょっと行ってくる」

和真は2人が短期のバイトだと言う事を説明すると新に明久と瑞希の居場所を聞いて2人のいる休憩室に向かって行き、

「小山さん、どう言う事？」

「FクラスがCクラスを同盟を組んでたBクラスを平気な顔して裏切る卑怯者軍団って言ってるのと関係あるの？」

「……ええ、そうね」

優子と愛子は和真の様子に今日、学園で騒ぎになっているCクラスをバカにしている騒ぎと関係あるのかと聞くと友香はFクラスの挑発が頭にきているが明久や瑞希の事もあるため、感情で怒れない事もあり、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をする。

「別に気にする事はありませんわ。ただの豚野郎どもの戯言ですから、小山さんが気にする事ではありませんわ」

「清水さん、ありがとう。でも、今回の騒ぎは私が結城くんの忠告を聞かずに何も考えないでBクラスと同盟を組んだ事にあるわけだし」

美春は４人分のお冷をテーブルに置くと彼女もFクラスの言動に腹を立てているようだが、友香はFクラスとCクラスの軋轢の原因が自分にある事を理解しているため、うつむいてしまう。

「責任は全部、あの豚野郎になすりつければ良いのですわ。あの豚野郎が小山さんにきちんとした説明もしないから、こうなったのであってあなたはまったく悪くないですわ」

「……いや、流石にそれは横暴だろ。まぁ、代表も和真に任せておけよ。あいつは基本的に面倒だと言うけどな。人が落ち込んでいる姿を見ると手を伸ばしたくなるお人好しだからな。そう言う時の和真はいつも以上に頼りになる」

「そうですわ。それくらいしか、役に立たない豚野郎なんですから、命が擦り切れるまで働かせたら良いのです」

美春は友香を励ますつもりなのか和真に責任を全てなすりつけるよ

うに言い、新は美春の様子に苦笑いを浮かべる。

第８６問

「「……」」

（は、入りづらいなぁ）

和真は休憩室のドアを少し開けて中を覗き込むが明久と瑞希の間に会話もなく休憩室の中は重苦しい空気になっており、和真は困ったように苦笑いを浮かべた後、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をすると、

「吉井、姫路、何、落ち込んでるんだ？」

「ゆ、結城君！？」

「ど、どうしたんですか？　今日はお休みだって！？」

和真は勢いよくドアを開けると和真の登場に２人は驚きの声をあげる。

「いや。ちょっと、色々とあってＡクラスの工藤に拉致（ドナドナ）された」

「拉致（ドナドナ）？」

「な、何があったんですか？」

和真は苦笑いを浮かべて自分が『ラ・ペディス』にきた理由を簡単に話すと２人は無理して笑おうとしているのがわかるくらいのぎこちない笑顔を見せ、

「……悪い。もう少し、お前達の事を考えてやれば良かった」

「ま、待って。どうして、結城君が謝るんだよ！？」

「そ、そうです。頭をあげてください」

和真は２人の様子にいたたまれなくなったようで頭を下げると明久と瑞希は和真が謝る事はないと思っているようで和真に頭をあげるように言う。

「いや、俺が感情的になり過ぎたんだ。お前らの事を考えれば何も言わなければ良かったんだ。この間の吉井のラブレター騒ぎで俺も反省したはずだったんだけどな」

「……で、でも、結城君の言う通りだったよ。誰も僕と姫路さんの話を聞いてくれなかった。雄二は諦めてたけど、美波や秀吉はわかってくれると思ってたんだ」

「はい。それどころか、Ｃクラスの人達をバカにするような事まで言い始めて、結城くん達の事を何も知らないのに」

和真は自分の感情を抑えきれなかった事を反省しているようで苦笑いを浮かべるが明久と瑞希は和真が反省しているのを見て、和真とＦクラスを比較してしまったようでさらに表情が暗くなって行き、

（……参った。話が続かない）

和真は２人の様子にどうして良いかわからないようであり、頭を乱暴にかき、

「もうダメだ。吉井、姫路、気にするな。少なくとも今回、悪いのはお前らじゃない。俺とFクラスのバカどもだ。お前らが気にするな」

「で、でも」

「でもじゃない。少なくともお前らは俺とFクラスを和解させようとしたわけだろ。なら、お前らが自分を責めるな。それをされると俺は責められてる気がするんだ。だから、俺を助けると思って笑ってくれ」

和真はこの重苦しい空気に耐え切れなくなり、語尾を強くしてしまうと

「えーと、姫路さん、吉井くん、私からもお願いできないかしら」

「小山さん？」

「どうしてここに？」

友香は美春に頼みこんできたようで気まずそうにドアから顔を出す。

「ゴメンなさい。元は私が悪いのよ。結城君や山下さん達は私がBクラスと同盟を組むって言ったのも反対してたの。だけど、私が何も考えずにFクラスをはめるような事をしたから」

「……ねえ。小山さん、結城君、結局、原因って、ウチの秀吉がCクラスに言った事？」

友香は明久と瑞希に頭を下げた時、優子と愛子も友香に付いてきたようで優子は今の状況を確認するように聞くが、そんな彼女の様子は周りの人間が後ずさりしたくなるような怒りに満ちている。

第87問

「ひ、一先ず、落ち着こう。木下さん」

「そ、そうだ。1度、大きく深呼吸をするべきだ」

「……結城君、吉井君、何を言ってるのかしら、あたしは落ち着いているわ」

優子の様子に和真と明久は自然に友香と瑞希を守るように立つと声を裏返しながら、優子に落ち着かせようとするが優子の表情は清々しくらいの笑顔にはなっているが対称的に背後には真っ黒な殺意をまとっている。

「あ、あの。木下さん、できれば私達との試召戦争の前に木下くんにしたような事は」

「姫路さん、何を言ってるの？　あの時、私は秀吉と話をしただけよ。そうよね？」

「は、はい！？　その通りです！？」

「……結城君、悪いんだけど、今日はあたし帰るわ。奢りのお誘いはまた今度でね」

「りょ、了解しました！？」

優子は秀吉にお仕置きをするために早く家に帰りたいようであり、和真に謝ると和真は優子の言葉に頷く事しかできず、

「それじゃあ、また明日、学園でね。愛子もあまり、結城君に無茶を言わないようにね」

「う、うん。わかったよ」

「木下さん、また明日ね」

優子はこの場にいる全員に頭を下げるとこの場を後にし、

「……優子を怒らせるのは止めよう」

「……今の木下さんはシスコンモードの結城くんに匹敵するわ」

「……うん。僕もそう思う」

愛子は顔を引きつらせるなか、友香と明久は優子と同じ殺意(もの)を和真にも感じた事があるようで顔を見合せて頷き、

「……いや、あれはないだろ？　……俺、あんなのなのか？」

和真は今の優子と同列扱いはしないで欲しいと言うが友香と明久は和真の肩に手を置き、和真はちょっとだけ傷ついたようで肩を落とす。

「あ、あの。木下くんは大丈夫なんでしょうか？」

「……姫路、良いか。俺達はこの後に木下に何が起きるかは知らない。これを心に留めておくんだ。それじゃないときっと、心が壊れてしまうから」

「……木下くん、安らかに眠ってちょうだい。私達を恨まないでね」

瑞希は秀吉に起きるであろう虐殺シーンに秀吉の事を心配するが和真と友香はすでに現実から目をそらす事に力を注いでおり、

「だ、大丈夫だって、試召戦争の時も弟くんは生きてたし」

「……そう願おう。木下の自業自得の部分もあるけど殺人の片棒を担いだとなると後味が悪すぎる」

「そうね」

愛子は流石に優子も手加減はすると苦笑いを浮かべると和真と友香は殺人事件にならない事に希望を託す。

「それで、結城くんと小山さんは吉井くんと姫路さんを励ませたの？」

「いや、全部、吹っ飛んだ」

「た、確かに」

和真と明久は優子の怒りで暗い空気が完全に吹き飛んでしまった事に顔を合せて苦笑いを浮かべると、

「結城くん、小山さん、雄二はCクラスを挑発してCクラスから試召戦争を仕掛けさせるつもりなんだ。だから、挑発に乗らないで欲しい。僕と姫路さんで秀吉や美波、話が通じそうな人間に……」

「言ってるそばから挫折するなよ」

明久はFクラスの説得を続けようとするがラブレター程度で自分を追いかけ回すクラスメートが説得に応じてくれる姿が思い浮かばなかったようで膝を付く。

第８８問

「そ、そうだね。結城くん、一先ずは挑発にのらないでお願いだよ」

「お願いします」

明久と瑞希は和真と友香に頭を下げるが和真は２人の様子に考えている事があるようで眉間にしわを寄せると、

「……吉井、姫路、お前達には悪いと思うけど、きっと近いうち、いや、２、３日中にはＣクラスはＦクラスに試召戦争を仕掛ける事になると思う」

「ど、どうして！？」

「落ち着け。俺も代表様も好き好んで試召戦争は起こしたくない。起きちまうと２人は居場所がなくなるしな」

和真は言いにくそうに明久と瑞希に近いうちにＣクラスとＦクラスのいざこざは試召戦争に発展すると告げる。

「……待ってよ。試召戦争なんかしたら」

「吉井の言いたい事もわかる。だから、もう少し話を聞いてくれ」

「吉井くん、結城くんの話を聞きましょう。結城くんにはきっと考えがあるはずです」

明久は和真の口から出た言葉に瑞希の体調を考えてしまったようで

和真に裏切られたと思ったようで和真へ向ける視線には敵意の色が混じり始めるが和真は明久に頭を下げ、瑞希は明久を落ち着かせ、

「Cクラスには Fクラスの挑発にならないように話を通しているわ。最近は吉井くんと姫路さんがウチのクラスにくる事も多いから、みんな、2人に迷惑をかけたくないから、納得はしてくれたの。だけど……」

「うちのクラスが挑発にのらないとFクラス(バカ)は自分達が正しいと言い始めて、ウチに理不尽な暴力を仕掛けてくると思うんだ。流石に暴力に出られると抑えきれなくなるんだ」

和真と友香はFクラスの人間が起こす行動を予想しているようでこの先に起きるFクラスの暴挙を伝えると、

「……うん。言われると本気で起こりそうだから怖いよ」

「そうですね」

明久と瑞希はクラスメート達がおかしな覆面を被り、Cクラスの生徒を追いかけ回している姿が目に浮かんだようで顔を引きつらせる。

「そうなるといくらなんでも無理だ。その場合は試召戦争になると思う」

「……そうだね」

雄二が考えている事を話すと明久と瑞希は真剣な表情になってきており、

「まぁ、暴力に出ちまうと正当性を訴えられないって事に気づかないのが坂本の抜けてるところなんだけどな。あいつ、自分が元神童だからって言って現実を見れないガキだろ」

「……結城君が現実的すぎる気もするんだけど」

「そ、そうですね」

和真はFクラスの代表である雄二を『ガキ』だと言い切ると友香と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、結城くん、試召戦争は避けられないって事だよね？」

「そうだな。まぁ、実力行使できた奴らは普通に処罰対象になるから、それでも良いんだけどバカ代表の作戦に乗ってやらないと反省もしないだろうしな」

「……そうだね」

和真はFクラスに反省させないといけないと言うと明久は試召戦争後の瑞希の体調を心配しているようで目を伏せると、

「大丈夫よ。吉井くん、私達は勝ってもFクラスの設備は落とさないから安心して」

「あぁ。後な。姫路、試召戦争になったら、手加減するな。戦い難くても全力で戦え」

「で、ですけど」

「心配するな。お前が戦い難いって事もわかってるけどな。下手に手加減をするとお前のＦクラスの居場所がなくなるからな」

和真は瑞希に試召戦争は全力を出せと言い、瑞希は不安そうな表情をするが和真は彼女を安心させるように優しい笑みを浮かべる。

第89問

「まぁ、俺達が勝つ事を前提で話しているけどな」

「確かにね。姫路さんに勝てるかはわからないのよね」

和真と友香は試召戦争になるとは言え、実際に瑞希に勝てるかわからないと苦笑いを浮かべると、

「ちょ、ちょっと待ってよ。それなら、何で試召戦争を起こすって言うんだよ。結城くん達にメリットってないんでしょ。試召戦争をする必要なんてないだろ？」

「そうです。私と吉井くんなら大丈夫です。ですから、落ち着いてください」

「ん？　２人ならどうにかなるって事か？　羨ましい限りだ」

「ホントだよ」

明久と瑞希は２人の様子に慌てて考え直すように説得しようとすると和真は明久と瑞希を交互に見た後にからかうように笑い、愛子も和真と同じ意見なようでうんうんと頷き、

「な、何を突然言い出すんだよ！？」

「そ、そうですよ！？」

「……結城君、工藤さん、あまり、２人をからかわない」

明久と瑞希は顔を真っ赤にして否定する姿に友香はため息を吐く。

「代表様からのご命令だから、従いますか。後な。吉井、姫路」

「な、何？」

「メリットとかのデメリットの問題じゃいんだよ。お前ら2人が困ってるのに自分の我だけ押し付けてる奴、それを利用しようとしてる奴がいる事が許せないんだ。少なくとも俺が知る限り、坂本と木下弟、島田は去年からのお前の仲間なんだろ。それなのに誰1人としてお前の言葉を聞かないんだからな」

和真の怒りはすでに収まらないところまできているようであり、声の調子は落ち着いているが背中の後ろには真っ黒な何かが漂っているように見え、

「……これはこれで危ないかな？」

「大丈夫だと思いたいわね」

和真の様子に友香と愛子は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、そう言う事だから、吉井も姫路もあまり気にするな。正直、なるようにしかならないからな」

「そんな感じで良いのかな？」

「良いんだよ。仮に失敗してもたかだか3カ月だ」

和真は試召戦争に負けても設備が落ちるのは3カ月だけだと言い切り、

「……そう思ってるのは結城君だけよ。私は仮に負けた時にクラスメートから何を言われるかと思うと胃が痛くなるわよ」

「そう言うところ、結城君って強いよね」

「就職希望だからな」

友香は代表として立場があるから苦笑いを浮かべるが和真は進級した時から就職希望だから設備は関係ないと言い続けているため、迷いすらないようであり、

「な、何か、結城君を見てると考えてるのがおかしくなってくるかな？」

「そ、そうですね」

明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、その表情は和真達が休憩室にきた時とは確実に変わっている。

「それは生活費を使い込んで、極貧生活をしている吉井には言われたくないな」

「確かにそうかも」

明久と瑞希の様子に小さく口元を緩ませると明久をからかい、明久は和真の言葉に笑顔で返した時、

「姫路さん、豚野郎、そろそろ、戻ってください。結城和真、邪魔をするなら手伝いなさい！！」

「和真、ちょっと手が足りないから出てくれ」

美春の怒声が休憩室まで響き、新が苦笑いを浮かべながら休憩室に顔を出し、

「わかったよ。代表様、工藤。俺はバイトに入るから、会計の時は俺にツケといてくれ」

「おっけー。小山さん、行こう」

和真は洋子も遅くなると言っていた事もあり、バイトを了承する。

第９０問

「……1日も我慢できないのかよ」

「……呆れてものも言えないわね」

和真はＦクラスがＣクラスを挑発し始めた翌日に登校をすると教室は昨日の下校時間に友人の女子と話をしていたＣクラスの男子生徒数名がおかしな覆面をかぶった生徒に襲撃を受けたと言う話を聞いて大きくため息を吐く。

「カズ、どうするの？　仕掛ける？」

「待て。落ち着け。昨日も言っただろ。昨日の今日じゃ、俺達の印象が悪い。なにより、吉井や姫路の立場がない」

清美は和真にＦクラスへの試召戦争を仕掛けるかと聞くが和真は首を横に振り、

「しばらくは待機だ。悪いんだけど、あまり、学内は1人で動くな。いくらなんでもこれ以上は」

「和、さっき、おかしな覆面をかぶった奴らが」

和真はいくらＦクラスでも短慮な人間ばかりではないと言おうとするが次から次と教室にはＣクラスの生徒がＦクラスに暴力を受けたと言う話が伝えられ、

「……ここまでバカなのか？」

「……なんて言ったら良いのかしら」

和真と友香は眉間にしわを寄せる。

「結城くんの言い分もわかるんだけど、これ以上はCクラスの怒りを収まらないよ」

「確かにな。いくらなんでもやりすぎだろ」

新と棗はクラスメートから聞こえる不満の声にどうしたら良いのかわからないようであり、

「……とりあえず、今の状況をバカクラスの代表に止めされるように言ってくる。その後は相手の出方次第」

「結城くん、私も行くわ」

「代表様も？　危ないから」

「良いから、行くわよ。結城君がキレたら元も子もないんだからね」

和真はFクラスの教室に行ってくると席を立つと友香は和真の隣に並び、

「山下さん、しばらくお願い」

「了解。その代わり、2人ともキレるってのは無しにしてね」

「あぁ。気を付けるよ」

清美は頭に血が昇りやすい2人がFクラスに向かう事に不安な所があるようで落ち着けと言って2人を見送る。

「さてと、行きますか？」

「そうね」

和真と友香は中央階段を挟んだ旧校舎にあるFクラスの教室に向かって歩き始め、

「流石の結城君の予想も外れたわね」

「予想なんて当たるか外れるかなんてわかんないって、A対(バカ)Fが出来過ぎだったんだよ」

和真はFクラスの行動が予想以上に斜め上を爆走しているため、頭が理解する事を拒絶しているようで表情は険しく、友香は和真を落ち着かせようと苦笑いを浮かべて声をかけると和真は友香が気を使ってくれている事に表情を少し緩めるが、

『裏切り者には死の制裁を！！』

『殺せ！！』

その姿を何か勘違いしたようでおかしな覆面をかぶったマント姿の3名の生徒が和真と友香に向かって巨大な鎌を振りまわして襲ってくる。

「ちょ、ちょっと、何よ！？」

「何？　って、Ｆ（バカ）クラスだろうな」

友香はとっさの事で顔を引きつらせ、逃げる事もできずいるが対照的に和真は落ち着いており、ため息を吐くと、

「暴力反対と」

「え！？　ちょっと、結城君！？」

慌てる事なく、最初の鎌の攻撃を避けると３人の足を引っ掛け、３人は前のめりに廊下に大部し、

「……Ｆ（バカ）クラス３名確保。校内暴力は何日間の停学処分かな？」

覆面をはぎ取ると３名の生徒はやはりＦクラスの生徒であり、笑顔で停学は免れないと言うが、

『バカじゃないのか？　俺達の行動は乙女を守る正義の行動だ』

『結城和真、貴様に制限される覚えはない！？』

Ｆクラスの生徒は自分達の行動は正義だと言いきった時に頭に拳が振り下ろされ、

「……そんなわけないだろ。結城、小山、迷惑をかけたな」

「に、西村先生」

「別に良いですよ。その代わり、こっちは被害者なんで現行犯です

しね。その3人の処罰はきっちりとお願いします」

「あぁ。当然だ。お前ら生徒指導室で詳しい話を聞かせて貰うぞ」

眉間にしわを寄せた西村教諭は和真と友香に頭を下げると和真は3名の生徒をきっちりと処罰して欲しいと頭を下げ、西村教諭は3名の生徒を引きずって歩いて行く。

第９１問

「行くか？」

「う、うん……」

「ん？　代表様、どうかしたか？」

和真はＦクラスの教室に行こうと友香に声をかけると友香は和真の様子に何かあるようであり、和真は首を傾げる。

「結城君は、どうして、あんなわけのわからない人達相手に直ぐに対応できるの？」

「いや、あれ以上に関わってるからな。店長……清水の親父さんの相手をすると考えたらあの程度の殺意は何ともない」

友香は先ほどの和真の様子を疑問に思ったようであり、不思議そうな表情をすると和真は苦笑いを浮かべながら、上には上がいると言い切り、

「……清水さんのお父さんがおかしい日には店に行かないようにしないとね」

「そうしろ。それが命を守るために必要な作業だ」

友香は清美達からも美春の父親の異常性は聞いているため、身の安全を守るために心に誓い、和真は大きく頷き、

「まぁ、話も落ち着いたし、行くか？　ここで遊んでても仕方ないしな」

「そうね」

2人は再度、Fクラスの教室に向かって足を進める。

「雄二、どう言う事だよ！！　いくらなんでも暴力はやりすぎだろ！！」

「そうです」

Fクラスでは明久と瑞希がクラスメート達の行動はやりすぎだとCクラスを挑発すると言いだした張本人でもある雄二に詰め寄ると、

「うるせえな。わかってるよ。俺だってこんな直ぐに行くとは思ってなかったんだよ。それを」

雄二はクラスメート達が始めた理不尽な制裁は考えていなかったようで乱暴に頭をかくが、

『正義は我らにある。結城和真の首を我らに奉げるのだ！！』

『あの男は先日、Eクラス代表の中林宏美と喫茶店でデートをしていた。それなのにCクラス代表の小山友香にも手を出している。乙女の味方と言う崇高な理想を掲げている我らには絶対に始末しなければいけない男だ！！』

Fクラスの生徒達は和真を殺す事だけを考えているようで和真の写真をかかげて嫉妬のこもった声で叫びながら和真の写真にカッター

を突きたてている。

「何が不味いのよ？　あんな、人の話も聞かない最低な男に制裁を加えるのは当然でしょ」

「悪いけど、あんたら豚に制裁を受ける義務はないよ」

美波は和真を余程毛嫌いしているようで憎しみのこもった声で和真を倒すと言った時、和真と友香がＦクラスの教室のドアを開ける。

「ゆ、結城君に小山さん」

「どうしたんですか？」

「２人ともおはよう。ちょっとな。バカ代表に話があったんだよ。一応は俺と代表様は正式なクラスの使者だからな。話くらいは聞けよ。ん。豚相手に話さないといけないから語尾に『ぶひぶひ』とでも付けてやろうか？」

明久と瑞希は和真と友香の登場に驚きの声をあげるが和真は気にする事なく、２人に朝の挨拶をすると雄二を挑発するように呼び出し、

「……なんだよ。豚になんか話しかけたくなかったんじゃねえのか？」

「あぁ。別に話しかける気もなかったがな。お前らの行動があまりに程度が低くてな。自分達の行動を考え直す事なく、暴力に出るなんて、言った通り、違うな。家畜以下が正しいか？」

「何ですって！！」

雄二はこれから和真が言う事は理解しているようであり、Fクラスの行動は不味かったがそれでも自分の思い通りに進んでいると思っているようで周りが気付かないように小さく口元を緩ませるが和真はため息交じりでFクラスをバカにすると美波が和真の胸倉をつかむ。

第９２問

「結城君、落ち着いて！？　美波も！？」

「そうです。美波ちゃん、暴力はダメです！？」

「吉井、姫路、心配するな。俺は落ち着いている」

和真と美波の一触即発の空気に明久と瑞希は慌てて声をかけるが和真は苦笑いを浮かべて美波の手をつかみ、

「俺は話し合いに来たと言ってるのにそれも聞けないから家畜以下って言われるんだ。それも気づかないのか？」

落ち着いた口調で美波の腕を引き剥がし、

「家畜代表、こっちからの話は昨日と今日、ウチのクラスに理不尽な暴力を仕掛けたバカ達を引き渡せ。それだけだ。それで平和的に解決しようじゃないか」

「あ？　そんなものに応える義理はねえよ」

「それもそうだな。クラスメートもまとめる事も試召戦争も勝つ事もできない無能な代表だしな」

和真は暴力に走った生徒を見つけて引き渡すように言うが雄二は和真の言葉を鼻で笑い、和真は想定内なようで雄二をバカにする。

「そりゃそうだろ。簡単に同盟を組んだクラスを裏切るようなクラ

スを信じる事なんてできねぇよ」

「……坂本くん、言っておくわ。簡単に裏切った覚えもないわよ。Bクラスは同盟を続けるほどの価値のないクラスだった。それだけでしょ」

雄二はあくまでも原因はCクラスにあると自分達を正当化したいようだが、その言葉を聞いて友香が口を開く、

「は？　よく言うな。流石は卑怯者をまとめる代表様だ」

「まあ、同盟を取りやめた時にキチンと話もしたし、部外者のあなた方に避難される筋合いはないわよ。だいたい、あなたはこっちに不利にしかならない条件を渡された時にクラスをまとめるため、守るために代表としてその同盟を続けてられるの？　クラスメートを簡単に売るクラスよ。同盟クラスなんてもっと簡単に売られるでしょ」

「代表様、言っても無駄だぞ。こいつもあの小者と同じ事をするだろうからな。相手のクラスの備品を壊す。やってる事は変わらないし、小者はそれをクラスの実行犯に押し付けてこいつはDクラスに押し付けた。それだけだろ。自分達の非を認める事もできないんだ。それも小者はそれでも代表としてお前らのくだらない提案であんな惨めな格好をしたのにこの家畜代表はAクラスとの条件も守っていない。そんな卑怯な人間が代表なんだ」

和真と友香は卑怯と罵られる理由はこちらには何もないと言い切り、和真は雄二をさらに挑発する。

「……」

「何だ？　何か反論でもあるのか？　クラス代表として責任も果たしていない。卑怯者以下の代表様。家畜クラス、思い出せよ。今、最初の設備以下になっているのは誰のせいだ？　それも理解できないのか？　さすがは家畜以下の知能しかない奴らの集まりだ」

雄二は和真の敵意に視線が鋭くなるが和真は気にする事なく、Ｆクラスを挑発すると自分の感情で走る人間の集まりであるＦクラスの生徒の敵意は和真と雄二に集中し始め、

「てめえ、何が目的だ？」

「何が目的？　最初から言ってるだろ。ウチのクラスに理不尽な暴力をふるった生徒を引き渡せ」

「制裁でもするつもりか？」

雄二はこの挑発の裏にまだ和真の考えがある事を感じ取り、和真の作戦の底を見ようとしているようである。

第９３問

「バカか？　何で同じ事をしないといけないんだ？　俺達はお前ら家畜以下と違ってルールを守るって事を知っているんだ。処分は学園に任せるに決まってるだろ」

「……そう言う事か？」

和真は当然、学園に処罰を任せると言うと雄二は和真が何を考えているか理解したようで苦虫を噛み潰したような表情をするが、

「その答えはノーだ」

「そうだな。だいたい、無能な代表様にあの家畜以下をまとめる事はできないんだ。それにクラスを売る事になるからな。俺達を卑怯者扱いしてまとめたクラスに亀裂を入れるわけにはいかないからな」

雄二は和真の提案に乗る事はできないと首を横に振ると和真はため息を吐き、雄二の心境を読み当て、

「そうだな。それができないなら、俺達が提案するのはお前らを少しでも反省させるために」

和真は小さく口元を緩ませると、

「模擬試召戦争を申し込む」

「も、模擬だと？　本番ならまだしも模擬なんて受けるわけがないだろ」

本番の試召戦争ではなく模擬試召戦争を宣言し、雄二は自分達に有利なものではないため和真からの提案を跳ねのけようとするが、

「受けてやるわよ！！　結城和真、あんたに西村先生の鬼の補習を受けさせてあげるわ！！　あんたをぶちのめして、ウチの前でウチが正しいって土下座させてあげるわ！！」

美波は和真からの挑発にかなり頭にきているため、和真を完全に敵と見なして吠えるとＦクラスの生徒も同様に和真の挑発が効いていたようで模擬試召戦争を受けると騒ぎ始める。

「ま、待て。模擬試召戦争はダメだ！！　勝っても俺達に何もないんだぞ」

『うるせえ。坂本！！　無能な代表の話なんか聞くわけがないだろ！！　俺達はあの男をグロテスクに殺せればそれで良いんだ！！　設備なんか知るか！！』

雄二は完全に開戦の空気になっているＦクラスの生徒を抑え込もうとするが和真の打ち込んだ楔はしっかりと最初から存在していたかわからないＦクラスの絆を打ち砕くには充分すぎるものであり、誰も雄二の説得に耳を傾ける者はいない。

「結城君、これが目的だったの？」

「あぁ。これだと設備を落とす必要もないからな。それに勝手にＣクラスに暴力をふるった家畜以下と俺達被害者の私闘になるわけだから、吉井と姫路が参加する義理はない」

友香は和真相手に向けられる罵倒や殺意に居心地が悪そうに和真の制服を引っ張ると和真はFクラスの生徒の罵倒も殺意もどうでも良さそうであり、つまらなさそうに欠伸をした時、

「お、おはようなのじゃ」

「ひ、秀吉、どうしたの！？」

ボロボロになった秀吉が登校してきたようで弱々しく朝の挨拶をし、秀吉の様子に明久は慌てて彼に駆け寄ると、

「……あぁ。木下さん、人殺しにならなくて良かったな」

「……それでも充分、やりすぎよ」

「そ、そうですね」

昨日の『ラ・ペディス』のやり取りを見ていたメンバーは秀吉に何があったかを理解したようであり、

「結城和真、お主、姉上に何を吹き込んだのじゃ！！　そのせいでワシはいわれのない暴力を受けたのじゃ！！」

「……お前、木下さんが説教した意味も人のせいにするのかよ。最低だな」

秀吉は和真を見るなり、優子からの暴力を和真のせいだと叫び、和真は話の通じない秀吉の様子に大きく肩を落とす。

「何じゃと！！」

「うるせえな。言葉も通じない家畜……秀吉だったし、サルで良いか？　サル相手に話す事なんてないね。家畜以下代表。開戦はＨＲ後だ。代表様、帰るぞ」

「ええ」

秀吉は和真にバカにされているため、声を張り上げるが和真は気にする事なく、模擬試召戦争の開戦時間を告げると友香と一緒にＦクラスの教室を出て行く。

第９４問

「……カズ、あんた、ずいぶんと挑発してきたみたいね」

「挑発？　何を言ってるんだ？　俺は事実しか言ってないぞ」

「核心を突かれた人間は反省するか責任転嫁するって相場は決まってるだろ」

「……Ｆクラスは全員が後者なわけね」

模擬試召戦争が開戦されるとＣクラスは和真、新、清美を中心に戦闘を開始するがＦクラスの生徒の８割は和真に向かって突撃してきており、作戦も何もないため簡単にＣクラスに返討ちにあって行く。

「さてと、そろそろ。坂本が何かを仕掛けてくるかな？」

「仕掛けてくるって、坂本くんは完全にＦクラスからの信頼を失ってるんでしょ。それなら、仕掛けてなんかこないでしょ」

「まぁ、普通はそうなんだけどな。Ｆクラスはバカで責任転嫁が得意な家畜以下の奴らばかりだからな。ここまでやられると次は代表の坂本のせいにして作戦の１つでも出せと言い始めてる頃だろ」

「……どうしようもないわね」

和真はＦクラスの戦力低下になりふりなどかまっていられなくなった人間が先ほど罵倒していた雄二に作戦を聞くと予想した時、

「見つけたわよ。結城和真！！」

「和真にまた女の影が！？」

「……違う。だいたい、俺にだって選ぶ権利がある。あんな感情任せで動く猪女は願い下げだ」

美波が和真を見つけて吠え、その様子に清美は和真をからかうように笑うが和真は大きく肩を落とすが、

「いや、カズの周りって、代表、宏美、清水さんって、感情で動くタイプが多いでしょ？」

「……否定できないのが痛いな」

清美はニヤニヤと笑いながら和真の周りにいる女の子は美波に似たタイプが多いと言うと和真は眉間にしわを寄せる。

「ウ、ウチをバカにするな！！　ウチだってあんたみたいな。性悪、お断りよ！！」

「カズ、今更だけど、あんた、島田さんに何をしたの？」

「別に何もしてない。こっちが因縁を吹っかけられたから正論で返しただけ」

「……こっちも後者なのね」

美波は和真と清美の話に和真を威嚇するように叫ぶが和真は相変わらず、美波の相手をする気はないようであり、

「許さないわ。結城和真、絶対にウチに土下座で謝らせてあげるわ！！　Ｆクラス島田美波がＣクラス結城和真に数学勝負を挑むわ！！　試獣召喚（サモン）！！」

「はいはい。受けますよ。試獣召喚（サモン）」

美波は和真を指名して数学のフィールドを展開すると美波の前の床には機械的な魔法陣が浮かび上がり、美波を２頭身にしたような召喚獣が呼び出され、彼女の召喚獣は和真に向けて武器であるサーベルを構え、和真は美波の相手をするために１歩前に出て召喚獣を呼び出すと美波の時と同様に床に魔法陣が浮かび上がり、白いプレートアーマーに大剣を装備した和真の召喚獣が呼び出される。

「島田さんの数学、Ｂクラスくらいあるね」

「そうだな。でも」

新と清美は美波の数学の点数が２００点近い事に感心したように言うと、

「数学は得意なのよ。さあ、結城和真、あんたは西村先生の補習でも受けてなさいよ！！」

「バカな事を言うなよ」

美波はよっぽど自分の数学の点数に自信があるようで和真の召喚獣に向かって駆け出してくるとサーベルを振り下ろすが和真の召喚獣は大剣でサーベルを弾き飛ばし、

「……でも、和真は理数は得意なんだよな」

「あいつのシスコン力は凄まじいよな」

和真の点数は３００点には届かないもののそれでも２００点代後半まで上がっているため、新と清美はため息を吐く。

第９５問

「あんた、何なのよ！？　ウチはＢクラスにも数学は負けてないのよ！？」

「……いや、普通、上位クラスが相手なんだから、自分より点数が高い前提で仕掛けてこいよ」

美波は数学にはＡクラス以外には負けないと思っていたようで和真の召喚獣の上に表示されている数学の点数に声をあげるが和真は彼女の反応に眉間にしわを寄せると、

「……島田さんって本当に猪みたいね？」

「いや、Ｆクラスの９割がそうだろ」

新と清美は美波の反応に大きく肩を落とし、

「猪女、自分の非を詫びるなら補習室に送らないでやるけど、どうする？」

「誰が猪女よ！！　だいたい、何でウチが謝らないといけないのよ！！　ウチがあんたに謝る事なんて何１つとしてないわ！！」

「……いや、俺、胸倉捕まれて罵倒されてるんだけど、他にも脅迫されてるし」

和真は明久と瑞希の話もあるため、それでも美波には話が通じるか確認しようと降伏勧告をするが美波は自分は何も悪くないと和真の

提案を跳ねのけ、和真は美波の様子に大きくため息を吐くと、

「まぁ、猪に話が通じるわけないか。品種改良も終わってないからな」

「ウチをバカにするな！！」

美波は和真の態度が気に入らないため、彼女の召喚獣は怒りに任せて和真の召喚獣に襲いかかるが、

「ふーん。教師仕様って、去年の召喚獣実習とかより、召喚獣と深く繋がっている気がするな」

和真は落ち着いた様子で美波の召喚獣のサーベルを弾き飛ばす。

「な、何で、あんたは召喚獣の操作まで上手いのよ！？」

「……これもお前らの被害を受けた結果だ」

美波は和真の召喚獣が特別仕様の事を知らないため、驚きの声をあげるが和真はその言葉に怒りがこみ上げてきたようで背後に真っ黒な殺意（もの）をまとい始め、

「……改めて聞くと、和真がＦクラスを恨むのは当然なんだよな」

「……調べてみると観察処分者の仕事の６割って生徒が壊した備品の移動みたいよ。それもウチの学年が壊した備品。和真がＦクラスを嫌うのって正当な理由だよね」

「その原因は誰１人として自分は悪くないって言うわけだしな」

新と清美を中心にしたCクラスの面々は和真の様子に巻き込まれたくないようで和真から離れるように陣取り、

「ちょ、ちょっと、あんた達、何で逃げるのよ！？」

「だって、私達はこの件に関しては悪くないしね。元々、島田さんに関しては和真の話を聞く限りは吉井くんのラブレター事件の事をカズに謝れば終わったわけだし、それを自分を省みずに和真が悪いって言ってるんだから、助ける義理も正当性もないよ」

美波は和真の様子に背筋に冷たい物が伝ったようで和真以外にはCクラスに恨みもないと言う事もあるのか、Cクラスにまで助けを求めるが当然、誰も彼女を助けるわけもなく、

「ま、待ちなさい。まずは落ち着きなさい。ウチは人間なの話し合いを提案するわ」

「……その段階はとっくに過ぎているだろ。それくらいも理解できないのか？」

美波はなりふりはかまっていられなくなったようで先ほどまでは憎悪の対象としか見ていなかった和真に話し合いを提案するが和真は当然、跳ねのけると同時に和真の召喚獣の大剣は美波の召喚獣の頭上から振り下ろされ、彼女の召喚獣の点数は一気に『0』になり、

「戦死者は補習うぅぅ！！！！！！」

「補習は嫌ぁぁぁぁ！！！？？？　ゆ、結城和真、覚えておきなさいよ！！」

美波は西村教諭に抱えられて退場して行くが和真への恨みは色濃くなって行くのが誰の目からも明らかであり、

「……カズ、あんたはそう言う星の下に生まれたのよ」

「……いや、そう言うのは止めてくれ」

清美は和真を労うように彼の肩を叩くが和真は美波を補習室送りにした事で少し冷静になったようで大きくため息を吐く。

第９６問

『坂本、お前のせいなんだから、どうにかしろよ』

『あの。生意気な結城和真を血祭りにあげる手を考えろよ』

「……」

Ｆクラスの教室では和真の言った通り、雄二に責任を押し付けて彼を攻め立てており、雄二は自分の指示を無視して勝手にＣクラスへの暴力を開始し、和真の挑発に乗ったクラスメート達の行動に眉間にしわを寄せている。

「雄二、諦めなよ。今回は確実に先に手を出したＦクラスが悪いわけだし」

「……黙ってろよ。あいつの思い通りになってるこの状況が俺は気に入らねえんだよ。そんな事を言ってないでお前も戦ってこいよ」

「イヤだよ。僕も姫路さんも結城君達Ｃクラスに恨みも何もないし」

「そうですね。それにそれをしてしまうと結城くんが私達を気づかって模擬試召戦争を提案してくれたのを裏切ってしまいますから」

明久は今回の模擬試召戦争はＦクラスに全面的に悪いと思っており、雄二に諦めるように言うが雄二は和真の事が気に入らないため、和真に頭を下げる事など論外だと吐き捨てると明久と瑞希を見て、Ｃクラスと戦って来るように指示を出すが明久と瑞希は雄二の指示には従えないと首を振り、

「何で、わかんねえんだよ。あいつはお前達の事なんか気にかけてねえよ。自分達の有利に事が進むようにしただけだ」

「そうなのじゃ。あの男は卑怯者なのじゃ！！」

雄二は戦う気がない明久と瑞希の様子に舌打ちをして和真が強力な戦力である瑞希を戦線に出さないための作戦だと決めつけ、秀吉は優子が自分への暴力をふるった事を和真のせいと決めつけている事もあるため、和真を卑怯者だと叫ぶ。

「秀吉……どうして、わかってくれないの？」

「わかってないのは明久、お主じゃ！！」

「木下くん」

明久は秀吉の様子に悲しそうな表情をするが秀吉はすでに明久の言葉を聞く気はないようで明久に当たると教室を出て行ってしまい、

「……結城の弱点でもわかれば良いんだけどな。何か無いか？　情報を集めに行ったムッツリーニはまだ戻ってこないか？」

「……今、戻った」

雄二は秀吉と明久の様子を気にする事なく、和真を倒す算段を付けるためには情報が足りないようで乱暴に頭をかいた時、Ｃクラスの情報を集めに動き回っていた康太が教室に戻ってくる。

「ムッツリーニ、あの男の弱点は何かわかったか？」

「……男になど興味はない。ただ、結城和真と高橋先生が従姉弟で一緒に住んでいると言う殺したいほど嫉ましい情報を手に入れた」

雄二は康太に駆け寄り、和真の情報を聞くが康太は和真の情報で洋子と和真が同棲している事を調べ上げ、和真に対する殺意をあげると、

「高橋先生と一緒に住んでいる？　なるほど、これは使えるか？」

雄二は康太の様子を見て、Ｆクラス特有の能力に目を付けたようでニヤリと笑い、

「良いか。お前ら、よく聞け。結城和真は代表の小山友香やＥクラス代表の中林宏美以外にもＡクラス担任の高橋先生に手を出しているそうだ」

『『『何！？』』』

『結城和真、許さん』

『あいつの臓物を我らが高貴な魂を持つ異端審問会に奉げるのだ』

和真を女たらしだとクラスメートに話すとクラスメート達はおかしな覆面をかぶり手には大鎌を持って教室を駆け出して行き、

「結城和真、俺をバカにした事を後悔しろよ」

「……雄二、お前は結城君の事を何もわかってないよ」

雄二はFクラスの生徒に血祭りにあげられる和真の姿を思い浮かべたようでニヤリと口元を緩ませるが明久は雄二の考えた策が和真相手では愚策でしかない事を理解しており、雄二を哀れむような視線を送る。

第９７問

「……感情任せで策も無しか？」

「……カズ、あんたは本当に敵を作るのが上手いわね。聞いた話じゃ、木下くんって、落ち着いた感じの子って話なのに」

和真は作戦もなく、和真に向かってきた秀吉を補習室送りにすると西村教諭に担がれながらも和真に敵意を向けている秀吉の様子にため息を吐くと清美は完全にＦクラスを敵に回した和真を見て苦笑いを浮かべた時、

「……和真、何か、おかしな連中が出てきたぞ」

「そうみたいだな」

おかしな覆面をかぶり手には巨大な鎌を持ったＦクラスの生徒２０名が廊下の先からこちらに向かって駆け出してきており、その様子にＣクラスの生徒達は気落とされたようで後ろに後退して行くなか、和真と新の２人は下がる事なく呆れたようにため息を吐いており、

「結城君、北条君、余裕そうだけど大丈夫なの？」

「まぁ、あの程度の殺意、店長に比べれば余裕だな」

「まったくだ」

Ｃクラスの増援に来たはずの棗は和真と新の様子に自分がきた意味があるのかと聞くと２人は美春の父親の方が恐ろしいと言い切る。

「それじゃあ、２人に任せた」

「いや、だからと言って、この人数差は無理だろ」

「大丈夫。骨は拾ってあげるから」

「……いや、それは大丈夫じゃないからな」

棗はあまり今のＦクラスの生徒に関わり合いたくないようで和真と新に任せようとするが流石に２人では２０人の相手はできないと和真がため息を吐いた時、

『居たぞ。結城和真だ！！』

『高橋先生にまで手を出す色欲魔人を我らの手で八つ裂きに！！』

Ｆクラスの生徒達は絶対に触れてはいけないものに手を出し、

「総員、撤退！！　結城君から離れます！！」

「撤退よ！！　ここにいて巻き添えを喰らうわけにはいかないわ！！」

棗と清美は和真の背後からおかしな殺意（もの）があふれ始めた様子にＣクラスに撤収命令を出し始め、Ｃクラスは蜘蛛の子を散らしたかのように撤退を開始し始め、

『クラスメートにも見捨てられるとはな。これで終わりだ。結城和真！！』

『『『死ねぇぇぇぇぇぇ！！！！！』』』』

1人で廊下の中心に立つ、和真に向かい5人のFクラスの生徒が召喚獣を呼び出す事なく、巨大な鎌を振り下ろす。

「……お前ら、覚悟は良いな？　これからは虐殺だ」

しかし、巨大な鎌を振り下ろした先には和真はすでにおらず、洋子の名前が出た事で和真の怒りは限界を簡単に超えており、目の焦点は合っていない。

「……誰だよ。和真相手にこんな愚策を取ったのは？」

「坂本君だと思うよ。結城君相手にずいぶんと辛酸をなめさせられたみたいだし、結城君を血祭りにあげられるとか考えたんじゃないですか？」

「……それが触れてはいけないものだと知らずにとは坂本君もバカよね」

新は和真の逆鱗を触れるような作戦を考えた相手の間抜けさに大きくため息を吐くと棗と清美はこの後に起こるであろう惨劇に顔を引きつらせた時、

「……Cクラス結城和真が家畜共に物理勝負を挑む。試獣召喚（サモン）」

和真は背後に真っ黒な殺意をまとったまま、彼が持つ最強の剣である物理を惜しげもなく使って召喚フィールドを展開すると和真の召喚獣の頭の上には４３７点と表示され、右手には漆黒に輝く腕輪が

装備されており、

「……大暴走（オーバードライブ）」

和真は腕輪を発動させると和真の召喚獣の点数は点数を上げ始め、単体教科の点数であった点数が彼の現在の総合得点である２６７８点まで上昇して行き、

「これが結城君の腕輪の能力（ちから）ですか？」

「……単体教科で総合得点で戦えるのは反則だろ？」

「だけど、酷くカズらしい気がするのは何でだろうね」

和真の腕輪の能力を見たＣクラスの生徒達は顔を引きつらせながらも和真らしい腕輪の能力だと頷き、

『ちょっと待て！？　ぼ、暴力はどうかと思うんだ！！』

『せ、先生、見てください。この男は暴力をふるっています。停学に、いや、退学に！！』

和真は腕輪の力でＦクラスの召喚獣とともにＦクラスの生徒まで蹴散らして行く姿にＦクラスの生徒は自分の身の危険を感じたようで自分達が和真を本気で殺そうとしていた事など忘れてそばにいる教師陣にみじめにも助けを求めるが、

『……今回は巨大な鎌を振りまわしていた事もありますし、結城君の正当防衛と判断します』

『そうですね』

『『『『お前ら、それでも教師か!?』』』』

『すいません。私達も人間ですので』

教師陣も人間のため、自分達の手伝いを良くしてくれる和真と問題ばかり起こすFクラスを天秤にかけたようで全員が和真の味方をし、

「お前で最後だな？」

『ま、待て。我々は人間だ。話し合いを!?』

「……ここまで話し合いを提案していたのに聞きいれなかったのはお前達家畜以下だろ」

和真は1人でFクラスを全滅させ、気絶をしたFクラスの生徒は西村教諭に担がれて行く。

「……次は家畜以下代表だな」

「と、とりあえず、追いかけるか？」

「そうだね。その前に……霧島さんを呼んでこない？　坂本くんの罰のために」

「そうですね」

和真は点数を減らす事なく物理のフィールドを展開したまま、Fクラスに向かって行き、残されたCクラスの生徒達は雄二への制裁を

彼の幼なじみの『霧島翔子』に任せると決めたようで数名が翔子を呼びにＡクラスの教室に向かって行く。

第９７問（後書き）

どうも、作者と、

和真「主人公です」

和真の腕輪はお披露目です。

和真「反則っぽい。能力だな」

まあ、そうですね。でも、和真らしい。

和真「……否定できないな」

怒りに任せた大暴走の和真。

Ｆクラスを殲滅して次は雄二を血祭りにあげにＦクラスに向かいます。

雄二の運命はいかに？（爆笑）

第９８問

「……家畜以下代表。居るか？」

「ゆ、結城和真！？　な、なんで、お前がここに？　あいつらを抜けてきたって言うのか！？」

「……いや、正式に言えば皆殺しにしてきたが正しいか？」

「そうですね」

和真はＦクラスの教室のドアを蹴破ると雄二は嫉妬にまみれたＦクラスの生徒の間を和真が抜けてこれるとは思っていなかったようで驚きの声をあげると和真の後を付けてきた新と棗は苦笑いを浮かべ、

「……やっぱりね。雄二、お前は触れてはいけないものに手を出したんだよ」

「えーと、坂本くん、死なないでくださいね。結城くんも人殺しにならないように頑張ってください」

明久は巻き添えを喰らうわけにはいかないと思ったようで瑞希を背に守るように後ろに後退すると瑞希は立場的には片方だけ応援するのはおかしいと思ったのか明久の背中に隠れたまま２人を応援するがその応援の言葉はおかしく、

「ちょっと待て！？　姫路、その応援の仕方はおかしいだろ！？」

「……結城和真が家畜以下代表の霧島雄二に物理勝負を挑む。試獣（サモン）

召喚」

「誰が霧島雄二だ!?　だいたい、模擬でも試召戦争だろ!?　手を出すんじゃねぇよ!?」

雄二は瑞希の応援に声を上げた時、和真の右ストレートが雄二の顔面を襲うが雄二はその攻撃を何とか交わして教師陣に和真の反則負けを宣言しろと言いたげに吠えるが、

『西村先生から結城君の件は目をつぶる様に指示が出てると学園長の許可も出てます』

「どんな理由だ!?」

教師陣は雄二から目を逸らすばかりかすでに雄二処刑の件は学園の許可が下りていると言い切り、雄二はあり得ない状況に声をあげる。

「さっさと、召喚獣を呼べよ。家畜以下代表の霧島雄二」

「う、うるせえな。今、呼んでやるよ……なんだ、その点数は!?」

和真は雄二の本体と召喚獣をぶちのめすつもりのため、雄二に声を召喚獣を呼べと言うと雄二は逃げ場所がないため、舌打ちをして召喚獣を呼び出そうとした時に和真の召喚獣の頭の上に表示されている単体教科ではあり得ない点数を見て驚きの声をあげると、

「霧島君、わたしが知る限り、今は結城君が物理の単体教科はトップだよ。それで腕輪の能力も付加済みで総合得点で単体教科で戦えるんですよ」

「反則じゃねえかよ!?　って言うか、こんな点数なのが何でCクラスにいるんだよ!?」

「……それはお前らの責任だろ」

棗は何も知らずに負けるのは流石にかわいそうだと判断したのか雄二に声をかけ、雄二は反則だと叫ぶが新は和真の点数がここまで上がった原因はFクラスにあるため、大きくため息を吐く。

「さっさとしろ。家畜以下の相手をしてるほど、ヒマじゃないんだよ」

「あぶねえな。お前、暴力(そっち)で俺に勝てると思ってるのか？　知ってるか？　俺は中学時代はそれなりに名前が売れてたんだぜ」

和真はいつまでも召喚獣を呼び出さない雄二への挑発なのか雄二の頭にボディブローを放つと雄二はそれを腕でガードし、試召戦争よりケンカの方が得意だと言いたげに笑みを浮かべるが、

「……坂本、良い事を教えてやる。たぶん、その状態の和真は西村先生と対等に戦うぞ」

和真はボディブローが防がれた事など気にする事なく、雄二の鼻っ柱をストレートで打ち抜き、和真の逆鱗に触れていると言う最悪の状況に気づいていない雄二を哀れむ。

第９９問

「ちょっと待て！？　こいつは何なんだよ！？」

「何って、シスコンですね」

「それ以外に言葉がないよね」

雄二は中学時代は『悪鬼羅刹』と呼ばれてこの界隈を騒がせていたため、多少はなまっているにしても反応すらできないくらいの攻撃を仕掛けてきた和真に声をあげると棗と明久は和真を『シスコン』と言い、新と瑞希は大きく頷く。

「意味が分かんねえよ！？」

「坂本、良いか。世の中なんて意味がわからないものばかりだ。人外化する父娘とかな」

「……うん。清水さんと店長も意味がわからないよね。後は秀吉のお姉さんも」

雄二は４人の反応に理解できないと叫ぶが新は首を振り、明久は最近、見た常識で測ってはいけない人間の顔を思い出して顔を引きつらせると、

「家畜以下代表、早く、召喚獣を呼べ、今なら補習室送りと右腕以外全部の関節を外すだけで許してやる」

「ちょっと待て！？　許した対応じゃねぇよ！？」

「……そうか。なら、全部、折る」

和真は改めて雄二に召喚獣を呼べと言うが、雄二は召喚獣操作では勝ちようがないため声を上げるだけで召喚獣を呼び出さない様子に怒りのボルテージはさらにあがって行く。

「雄二、早く。グロテスクに倒されろよ」

「坂本、俺達もお前らの変な意地に付き合ってるほどヒマじゃないんだ」

「待て！？　模擬試召戦争を始めたのはあいつらであって、俺じゃねぇよ！！」

すでに教室には雄二の味方はいない状況であり、雄二はクラスメート達の暴走により、自分の作戦から外れた事もあるためか自分がCクラスを悪者にした噂を流したと言う事実を否定し始めた時、

「……坂本君、それは流石に情けなくない？」

「……雄二、男らしくない」

友香がAクラス代表であり、雄二の幼なじみの『霧島翔子』を連れてFクラスの教室に入ってくる。

「しょ、翔子、お前、何しにきた！？」

「……夫が粗相をしたのを謝るのは妻の役目。結城、雄二が迷惑をかけてごめんなさい。雄二を許して欲しい」

雄二は翔子が現れた事に驚きの声を上がるが翔子は和真に深々と頭を下げ、

「……わかった。両目を潰すだけで許してやる」

「だから、それは許した。行動じゃ！？」

「……これで良い？」

和真は翔子に妥協点を話すがその妥協点はやはりおかしく声を上げた時、翔子の指は流れるように雄二の両目に吸い込まれて行き、雄二は畳の上でのたうちまわっている。

「……結城君、こんな決着で良いのかしら？」

「さあな。とりあえず、霧島さん」

「……何？」

友香は模擬試召戦争の決着の仕方が意味がわからないようで眉間にしわを寄せるが和真の怒りは一先ず、落ち着いたようであり、翔子を呼ぶと、

「これからも旦那が粗相をしたら、調教……しつけを頼んで良いか？」

「……さっきも言った。夫の粗相を正すのは妻の役目」

「流石、霧島さん、頼りにさせて貰う」

翔子に雄二のしつけを頼み、翔子の返事に笑顔を見せ、

「吉井に姫路、他は補習室だけど授業ってどうなるんだ？」

「さ、さぁ」

新は模擬試召戦争が授業の一環ではないため、補習室から帰ってこないクラスで明久と瑞希はどうするのかと聞くが、

「野暮な事は聞いたらダメですよ。後は若い2人に任せます」

「だな。吉井、姫路と2人で自習でもしてろよ」

「一応は学校だからね。あの2人みたいに保健体育の実技は止めてよ」

棗は新の背中を押すと和真と友香は翔子に押し倒されかけている雄二に視線を向けた後に2人をからかうように笑い、

「ちょ、ちょっと、結城君もみんなも何を言うんだよ」

「そ、そうです！？」

明久と瑞希は顔を真っ赤にするが和真達は2人から逃げるように自分達の教室に戻って行く。

第１００問

「1度、休憩を入れるか？」

「ホント……疲れたよ。まだ、半分くらい？」

「そうだな。それくらいか？」

CクラスとFクラスの模擬試召戦争を終えてから、2週間が過ぎた頃、文月学園は学園祭である清涼祭の準備期間に入り、教師仕様の召喚獣になった和真と観察処分者の明久は教師達から頼まれた材料をト運んでいると西村教諭は2人の疲労具合を確認して休憩をするように言い、2人は額ににじむ汗を拭った時、

「和くんに吉井くん、お疲れ様です」

「高橋先生、ですから、学園内では結城と呼んでください」

「す、すいません。どうしてもなれなくて」

洋子が3人に差し入れを持って来てくれたようで購買で売っているスポーツドリンクを3本持って駆け寄ってくる。

「まぁ、結城も落ち着け。今は他に誰もいないし、良いだろ」

「ですけど」

「そうです。それより、差し入れを持ってきましたので、どうぞ。吉井くんも」

西村教諭は和真をいさめるが和真は苦笑いを浮かべ、洋子は西村教諭の助けに和真から逃げるように明久にスポーツドリンクを渡し、

「あ、ありがとうございます」

「まったく、高橋先生、ごちそうさまです」

明久は喉が渇いているようで洋子から渡されたスポーツドリンクに口をつけると和真は苦笑いを浮かべたまま、スポーツドリンクを受け取り、

「しかし、吉井が真面目に手伝いをするとはな」

「な、何？　せっかく、真面目に観察処分者の仕事をしてるのに」

西村教諭は明久が真面目に観察処分者の仕事をしている事に何かを疑っているような視線を向けると明久は文句がありそうな表情をする。

「まぁ、結城達と知り合って少しは成長したと言うことか……あいつらは、遊んでいるのに、高橋先生、ここを頼めますか？　俺はあのバカどもを教室に戻してきます」

「はい」

西村教諭は和真達と知り合って、明久が少しは真面目に教師達の話を聞くようになった明久を見て少しだけ嬉しそうに笑った後、グラウンドに集まり、野球を始め出したFクラスの生徒達を見て大きくため息を吐くと西村教諭は洋子に和真と明久を任せてグラウンドに

向かって行くと、

「……野球か。周りがお祭りムードのなか、あんな事をやってるから、女にも縁がないんじゃないか？」

「そうなの？」

「そりゃあ、普通に考えたら、準備をほったらかして遊んでいる奴らと真面目に手伝ってくれる男の方が評価が上がるだろ。あいつらは自分勝手すぎるから、女が近づいてこないって事に気づかないかな？」

和真はＦクラスの男子生徒がもてない理由がわかると頷き、明久は首を傾げ、

「それじゃあ、高橋先生、続きをやりましょうか？」

「そうですね。吉井くんも良いですか？」

「は、はい……ねえ。結城君」

休憩を終えて作業の続きに移ろうとすると明久が和真を呼び、

「何だ？」

「結城君はフィードバックがなくて良いなと思ってさ。僕は材料を足に落としたら、痛いし、結城君の召喚獣の方が性能が良くてうらやましいと思ってさ。僕のもどうにかならないかなって」

「吉井くんの召喚獣ですか？　すぐにはどうにもなりませんが、１

年間、きちんと観察処分者の仕事をして、成績の向上が見られれば変更もあるかも知れませんよ。それに1年間、真面目に観察処分者の仕事をしてくれれば先生達からの印象も変わってきますから」

明久は和真との召喚獣の性能の違いが羨ましいとつぶやくと洋子は明久の成長次第では観察処分者からの格上げも考えられると言う。

第１０１問

「そ、そうなんですか？」

「はい。元々は学習意欲に欠けた生徒の更生プログラムの一環なわけですし、吉井くんしだいでは観察処分者は返還する事は可能です」

明久は洋子の言葉を確認すると洋子は頷き、

「そうなのか？　吉井が観察処分者じゃなくなると手伝いは俺だけか？　１人で召喚獣を呼び出して先生と２人っきりって状況が悪くなくてもなんか悪さしたみたいに感じるんだよな」

「だよね。１人だとなんか、本当に罰を受けてるって感じがするし」

「まぁ、吉井は本当に罰なんだけどな」

「まぁ、そうだけどさ」

和真と明久は教師陣の手伝いは面倒な事もあるがそれ以外にも手伝い難い事があると苦笑いを浮かべる。

「そうですか？　そう言う事なら、和くんと同じ立場の生徒をもう少し増やせないか、学園長先生に提案してみましょう」

「……高橋先生、既に俺を結城と呼ぶ気もないですね」

「西村先生も良いと言ってましたし、私と和くんが従姉弟と言う事は先生達も知っているわけですし、問題ありません」

洋子は和真と明久の本音の意見が参考になったようで学園長への提案を考えてみると言うが西村教諭から許可を貰った事を自分の都合の良いように受け止めており、和真はため息を吐くと、

「実際は教師の手伝いなんかしたくないのが本音だしな。俺と同じ立場を増やすよりは観察処分者を……ダメだ。Ｆクラスの姫路以外が観察処分者になると先生達の仕事が『絶対』に増える」

「……うん、否定する要素が見つからないね」

和真は観察処分者を増やす事の方が簡単だと言いかけるが惨劇しか目に浮かばなかったようであり、眉間にしわを寄せると明久は大きく頷き、

「まぁ、とりあえずは吉井が観察処分者を返還できるかはこの後の成績しだいか？　……難しいか」

「ちょ、ちょっと、そこで落とすわけ！？」

和真はくすりと笑うと明久をからかい、明久も雄二達に比べるとバカにするだけではなく、きちんと自分の事を考えてくれる和真には好感が持てるようになっているようで声をあげるがからかわれてはいるが顔は笑っている。

「和くん、吉井くん、そろそろ、作業に戻ってください。授業中にこちらの都合で手伝って貰っているのですけど、あまり時間をかけると清涼祭の準備に影響が出てしまいますから」

「そうですね。ＣクラスはまだしもＦクラスはまとまらないだろう

からな。まともなのが姫路くらいじゃ大変だからな」

「そうだね。流石に姫路さんと美波は野球には参加してなかったみたいだけど、２人じゃ話し合いにもならないだろうからね」

洋子は作業に戻ろうと言ったわりには作業が始まらないため、２人に声をかけるとＦクラスの清涼祭の準備に不安しか感じないようで作業に戻り始めた時、

「……吉井、今更だけど、西村先生って人間か？」

「……僕は人間じゃないと思うんだ」

西村教諭が野球をしていたＦクラスの生徒を担いで校舎に入って行く姿が目に映り、２人は顔を引きつらせるが、

「２人とも召喚フィールドを張りますよ。準備してください」

洋子は気にする事なく総合教科の召喚フィールドを展開する。

第１０２問

「結城君、お疲れさま」

「……この帯は引っ張っても良いのか？」

「和真、その気持ちはわかるが止めておけ」

和真は作業を終えて教室に戻るとＣクラスは出し物は喫茶店にするつもりのようだが衣装の事を話し合っているのか、茶道部である友香は着物に着替えている。

「カズ、作業は終わったの？」

「あぁ。終わったんだが……」

「何かあったのか？」

「……素手で召喚獣と同じくらいの量の材料を一気に運ぶ、西村先生は人間じゃないと思うんだ」

清美は和真にまだ作業の途中かと聞くと和真は作業をしていた時に納得がいかない事があったようで眉間にしわを寄せて西村教諭が本当に人間か悩んでいるようであり、

「……結城君は何を言ってるのよ」

「待て。それだけじゃないんだ。Ｆ（バカ）クラスがグラウンドで野球をしていたんだがバカども全てを担いで校舎に消えて行ったんだ」

「……もう西村先生は『鉄人』って言う生物で良いだろ」

友香はため息を吐くが和真は眉間にしわを寄せて衝撃的だった光景を思い出していると一心は西村教諭を人間ではないと言い切り、周りにいた男子生徒は全員納得したようで大きく頷くが、

「そんな事を言ってるとみんなもFクラスと同じように西村先生に捕まるのですよ」

「まったくね」

女子生徒達は言い過ぎだとため息を吐く。

「それより、カズ、Fクラスは野球をしてたって言ってたけど、準備は余裕なの？」

「いや、吉井から話を聞く限りでは何1つとして決まってないらしい」

「本当にバカばっかりね」

清美はFクラスが遊んでいたと聞き、Fクラスが清涼祭の準備がかなり進んでいると思ったようだが和真はそんなわけないと首を横に振り、友香は呆れたように肩を落とすと、

「……いつもの事だけど西村先生も大変だな」

「と言うか、西村先生じゃ無ければ、下手したらひきこもるか学園に来なくなるぞ」

「……そう考えると本当に害にしかならない人達よね。学校をなんだと思っているのかしら」

改めて西村教諭の凄さとFクラスのバカさ加減を再認識したようであり、微妙な空気が広がる。

「まぁ、仕方ないだろ。それより、和、吉井は姫路を清涼祭の休憩時間に誘ったと思うか？」

「いや、まだだろ。バイトの件で距離は縮んだとは思うんだけどな」

「吉井より、姫路が誘う確率の方が高そうだな」

トオルは教室全体に広がっている微妙な空気を振り払うように和真に明久と瑞希の進展具合を確認すると和真と新は明久ではなく、瑞希の方が行動に出そうだと話し出すと、

「吉井くんと姫路さんの事もだけど、カズは自分の事は考えないのかな？　ねえ、代表」

「代表は結城君からお誘いはないのですか？　もしくは自分から誘ったとかはないのですか？」

「な、山下さんも尼崎さんも何を言ってるのよ！？」

清美と棗は友香に清涼祭で和真を誘うつもりなのかと詰め寄り、友香は驚きの声をあげるが、

「もう、そんな事を言ってるとカズを他の女子にかっさらわれるよ」

「そうです。あれで結城君は競争率高いですから」

「そ、それはそうかも知れないけど」

清美と棗は友香を引き寄せると友香に和真を清涼祭に誘うように吹き込み始める。

第１０３問

「そんな代表に朗報です」

「朗報？　……召喚大会？」

棗はカバンから清涼祭で行われる２人１組で参加するトーナメント形式の召喚大会のポスターを取り出す。

「そう。ここ、ここを見て」

「優勝賞品は白金の腕輪？」

「じゃなくて、優勝者と準優勝者の副賞」

棗はポスターの賞品が書かれたと個所を指差すと友香は優勝賞品の『白金の腕輪』の名前を見て首を傾げるが棗は見て欲しいのはそこではないと友香の顔の前にポスターを近づけると、

「如月グランドパークのプレオープンペアチケット！？」

「そうです。これを獲るために結城君を誘えば良いんです。そして、獲得できればデートに誘えます」

「と言う事で代表、カズを誘ってみようか？」

「で、でも、私、恭二を振ってすぐなわけだし」

友香はもう直ぐオープンするテーマパークの優待チケットを見て驚

きの声をあげると清美と棗は友香を引き寄せて和真を召喚大会に誘うようにそそのかす。

「そんな事を言ってる場合じゃないでしょ。さっきも言ったけど、カズは倍率が高いのよ」

「豚野郎、出て来なさい！！」

清美は踏ん切りが付けられない友香の背中を押そうとした時、教室のドアを美春が勢いよく開け、

「清水、お前は男をすべて豚野郎と言うから、誰か、わからん。せめて、大勢いる時は名前で呼べ」

「……いや、和、お前は清水に豚野郎と言われる事になれすぎだろ」

和真は美春が乱入してきた事にため息を吐くが一心は苦笑いを浮かべ、

「美春が豚野郎と言ったら、直ぐに返事をするのが豚野郎の役目のはずですわ！！　生意気ですわ！！」

「和真、どうやら、お前に用みたいだぞ」

「みたいだな」

美春は和真の見つけると我が物顔のように教室に入ってくるため、その様子に和真と新は苦笑いを浮かべる。

「それで、何かようか？」

「豚野郎、美春がお姉さまとデートするために協力しなさい。拒否権は認めませんわ！！」

和真は美春の様子にあまりろくでもない事だと思っており、関わり合いたくはないようだがここで跳ね返すとさらに面倒になる事もわかっているため、彼女が自分の元を訪れた理由を聞くと美春は召喚大会のポスターを和真の目の前に出して吠えるが、

「却下、面倒くさい」

「なぜですか！？」

和真は興味がないため、直ぐに拒否をし、美春は自分の言う事を聞かない和真の態度に驚きの声をあげると、

「いやだね。それに参加して仮に賞品が取れたとしてもそれは清水に搾取されるわけだろ。俺に旨味も何もないだろ。だいたい、それなら、そのお姉さまを誘えよ」

「お姉さまは姫路さんと参加登録を終わらせて会ったのですわ」

「姫路と？　……なぁ。清水、今更だけど、お前のお姉さまって」

「島田美波お姉さまですわ！！　豚野郎、お姉さまに色目を使ったら、直ぐにはらわたを引き裂きますわ！！」

和真は美春にデートに誘いたい人間を相手に選べと言うが何かが引っかかり、美春にお姉さまの事を尋ねると美春の想い人は美波であり、和真がおかしな事をした場合は和真に命はないものだと思えと

吠える。

「……世界が滅びるその日になってもあのバカだけは襲わねえよ。あいつを襲うなら、清水を押し倒す」

「和真は店長も倒せるからな」

「その前にもっと言葉を選べよ。後ろからの視線が痛いから」

和真は美波だけはあり得ないと言い切り、新は和真の様子に苦笑いを浮かべるがトオルは背後から突き刺さる友香の視線に背中に冷たい物を感じているようだが、

「美春は豚野郎になど興味はありませんわ。だいたい、お姉さまをバカにする事は許しません」

「いや、あいつは充分にバカにされるに値するだけのバカだ」

「和、この状況でお前は良く清水を挑発できるな」

それ以上に前方に立っていた美春の殺意が上昇して行き、平太は顔を引きつらせる。

「悪いな。これをDクラスに帰してくる」

「あぁ、行って来い」

和真はこれ以上は関わっていられないと思ったようで美春の首根っこをつかむと美春を教室の外に引きずって行き、クラスメート達全員が顔を引きつらせているなか、新だけが和真と美春を見送る。

第１０４問

「姫路が転校？」

「ちょ、ちょっと、結城君、声が大きいよ！？」

和真が美春をＤクラスに送り届けると和真を見つけた明久が誰にも聞かれたくない話があったようで和真を屋上まで引っ張って行き、瑞希の両親が彼女を転校させる事を考えていると言う話をする。

「悪い。でも、考えられない事でもないか」

「ど、どうして？」

和真は明久に謝った後に瑞希の両親が転校を勧める理由もわかると頭をかくと明久は声をあげるが、

「落ち着け。姫路は身体が弱いだろ。方針とはいえ、あんなボロボロの校舎にいて身体を壊すことになったらと思うと仕方ないだろ」

「それはそうなんだけど」

「それにそれ以外にも大きな問題が２つある」

「ど、どう言う事？」

和真は瑞希の両親が考えている事に予想が点いているようであり、子供の事を心配する両親がいる事に羨ましい気持ちもあるのか少しだけ寂しそうに笑うが明久は瑞希の転校の事で頭がいっぱいのよう

であり、和真の表情の変化には気づく事はない。

「1つはFクラスがバカすぎる事、もう1つは教室の設備、ミカン箱が机がわりって現代社会じゃあり得ないだろ？」

「そうだね。問題が多すぎるよ」

和真は明久の様子に直ぐに表情を戻すと明久は瑞希の転校を防ぐ手立てがないのか考えたいようだが頭の弱い彼には良い考えが浮かぶわけもなく大きく肩を落とすと、

「まぁ、悪い方向にだけ考えるな。転校先を女子高にして貰えば姫路に悪い虫が付く確率は減るわけだし、どうせ、学内ではお前のクラスのバカどものせいでいちゃつけないんだ。あまり変わらないだろ。何より、他の女子高とつながりができると考えるとメリットもある」

「女子高との繋がり？　……ダ、ダメだよ。確かにそれも良いのかも知れないけど」

和真は明久と瑞希の事を考えると瑞希の転校も悪い案ではないと言うと明久は和真の言葉に一瞬、考え込むがそれでも瑞希と一緒に居たいようであり、

「吉井、姫路と同じ高校生活を送りたいなら送りたいと素直に言え」

「な、何を言ってるんだよ！？」

和真は明久の反応にニヤニヤと笑うと明久は顔を真っ赤にして慌てて否定しようとする。

「別に慌てて否定する必要はないだろ。だけど……」

「結城君、協力してくれないかな？」

和真は慌てる明久の様子に苦笑いを浮かべつつも何かあるのか困ったように頭をかき、明久は和真の様子に和真が協力してくれないと思ったようで不安そうな表情をすると、

「できる事はもちろん協力するけどな。問題はFクラスの設備だろ？　学生にできる事なんてたかが知れてるぞ」

「それなんだけど売上で設備を向上させても良いっては言われたんだけど、良い案が見つからなくて」

「それにFクラスのメンバーを考えるとそれに協力できる人間って何人いるんだ？」

和真は協力は惜しむ気はないが自分だけではどうにもできない事もあるため、他にも協力を仰ぎたいようだがFクラスで瑞希の転校阻止に動いてくれる生徒がいるとは思えないようで眉間にしわを寄せる。

第１０５問

「えーと、僕と美波と秀吉の３人かな？　雄二は清涼祭に興味無さそうだし」

「……もぞ凄く、不安なメンバーだな。まぁ、他のバカどもに比べると吉井や姫路と距離が近いみたいだし、使えるかは置いておいて無難なメンバーか？」

明久は秀吉と美波は協力的だが雄二はわからないと首を横に振ると和真はＦクラスが自分勝手な人間ばかりのため、ため息を吐くと、

「とりあえず、家畜以下代表は使えそうなのか？」

「使えるって考えると使えると思うよ。頭は回るし」

「そうだな。他人を見下してるからつめが甘いけど、頭は回るな」

和真は雄二が使える事だけは認めているようで頷き、

「それじゃあ、雄二を巻き込んだ方が良いんだよね？」

「信用しきらなければな。とりあえずは味方に引き込むようにしろ」

和真は明久に雄二は味方に引き込んでおくように言い、

「この話はウチのメンバーにも話は伝えておくぞ。協力できる事は協力してくれるだろうな。後は少し不安だけど、清水にも話をするぞ」

「う、うん。お願い」

和真は明久に他にも協力者はいないか確認すると告げると明久は大きく頷き、和真は教室に向かって歩き始める。

「さてと、やれる事ってなんだ？　……見なかった事にするか？　それとも嫁に連絡するかどっちが良い？」

「ゆ、結城、てめえ、俺になんの恨みがあるんだよ！！」

和真は教室に戻る途中で翔子から逃げているのか周囲を警戒している雄二を見つけて徐に携帯電話を取り出すと雄二は翔子に自分の居場所を知らせられる事は避けたいため、和真に考え直すように声を張り上げると、

「恨みならいくらでもあるぞ。何なら、この後、お前らがさっき、無断で野球部部室から道具類を持ち出した時に破壊した部室のドアとかロッカーの移動とかその他の修理に駆り出される予定になっているんだけど、手伝うか？　お前らが壊したものだろ？」

「は。そんなもの知ら！？　ま、待て。携帯をしまえ！！」

和真はFクラスになら恨みならいくらでもあると話し、雄二は和真の言葉を鼻で笑うと和真は携帯電話のアドレスから翔子のな間を探し始め、雄二は和真に携帯電話をしまうように叫ぶが和真は気にする事なくに明久に電話をかけ、

「……逃げるな。別におかしな事をしなければ嫁に引き渡さないでやる。吉井か？　家畜以下代表を見つけたんだけど、居るか？　…

…あぁ。それなら、仕方ないからCクラスにいるからな」

「ちょ、ちょっと待て!?　結城、お前、どこに行くつもりだ!?」

「うるせえな。さっさとこいよ。嫁に引き渡すぞ」

和真は雄二の首をつかむと雄二を引きずってCクラスの教室に引きずって歩きだす。

「見つけましたわ。豚野郎!!」

「……良いところにきた。二度手間は面倒だからな」

「ぶ、豚野郎!?　どこに行く気ですか!?」

和真が教室に向かって歩いていると美春が現れるが和真は美春の首をもつかみ、右手には雄二の首を、左手には美春の首をつかみ歩きはじめ、

「ど、どうしよう?　今の結城君には近寄りたくないよ」

「明久、見てないで助けろよ!?」

明久は和真の呼び出しに急いできたようで和真の様子に顔を引きつらせ、明久の姿を見た雄二は明久に助けを求める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3785s/

バカとテストと勤労少年

2011年11月9日19時38分発行